

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■

9月号



9

September 1944

奇譚クラブ

昭和四十三年九月号

定価三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukasyogan

Orake Japan



9月号 Y 350

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

花と蛇

前編 続編 合編

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥家令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美型の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前編(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に秘蔵の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の要素を団鬼六作の流暢な筆で描き尽された続編(39年11月号より12月号まで)に至るまで一挙に登場。堂々四頁十頁に亘るサディズム文学の傑作を誇ります。この一冊によって「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘って本誌に連載しSファンの熱狂的な絶賛を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」収録内容見出し一覧

- 前編
- 第一章 発端(静子令夫人誘拐された令夫人)送られた着衣(ズベ公の本拠)
 - 第二章 陥罪(二度の謎がらせ運転手の正体)地獄の結婚
 - 第三章 美人探偵(落花散々)美人探偵(落花散々)
 - 第四章 洗脳(逆轉)洗脳
 - 第五章 救援者(羞恥地獄)観念の座(京子の活躍)
 - 第六章 救援の失敗(逆轉)観
- りもの
- 第七章 好餌(京子の屈伏)淫
 - 第八章 悪魔の嘲笑(毒牙は迫る)新編(生憎)悪魔の笑い
 - 第九章 地下室(悪魔の悪意)美津子のおとり
 - 第十章 騙弄(屈辱と羞恥)一代りに立つ夫人
 - 第十一章 蛇の執念(探偵り)おしめ使う夫人(屈辱の快挙)

- 第十二章 姉妹危し(屈辱の狼々つわ)流転(悪魔)
 - 第十三章 調教師(遂に京子も)中(調教師来る)
 - 第十四章 美津子受難(二人の美女)調教師(狂鬼の美津子)
 - 第十五章 結末(美津子の屈伏)二つの肉塊(絶対絶命)美しい美女(スター誕生)
- 続編
- 第一章 密室の秘密(洗脳)
 - 第二章 脱走の失敗(美津子の脱走)望み破れて(絶望の涙)
 - 第三章 華やかな宴(悪魔の計画)
 - 第四章 地獄屋敷へ新顔(新たな獲物)デープレコ(美津子のいわけ)美少年
 - 第五章 騙弄されるカップル(美少年)美少年は迫る
 - 第六章 一千万円的身代金(正気づいた小夜子)幽霊の復讐
 - 第七章 身代金奪取の失敗(小夜子の受難)女体の悲しさ
 - 第八章 涙の宣誓文(美女と本馬)毒師の影(小夜子)
 - 第九章 恐怖の逆転劇(悪魔の相談)恐ろしい計画(一代夫人)狂鬼の静子夫人
- 直接お申込みを 定価五〇〇円 略号「花特」
- 第十章 奇妙な三々九度(鬼女)の鳴り(地獄の花嫁)
 - 第十一章 飼育される白い動物(美しき敗北者)プレイ開始
 - 第十二章 悪魔と悪女の悪業(恐ろしい仕事)全身美容(悪魔の悪意)
 - 第十三章 屈辱の地獄図絵(猫とねずみ)強迫(悪魔)
 - 第十四章 逃走の恐怖と失敗(風前の灯)再教育(京子の脱走)勝利に酔う悪魔
 - 第十五章 悪魔達の残忍な所業(朝の活)白い酒樽(ガラスの風)
 - 第十六章 落花無残の修羅場(白いコンビ)バラの肥料(開扉準備)
 - 第十七章 淫らな美女の調教(嵐の後)二人花形(美女戦)
 - 第十八章 すさまじいショーの展開(変身)富貴(舌と唇)
 - 第十九章 汚水にまみれた宝石(血と涙のバラ夫人)
 - 第二十章 華々しき美女の屈伏(一舞一舞)静かな身代
 - 第二十一章 対峙する美女と美女(虚に立つ令嬢)美女対峙
 - 第二十二章 あくどい陥罪(羞恥園)失心する小夜子(悪魔の部屋)
 - 第二十三章 羞恥園の展開(復讐の生憎)汚辱に没く令嬢(小夜子の屈伏)

限定版 写真集

美しき縛しめⅤ 第七集

山原清子 妖艶緊縛 刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円(下共) 略号「美7」

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集 刺青の女王 山原清子の魅力の隅から隅までを抉り出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄じいポーズ満載)

限定版 写真集

美しき縛しめⅥ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動! 女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開 ◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版 写真集

美しき縛しめⅦ 第九集

女性刑罰拷問特集 西洋篇

革具に拘束される女 七十二葉

頒価一〇〇〇円(送共) 略号「美9」

モデル 清楚な美女乃々子グラマーで美貌の大塚啓子 真白で肉づきのよい女体が黒光りする革具或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集Ⅶ(日本篇)「略号美5」は光切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先は必ずしも大阪阿倍野局私書箱第十四号箕田京二へ。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円(送50円) 略号「M特」

全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生地のかすかすを豊富な写真資料によってマニアの方に提供するグラビア写真集の結集版です。発売以来数カ月、すでに残り数がなくなりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。

「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

- 1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
- 2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
- 3 襲う影に慄く (佐々木真弓)
- 4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
- 5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
- 6 縛られて困るわ (金原奈加子)
- 7 私を襲わないで (左近麻里子)
- 8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
- 9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
- 10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
- 11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
- 13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
- 14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
- 15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
- 16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
- 17 何故私を縛るの (金原奈加子)
- 18 感泣する胸縛り (ローズ秋山)
- 19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)
- 20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
- 21 足指はく字に (佐々木真弓)
- 22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
- 23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
- 24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
- 25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
- 26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
- 27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
- 28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
- 29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
- 30 出脐を晒す縛り (佐々木真弓)
- 31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
- 32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
- 33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
- 34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
- 35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
- 36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
- 37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

- 38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
- 39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
- 40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
- 41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
- 42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
- 43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
- 44 私は縛りが好き (金原奈加子)
- 45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
- 46 麗身を横たえて (左近麻里子)
- 47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
- 48 柔肌に細は厳し (長井葉津子)
- 49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
- 50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
- 51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
- 52 突き出した尻 (中河 恵子)
- 53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
- 54 首細股間縛の女 (長井葉津子)
- 55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
- 56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
- 57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
- 58 罵られる緊縛女 (長井葉津子)
- 59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
- 60 もう虐めなないで (金原奈加子)
- 61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
- 62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
- 63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
- 64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
- 65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
- 66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
- 67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
- 68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

- 69 美体は縄に映る (中河 恵子)
- 70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)
- 71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
- 72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
- 73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
- 74 捧げられる女体 (中河 恵子)
- 75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
- 76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)
- 77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
- 78 開股の股間縛り (大島 照代)
- 79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
- 80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
- 81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
- 82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
- 83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
- 84 胸締縛りと猿轡 (長井葉津子)
- 85 投げ出された裸 (金原奈加子)
- 86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
- 87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
- 88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
- 89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
- 90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
- 91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
- 92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
- 93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
- 94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
- 95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
- 96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
- 97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
- 98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
- 99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
- 100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

本誌自粛の徹底……………	編集部……………	(9)
愛妻記……………	千草 忠夫……………	(10)
映画感「猿の惑星」を観て……………	高浜 満六……………	(24)
SMカメラ・ハント〈続・三好留美。美波恵子の巻〉……………	辻村 隆……………	(26)
『悦虎のカルテ』……………	茂野 礼……………	(52)
「痛くないお産」について思う……………	斎藤 夜居……………	(58)
探奇考料「羽塚隆成師」基督教の理學と傳……………	斎藤 夏彦……………	(63)
奇クと共にここ三年……………	堀 弓削 達人……………	(68)
S・C・R「性問題相談室」回答欄……………	沢瀉 しの……………	(72)
「浣腸マニアの悩みについて」……………	能美 積……………	(90)
懸賞入選作品 理恵女献身(最終回)……………	佐野 寿……………	(10)
かずひこのノートから(この神祕の味……………)		
続・けったいなほんまの話……………		
女性樂馬アマゾネス考……………		



奇クサロン…………… 編集部構成…………… (23)

SMつれづれ行脚……………	徳永 昭三……………
サロン楽我記(第五十一回)……………	辻村 隆……………
イメージ画「ある夜の幻覚」……………	春川 泰三……………
テレビの緊縛シーン……………	安良 名太郎……………
荒野の抱擁……………	黒井 珍平……………
ちかごろのクールショック……………	香川 泳三……………
新聞より「ムチ打ち症」について……………	鶴 集……………
編集部だより……………	堀 集……………
提案「作品鑑賞席」……………	原 五平……………
告白「S」か「M」か……………	町 陽一……………
短歌「生花」……………	高村 初子……………
ミニズのたわごと「S」と「私のS」……………	早乙女 貴留……………
無題……………	能美 積……………
原作イラスト「鞭のイメージ」……………	萩野 和夫……………
ショート・ショート タバコと女……………	城野 道一……………
映画通信 私の見た緊縛映画……………	細川 英治……………
「受感」……………	桑 昇……………
「花と蛇」に望む……………	佃 鬼八……………
談話感 可愛い妖精たち……………	高野 原美……………
美人コンテストはSM女性の中から……………	錦田 礼……………
僕のイメージ画集……………	
「ボスター」……………	室井 亜砂路……………
「運任せ」……………	九美 淳……………
私の夫婿ブレイ「ゆう子」……………	新田 英雄……………
「常連」の偶筆……………	夜乃 輝郎……………
貞操帯……………	徳月 信一郎……………
イメージ画「鏡の中のおんな」……………	野江 三郎……………

連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄(第五回)…………… 白鳥 大蔵…………… (11)

奇クに望む ヤセ犬の遠吠え……………	系振 昇……………	(11)
マゾヒスティック・ストーリー「蒸発」……………	保藤 久人……………	(11)
映画通信「極秘・女拷問」……………	佐度 喜男……………	(11)
懸賞入選作品 夜の潮騒……………	葉夜田 澄尾……………	(11)
拝啓、編集部殿……………	頑田 一徹……………	(11)
漫談千一夜物語 薔薇と蜜蜂……………	田代 俊夫……………	(11)
日本腰巻党始末記……………	牧 高志……………	(11)
濡れにぞ濡れし II M派二人……………	芳野 眉美……………	(11)
合戦記と切腹の美学……………	中康 弘通……………	(11)
連載小説「花と蛇」(終篇第四十六回)……………	団 鬼六……………	(11)
告白 私の刺青考……………	堀田 彩次郎……………	(11)
わが回想と私見「真実の叫び」……………	威井 蘇生……………	(11)
懸賞入選作品 Mモデルとその妻……………	伏虎 久作……………	(11)
あぶ・らふす・こんと……………	水沢 登……………	(11)
K誌をおもう II 私の望むこと……………	魔仁 阿天狗……………	(11)
ピンク映画シナリオ「赤い拷問」……………	団 鬼六……………	(11)
読者通信……………	編集部選……………	(11)
(目次カット「旅」……………)	室井 亜砂路……………	(11)

☆新しい女性の華麗な責めフォト紹介

最近の誌上を賑わした美しい女性達の惚々とする素晴らしい緊縛体と首めに喘ぐ悦虐ムード溢れる印画紙焼付の極めて鮮明なるフォトをマニアのために提供します。

全裸後手柔肌縛り

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こよ
垢ぬけした近代的フェイスマスクを持つ伸びやかな全裸の肢体に厳しい後手の綱目がむごたらしく絡む。

乳房強烈膨隆責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こわ
すべすべとした丸味を持つ乳房を上下左右から締め上げてむくむくと盛り上げた後手縛りの全裸。

海老責めに苦悶す

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こお
長身の柔軟な肢体は嚴重な綱目によって重ね餅となり無防備の裸身を晒したまま美貌の顔で仰ぐ。

全裸の全身を晒す

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こる
高々と後手首を背中に掲げて縛られた均整のとれた裸身は、その全身を晒して惚々とする眺めだ。

煙草責めに喘ぐ女

大手札二枚 一組 略号 三〇〇円
佐々木真弓 略号 八こぬ
身動きの出来ない後手縛りで美しい裸身を曝した女に火のついた煙草をくわえさせて責める。

麗姿に映える光彩

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こほ
強烈なトップライトに浮かび上がった縛られた全裸身は、素晴らしい美しさで輝くように映えている。

臀部強調後手縛り

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こる
笑顔をもった豊かな臀部をこれみよがしに突き出させられて後手縛りの女体は、いたくはにかむ。

羞恥に悶える全裸

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こに
膝頭が口に届くまで二つ折りに縛られた女体は、その無防備を羞らって足指先をくの字に曲げる。

ホステスの緊縛体

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こち
全裸で後手に縛られた女体を晒してホステス稼業の微笑を洩らし美しい表情と肢体を捧げる。

二つ折りで責める

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こへ
後手縛りの綱と膝頭とを連絡して二つ折りとした女体の流し目の表情と反りかえった足指の表情。

脈打つ全裸臨月腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八こふ
月満ちた便々たる妊婦腹が麻縄できつく締め上げられて怒張した血管がドキドキと脈打っている。

革紐の臨月股間縛

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八こや
まんまるく膨れ上がった臨月腹の中央を皮紐が股間縛りとなつて締めつける臨月妊婦責めの醍醐味。

猿轡の臨月妊婦腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八ここの
豆絞りの猿ぐつわを噛まされた臨月の妊婦は厳しい麻縄縛りで大きく喘ぎつつ被虐の境地に没る。

卓上の股間しばり

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八こそ
テーブルの上に置かれた股間縛りの人形は、どのようにも動いても豊満な臀部をさらけ出すのだ。

羞恥の足挙げ責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八これ
豆絞りの猿ぐつわで柱に縛られ

悦虐責めの終着駅

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八こた
身動き出来ない後手縛りで両の足首には、それぞれ縄を掛けられて思いきり左右に引っ張ってさんざんにいたぶられた挙句の果て。

片足挙げて鞭打ち

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八こら
ムチ打ちに徹した美貌の夫人の片足を張り裂けるばかりに引き上げてムチで責めた新しいフォト。

柔肌に答は弾ける

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八こな
真白い柔肌に実際に力まかせにムチを揮って、その時の全身の表情をストロボにてキャッチした。

あぐら縛りで観賞

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 八こえ
鬼六先生の趣向で全裸の麻里子をアグラに坐らせて縛りあげた鬼六対談の際のプレイフォト。

対談用に縛られる

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 八こて
二者対談のあとで二人によって縛られる左近嬢の肢体をスナッパした珍しい緊縛フォト。

◎お申込みは大阪阿倍野局私書箱第十四号箕田京二宛へ願います。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 43 年 9 月 号

(1968年・9月号<第22巻第10号・通刊第244号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

愛

妻

記

千 草

忠 夫

雪子——

こう名前を呼んでも、紙に書きそれが活字に印刷されてしまえば、私がそこにこめた思いは、消えてなくなってしまう。初夜の床ではじめて「雪子さん」を「雪子」と呼び変えた時から、病院のベッドの上で次第に冷たくなってゆく手を握って呼び続けたあの時まで十数年間の結婚生活を通じて、幾万回となくそれぞれの時に、それぞれの思いをこめて呼んだ名前だ。そしてそのたびごとに、お前もその時その時の思いの通り、返事をしてくれた。

だが今は、私は声を出してお前の名前を呼

ぶこともなく、お前の返事も返ってこない。

お前の名前はこうして冷たく紙の上に張りつけられて死んでいる。死んだ名前に、いくばくかの生命をよみがえらせようと書き始めたこの文章なのに、紙に書いたお前の名前を見れば、死別の悲しみが胸に吹きあがってくるばかりなのだ。

今日、お前とふたりで住むのでなければ意味のない、このアパートから引き移る準備のもと、乱雑に手当たり次第のものをつめこんである押し入れの整理をしていた。お前が死んでから、とかくボンヤリと過ごし勝ちになった日常の日々を、少しでも整理したいという

気も働いていた。

お前が入院する前日まで敷いていた布団がそのままめ込まれている押し入れだった。入院の際のあのあわただしさをそのままに、シーツもろともくるめるように放り込まれたままの布団は冷たく湿け、お前の汗と共にしみ込んだ体臭が微のにおいと一緒になって私の鼻をついた。

私はしばらくの間、冷たくなったお前の懐かしい体臭だけを、微のにおいの中から嗅ぎわけようとして汚れたシーツの皺の間に顔をうずめていた。

お前の肌は甘い汗に匂っていた。洗ったば

かりの石けんのおいのするシーツがヨレヨレになって、乱れきった濡れ羽色の黒髪がその上に散っていた。汗と体臭と香水のにおいが、体温に蒸されて疲労の吐息と共に立ち昇っていた。その時世界は暖かく、確実な鼓動を私の体に伝えていた。

私はシンと重い布団から顔をあげ、それを日向で乾かそうと思った。湿った死のにおいを——たとえお前の体臭を道づれにしよう——追い出そうと思った。だが、かかえてベランダに運ぼうとした時、足の上にドサリと重く落ちたものがあったのだ。両腕いっぱい、に布団を抱えていて足元に眼がとどかないのだけれど、足の甲に触れたその感触で、私にはそれがなにか、すぐに判ったのだ。

私は、そのまましばらくボンヤリと立っていた。思い出が、その物の乗っている足の甲からゆっくりと脚を上ってやって来た。それは異様な戦慄をともなった苦痛ともいえる恍惚を、徐々に全身に^{びまん}瀰漫させていった。

私は急速に反応しようとする内部の衝動にわざと逆らって、ゆっくり布団を傍におろすと、その物を手に拾いあげた。私はそこに坐りこんだ。

雪子。それが何だか、お前にはもう判っている筈だ。そう、それは古び黒ずんだ一束の縄だった。そしてこの縄が、忘れようと努めていた私を一挙に駆りたてて、こんな繰り言を書き綴らせてしまったのだ。

お前の流した汗とあぶらを、そのケバだった繊維の一本一本に吸い込んだ綿ロープは、冷たく、重く湿っていた。私は老婆が亡き人を偲びながら念珠をまさぐるように、ロープを爪繰っていった。爪繰るたびに、しつとりと重いロープから、呪縛を解き放たれた何か、が妖しく立ち昇って、私を過去へ過去へと引きさらって行くようだった。

やがて、ロープが結ばれたままコブになっている箇所が手元に手繰られて来た。そのコブは二重の結び目からできていて、しかもひとつだけではなく、十センチばかりはなれて二箇所にあった。いや、作られていた。そしてそれは、もう今ではいくらほぐそうとしてもほぐれない、一箇の球になってしまっていた。あまりきつく結んだせいもあるが、結び目のすき間すき間に何か脂質のものが塗り込められて、それが固まった状態になっているのだった。ロープはそこだけがひととき黒ず

み汚れ、白い微さえふき出している。

雪子、これがぼくたちの情熱の名残りだった。

シミひとつない雪白の肌——とひとは女性の素肌の美しさを形容するけれど、それだけでは足りない。統のような——とも言うけれど、私は統という絹布を見たことがない。吸いつくような餅肌というのは、なにか娼妓を連想させて、いやらしい。

お前のあの情熱に汗ばんだ素肌の美しさを何と形容したら私のこの飢えた気持ち表現できるのだろうか。きめ細かな肌を透して、その奥に輝かせていたあの桜色に息づき、霧のようにけぶるが如く浮かび上ってくる微妙な美を何と形容しよう。

私はそれを自分のものにしたかった。愛撫するだけでは勿論足りない。指先を立てて掴み、歯で所かまわずシコシコ噛み、舌を犬のように吐いて舐めまわし、そのあげく黒ずんだロープで荷物さながらに括りあげたのだ。縄は姿を没するまでに肌に喰い込んだ。うっすらと静脈を沈ませた乳房は上下から絞りあげられて、はち切れんばかりにふくらみ、頂上の紅が可憐におののいて上を向いていた。

お前は幾度か呻き、呻きながら小さな声で、「いたいわ……」と、怨むような濡れた眸を向けた。

肌が濡れて桜色にけぶり始めるのはその頃からだ。ほつれ毛がふるふるとふるえる白いうなじからそれははじまって、肩先へ乳房へと降りてゆく。山の霧が、若葉をいつしかしっとりと濡らしてゆくように、それは屈曲した腰の量塊も浸し、羞恥と喜悅におののく双丘をひときわ、あざやかに染めあげる。

その頃になると、先程まではあれほど固く引きしめていた膝の力も、いつしかゆるんでくるようだった。

お前は顔もあげられないで、後ろ手にくくしあげられた両手を私に見せて突っ伏している。しかし、赤く染まったうなじにたわむれる、ほつれ毛のかすかなふるえが、お前の女としての悦びを何よりもよく私にかけてくれたのだ。

ああ、その時の私の残忍な恍惚はどんなだったろう。私は黒ずんだ縄でからめ取ったお前の白い肌を、恍惚のかすみの底から眺めている。私は眼だ。そしてそれ以上にお前の肌に厳しく食い込んでいく縄そのものだ。こと

にお前の羞恥と悦びを引き出してくり束ねている縄の結び球だ。私は眼となって、私のものにした暖かく美しい珠玉のほてりを眺め汚れた縄と化して捕獲のよろこびを噛みしめ味わっている。

ほっそりとした頸にかかった縄、それに吊り上げられて苦しげに屈曲している腕、その腕は更に二条の縄をかけられて豊かなしし置きはゆがみ、縦横の縄の交叉する所に手首がくくしあげられて、掌が蝶の羽のようにゆらめいている。胴を食いしめている縄はほとんど埋没し、それと十文字の結び目を作って伸びる汚れ黒ずんだ二条の触手は、互にからみあって、汗をにじませた背にたわむれながら走り降る。

そんな姿で、小さく縮こまっていたお前はじらい——それが私の貪婪の牙をむき出しにさせたのだ。

縮こめた体を更に小さくして、お前は逆らった。いや、いや、と小さな声をあげ、たまたなく羞ずかしげに頭を狂気のように振りながら、しかしいましめられた身の哀しさは、甘いあきらめの吐息と共に、私の双の腕の中にあずけてしまう。

可憐な舌先をのぞかせた唇と、絞りあげられた乳房の頂点におののく木の実の紅の鮮烈さ。そしてここにも頸から一直線に、雪の肌を汚すよろこびに歓声をあげながら駆け降りる縄。

眼はむさぼり、確かめる。確かめられながら仰向けざまに投げかけているお前の頬は燃えあがり、顫える睫毛の陰から瞳が複雑な想いを訴えかけてくる。

お前は私を飢えさせる。渴かせる。更に深く、更に奥へ、私は私の黒い欲望の成長をのみ感じさせられるのだ。ポツテリと血の色にふくらんだ唇に、私は私の想いを代表させる口唇を寄せる。

ああ、お前の悲鳴の、呻きの、はては魂をゆさぶるような歎歎の、ころよさ——
そうして、雪子、お前は死んだ。私だけを残して帰り道のない旅に、お前は独り旅立ってしまったのだ。

それと共にあの情熱の夜な夜なを味わいつくしたロープも死んだ。お前の情熱も、今はただ、いたずらに微を肥やすばかり……

思えば、なんと長い道のりだったことだろ

う。十三年という結婚生活の間、ふたりの心がピッタリとあって、結婚生活の幸福とはこんなものかと吐息をつく思いにひたることでできたのは、最後の数年、ほとんど二三年位のことには過ぎなかった。それなのに今の私は「終りよければすべてよし」の諺どおり、お前との結婚生活は誰にでも自信と誇りを以て吹聴できるしあわせなものだったと結論することが出来る。

こう言ったからといって、はじめの十年間が不幸なものだったというわけでは決してない。ただ、その後に来たような、文字通りの琴瑟相和す状態ではなかったというだけのことなのだ。ではなぜ十年の結婚生活の後に、自分ながら驚く程突然に、そのような幸福な生活が訪れて来たかという、それはやはり一本の縄が取り持つ縁と、言わないわけにはいかない。私たちの不幸も幸福も、一本の縄にかかっていたと言っても、決して言い過ぎにはならないだろう。

私たちは平凡な見合い結婚だった。見合の席で、私はお前の和服の似合うしっとりと落着いた物腰とつましやかな人柄、それに何よりも名前通りの抜けるような肌の白さに魅

きつけられた。美貌とまではゆかないがおだやかにととのった容貌と、やや小柄でふくよかな体つきが私の好みにあった。その時私はもう、お前を裸にして縄をかけた場合のことを脳裡に思い描いていたことを告白しなければならぬ。

その時までには私は二、三人の女を知り、縛ったこともあった。そして縛った姿のいい女と、そうでない女のあることを知っていた。その経験がお前を妻として娶る決心を即座に固めさせたのだった。

つきあった女のひとり、ルミというバーのホステスは、大柄でスタイルのいいのが自慢だった。長身でスラリとした伸びやかな肢体は、連れて歩く男の鼻を高くさせるのに十分なものがあつた。ところが、はじめてホテルでルミが裸になった時、私は痩せた女の味気なさにガックリしたものだ。薄ッぺらな胸、骨の浮き出した腰、どこまでも浅黒い肌。

その頃の私は若かった。ベッドでの情緒よりも、連れて歩く時の誇らしさをより大切に思う年頃だったのだ。そして数回ベッドを共にした後で、私は縛った。ホステスを職とするだけあって、ルミは私が持ち出した縄にも

別に驚く様子もなく、私に乞われるままに両手を背中にまわした。

縄をかけてゆきながら胸の中を去来した索然とした気持ち、私は今でもありありと思ひ出すことができる。ほとんど羞恥も見せず、に為すがままになっていたルミ。やたらに苦痛を訴えるのも興ざめだが、枯木をからげるような手ざわりと無反応は更に悪い。いくら引き締めても、食い込まずに浮いているような感じの縄を見て、さすがの私も遂にあきらめた。

「あら、もうやめたの。あたしまんざらでもなかったのよ」

縄の解かれた手首をもみほぐしながら、ルミは平然とそう言った。

信子という女はルミと対照的な、餅肌でポチャポチャしたB Gだった。短大を卒業して就職したばかりで、世間のいろんな事に好奇の眼をキラキラ輝かしているような時期に知り合ったのだった。まだ処女だと知ったときは、これは厄介なことになるかも知れないぞと思ったけれど、うつつに「これは遊びよ、ね、いいわね」と何度か口走るのを耳にして少し気分が楽になったものだ。

信子は私の遊んだ女の中で、一番タイプがお前に以ていたと言える。しかしあまりにも情緒がとぼし過ぎた。もうはじめから、何もかも任せっきりで、そのクセ、男は女についてくるものだと考えているタイプの、女なのだ。そして、それが新しい女のいき方だと心得ているから、なお始末が悪い。

縄を見せた時も、それで縛られるというところが、何が斬新な——というより、信子に言わせれば「前衛的」な方法に思えたらしく、協力的なのはまあいいとしても、ここをこうしろあそこをあしろと、恥ずかしげもなく指図するに及んでは、開いた口がふさがらなかった。そのくせ、お前もその味を身にしみて知っている筈のあの私独得の責戯のまえには、もう前衛的もクソもあったものか。だらしなくもピーコラピーコラ泣き叫んだ上、とめどもない恩きせがましい、ひとりよがりには悩まされてしまったものだった。

雪子、お前の素晴らしさを讃えるために、ついこのようなことを書いてしまったのだけれど、不愉快だったろうか。だが、誓って言うけれど、お前と結婚してからは、他の女と交渉があったことはただの一度もない。そし

てただひたすらに十年の間、お前の心の解けるのを待ち続けて来たのだ。その長い年月の重さを思いやって、私のささやかな逸脱を許してくれ。

十年とひと口に言うけれど、そのような思ふままな経験を経た後では、つらい年月だった。しかも今でこそ十年と区切って言えるのだけれど、その当時はなんの予測もできず、そんな状態が一生続くかもしれないことを覚悟していなくてはならなかったのだ。

結婚し生活を共にするようになってから、お前は私の書棚などを見て、私にそのような性癖があるかもしれないと、薄々感づいていたかもしれない。しかしそれらの書物がちょっと異常にかたより過ぎていたって、どれもそこら辺の本屋の棚にも並んでいるものばかりだ。私が、お前の眼にとまったこともないたとえとまったとしても嫌悪に眼をそむけるような本や雑誌の愛読者だとは知る由もなかったろう。まして、その本や雑誌に書いてあることを実行したくてウズウズしているなどとは夢にも思わなかったに違いない。

一方私の過去を知る者なら、私が十年の間も妻と暮しながら、一度も縛らなかつたと聞

いてもおそらく信用しないだろう。たとえ信用しても、「おめえ、よっぽどカアチャンがこわかったんだな」と冷やかされるくらいのものだろう。

私とてただ腕をこまぬいて、私のものになつた縛るのに理想的な肉体を眺めていたわけではない。ことに結婚して数カ月、お前がはじめて女の悦びに目醒めたことを感じとった時からというものは、幾度となく私の手は無意識にそこに脱ぎ捨てられた寝間着の紐の方に伸びたものだ。そしてただ一度だけ、我を忘れて、お前の両腕を背後にねじりあげ、紐をからませにかかったことがあつた。

「なにをなさるの？」

シートに押しつけた顔をねじ向けて、お前は詰問した。おびえがお前の表情をきついものにしていたのかも知れないが、私はその表情を見て冷水を浴びせられたような気持ちになつた。

「いや、いやよ」

突き刺すような声だった。侮蔑の色が、つい先程までの陶醉のものを吹き払って、お前の頬をよぎった。私の黒い血の奔流はたちまち萎えた。それから数日の間、私はお前の顔

を、まともに見る事ができなかった。

人は恐らく私の気の弱さを不審に思うだろう。結婚前は、あれ程破廉恥に女を縛っててもあそんでいた男が、妻にだけはそのことを言い出しもできずに、ただの一喝ですくみあがってしまったのだから。私自身も自分の心の動きが不可解だった。なんだこんな女のひとりやふたり——とカラ元氣をつけて、ルミや信子の場合同様に、いどみかかって行こうとしたこともあった。しかし、イザとなるとどうしてもすくんでしまうのだ。

その当時はただ齒がゆさに地団駄ふむだけだったが、今はなぜあの時あだったのか、よく判る。

雪子、私はお前を愛してしまったのだ。だからこそルミや信子に対したのと同じふるまいに及ぶことができなかったのだ。私はお前に捕えられてしまっていた。ゾッコン参ってしまったのだ。それなのに私の方は、お前を私の好みのままに縄でくくしあげてしまふまでは、お前を捕えた、という実感を持つことができないでいたのだ。ああ、この呪われた性。私は愛するお前と床を共にし、愛を分かちあいながら、渴きと不安にいらだち続け

ていたのだ。それがいつ癒やされるかも判らずに……。

うわべは平穩な結婚生活が続いた。四年目に女の子が生まれ、路子と名前をつけた。

その頃のお前が私を愛していたのかどうかは、いまもって私には確信がない。だが、お前は一家の主婦として妻として、若い母として、平凡ながら立派に役目を果していた。万事に控えめなお前のことだから、愛情の表現も大げさでないことはよくわかつている筈なのだが、時にそれが疑心暗鬼をかきたて、ふたりをへだてる溝は埋めようもなく深いのだと考へたりした。

はじめてお前を縛ろうとした時、お前が私に向けた冷たい拒否と侮蔑の視線が、事あるごとに私の意識をシクシク痛ませたものだ。お前に軽蔑されているのではないかと思っただけで、居ても立ってもおれない気持になるのだ。そのくせ私は塞がれた欲望を満たすために、結婚後は発覚をおそれ一時やめていた、お前が見たら私への軽侮を更に倍加するような本や風俗誌に再び耽溺するようになっていた。

ああ、あの頃の私の心の暗さを思うと、今

でも暗澹とした気分になる。あの頃の私は、鼠だった。お前の眼をかすめてウロチョロしながら、欲望の切れ端を薄暗い穴の奥で後生大事にかじっている鼠だった。

あれらの雑誌類をお前の眼から隠すのにどんなに苦心したか。そしてそれらが遂には発見されて、すべてが白日の下にさらけ出される時のことを思つて、どんなに戦戦恐恐と日を過ごしたか。それにしても夫婦の間で秘密を保つことのなんと至難の業だったことか。

生来蒐集癖の強い私は、どんな雑誌でも読み捨てにできない。まして苦心して手に入れた便所にかくれて読むような真似さえした、私にとつては何にもかえがたい書物だ。捨てることなど思いもよらない。一枚二枚の紙ならいざ知らず月月たまってゆく雑誌の類は、かくすことを考えただけで憂うつになったものだ。私ははなけなしの智慧の限りを絞った。狭いアパートの開けっぴろげの部屋。しかもお前は私の留守中も終日そこに居て、やろうと思ひ立ちさえすれば、スミからスミまで調べ尽すヒマを持っているのだ。そこにかんりの量のものを隠すなどという芸当は、アルセーヌ・ルパンの奇想をもつてしても、不可能に

近い。しかし私はそれをやった。およそ二年の間、秘密を保つことができたのだ。

その方法をここに書けば、今でも時折「奇ク」誌上に載る、奥さまに貴重な雑誌類を焼かれる悲劇を防ぐ一助になるかとも思うのだけれど、今の私は、とてもそれに耐えられない。私はまだこの悲しい滑稽劇を再現するよきな心境には達していない。

しかしいかに苦心しても、その発覚は時間の問題だった。そしてそれは遂に来た。心臓も凍るほどひっそりと。

或る日突然に、命より二番目に大切な、苦心の蒐集のすべてが忽焉と消えうせてしまったのだ。お前は平然として何も言わない。私はもちろん何も言えない。事は奇妙な暗黙の了解のうちに、さざ波ひとつたてずに小暗い深淵に呑み込まれてしまった。

雪子、お前の心が解けてからも、私たちは結局この時のことについて、ただのひとことも触れたことがなかった。しかし今でも、お前が私の苦心の隠し場所から、一冊また一冊と薄汚い本を引きずり出している図を想像するたびに、私は羞ずかしさに居たたまれないうる思いをする。一冊引き出すたびに、お前の心

から欠け落ちていった私への信頼を思うと、慄然となる。お前はそれらのことを結局ひとことも私に言わず、胸に秘めたまま往ってしまった。

だが、雪子。その事があった後のある夜のこと、お前がむずかる路子に添い寝しながら何気なく口にした言葉、

「ああ、ヨチヨチ。路子はお母さんの言うことをよく聞いて、いい子になってちょうだいね。」

あの言葉の持つ微妙なニュアンスをあれ程鋭く感じ取ったのは、ただ私のうしろめたさのせいだけだったのだろうか？ あれは、お前のつつましい心が苦痛のあまり、ふともらした呻きではなかったのか。私への精一杯のあてつけではなかったのか。私は何も言わなかったけれど、お前の言葉は十分に私の胸を貫いていたのだ。……

雑誌類の消失は、その後も二度にわたってひそかに起こった。そしてふたりのかわす言葉はますますわずかになり、固く冷たいしこりが、ふたりの間にドッカと腰をすえてしまった。週に一度は、熱い抱擁に魂を奪われていながら、心はどんなに離れていたことだらう。

私も強情だったが、お前も芯の強い女だった。あんな状態にまで立ちいたりながら、どちらもひと言もその問題に触れようとしなかったとは！

その頃のお前がどんな内心の苦しみと戦っていたのか、遂に永久に聞くチャンスが失ってしまったが、私の方はこの泥沼のような状態から何とかして這い出そうと、私なりの努力はしていたのだ。

結婚してしばらくの間、この人には言えない嗜好を絶とうとして、そんな雑誌類から遠ざかっていたのが、ふとしたことで再び元のもくあみに戻ってしまったことは前にも書いた。それで私はこの生まれつきの性癖をいやそうという努力を、二度と繰り返す気にはならなかった。そうするにはあまりにも深入りしすぎていた。その代り今度は逆にトコトンまでそこに入り込んで、自分の欲望を正当化しようとするようになったのだ。

ルミの時も信子の時も、私は何のうしろめたさもなく縛りを楽しんでいたわけではなかった。人に言えぬ性癖を持つという罪悪感に絶えずつきまとわれていたのだ。私のなけな

しの女遊びも、だから青春時代の愉快な乱行というのには程遠く、常に影につきまといわれていたといつてよい。

が、それを発散することができた間はまだよかった。お前との結婚生活に入って欲望が抑圧されればされる程、それは陰湿なものとなって私の心をむしばんでいった。お前にかくれて雑誌のページをめくる時も心は閉ざされどす黒い粘液で指先がページにねばりつくような感じにとらわれたものだ。お前の美しく熟した肉体を傍にしながら、心をよそに集中して自慰にふける哀しさ——いや、哀しさなどという綺麗ごとではすまされない。それは自己の崩壊をまねかずにはおかない不毛な行為であり、精神状態でもあったのだ。

立ち直るには、この疎外を自己の正当な立場として世間を糾弾するより外なかった。私は勉強した。哲学を、心理学を、文学を。私の心はほの暗い森かげを流れる小川から次第に山を降り平野を横切り、次第に広く次第にゆるやかに、やがて広く輝かしい大海へと乗り出していった。ああ、あの頃の私の明るくなった表情を、自信ありげになった様子を、お前は気付いてくれたらうか。

私はこの世界の広さに次第に自信を持つようになつていった。私の性癖などサジスムというより、ただ和合の方法に好みがあると同じ程度の、単なる嗜好に過ぎないと思うようになってきた。縛られた女体のかもしだす妖しくも美しい羞恥図に恍惚となる——それだけのことではないか？

広い世界に出た私は、やがて長い間うつ積したものを吐き出すように、原稿用紙に向かうようになった。ただ他人の書いたものに欲望をたぎらせて、それを発散もできずに悶々としている立場から、積極的に世の同胞に働きかけて、新たに獲得した自分の立場をさらに強固にしたかったのだ。投稿したものが掲載され読者の反響があると楽しかった。はげまされた。そして私の心からうっ積したものが徐々に消え去っていった。重くたれこめた雲の間からひとすじの曙光がさしてくるようなあの頃の感じを、今でもありありと思い浮かべることができる。

もちろん原稿を書くのもお前にかくれてだった。しかし次第に私の内にたくわえられた自信が、このようなこそとした行動をとることを次第にいさぎよしとしないようになり

遂に一大決心をもって、おおっぴらに書くことにした。ところが意外なことに、お前は何も言わなかった。書き置いてある原稿を破るということもしなかった。そればかりではない、その頃からお前は眼に見えて態度を軟化させていったのだ。もう雑誌をこっそり始末されることもなくなった。不気味な思いを抱きながらも私の方も次第にそれに慣れて、雑誌類をかくさないようになっていった。

あれ程強硬だったお前が軟化した原因を聞きだす事もないままにお前は往ってしまった。今となつては知りようもない。あの不屈不撓の「時」の浸蝕作用だったのだろうか。それとも、私の次第に明かるく自信たっぷりになつてゆく様子が、お前を、圧倒したのだろうか。あるいは（こんな風に考えるのは気がとがめるのだが）私の原稿に与えられる幾ばくかの原稿料をさいて、お前に何かと買ひ与えた。その事が原因だったのだろうか？

たしかに、はじめての原稿料でパールの指輪を買い、それを拒否されることをなかば覚悟しながらお前の指にはめたとき、お前は拒否するどころか、普通の女と交らず眼を輝かしたものだ。この金の出所についてお前に何

も言わなかったのは、私がずるかったかもしれないが、もし後に私の嗜好を実行に移したことが悪とするならば、あの指輪を受け取ったとき、雪子、お前は私の共犯者になったのだ。が、今となつてはそんなことはもうどうでもよい。あの指輪が私たちを結びあわせる第二の結婚指輪になったという事実さえあれば十分だ。

新しい生活が始まった。しかし私たちはいぜんとしてこの問題について話しあう事はなかった。羞恥がそれを言い出すことをためらわせたし、もう今更そんな話を話し合うこともないじゃないかという気楽さもあった。

お前の方はどうだったのだろう？ 結婚当初の生真面目さの代りに、駄々っ子のような男をおおらかな気持ちで抱擁することのできる年令に達していたのだろうか。いやらしい性癖の持ち主ではあるが、他に女遊びひとつするわけでもない私を（私も危険な中年男になっていた）許す気持ちになつていたのであるか。ああ、夫婦というものは、無言のうちに何と多くのことを伝えあうことができるのだろう――

このように心の垣根が取り払われたにして

も、そこから更に進んでお前の緊縛を実行に移すまでには長い時間と、それに何かのキツカケが必要だった。昨日まで嫌いぬいていたことを、さあもうよくわかったらうから、お前にひとつやってやるぞといったって、うまくいくわけのものではない。理解するということと、現実に自分の身に起こることの間に、千歩のへだたりがあるものなのだ。私はお前の許しを得たことで有頂点になつていたし、抑圧が解かれてみればさほど実行をあせるような気持ちでもなかったのだ。ただ、私がそこら辺にわざと出しばなしにしておいた雑誌を、留守中にお前が読んでくれることを、ひそかに期待するだけだった。

ああ、しかし結婚以来十年にしてはじめて得られた心の平安も、そうながくは続かなかつた。一粒種の路子が幼稚園の帰途、ダンブカーにはねられて死んだのだ。あの時のお前の嘆きぶりは、今思い出しても胸が痛む。しかし路子のこととはここではあまり深く触れまい。今の私は路子にもお前にまで先立たれたただひとりこの世に生きている。天は私のよこしまな欲望を罰するために路子を、更にはお前を奪い取り、私ひとりだけをこの世に見

捨てたのだ……

ありあわせの手拭でお前の手首を背中に交又させてくくった、あのめくらめくような第一歩のキツカケを私がどうして擱んだのか、今になつてどうしても思い出せない。ただ、路子が死んでから半年もたった頃から、お前は夜の床で俯伏せになるのを好むようになっていて、私が背後からお前の脇腹や尻をくすぐったりすると、体に沿うて下に伸ばしている手で、私の手を、払いのけようとしたものだ。その手首を擱んでひとまとめにすれば、それで完全に後ろ手に縛つたのと同じ形になる。多分私はさりげなくそうしたのである。そして、それに対してお前が拒む様子を見せなかったのに力を得て、手首をくくりあげたのだろうと思う。今でもはつきり覚えてるのは、私に背後から責められながら、お前が汗ばんだ背中の上でくくられた手を開いたり閉じたりしていたことだ。その手を軽く叩いてやると、お前はシートに上気した頬を押つけたまま、くくられてやや赤らんだしなやかな指をからませて来た。ああ、私はあの時のお前の無言の動作の中に、いかに多くの思

いを読み取ったことだろう。

私が自己を克服するために、心理学その他のいろんな書物を読みあさった事は前に書いた。その目から見れば、お前が私に背中を向けて腕をその両側にそって垂らすという姿勢は、お前が意識してやった事かどうかは知らないが、私に縛ることを無言のうちに求めていた、としか言いようがない。そしてこの被虐への願望がどうしてお前の心に芽生えたのか——これには路子の死が決定的な影響を与えたとは私を考える。

雪子、お前は路子を死なせたことについて自分を罰したかったのではなかったのか？

路子の死後、次第にお前の一面はおだやかな表情の底にあらわれはじめた。なにか思いつめたようなやるせなげな翳り、あの若く美しい修道女を思わせるような表情を思い出すにつけても、そう考えずにはいられない。このようなことをおぼろげに感じながら、自分の黒い欲望のおもむくままにそれにつけ込んでいった私は、今度はお前の共犯者になったのだ。おそらくここで私たち夫婦は、はじめて水ももらさぬ仲になることができたのではないだろうか？ 結婚後十年、しかも娘の死と

いう代価を払ったうえで、ようやく——

手拭から腰紐へ、腰紐からロープへと発展（よく人は「馴致」という言葉を使うけれど私はその言葉の響きに反撥を感じる。私はお前を縛りはしたけれど、それはお前を私に隷属させるためではなかった）してゆくのに、さほどの時間はかからなかった。それはあたかも、処女を奪われた女がどうしようもなくその男に引きずられてゆくようになる心理と似ているようだ。

雪子、私がこんなことを言うからといって腹を立てたりしないでほしい。私は何もそうなっていたお前の心理を自分なりに分析して、お前をつまらない女だ、表面はすましていてもその心の中には縛られたくてウズウズしていたのだ、などと軽蔑しようとしているのではないのだから。それどころか、お前が縛るのを許してくれるようになってからの私の変わりよう、自分の口から言うのは気がひけるが、お前への傾倒の仕方——それはお前が一番よく知っていることなのだ。

ああ、今思い出しても体が熱くなってくるような、あの二度目の蜜月——その蜜月も、ただ私だけがタブーを許された歓喜にひたっ

ているだけなのだったなら、こんなにも深い幸福感にひたり切ることはできなかっただろう。私の喜びをまったくきものにしたのはなにをおいてもお前の喜びを見たり感じたりしたからこそなのだ。

赤いしごきでいましめられた肌身を消え入りたげに悶えさせながら、やがて耐えかねて身も世もない歎歎の中に崩壊していったお前を眼の前にして、私自身もかつて経験したことの無い、めくるめくような恍惚に、思わず呻き声をあげたものだ。こんなことがお前の身に起こりうると、それまでのお前を知る誰が予想したろうか？

「どんな女でも縛るぞと言えばおぞ気をふるったように尻ごみするけれど、いざ縛りあげられると、それだけでもう踏ん切りがついて悦ぶものさ。その証拠に、縛り写真を見てみたまえ。みんな恍惚とした顔付になってるじゃないか」

かつてS友のひとりが自分の経験をふまえて、こう断言したことがある。私にはとても信じられなかったが、お前のそうなった状態を確認して、残念ながら彼の言葉に多くの真実が含まれていることを認めざるを得ない。

(もっとも現在でも女の全部が無条件でそうなるとは思わないが) それにしても、女心を開く鍵のなんと複雑なことよ。

このような経験をしてからというものは、お前は前にもましてつつしみ深い、羞じらいの多い女になっていった。ちょっとしたことで白い頬をポツと上気させ、睫毛をそよがせながらゆらぐようになまめかしい瞳で流し目をくれる。そんなお前のそぶりを見て私の方もいとしさにやるせない気持ちになってしまふのだった。お前の羞じらいは何にもましてお前の魅力だった。そして私はその羞じらいを強引に剥ぎ取って、お前を更に強い羞恥へ突き落としたという衝動にたえずゆさぶられ続けていた。それは飲んでも飲んでもいやされない渴きに似ていた。

緊縛美という言葉がある。その種の雑誌にはクドイほど用いられる言葉だ。しかし私には、雑誌に載っている緊縛写真などを見てもちっとも美しいとは思えなかった。それらの写真はあまりにも即物的過ぎた。被写体(この場合はもちろん縛られた女だが)がいかにカメラマンの主観に美しく見えようと、それと写真にあらわれる美しさとは全然別個のも

のであるという初歩的な認識すらカメラマンにはなかったのだろう。それらの写真はカメラマンの経験のメモにすぎず、第三者にとつては美でもなんでもなかった。緊縛美という言葉は、なにか自分の行為のうしろめたさを糊塗するための切り札のようにさえ思えたものだ。

だが、お前を縛るようになってからは、この緊縛美というものをしみじみと味わい考え直すようになった。それまではお前に隠れて漁った、死んだ写真(それらの中には公にはできないものも含まれている)ばかりを見てそこから緊縛美の片鱗でも感じ取ろうとするのにならされて来た私の感覚には、その美は全然違ったものとして感じられたのだ。

それは、いわば生きて息づいているムードそれ自体といていい。ムードは客観的にそこに縛られた女がいるというだけでは醸成されるものではなく、主観がそれに没入するところが絶対条件として必要なのだ。お前が縛りあげられた白い素肌のすみずみから立ち昇らせる羞恥の霧が私の眼を曇らせることが、逆に私がその霧をよしとしてすすんで曇らされようとする態度が絶対必要なのだ。いわば緊

縛美はふたりの創作なのだ。(私が雑誌などで見る緊縛写真よりも絵の方にはるかに興味がわくのは、おそらく想像力のもたらす創作という点においてなのだと思う)

お前は恥ずかしがってよく私に背を向けたまま、顔を両手でおおって脚を縮める姿勢をとった。そんなお前の腰から細紐を一本一本抜き取って衣紋を次第に崩してゆき、後ろ襟に手をかけて、一気に、肩肌抜きにしてしまふ。その時あらわれるお前のほっそりしたうなじから優しい肩へかけての線が私にはたまらなくいとしくて、そのまま手を止めて、接吻の雨をそこに降らしたものだ。高く結いあげた髪の毛の生え際や、耳たぶの後ろあたりからえもいえない甘い香りをただよい昇らせて、お前は、くすぐったげに鼻を鳴らした。

和服用の愛らしいパンティ一枚にされたお前は更に体を小さくまるめて布団の上にならずくまっていた。私はその時の気分で絹の赤いしごきを選んだり、綿ロープを手にとったりする。前者は甘い香りを求める時、後者は残酷な気分を駆られた時だ。

「ひどくしないで……」

顔をおおっていた手を逆手に取られて背中

にねじりあげられると、お前は頬をシートに埋めて、小さく叫ぶ。叫びながらも片手をそうされると、お前はみずからもう一方の手もうしろへまわして、私の作業を助けてくれたものだ。時には「さあ手をうしろへまわして——」と命ずることもある。そうするとお前はうらめしさと羞ずかしさの妖しくいりまじった瞳で私を怨ずるように見ながら、頬を染めて両手を背中で交叉させた。

手首を縛りあげた縄尻を上引き絞ると、お前の優しい肩が怒り肩になり、お前は「いたい、いたい」とのどの奥で訴えながら腰を浮かす。そうして突っ伏しているお前を背後から抱え起して、丹念に縄をかけてゆくときどうかするとお前は背中にくくしあげられている手を器用に動かして私をよろこばせるいたずらをしたものだ。

どの女もそうなのだろうけれど、お前も乳房がとても敏感だった。お前はなかなかそれを認めようとはしなかったが、私の執拗な責めに遂に屈服して、乳房責めが一番こたえることを真っ赤になって認めたものだ。この責めにはなにも胸に縄をかけなくても、手首だけを背中に縛っただけでできるし、それには

またそれなりの楽しみもあるのだが、お前はやはり、胸に縄をかけられて、女の命としていつくしんでいる乳房が残酷に責められる被虐感の方をより好んだようだ。

お前はよくうなだれた恰好のままで、自分の玉のような白い乳房が、ザラザラしたロープや、時にはついさっきまで自分の腰をしめていたしごきで無惨に絞りあげられてゆくのを睫毛の陰からじっと眺めていたものだ。縄が豊かなふくらみの上下に姿を没すばかりに食い込み、その上下の縄をひとつにして胸の双丘の谷間と両の脇に縄が通されると、眼鏡の枠をはめこまれたようにプックリ盛りあがって、すき透るような肌の奥から静脈の蒼味がすけ、頂点のポッチリと愛らしい木の実が紅に色づくのだった。

お前はそれを見とどけると、絞めあげられた胸を切なげに喘がせ、のどを小さく鳴らしながら、睫毛を伏せて顔をのけぞらせ、背後からのぞき込んでいる私に唇を求めるのだった。

お前は自らの豊かな乳房にナルシスの愛を抱いていたのかもしれない。

その頃には、お前はもう全身の筋肉をもみ

ほぐされたようにグッタリとなってしまうているのが常だった。

汗ばみ羞恥と激情に染めあげられたお前の肌の美しさ。その香ばしい匂い。私の感覚ももうしびれきっている。しびれの中で私は更に鋭い刺戟を求める。わざと今まで残しておいたパンティにお前の悶えのあかしをさぐり当てて、それをお前のうっすらと涙をたたえた眼に突きつけるのもその時だ。頬を火のよう燃えたたせて狂わんばかりに頭を振るお前の姿のいじらしさ……そのくせ、

「ねえ……」

と、乾いた唇を半開きにし、濡れた瞳で訴えかけてくる妖しさ……

私はそんなお前を突き倒す。足首に巻きつけた紐を敷布団の下にくぐらせて、もう一方の足首にくくりつける。それだけでお前は敷布団の幅一ぱいに引き裂かれた体をどうすることもできないのだ。こうこうと輝く電灯の下にどうすることもできず、羞恥のはむらを吹きあげながら、お前は消え入りたげにすすり泣きはじめる。

だがお前は泣いて欲しがるものを与えられず、更に意地の悪い責に翻弄されて、あられ

もなくくねる姿をさらさねばならなかった。

足のいましめを解かれただけの体を乱れたシーツの上に突っ伏して、まだ夢幻のさめきらない膏汗にぬめぬめと光る背中を私に向けていたお前の消え入りたげな姿を、今でもありありと、眼の前に思い浮かべることができ。ああ、緊縛美というのは、その時のお前の姿をこそという言葉なのではないだろうか？死ぬほど恥ずかしい姿を目撃されて、絶えも入りたいのに、手は背中に高高とくくしあげられて空しく空を掻くばかり。快楽の喘ぎおさまらぬ乳房も、余情を噛みしめておのいている唇も、にくい征服者の眼からかくすべはないのだ——緊縛はここでこそ快楽のかなめであり、その美しさはここで極まるのではないだろうか？

しかし、私はこのようなあからさまな緊縛美だけを好んだわけではない。無残絵とかあぶな絵というか、日本的な情緒にひたることもまれではなかった。お前がひそかに自慢する艶やかな黒髪と抜けるような肌の白さが、この日本独特なしっとりとした情緒を私に満喫させてくれたのだ。前にもちょっと書いたように、お前をはじめて見た時の印象に

私が魅きつけられたのもこのお前の持つ日本的なムードなのだった。だから責めの順序からいえば、素肌を晒して羞恥の汗をしばらくせる前に、この情趣を味わいたいという欲求があったことになる。

お前は日常でも夏をのぞけばほとんど和服だったから、なにも縛るのにあわてて長襦袢の着用を命ずることもいらなかった。上に着ているものを脱がしさえすれば、薄い桃色に菊の花を散らした長襦袢姿が眼の前にあらわれるのだった。細帯一本で横坐りになっているのを、しごきで後ろ手に縛りあげておいて長襦袢のうしろ襟を肌襦袢ごと肩から剥ぎおろす。胸元をはだけて襟の間からたわわな実りを引きずりだし、胸にまわった赤いしごきで絞りあげる。そうする間に裾はもうお前自身身悶えで崩れ、真っ赤な蹴出しがこぼれ出ている——これが私の好きな構図だった。

いつの正月だったか、自前の髪で日本髪に結わせ、正月があけてそろそろ髪を崩さねばならなくなった頃を見計らって、お前を縛ったことがあった。その時は緋の長襦袢だったが、髪、黒、着物の赤、その間にほのめく肌の白さが私を有頂天にしたものだ。横ずわり

になって髪も重げにうなだれているその縄尻をこたつに入った私は左手で握り、右手には酒の盃をかたむけながら、あかず、眺めていた。時折構図を変えるために、私は縄尻を引っ張っては、不安定なお前の姿勢を崩させるのだ。紅の間からのぞけた乳首の愛らしさ、こぼれ出るまるっこい膝頭の艶めかしさ、私のなめるような視線に耐え切れなくなってお前が喘ぐようにもらした、恥ずかしいことをねだる言葉——私は酒よりもそれらのものに早ばやと酔ってしまった。そしてその後私たちを巻き込んだ紅の嵐の激しかったこと……。

またある夏のこと、ある高名な日本画家の美人画にヒントを得て、お前に緋の長襦袢を買い与えたことがあった。ああ、蟬の羽のような薄物の陰にはのめくお前の素肌の美しさはどうだったろう。それは薄物の作り出すひだによって、ある所は濃くある所はあるかなさかの桃色にぼかされて、それですべてさえず美しいお前の肌を、まるで夢の中のもののように見せていた。細腰にキュッとくびれ込んでいる細帯と、特に選んだ涼しげないましめのしごきの空色とがその肌の色と調和して、

かつてないなまめいた匂いをかもし出していった。私はすけて見えるお前の素肌を楽しむために、その時は薄物の下に糸もつけさせなかったのだが、そのねらいは当って、薄紅の乳首をつけた胸のふくらみや、むっちりとした腰まわりの色っぱさが、直接見るより強く私にうったえかけてくるのだった。

私は、いやがるお前を引きずるようにして鏡の前に立たせ、そむけようとするあごに手をかけて強引に鏡にうつる自分の姿を見させた。お前は弱々しげな瞳をあげてチラと鏡を見たが、あっと小さな叫び声をあげると、ぱつとうなじまで染めて羞かしげに顔を伏せてしまった。

薄物を通してほの見える乳首の愛らしい風情や、むっちりと白い腰の悶え、ほのかな肌色などが、あらわに見るよりも、なお感覚をそそるものとして、お前の眼にも映じたことだろう。

私はお前の背後に立ち鏡に写った映像と共に哀しげにおののく睫毛や、上気した頬からあごにかけてのふくよかな線、結いあげたばかりの襟足の匂うようななまめかしさに、うつとりと見とれていた。あの時も、お前は高

高と縛りあげられた白い手を、もどかしげにうごめかせていた……

私たちのこれらの行為は、その道のベテランの眼から見れば、発展のない児戯に類するものに見えるかもしれない。しかし私はそれで満足だったし、何よりもお前が悦ぶ限界がそこまでのなを知っていた。鞭打ちや浣腸のようなこともやりかけたこともあったが、私自身の好みもあって、お前の拒否をおしてまで実行することをしなかった。私はその方面の雑誌を読み過ぎていたのに対して、お前は遂に死ぬまで私のたくわえた雑誌類はもちろん、私の書く原稿にさえ眼を通そうとしなかったのだから、それも当然だったのかもしれない。

お前はやはり、そういう意味では潔白なままだったのだ。

そして、ああ、今にして思えば、あれ程苦心してようやく手に入れたように思えたお前の許しも、実は結婚十年という長い歳月の間に、にぶってしまった感覚の楽しみを鋭く生き返らせるために、お前の肉体がみずから求めていたことではなかったのか？

ああ、雪子、はたしてそうだったのか？

私ひとり罪の意識におののくばかりで、お前の方は心になんの傷も受けずに死んでいったのか？

死の床でお前は私の手を握りしめながら、路子を死なせたことをわび、その心残りをのぞけばしあわせだったと言った。私はそれを聞いて、お前の肩にすがって男泣きに泣いたものだった。

あの時のお前の言葉に、嘘があったとは思わない。

だが、ああ雪子、今の私はそれだけでは足りない。

かつてお前を縛りあげて、その襟あわせを割り開き、かくされた珠玉を自由に弄んだのと同じように、お前の心を断ち割って、お前の奥底にひそんでいた思いを——お前が私にあかさぬままにあの世へ去ってしまった思いをこの手に握み出したいのだ。

それなのに、お前は冷たく微をはびこらした縄を——かつて私があればど狂喜して、お前をからめ捕えたと信じた縄を後に残したただけで、もう答えてくれようともしない——

(おわり)

映画感

『猿の惑星』
を観て……

高 浜 満 六

私がこのSF映画を観に松竹座へ出かけたのは他でもない。SF映画の粋とか、ラストの面白さとか、宇宙時代がどうのとかという映画評にかかれていたことは、二の次であった。一途に、猿と人間の主客顛倒の世界から連想される、猿に支配された人間の家畜化の興味だけであった。

昔、奇クに連載された、沼正三氏の「家畜人・ヤプー」に少なからず共鳴し「家畜化小説の登場を喜ぶ」とかいふ迷文を書き、「第七天国の夢想」で肥った紳士貴婦人を家畜にみ立てて、裸で貸出すなんてとんでもないことを考えた私は、今でもそれが忘れられないのだ。私の好みは、常に強者と弱者が位置をかえる所にある。兵卒が高級将官を、労働者が社長・重役を、不具者が堂々たる偉丈夫を、醜い女が美しい貴婦人を、貧乏人が富豪を、少年少女が中年の紳士や婦人を、やせた人が

肥満体の男女を（肥満体の人が常に強者であるかどうかは疑わしいが私なりの観念に於いて）……等々。それが家畜対人間の位置が反対になるなんてのは、最高に楽しいではないか……とばかりに出かけたのである。

結果は勿論（いつでもそうだが私の望みは欲ばりすぎて）私の願望を満足させるのには程遠い内容であったことは確かである。しかし、ぜいたくな望みを押さえての感じはこの奇想天外な映画は面白く、私を喜ばせたことは事実であった。

まず、猿のメイク・アップが素晴らしい。松竹座の前に念入りの説明があったが成程、堂にいったものである。私は行く前にそれが不安であった。表情のないぬいぐるみの猿のお面ではまるで漫画であり、怪獣映画であって、折角映画なればこそ表現出来る奇抜な世界も、所詮紙芝居を見ているようで馬鹿らし

いからだ。せめてその時間なりと、夢と幻想の世界に観客をひきずりこむだけの力がほしいからだが、この点がまず観物ではあった。こういうと、何だか健全な映画評を真似たみたいな気どり方だが、私のこの映画の興味は、宇宙船の中からこの大陸へ不時着して、沙漠の中から泉までの長々しい導入は時間が惜しかった。退屈したというのではないのだが……早く猿の支配する世界が見たかったからだ。

いよいよ猿の人間狩りの勇ましいシーンが始まる。面白い。そして、戦いというより狩猟であるが……、終って猿の住む都会へと移ってゆくシーンが、私の最も目を開いて見ていた処であった。主演のチャールス・ヘストンは、生憎く私の好みのタイプではないが、もし彼の様なタイプを好むサジストで私の様な興味を以てこの映画を見た人がいたら、彼が裁判所で身にまとう最後の布をはぎとられて丸裸にされる処や、狩りで捕えられて手と足を棒に縛られて担いでゆかれるところ……（こまかいことで恐縮だが、この縛り方は私なら手と足を一しよに固めて縛ってほしかった。その方がより獣的であり、浅ましい姿であるが故に……）逃げようとして網で捕えられ、もがくところ。首環をはめられ後手に縛られギョツとしめられる場面等、かたずをのんで見たことであろう。私が息を

のみ、面白いと思ったのは、猿が人間狩りを終って、数多くの獲物を捕えて意気揚々と引き揚げるところ。裸で積み重ねられた人間を前にして、大仰な身ぶりで写真をとるところや、木の杭に足を縛られて逆さに吊り下げられた丸裸の捕虜の人間。ここらにはもっと克明に見たかったが、如何にせん、チラリと見せた処がチラリズムの昂奮を誘うのだろうか。檻へ入れられて飼われる人間。鞭うたれる人間。そこらは面白いが、裁判が始まるあたりから話が理屈っぽくなってくる。猿がどうにもこの一ぴきの人間を扱いかねて、もてあましている感じでじれったくなる。家畜飼育者（ここでは猿）の間で、捕虜ではないけどものに對してこんなに理屈っぽくなければいけないのが不自然だ。ましてや絶対的に権力のある猿の世界で、しかも最高幹部の一人？ たる博士が、人間の知能のすぐれているのを知っていて恐れているのなら、何も、このいうことを聞かぬ、人間の世界でいえば狂犬の様な存在の兇暴なけだものたる人間はもっとひどい目に合わせねばならない筈であり、他の人間の（それにしても他の人間が無き過ぎるが）見せしめにすればよいではないか。前半の人間狩りに見せた、支配者の活き活きとしたスポーツの対象たる人間というけだものを捕え、殺りくする非情な横暴さが、次第に影をひそめてしまったのは何としても

残念である。

又、人間の知能を研究して喜んでいるチンパンジーの女（いや、めすというか）彼女のヒューマニズム（ではなかった）動物愛護の精神も度がすぎるといふものだ。猿の社会の中に於いて獣である一ぴきの人間が、かくも勇猛（いや兇暴）であり、知恵が発達していて恐るべき存在であることは、今話題の東山動物園に於けるゴリラのゴン太が危険なことをしてショーをとりやめた浅井氏の如くに悟らねばならないのだ。その上で研究をつづけるならば、もっと嚴重に緊縛し、監禁状態にして飼育し、実験しなければならぬ。それがあえてノソノソと彼の意のままにひきずられてゆくということは、いくら女とはいえ（失礼）笑止千万である。人間の現世のどこに、素晴らしく男前の猿がいて、たくましく勇敢で、賢くくつても、それに丸めこまれて興味をもち、うつつをぬかして喜ぶ婦人がいるだろうか。いれば又面白いのだが……。

終りのヒーローのスーパーマンの様な強さや、捕えられていた女（猿は、けだものである人間の、おすでもめすでも別に違った意味の興味がないのは仕方がない。人間の世界がそうだから。がこのあたりも期待は外れる）等々に至っては、もう駄目であるという様なことをいえば失礼だがそれなりに最後まで猿が支配者で絶対的で、人間は哀れな家畜であ

ったという筋を通して欲しかった。

どうせラストシーンは、人間の世界には戻ることがないのだし、人間そのものが悪からうがどうしようが、自由の女神の像を見て女と二人泣くのであろうから。

併し、私の私なりの観方、論理も何だか、あてにならないこととなった。ヒーローをのぞいて、野原で群らがっている人間共があまりにも動物的で、形だけが人間であっても、すっかり人間としての価値をなくしてしまっただけ、身体にまきつけている一片の布にだけ人間の誇りが見られる、という状態は私には少なからず不満であって、結局、人間が猿に支配されていることが当然の光景の様になり、始めに述べた強弱の転位がむなしく消えてしまっただけで、つまらなくなり、ラスト近く、この国の権力者の博士の猿が倒木の株に縛りつけられる場面に、不思議な倒錯の様な興味（即ち貫禄ある権威者がけだものである人間に縛られる）そのためにはヒーローがたくましく強いのは頂けない。それがおりに入れられていた野性の人間なら又格別に興味をもつのだがという、奇妙なこんがらがった気持ちにおちいったことに我ながら苦笑してしまい、この気持の分析を、昔、奇ク誌上で欽義先生に『肥満体を好む男』としてお答えを頂いた時の様に、弓削達人先生にお願いしようかとも思った次第である。

|| S M カメラ・ハント ||

続・三好留美
美波恵子の巻 ||

悦 虐 の カ ル テ

辻 村 隆

—— 第一の処方箋 ——

(クランケ 三好留美)

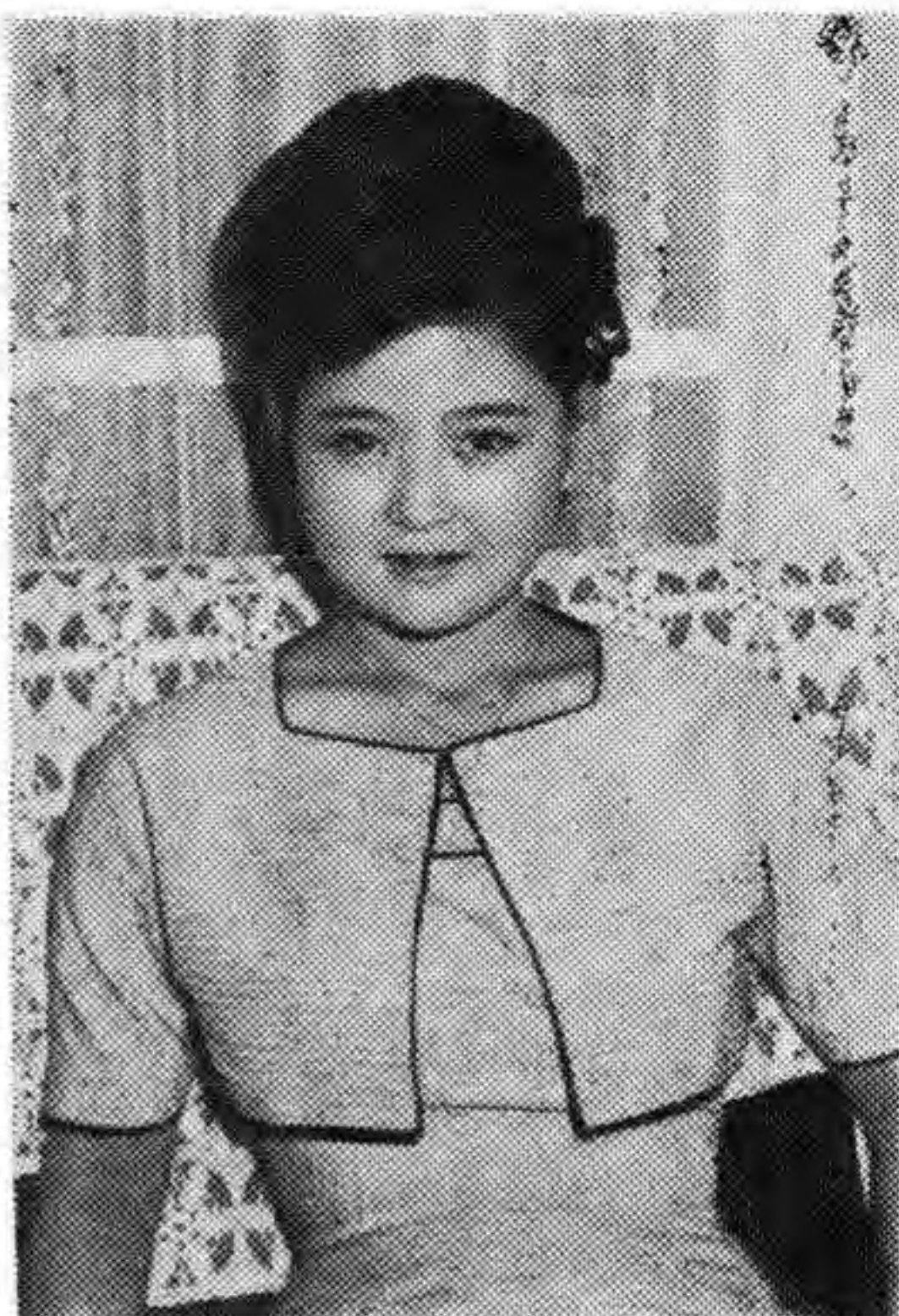
ひたむきなじらしい便りが、私と三好留美との絆を今も結んでいた。そのうち今一度いまひとたびと、絶えず心で思いながらも、名古屋まで、そのためにゆく私の足は重かった。始めて出会ったのが去年の秋(十一月十五日)のことだった。あれからもう丁度、半年の歳月が流れていた。山本章氏始め数人の人から彼女を紹介して欲しいと頼まれ、心のどこかでは独占したいという思いにかられながらも、心ならずも彼女の住所を教える結

果になってしまった。しかし彼女は、あの様にプレイを希望しながらも、他の人とは会おうとはしなかったのである。私のどこがよくて、そんなに義理立てしているのかとも思っていたが、始めての出会い(二月号掲載「甘美なる羞らい」参照)の時も、手紙ではあれ程積極的でありながら、いざ本番となると、一度の簡単な縛りで、三十分そこで終ってしまったあの羞らいが、ルミの心にはいつも脈々と流れているのかも知れなかった。縛られて袴々と身をさいなまれ、数々のあられない責め模様を幻想し憧憬していても、それが現

実となると身をきられる羞恥と不安の恐怖とになって撥ね返ってくるのだった。

手紙では、別れ際にそっと贈ったプレゼントの時計の礼とか、父娘と弟の四人暮しの楽しさとか、会社の些事、奇クの一ファンとしての希望のあれこれ、私のカメラ・ハントに対する、讃辞とも羨望ともジェラシーともつかぬ批判めいたこと、私という人間に対する憧憬、自分の日頃の緊縛に対する希望etcが、その後来た五、六通の便りに、羅列してあった。

又会って、第一回の様な、ああした気の使



う結末になることを私は懼れていた。その癖、榎山文枝に似た、彼女の容貌。素晴らしい豊満なおっぱいの魅力、ういういしさが、私の心をいつ迄も彼女に繋ぎ止めていた。

彼女から便りが届くたび、折返し私は多忙の折でも、かなり小まめに手紙を書いて返事していた。

美波恵子のこと、名古屋で彼女と会う腹をきめた時、一番に私の脳裡に浮かんだのはルミとの再会である。一日の間に二人の女性とプレイするのは、かなりの離れ技である。かつて三年前、神戸で刑部典子と志村善子の

可愛い顔が自然と臉に浮かんでくるのであった。

この処、三好留美からは暫く便りが途絶えている。二月中頃に届いた便箋二枚の便りが最後である。突然行くといったら、どういうだろう。男と違って女性の場合、いきなり言われても諸種の事情や、生理的な面もあるものだ。

思いつくと矢も楯もたまらない。大分心で迷った挙句だったが、思いきって受話器をとる。私の電話メモには彼女の会社の番号が今も控えてある。

○五二一九七一—三×五×番。直通——。交換手の会社名を告げる声。私は総務課の彼女の名を告げる。

「ハイ、三好でございますが……」

半年振りにきくルミの、鈴を振るような透きとおる声。私はゴクリと生唾をのんだ。

「辻村です、突然でごめんなさい。久しぶりですねえ、お元気？」

「ああ、辻村さん。びっくりしましたわ……何か……」

「急に思い立って名古屋へ行くのですが、お目にかかれませんか？」

「まあ、いつ？」

「あさって（明後日）午前十一時頃」

「というと水曜日でございますね。さあ何とか——」

「是非、会いたいですよ」

「ええ、私も……」

「以前始めて会った時の、あの地下のレストランでどうでしょう」

「武平町のピーコックでございますね。多分大丈夫と思います」

「じゃあ、必ず、お待ちしております」

「あー、あのう……」

「はあ？」

「いいえ、結構ですわ。それじゃ」

交換経由の電話だし、会社内では何も喋れないのだろう。私も余計なことと言わなかった。最後に何か訊ねたかった様子であったがルミはぐっとそれをこらえて、さりげなく電話を切った。二人の唐突の会話に万感交々胸に迫るものがあつた。

車で走って十一時に会い、三時間許りプレイのあと、午後三時、名古屋城の正面入口で美波恵子と会う手筈になっていた。果して、予定通りそううまくゆくかどうか分らなかったが、当日の本命は美波恵子であるにしても三好留美との懐かしい再会は、私の名古屋行を楽ししいものにしてくれる最大の要素になっていたのである。最初は、初めての美波恵子と、若しうまく会えず、或いはスッポカされた場合の味気なさから、予備軍のようなつもりで、二股かけて三好留美にもと考えた、不埒な私であったが、考えが追々と煮つまってくると、ルミとの再会は、不可欠のものになり、やがては、それが今度の名古屋行の目的のようにも思えて来たのである。

名古屋まで新幹線を利用すれば、週刊誌を一冊見終らぬ間に到着する時世だというのに大正二桁の少々中古の人間は、未だに何か遠く

感じていた。ひとつは車で行くことを念頭にいられているからであろうか。指名したレストランへは、もう迷うこともなく直行するところが出来る。私は改めて書斎の奥から、隠し書類箱の埃を払って、三好留美とのあの日のフォトをとり出してみた。みずみずしい純情ピチピチとはち切れそうなボリウム。しゃぶりつきたいようなボインのおっぱい。なつかしい微笑。半年の隔絶が一瞬に消えて、私は、ありありとルミの女体を眼下にホーフツとさせていた。

× × ×

ピーコックのひる前。地下の静かな雰囲気の中で、客は私達二人。少し時間が早いが、ディナーのコースを注文して、私達は向かい合っている。

ルミの顔に、まだ再会の感激が余韻をひいていた。

「ちっとも変わっていないね。ヘヤースタイルもその俣だよ。何かまるで数日前に会ったみたい」

「辻村さんも。お洋服だって、あの時のですわ。少し白髪が殖えられたかしら」

「気を使うからね。四十八才の抵抗期となる」と、俄然肉体の衰えを感じるんだよ。ところ

で今日は休みでないのによく出られたね」

「家には内緒ですけど、会社の方、有給休暇とりましたの」

「お父さん、その後、例の女性とよろしくやってるの？」

「余り悪い人でもない様ですわ。籍は未だ入っていませんけど、今年の正月から一緒に暮すようになりました。未だ母と呼びにくいんです。弟達もどうやらなつき始めた様です。父の笑顔の日も多い処を見ると、やはり嬉しいんでしょね」

「そう、それがいい。ルミちゃんも、いずれ結婚して家を出て行くのだから安心だよ、あの事が」

「私、未だ結婚なんかしませんわ。いい人はいないし……」

「放っておかないと思うがね。名古屋の男性は女を見る眼がないんだろうか。私が独身で若かったら、一番に求婚するがね」

「結婚しても、私の様な我儘な、しかも内攻的な性格うまくゆくでしょうか。特にあの方に理解ある人なんて、そうそうザラにはいないでしょう」

「結婚前には、誰だって夢もあれば秘密もあるさ。結婚当時はプレイなんかなくても愉

しいんじゃない？ 本当に必要になるのは倦怠期を迎えた時だよ」

「いい奥さんになれるかしら。自信ないみたいだけど……。あのう……」

「何？」

「辻村さん、突然来られたのは私だけのことなの？」

「いよいよ、ルミは疑問を訊してきた。どう答えるべきか。正直にいったら、潔癖なルミのことだから、そのまま帰ってしまいかねない。さりとて、いきなり会いたいといって、日時まで指定したのだから、彼女はその突然の私の行動に疑問を抱くのは当然である。やはり多少の嘘も方便、ハントを彼女が読めば分るかも知れないが、何とかうまく逃げるとしよう。咄嗟に腹をきめて」

「ああ、実はそうじゃないんだ。夫婦プレイの方が大変な熱心さでねえ、是非一度会いたっていうものだから、とうとう断わりきれなくなってる。日時を今日に指定して来たので、ルミちゃんに突然電話したのさ。あなたが駄目だったら、夫婦プレイの方も断わるつもりでいたんだよ」

「何処の方？」

「春日井市とかいってたけど、名古屋城附近



で会うことになっている」

「ああ、お城なら近いわ。お楽しみネ」

「相手は御夫婦だよ」

美波恵子が春日井市であるので、そんな点はチョッピリ本当のところ。しかし夫婦プレイは全然、出鱈目。未だ二十一才のOLだそうである。ルミと同年輩という処か。

「一緒に行ってはいけなしかしら」

「ああ、よかったら来てもいいよ。大胆な夫婦プレイを見学するかね。よかったらプレイ仲間に入ってやってもいい。彼等、思い掛けない珍客に欣喜雀躍するかも知れないよ」

「あっさり言っただけなら、てっきりたじたじ退却した。」

「でも始めての人と、やはり変だわ。私よすことにするわ」

「その方がいいかも知れないよ。ルミちゃんは今日はダメ？」

「……」

ルミは急に頬を真赤に染め、うなじまで赤らめて、うつむいた。

「いいんだろ？」

「でも……」

「どうして」

「何だか羞かしいもの」

モジモジして、ポタージュのスプーンをカチャーンと床に落した。大分気が顛倒しているらしい。逸早くボーイがかけ寄って、新しいスプーンをおいてゆく。

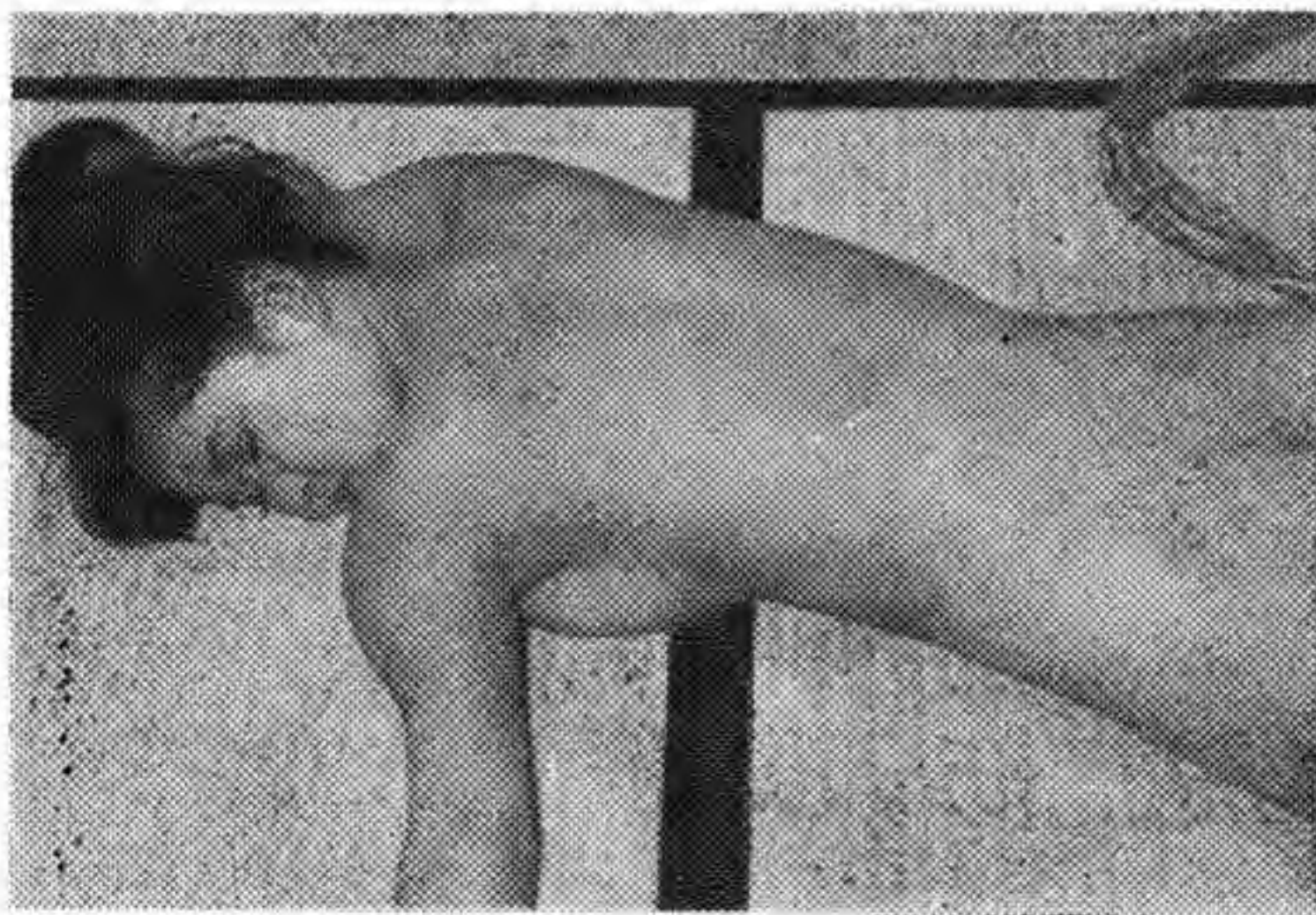
「今度会った時は喜んで縛られると、別れる時にいったんじゃない？ それにさ、ルミちゃんのくれた手紙に、いつも今日の日を待

ち兼ねている様に書いてあったし、どんなことでも耐える」と

「本当はそう思ってるのです。その癖、いざとなると——」

又ぞろ、焦れたいやりとりが続くのか。処女の本能が、幻想の被虐を求めつつ、現実の羞恥におののいているのであった。

こうした幻想と現実のギャップを予想して私の足は半年間、重かったのかも知れない。さっとあっさり行ける娘なら、名古屋辺り遠しとせず、あるいは屢々走っていたのかも知れなかった。この焦燥が再び繰り返されることを考えて、つい再会がのびのびになっていったといえなくもなかった。それだけに、もぎたてのういういしい新鮮味が漂っていた。処女の羞恥のベールを無理やり剥ぎとるのが、嗜虐の三昧境であるとするならば、ルミのような、想念のみに燃えている未熟の蕾をむしめるのは、この上もない悦虐の極みであったかも知れない。悪くいえば煮え切らぬともいえようが、いい方にとれば、秘かなアパンチュールを愉しもうとする、聖処女さながらの汚れない娘を陥落させること自体に、SMプレイとしての妙味津々と尽きざるところがあったともいえよう。



水前寺清子の唄の文句ではないが、こうしたウブな娘に対する戦術は（押してもダメなら引いてみな）である。

顔を見れば見たで、このもぎ立ての生硬な果実のような新鮮で初い初いしさに溢れたルミを何が何でも縛りたくなっていた。事実、私のハイド氏はウズウズしてよだれを垂らし

腕を撫しているのである。

「食事とはいえ、時間の経過も惜しい。デザートコースはもう主餐が出終って終りに近かった。黙って私は肉を口に運ぶ。ルミもポツリポツリと、少々怪しい手付でフォークとナイフを動かしていた。」

「じゃあ、又にしようね。食事すんだら、少しテレビ塔辺りを散歩して別れようか」

「ええ」

とはいったものの、途端にルミの表情がかげって、やるせない瞳が伏せられる。彼女自身、いざとなれば、余りにも不甲斐ない自分に情なく思っているのかも知れなかった。柔らかなアップのうなじの生毛が、かすかに震えている。必死に二つの相反する心が相剋しているに違いなかった。

「私ってダメね」

ルミは、ポツリといった。

「何が——」

「どうして自分に、素直になれないんです。う。こんな自分がイヤになりますわ」

引くと見せれば、傾斜し出したルミの起伏の多い感情である。ホテルへついてきても、又、プレイの緊縛までには一苦勞することだろう。ルミは何とか、もう一度私にいわせた

がっていた。それがありありと分るルミの必死の、縋りつくような思いつめた表情であった。意地悪く、このままおし通せば、ルミは泣きベソをかくかも知れない。もう食事も、のどに通らぬ様子で、ナイフをおいた。

「どうしたの？」

「何だか辻村さんに悪くって」

「無理にとはいわないさ。でも本当はプレイしたくてウズウズしている。半年がどんなに長かったか、分ってくれる？」

ルミは大きく、うなずく。

「行こう——」

その短い言葉の行先をルミは察していた。惜しげもなく大半の料理をたべ残したまま、彼女は立ち上った。暗黙のうちに、契約は成立していた。こんなうぶなルミに、多言は無用。しかるべく、男の力でぐいぐい引張ってゆけばよいのだ。

助手席に坐ったルミの瞳は、アバンチュールを求める期待に、しっとり濡れて光っていた。行先は短い。この辺りアベックホテルが林立。その何処へでも、このアベックは気軽に乗り込めばよかったのだ。

× × ×
「あッ、いや。困るわ、わたし……」

狭い浴槽に、あとを追うように入ってきた私に、ルミは湯の中でタオルを胸に蔽った。「いいじゃないか。どうせハダカになって、私に縛られるんだから」

「ウウン、エッチね」

「エッチか、ハハハ。エッチついでに一緒に入ってやろう」

笑い捨てて、体を丸めるルミの背に添うように、小さい湯槽につかって行く。激しくあふれて、洗面器が玩具の船のようにプカプカと浮いて流れる。

「キーン、くすぐったい」

うしろから抱きつく恰好になったので、ルミは激しく身をよじった。真白い肌に凝脂がのりきって、湯をツルツルと肌からはじきとばしている。まるくなめらかな背は、さながら名工の白磁の像のように光り輝いて、ただもう見事としか、いいようがなかった。やっとな心の落ちつきを取り戻したのか、ルミは私に背をいだかれた俛、じっと眼をつぶっているようであった。

「背を流してあげようか？」

そっと耳許に唇をよせて、ささやくようにいうと

「でも勿体ないわ。それより私が洗ってあ

げる」

振り向いて、あどけない声が撥ね返ってくる。ひたいに浮かぶ汗のしずくが印象的であった。

「怒っていないんだね」

大きくうなずき返して

「だって、いきなりで羞かしかったもの……」

三好留美の、異性に対していつも先立つものは、この羞恥心と軽い不安であった。それだけにルミの一举一動は新鮮そのものであった。近頃は、羞恥を置き忘れたような娘をよく見掛けるだけに、ルミのこの処女性はいかに貴重な存在であった。異性と一緒に入浴するという事だけでも、ルミにとっては日頃の生活からは思いもよらない、スリリングでショックな行為であったのではなからうか。勿論、良家の子女としてはそれは当然のことであったが、プレイを希望し、しかも既に一度実験済みの彼女が、いつまでもこの羞恥心を持ちつづけていることに対する、それは珍重の度合であった。

ルミは巧みに腰をかがめて浴槽を出ると、タオルを胸にあててしゃがんだ。つづいて私のハダカが流し場に出る。二人並べば一杯のこの狭い浴場の流し場で、ルミは否応なくふ

くよかな胸の膨らみを私に触れながら、泡を沢山立てて、丹念に背中を洗ってくれた。ついで腕をとると指先までも……。うっとりとした放心状態で、名古屋まで一気に走り続けた疲労の急速にぬけるのを覚えながら、私はルミに体を預けていた。

「さあ、代って洗ってあげよう。向こうをお向き——」

「いいの、私いいのよ」

「遠慮しなくてもいいんだよ」

「御免ね」

男尊女卑の、しおらしい女性の優しい心根をルミは持っていた。遠慮し勝ちに向けた背に、私はタオルをこする。腰からおしりまでタオルが動く。擦ぐったそうにながらも、ルミは私の洗う手を拒まなかった。

異性に対する羞恥の壁が、私の思いきった行為で、徐々に取り除かれつつあった。

後で入った私が、先に湯を出た。未だ濡れそぼった軀に素早く浴衣を纏うと、逸早くバッグにかけよる。ルミにあれこれ逡巡させる隙を与えず、短兵急に行動を起して、リードしながら、プレイに移ってゆく腹つもりであった。またぐずぐずされると、美波恵子との初の出会いの時間に遅れるという気持が、こ

んな性急な行為に走らせていたのかもしれない。私はそっと縄をとり出していた。

ルミは私に背を向けて、丹念に体の隅々まで拭いていた。その背後からそっと近附くといきなり羽搔じめするように、私の手の中の縄が、ルミの胸許に廻って纏わりついた。

「あッ、待ってエ、いけませんわ、いきなり……一寸まって、ああ」

愕然としたようにルミは身悶えた。二つの体がぶつかり合っただけ。無言で私はルミを縛ることに精神を集中させていた。それが無茶であろうと、プレイのエチケットに反そうと、もう構ってはいられなかった。前触れもなくプレイの賽殻は投げられたのである。既にしゃにむに、文句を言わせぬ空気が醸し出されていた。髪を乱し、じっとりとした桃色の女体を喘がせて、ルミは一通りの抵抗を示した。しかし、だんだらの縄は無惨に、ルミを後手に縛り上げていた。無理に捻じ上げた両手が、かなり痛そうである。

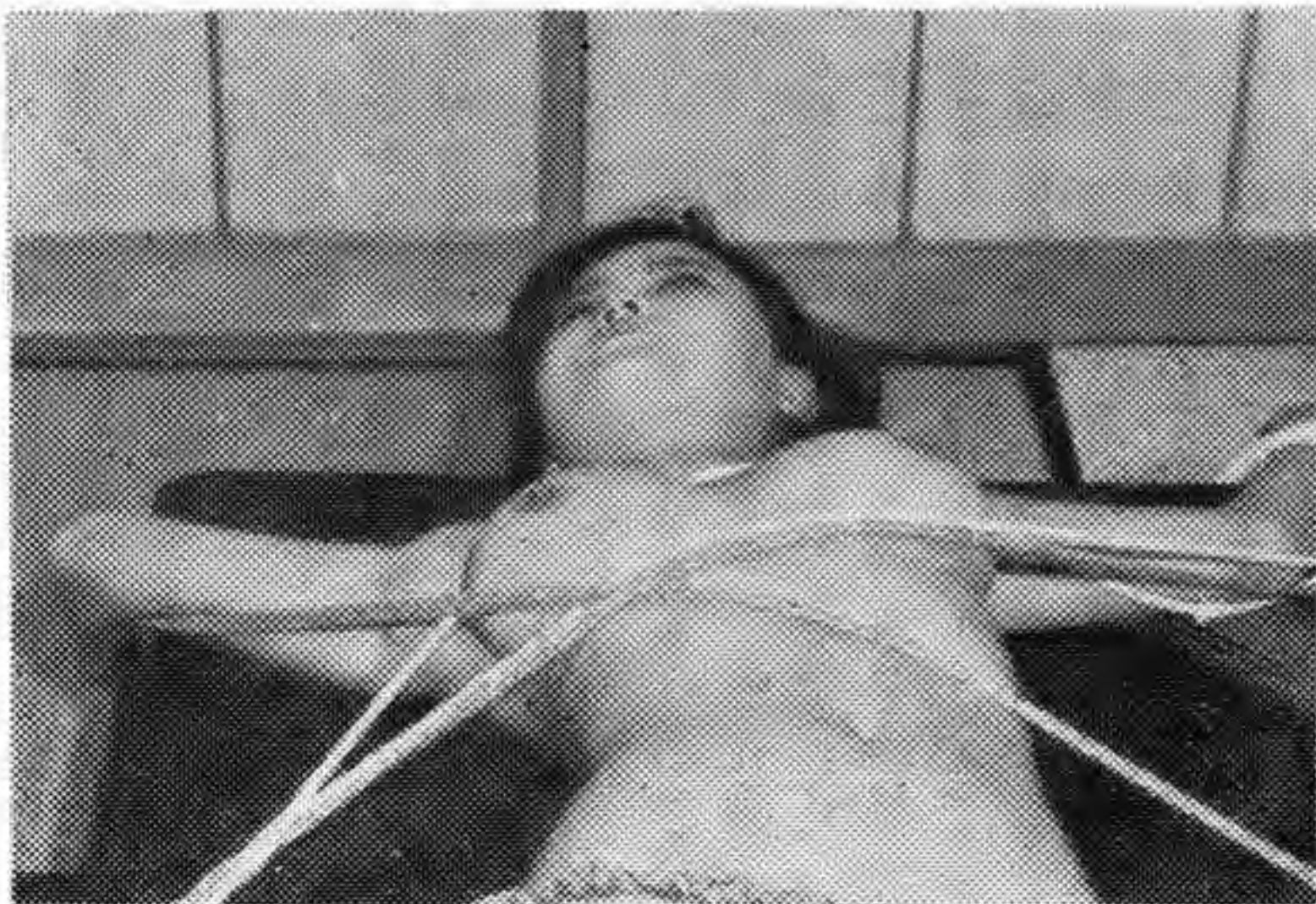
「ひどいわ、ひどいわ、あッ……」

ルミの抗う声は次第に弱まる。片隅に脱ぎ捨てられたパンティが、鮮やかなブルーの色を、丸めた浴衣の底から覗かせていた。

縄尻をとって体ごと押し出すようにして部

屋に引き返す。引き据えるようにして中央に坐らせると、ルミはガックリと膝をついた。私はカメラをバッグから引き出した。既に心は今のこの暴力にも似た行為で、意馬心猿にたぎっている。

風呂から上るなり、すぐ縛られたので、ル



ミの結い上げた髪は、抵抗と湯気でかなり乱れ、紅潮した素顔に乳液すら、なすりつけるいとまもなかった。

考える時間を与えることが、ルミを遅疑逡巡させるのだ。すべからず直接行動に出ることによって、プレイへの解決の道が開けそうに思えた上での、わざと粗暴な唐突の行為であつたのだ。

ルミの柔肌をしめつけている愛用のだんだら紐は、梨花悠起子以来の女の肌の味を知っていて、既にすり切れる迄に使い古した柔らかい縄であつた。狭い個所で、体制もとのえず、いきなり縛り始めたので、こうべを垂れてじっとしているルミの縄は大分ゆるんでいた。彼女のプロフィールに怒りの翳はなかった。むしろ突然に襲った、暴力の手に反ってフンギリのついた気持でいるのかも知れなかった。私は更にもう一本の縄を握って、ルミに近寄る。

「もう少し縛るよ。いい？」

ルミは微かに、うなづく。

「乱暴な奴だと怒っている？」

「……………」

「どうしたの？」

「いいんです……………」

一寸怒ったように言って、ルミは眼をつぶった。自分の感情の起伏をさとられなくなつたのかも知れない。

私はルミの両足を組ませ、背から縄をかけてゆき、太腿辺りで絞ると、その中心で体を押さへこむようにして縄を止めた。変型の海老責に近いポーズである。見事としか表現のしようのないオッパイがプリリンと押し出されて、微かに震え、切なげに喘ぎながら、肩が小刻みに揺れていた。緊縛の女体にルミの極度の昂奮状態が、如実にあらわれていた。この日を待ち焦れ、幾度か夢にみた被虐の憧憬の、現実の生々しい姿が、今ここに在った。ルミの感慨は無量であつたかも知れない。

ルミは、もう何も言わない。私のなすがまま縛られて、羞恥と不安と期待のうなじを深々と垂れていた。ルミの幻想の世界のプレイが、今きびしい現実となつて続けられているのだ。あこがれの被虐のプレイの真唯中で、ルミはただ、呆然自失したかの如く、なすすべを知らなかったのであらうか。

余りにも唐突に始まったプレイに対して、心のゆとりすらないようであつた。

私は夢中でルミの周囲をぐるぐるとかけ巡っていた。幾度か閃光は走り、カメラアング

ルは、あらゆる角度からルミをねらつた。

彼女は身じろぎもせず、いつまでも最初のままのポーズを崩さなかった。うなだれたてうべは、いっかな上ろうとはしない。しかし被虐の陶酔が、じわじわとルミの心に喰い込んでゆくかようであつた。

ポーズを変えるため、私はルミの体を抱きかかえ、支えるようにしながらそろそろと横に倒す。足指が反って虚空に足掻き、二の腕の縄が、ヒタと深く喰いこんでいった。

双丘はなだらかに眼下にまざまざと迫り、清純そのものの泉のほとりを、私はあきらかに眼に灼きつけた。ルミは自からの、この無残な姿を見まいとするかのように、かたく眼をつぶっていた。数枚忽ちにして撮し終る。

「どこか痛くない？」

ルミの顔の近くに、にじりよって聞く。

「ええ、足首の縄がよじれて、少し……………」
痛いといいかねて、微かに眼を開いて私をみた。うっすらと笑みが漂う。

「解いてあげようか」

「もう少しぐらいなら、我慢出来そうです」
ききとれぬくらいのかぼそい声が、まるで鈴虫の啼くように澄んだ音色で訴える。

「鞭打ちしていい？」

「痛いでしょうね」

ハッと恐怖が走る。

「一度だけ試してみようか」

返事はなかった。私は白いロープをとり出すと、なるべく短く握って、まるで体を刷くように、そっとルミの臀部に当ててみた。

鈍い音と共にピクリと体がけいれんする。続いてもう一度、今度は少し強いめに振う。のけぞるように女体をそらして、ルミは無言でこらえた。いじらしくも彼女は、私の嗜虐のいたぶりを必死に耐えているかの様であった。体を抱き起すと、私は可愛いルミの縄を静かにほいて行った。解き終った時、彼女はバタリとそのまま、豊かな女体を惜しげなく曝して、俯伏せにタタミにのびた。それは、もうどうにでもしてくれという、無防備なポーズであった。ルミはいつ迄もじっと眼をつぶったままであった。まるで私の次のプレイの縄を待ちかねている様でもある。

「どうしたの？」

「ウウン、別に……」

ふくよかな頬が動いて、眼をつぶったままで微かにこたえる。

彼女の体をそっと抱き起す。ほてっているのか体のどこかが熱っぽい。

この体を自由に観察してみたい衝動にかられる。まくり上げたマットレスを座敷の中央に引っ張り出すと、起き上ってじっとしている彼女の手を引いて、マットレスに大の字に仰向けに大きくねそべらせる。

二本のだんだら縄では足りないのです、もう一本白いロープを取り出し、胸で×字にかけてマットレスの下を通して、柔らかい上に固定させてゆく。腰から腿にかけて、同じようにしてとめてゆく。座敷机があればもっと強く縛れるのだが、マットレスではやや緊縛にかけるきらいがある。両手を伸ばして手首を縄で結んで、兎も角もマットレスに動けぬよう固定させた。微かに眼を見開いたり、又ハッとした様に眼を閉じたり、ルミは心の動揺を眸に現わしていた。フットボールのようなオッパイが、ユラユラ揺らめいている。最後の一本の縄で両足首を縛ると大きく開股させて押え、私の大の字縛りの作業は終わった。第一回にくらべて、ルミはかなり協力的になっていた。

鮮やかに、すべての部分が私の視野の中にあつた。この若く申し分のない柔肌を、私はぐっと抱きしめたい衝動にかられる。

そっとマットレスの傍らににじりより、眼

をつむって神妙に縛られた俤のルミの顔に私の顔を近づけてゆく。激しい息づかいでルミは吐息を頬に受けてパツチリと瞼を開いた。黒く長い睫毛があわただしくまたいた。ハッと息を呑んだようだ。

「観念したんだネ」

「ええ、気分がラクになりましたわ」

「しゃぶりたくなった。可愛くて……」

真実、ルミはしゃぶりたいうような意慾を起さずに充分の可愛さと抜群の肌をしていた。搗き立ての餅を丸めて、人型にしたらルミの体になりそうな感じであった。フワフワとたゆたう乳房は、ぐっと力をこめて握りしめたくなる魅力を一杯にあふれさせている。そっと指先で弾くと、ピクリと肌が震えた。

「いやーん、止めてエ……」

甘えた声が惱ましく私の耳朶を打った。生憎とパイプレーターの持参を忘れたが、この豊かな乳房にパイプをかけたなら、この豊醇な娘は、どの様な反応を起すだろうか。そっと唇を近づけると、ルミの吐く息、吸う息は激しくなる。

「イヤ、イヤ、……」

その声は上ずって弱々しく流れた。

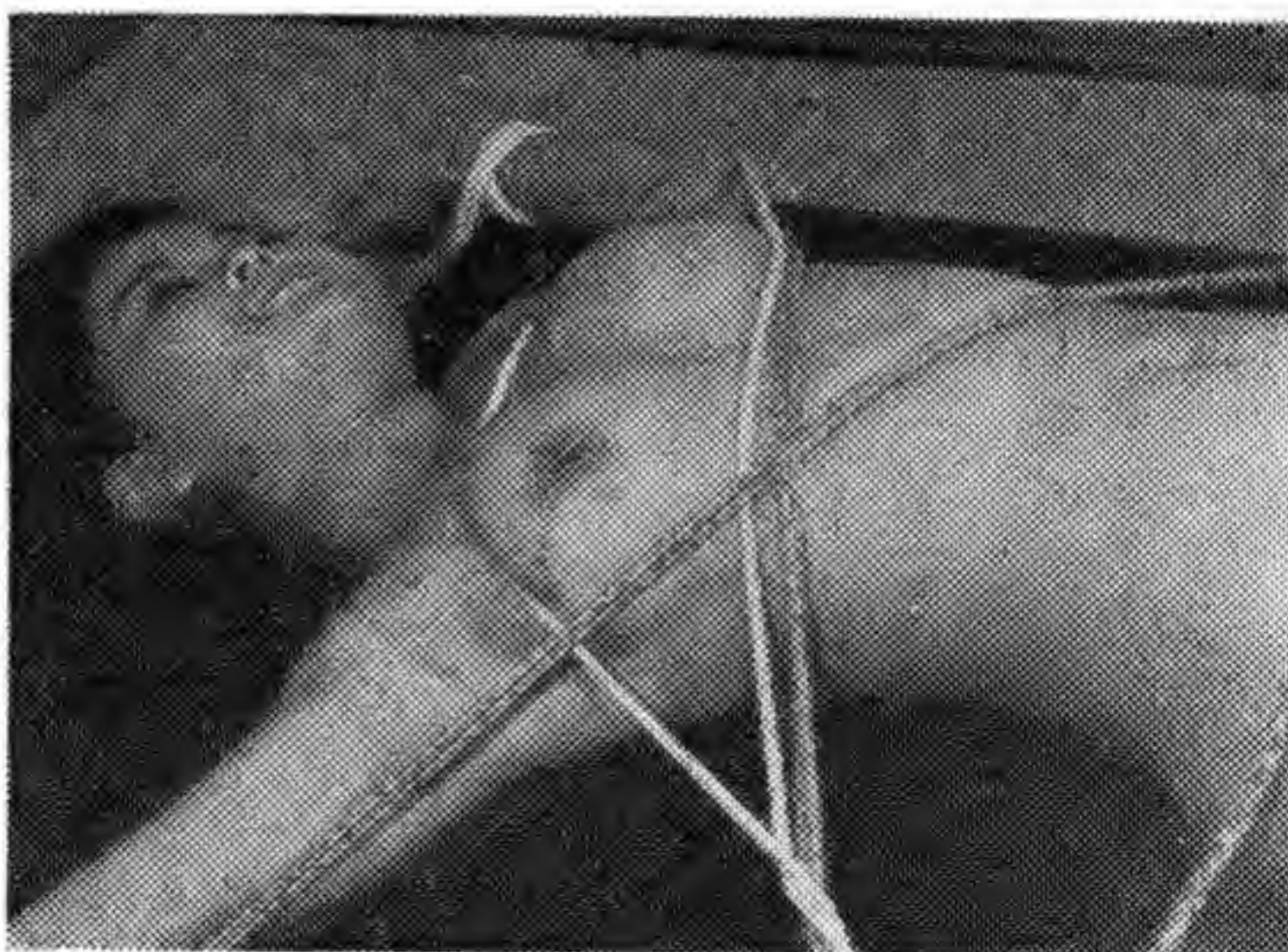
私の眼の前で、ルミの乳房が甘い芳香をた

だよわせて息づいていた。彼女は身をよじってマットレスをきしませ、私の責めに耐えようとしていた。悦虐がジーンと痺れるようにルミの五体に、しみ渡ったに違いなかった。眼を放し、フワフワした羽二重餅のような真白い柔肌のあちこちに唇をよせると、ルミの息は流石に大きく弾み出していた。この無防備の、しかもあがらうすべもないポーズからなら、どのような獣めいた行為も可能に思われたし、ルミ自身、秘かにそれを待ち望んでいるようにも思われた。

糖尿でふるいたたない私の体内に、珍しく熱いかたまりが吹き上げてくると、大脳神経は異常に一点に集中して活躍を始めていた。いけないと思いつつも、ともすれば自制心がガラガラと音を立てて崩壊してゆきそうな危険を、私はひしひしと身内に感じた。

「ああ、もうやめて……いけませんわ。わたし、もう……」

身をよじるルミの熱い吐息が、甘く私の頬をなで、身をよじって弱々しく抵抗するルミの声は、悦虐の愉悦にともすれば溺れかかっていた。私の硬い腕は、いつしかルミをぐっと力強く抱きしめていた。



ペッティングのあとの、物憂い満ち足りた感情が、私をぐったりとさせていた。けものめいた行動は、最後の理性によって辛うじて回避することが出来た。とは言え、プレイを逸脱しようとした私自身、ふり返ってみて、それは恥ずべき行為だったに違いなかった。ルミの自由を奪って束縛し、がむしゃらに

溺れていった私を、ルミはどのように受け止めたであろうか。

でもよかった。この美しい薔薇の花園を、私は蹂躪することなく、花の美しさを賞でるに止まった。本当にこれでよかったのだと、私は未然の結末を、心底から喜ぶ気持ちになっていた。

縄を解きほぐすと、羞かしげに喘ぐルミをやっこらさと抱きかかえて、マットレスの傍らの、取り除いた布団の上へ移した。

全裸を惜しげなくさらして、大きく弾む胸を押さえながら、ルミは私を甘い眼で見つめていた。床の間においた腕時計をとり上げてみると約束の午後三時に二十分前であった。早くも、ルミとの切ない別れの時が迫っている。私は甘い夢想からさめて現実に戻らねばならなかった。

「ここからお城までどのくらいかかるの?」「さあ、車が停滞しなかったら、五分ぐらいでゆけると思いますけど、今何時ですか?」「三時前だよ。名古屋城の正面入口で午後三時に会う約束になっているんだけど……」

気の進まない私の重い口吻である。ルミと間もなく別れるのが、正直いって身を切られるように辛かった。



「じゃあ大変だわ。もう余り時間なくってよ。急がなくちゃ」

「ルミちゃんと別れるのが辛くてね。もうどうでもよくなった。出来れば電話して断わりたいぐらいだ」

「でも、もうきつと家を出られて、今頃はお城辺りを歩いていらっしやるかも知れませんわ」

わ

「折角プレイしてくれる気になってくれたのだから、この際もつといろいろと緊縛したいんだよ。今度いつ会えるか分らないもの」

「私、構いませんわ。だけど、それじゃ待つての方がお気の毒ですわ」

「当てにならないんだよ、来るかどうか」

「行ってみなきゃ分りませんわ」

「やはり時間的に少し無理だったね。ルミちゃん一人に会いにくるべきだったよ。かけもちするなんて無理があったよ」

「いいの、又会えますもの」

「さっきのこと怒ってる？」

「いやッ、言っちゃ……」

ルミはパツと両手で顔を蔽った。徐々に開くと、黒耀石のように澄んだ瞳が、艶然とあでやかに微笑んでいた。余りの可愛さに、蔵にかけていたカメラを慌てて向けると、パチリと一枚シャッターをきる。別れの淋しさがそくそくと胸に迫り、私の挙動に元気がなかった。

「何だか淋しそうね、物足りないんでしょう本当いうと、私もポツチリ……」

「私がいけないんだよ。つかかけ持ちに約束してしまつて」

「いいの。会えてとても愉快かったですわ。若し将来結婚することがあっても、今日の思い出は一生忘れられないで、そつと胸に秘めておきますわ」

仰向いて何一つ纏わず、ルミのすべてを私の前にさらけ出して、鈴を振るような声でいった。その言葉が尚更私の別れを辛くする。

かくする間にも時間は刻々経っているだろうに。いざとなれば乙女の、余りにも大胆な姿に私は一驚していた。かつてのルミからは想像も及ばぬ肢態であったのである。そこには別離の感傷的な感情の燃え上りから、乙女の誇りすら捨てかねない媚態すら、そこはかとなくこぼれているようであった。危険な空気は部屋一杯に充満している。それを断ち切る様に、私は洋服を着け始めた。

「ルミちゃん、そろそろ服を着ない？」

「構いませんの？」

精一杯の言葉に、齒搔ゆい私をなじる恨みがこめられていた。

「だって、時間がないといったのは、ルミちゃんの方じゃないか」

ルミは黙ってスックと立上る。途端に媚態は消え、挑発げななまめかしさは蒸発した。一転して羞恥の様相を取戻したルミは、今ま

で曝していた裸形をはじめるかのように、さ
っと浴衣を纏うと、洗面所の方へ消えた。

微かに私の耳に伝わる排泄の響きが、私の
五感の血を疼かせた。忽ち激しい水洗の音に
変る。自惚れではないが、あのルミは、確か
に私の愛撫を待ちのぞむ態勢にあった。もう
一息、その気になって強引に押せば、女体が
崩れることは必至であった。しかしそれは、
プレイという異様な雰囲気、ルミをそのよ
うに変化させたのであろう。きっといつの日
にか、何事もなく、単なるプレイに終わったこ
とを、ルミは自分の体に飲こぶ筈である。

暗いホテルの、もぐらのような駐車場から
地上に出た私達の眼に、五月の終り近い太陽
は眩しかった。二時間許りの、妖美のプレイ
が、まるで白昼夢のように思われ、いかにも
淫靡な、湿潤したものに感じられた。

「何処で別れよう」

「広小路の交叉点で結構です。早く帰るとへ
ンですから、映画でもみて、時間潰して帰ら
ますわ」

「御免ね、つき合えなくて……」

「いいのよ。成功を祈りますわ、これからの」
ルミは如何にも名残り惜しげであった。私
は徐行しながら、そろそろ道路脇を走る。

「一度そちらへ遊びにゆきたいと思うんです
が、お邪魔じゃありません」

「ああいつなりと、大歓迎ですよ。一日中、
ゆっくり溺れて見たい」

ポケットから細長い紙包みを取り出すと、
そっとルミに手渡す。黙って――。

「何なの、これ？」

「帰ってから開いてみるさ。多分似合うと思
うけど」

私はルミの手を握りしめ、すぐハンドルに
戻す。ハンドルの私の手にルミの白い掌が重
なる。名残り惜しさと、感謝のしるしなので
あろうか。

「じゃあ、ここで――」

車を止める、一礼してルミは舗道に立つ。
じっと見送る三好留美の可憐な佇む姿を、
バックミラーで追っていたが、それも束の間
に、流れる車に遮ぎられて、視界から消えて
いった。

× × ×

――第二の処方箋

(クランケ 美波恵子)

大抵は時間に厳格な私であったが、ルミと
の愛の溺れと訣別に時間をとられ名古屋城に

到着したのは午後三時を十数分過ぎていた。

正門入口の道路をはさんで、自由の駐車場が
ある。五、六台の車が停っているのみであっ
た。慌しく車に鍵をして、正門前に小走りに
走る。半袖のグリーンのワンピースに、白い
ハンドバッグ、身長一五五センチ、四八キロ
髪を短くボーイズカットにしてあるという。

それが、美波恵子の便りによる、彼女の服装
であった。よく似た服装の女性が、チラホラ
散見された。時間はもう三時を二十五分許り
超えている。ウロウロするのも反ってよくな
いと、私は名古屋城入口の入城券売場近くで
佇んでいた。まさか名古屋くんだりまで遙
々来たのだからスッポカシもしないだろう。
そんな多寡をくくってはいるが、正直いって
いささか心もとない。それにルミとのプレイ
の余韻が、未だに私の心の奥に尾を曳いてい
た。

傍らに立止る人の気配を感じて、ツト首を
それに向ける。サングラスの若い娘が、じっ
と私の様子を観察していた。直感で彼女が美
波恵子だと思った。何気なくフト微笑むと、
つられて娘は近寄り、

「失礼ですけど、辻村さんじゃないでしょ
うか――」

私を、まじまじ見つめる様にして聞く。

「そうです。美波さんですね」

「ハイ、ああ、よかったですわ」

娘はインソインとしてサングラスを外した。きりっとした眼鼻立ちの、やや色の浅黒いハキハキしたような女性である。

「時間が少し遅れましたので、もう会えないかと心配していたんですが、よかったですわ本当に」

「ああ、私も今ついたところです。車の方へ行きましょうか」

私達は肩を並べて歩く。

「突然、あなたのお手紙が廻送されてきたも

のですから面喰らいました。どうして私のことを知られたのですか。奇クをお読みなんですか？」

「私、子供の頃、両親を相ついで亡くしまして、唯今、伯父夫婦の家で世話になっていますが、伯父が伯母に内緒でずっと愛読しているんです。伯父の部屋を掃除した時、見つけちゃって、こっそり読んでいたのです。お手紙に書いた様な事情で、モデルに応募したのですが、辻村さんに撮っていただきたくて、御無理なお願いを申し上げたのです。御迷惑じゃなかったでしょうか」

「迷惑どころか大喜びで飛んできました。

(ルミと別れて直後、よくヌケヌケと我ながらこんなことが言えるものだ。しかし私の心は事実そう思っているのである)私を指名していただいて光栄の至りますよ」

「まあ、お上手仰有って……」

彼女は、楽しそうに笑った。快活そうなのが何よりいい。両親をなくして伯父

夫婦の世話になっているような娘には、到底見えなかった。

「私がプレイすると、カメラ・ハントを書くかも知れませんよ。いいんですね」

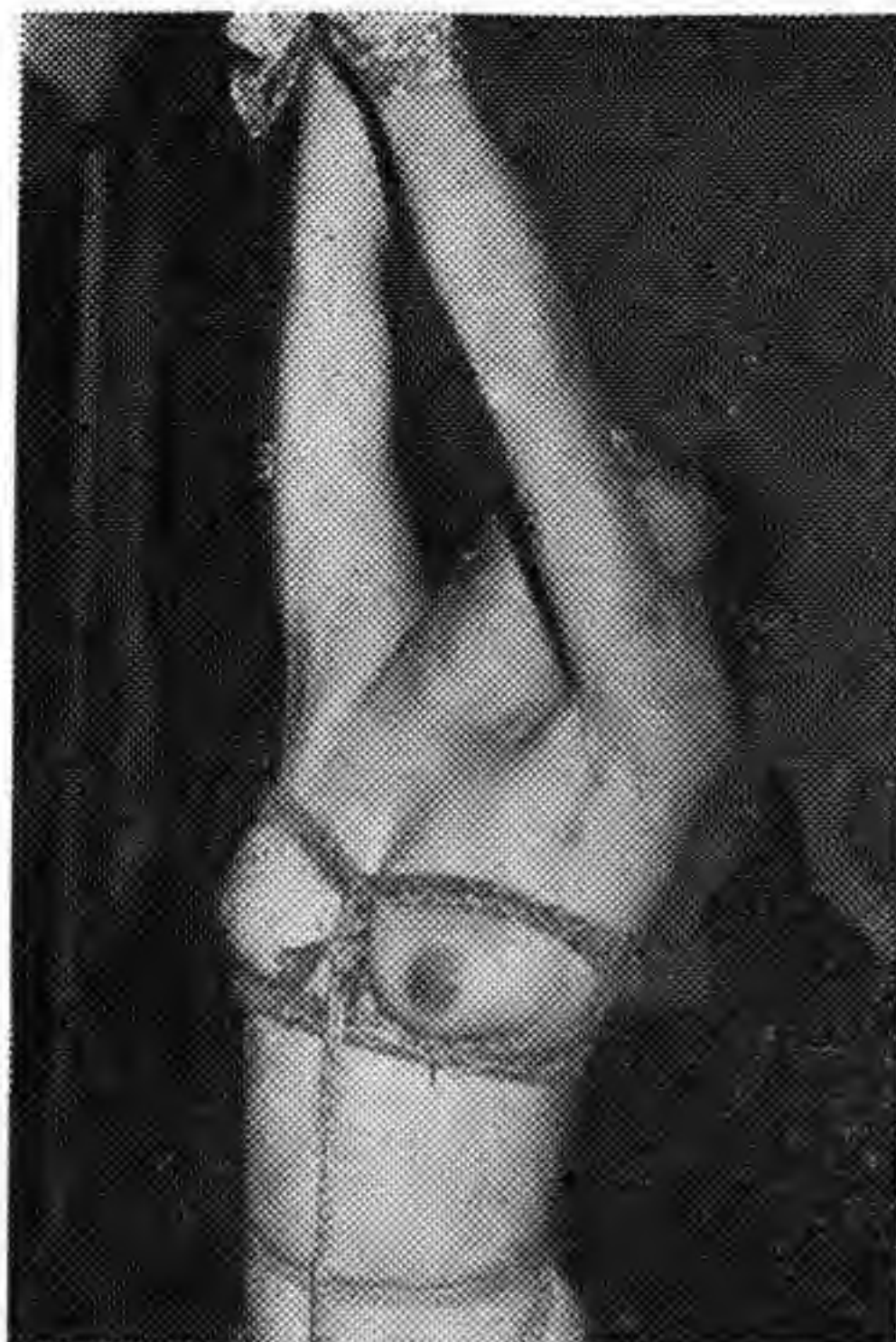
秘密愛読の伯父にすぐ分ることである。美波恵子は伯父の手前、困惑しないだろうか。私は危惧した。

「いいんです。すぐ伯父に知れるでしょうけど、知れたら知れた時のことですわ。伯父は家庭では聖人君子なんです。だから伯母にはいわないでしょうし、伯父と私と二人だけの秘密が出来たら、反って今迄と私を見る眼が変わって、うまくゆくかも知れませんわ」

実にさばさばと明快に割切っている。そしてハキハキよく喋る。むしろS性の方が多いのではないかという感じがしてくる。成程、手紙にあった通り髪を思い切ってボーイッシュに刈り上げ、男のように襟を剃ってある。うしろから髪型を見ると、長髪族の若者の多い昨今、むしろ男性のようにすら見えるくらいである。

「今日は何時頃までいいのですか？」

「時間の許す限りお供しますわ。折角、わざわざ来ていただいたのですもの」
「泊ると困るんでしょう」



「そうね、余り外泊する処ありませんから。おそくても帰ります」

私としては、今日是否応なく名古屋で一泊しなければならなかった。一人寝の味気なさを思つてフト軽い気持ちで誘つてみたが、所詮初対面では無理なのは当然である。何かこの際、又名古屋へ引返して、アベックホテル界隈をウロウロするのも気が進まなかったし、万が一、三好留美の眼に止つては一大事であつた。

「市内も今までおりまして、引返すのも何ですから、少し走りましょうか」

「ドライブいいですわ犬山辺りまで如何？」
カーといえばツーと応える明快さに、私の頬は思わず綻ろぶ。

「犬山まで、どのくらいあるのです？」

「そうですね。国道41号線で大体一直線ですが、二十七、八キロつてとこじゃないでしょうか」

「とすると、直行すれば三、四十分もあれば充分ですね」

「私の家は、多治見市へつながる国道十九号の途中にある春日井市の中央ですの。家の近くを東名高速道路が走っていますわ」

確かに自分からよく喋べてくれた。聞き

出す手間が省けて有難い。

「犬山の方、よく御存知？」

「ええ、よく知っています。御案内しますわあ、そうそう、犬山に向う途中に交つた神社があるんですよ。お立寄りになる？」

「どんな神社？」

「田県神社というのですけど、一寸、女の口で説明しにくいですわ」

美波恵子は不意に顔を赤らめた。探求心がモクモクと盛り上る。女性を連れてゆけば尚更面白いのかも知れない。それは私の直感であつた。

彼女を助手席にのせて、教えてもらいながら、国道四十一号線に出る。車の流れは激しかったが、幸い、さしたる停滞もなく順調であつた。これから第二の女性との悦虐のカルテを私は書き込もうとしている。女体の診断は夜になるかも知れない。

運転途次のお喋りを省略して、こちらで彼女との対面のいきさつを書かねばならない。

x x x

「昨日、手紙を送っておいたけど、モデル志望の女性で、あんたを御指名なんだ。名古屋郊外の人らしいけど、どう、会ってみる」

「へえ、それは有難い。いくつなの？」

「二十一才、名古屋市外でO・Lをしている家庭の事情がちょっと複雑らしいけど、手紙からの感じではハキハキした処がある」

そんな編集長の連絡であつた。翌日の午後転送の手紙が早速、届く。(以下原文の終)

——昭和二十二年生れの会社事務員です。御誌を拝読させていただき、一度モデルに応募させて頂きます。わたくしの身長は一五五センチ、体重四八キロ。バスト八五、ウエスト五八、ヒップ八七でグラマーではありませんが、比較的、均整のとれたほうです。

あることから奇クをひそかに読み、すごく興味をひかれました。わたくしは特に、鼻責めや舌責めされるのを好みます。自分でもよくクリップを狭んだりして、長い時間、じつと耐えつづけたりたいします。縛ることは自分ひとりでは出来ませんので、余りやりませんが、縛られてみたいと思います。鞭うちなどもされてみたいし、少々の痛さでしたら、大体がまん出来ると確信しております。中学二年生の頃、Sの級友と一緒によく遊び、その人は男役になって、わたしを虐めたりしたのが忘れられないのだと思います。なにとぞ辻村隆様などにご連絡下さいまして、わたしの望みをかなえていただけるよう、お世話下さ

るよう、ひとえにお願いいたします。

末筆ですがモデル料のことや、ご連絡は左記の会社あてに、親展でお願いいたします。

一週間前に知らせて下されば、わたくしの体に何もないかぎり、大体行かれますから、くれぐれもご連絡の程、伏してお願ひする次第です。貴誌のご発展を祈りましてペンをおきます。五月二日 美波恵子

奇ク編集長様おん許へ

以下、会社名及び彼女の現住所が書かれてあった。

私は折返し会社宛、彼女に手紙を書いた。諸種の条件、日時、会合の場所など。

速達で三日後、返事が出て、彼女の欲びがマザマザと紙面に溢れていた。さして達筆ではないが、元氣のよい、読み易い字で、さして若い娘に似ず、誤字もない。フォトを一枚欲しかったが、これは会った時のお愉しみというところか、私の希望にもかかわらず同封してなかった。私の予定や



仕事の配分を考えて、日時を知らせた。その翌日、三好留美にも電話しておいたのであった。

美波恵子は一風変わった責めを求めている。鼻責めや舌責めとは、どんな責めを指すのだろうか。増田喜代司がきけば、飛びついてきそうなモデルである。私は正直いって、その種の責めにさして関心はなかった。しかし、未知の彼女の謂う、そうした一連の責めにはかなり興味を抱いた。そのため、事務用のプラスチック製の紙クリップや、洗濯の挟みなど数個、バッグの底に忍ばせていった。第一

回から、さしたる期待は持てないが、いずれにしてもニューフェイスの突然の出現に、欣喜雀躍して、朝早く、折りからの晴天を天の助けと許り一路名古屋へ飛ばしたのである。再会のルミとの逢瀬。未知の美波恵子への期待。双つの嗜虐の情熱を抱いて、私の悦虐のカルテは、かくしてめくられた。

× × ×

車は時速六〇キロぐらいで、快適に走っている。小牧市を越えて、しばらく走ると、四十一号線の国道に面して、神社の鳥居が立っている。古ぼけた神社を想像していたが、田県神社は意外に明るく、建物も新しい感じであった。鳥居の脇に車を止めて降りる。

「あおう、私ここで待ってますわ」

「どうして？ 一緒に行きましょう」

彼女はしばらくためらっていたが、思い切った様に車を降りて、私の後につづいた。広々とした境内に、二軒許りジュース、菓子類などの出店があるだけで、ヒツソリしている。出店のおっさんが、私達アベックにじろりと視線を送った。

社前に立って、私は呀っと声を挙げた。この神社の神殿に、なんと数米もあろうかと思われる巨大な陽根が、デンと華々しく鎮座ま

しましていたのである。赤銅色にテラテラ光る巨根の偉大さに、私はしばしば我を忘れてみとれていた。成程、美波恵子が参拝を済る筈である。当の彼女は私の背後に立って、流石に見兼ねて顔を伏せていた。彼女に知らされなかったら、その僥倖通過してしまうところであった。

一礼して社務所に至ると、内部は一杯の陽根の山である。彫りものあり、絵画あり、石ありで、啞然とする。案内の人の出す、お守りにも、すべて陽根が刻み込まれていた。

社殿の裏も拝んでいって下さいという。社務所の人の説明で、ぐると社殿の裏に廻ると、あるわ、あるわ、見渡す限り、すべて陽根を象^{かた}どったシンボル許りであった。ここには「ガマの聖談」で南喜一氏のいうような、粗チンは一物もない。謂うなれば、巨チン、偉チン、大チン許りである。男として、恐ろしく劣等感を感じる場所であった。

彼女の表情たるや複雑であった。膨大なる物量に圧倒されて、ぼんやりそれらを真赤に頬を染めてみつめていたのである。

三月十五日には、天下の奇祭として有名な豊年祭の当日、大密画陽物を描いた大幟をおし立て、巨大なる陽物を御輿に納めて近郊近

在を行列して廻り五穀豊穰を祈るのだそうである。

その御輿をみる、女房の顔、娘の表情、子供等の疑問、男性の照れ臭さ。そんなことを想像したのは、あながち私一人ではあるまいと思うのだった。

美波恵子は気まり悪げに、先に車に乗り込んでいた。これ以上、正視するに堪えなかったであろう。

「いい神社を教えてくださいましたね。愉しかったですよ」

「エッチな神社ですのね。こんなこと大っぴらに許されるのが分りませんわ」

若い娘にとっては、そのものズバリの、この神社の在り方がのみ込めなかったに違いない。そのくせ、始めてここを訪れた私を、やはり紹介しようとするだけの、物珍しさだけは持っているようであった。ちょいと世間にならにないから紹介はしたし、羞かしいという奇妙なジレンマを、幾多の女性が感じたことであろうか。

明治村に右折する看板を右手にみて、犬山へ直行する。恐らく今頃、犬山へ走っても、自然公園や猿類の動物園は閉園間近に違いなかった。日本ラインの景観をながめながら、

犬山城のほとりのホテルに、しばしプレイの場をみつければいいのだ。

田県神社の陽根に毒気を抜かれたのか、美波恵子はしばらくは沈黙して、自分からは語りかけてこなかった。

成田山の別院の前で車を停める。急階段の上に建つ、赤塗りの華麗な別院は、折からの夕映えにひととき美しく聳え、樹々の緑とマッチして、一幅のカラー・フォトの景観であった。モノレールが一本の鉄路をきしませて頭上を走り去っていった。

見届かす犬山城の辺りは赤く染まり、静かなたたずまいの中に、木曾川の流れを臨んで日本ラインは奇岩の谷間に白く光っていた。「素晴らしい眺めですわ。何もかも忘れてしまえよう」

彼女は幾度目かの、この景勝を、感慨も新たに眺めていた。

「ここでしばらく、あなたとプレイの話などしようと思ったが、この素晴らしい夕映えの景色をながめていると、何となく大自然の美しさにうたれて、もう話が出来なくなりましてよ」

「……」

美波恵子は、私の言葉に返事しなかった。

私と同じ思いにかられているのであろうか、今日の出会いの目的であるプレイの感覚を、しばし忘却の彼方へ押しやっていたのかも知れない。

鶴沼の辺りに、ホテルや旅館が点在していた。

× × ×
観光地特有の、料亭式ホテルの一室――。

このI館は又、犬山温泉の、温泉旅館でもあった。二間つづきで、入った処が赤いジュータンの敷いた洋室風であり、洒落た障子を開くと、和風の寝室につながっていた。出張りの窓からのぞむ日本ラインの景観は、流石に



素晴らしかった。早瀬や奇岩、深淵が連続して、急流が岩を噛んで白く走っていた。

「温泉だそうだよ。一風呂浴びてこない？」

「辻村さんは？」

「私もすぐ行く。どうせ男女別々だろう」

「着換えていい？」

美波恵子は一応、私の同意を求めると、私の眼前で、さっさと服を脱ぎ出した。薄いピンクのシュミーズ一枚になると、さっさとガードルを外し靴下をすると脱いでゆく。

いささかたじろいで眼を外らす。いずれ全裸になるからと、割切って行動する彼女の態度は、これは又これで、余りにも潔きよかった。

部屋の片隅の乱れ簾から宿衣をとり出すと、チラッと寸法を確かめ、さっさと身につける。私に無言で一寸会釈して、タオルを握ると浴場へと出ていった。冷泉のわかし湯らしい。しかし、温泉で売らなくても、観光地として結構、泊り客があるのだろう。男湯の浴槽はタイル張りだがさして広くなかった。

夕食をすませて、休憩後帰

るといって、女中は一寸、厭な顔をした。初対面の彼女を帰らせるならば送らねばならぬし、兎も角あとはプレイの風次第ということにして、取りあえず夕食を頼む。プレイを始めるにしては、夕餉時の余りにも慌しい時刻であった。

湯上りのほてった体を、窓際の椅子によせて、向かい合って私達は坐る。数時間前まで赤の他人だった男女が、今こうして揃いの宿衣を着て対座しているのも奇妙なえにしまった。そしてお互いに、何一つ深い事情は知らないのだ。彼女は私を辻村隆という、中年のハント・ボーイとしての人間しか知らなかったし、私も又、美波恵子の素姓は手紙以外何一つ分ってはいなかった。触れ合うものは何一つないのに、私達は表面はいかにも恋仲のようにアベック然としているのだから、世の中は面白いものである。私の事を聞けば、フランクに何でも答えてやるつもりでいたが一向に彼女は尋ねようとはしない。やむなく私の方から口を切る。単刀直入にプレイの話から始めた。

「伯父さんって、もう随分以前から奇クを読んでいるの？」

「五年ぐらい前からの本、ありますわ。辻村

さんがまだ、三十九夜などお書きの頃から」

「よく知ってるね、私のこと」

「あら、読みましたもの」

「面白い？」

「ええ、面白いのもあるし、一寸理解出来ないものもあるけど……唯、お会いするまでは、ハントなどの感じからして、もっと怖い人のように思いました」

「今はどんな感じ受ける？」

「いいオジサンってところかな」

「プレイ始めると、いいオジサンでいられるかどうか分らないよ」

「ハントのこと本当かどうか知らないけど、若し本当だったら、とてもフェミニストですわ。そう信じていますのよ」

「偽善だよ。そういわれると、いよいよ悪いことが出来ない」

「アラッ、どんなわるいこと？」

「縛ったり、叩いたり、責めたり……」

「でもそれは、プレイなんですよ。カメラ・ハントの目的なんだから当然ですわ。それが悪いこと？」

「いや、縛っておいていろいろ虐めるのさ」

ハキハキしていて、一寸勝手が違う。彼女は恬淡と受けこたえているのだ。

前髪をバラリと下げて、何かシスターボー

イめいた美少年のように見える。それでいて宿衣では蔽いようもない、胸の膨らみは、豊かそうであった。フト話題をかえてみる。

「男の人を虐めたいと思わない？ あんたがSになって——」

「そうね、そんな気の起きるときもありますわ。でも矢っ張り縛られて、虐められたい気持の方が強いようすわ」

「自分で鼻や舌や唇を責めるそうだけど、どんな気持？」

「息苦しく、切なくなるんです。もう少し、もう少しと我慢している時に、ジーンときちやうんです。手紙に書いてありませんけど、オッパイにも挟んだりします」

躊躇も逡巡もなかった。ルミとくらべて、これは又何という性質の相違だろう。一日の間に、陰と陽の相反する女性二人と過ごして私もいささか途惑わざるを得なかった。

「ああ、食事が来たようすわ」

空腹なので、逸早く彼女の心は、夕餉の膳に走っていた。

「のむの？」

「ビールなら一本ぐらい——」

「ウン、大したもんだ。のもうか」

私は断然、愉しくなる。彼女となら幾らでも話が弾みそうであった。

「意外と御馳走ですのね」

私の耳許で、彼女が嬉しそうに囁やいた。

× × ×

満腹の飽和状態と、思わず過ごしたビールで、疲れがどっと出たのか、プレイが少々億劫であった。

恵子は私の傍らに坐り、プレイの開始を待ち構えているようであった。

「そろそろ始めようか。寒くない？」

「ええ、大丈夫です。寒くなったら又お湯につかりに行きますから」

「じゃあ、脱いでくれる」

「ハダカになるのですね」

判っきりいう娘である。私は苦笑してうなずいた。彼女は宿衣をパツと脱ぎ捨て、シュミーズを降ろし、向うを向いて、私の眼前でパンティをぬぐと、丸めてシュミーズと共に片隅へよせた。

私は、やっと立ち上る。酒気を帯び乍ら、ぞろぞろ縄やカメラをとり出した。好奇にあふれた眼で、恵子はそれらを眺めていた。

障子を開け放つと、いい工合に鴨居だけが吊るように出てくる。さりとて細いから、

逆吊りや、猪吊りをする、鴨居がしなって折れてしまうかも知れない。立たせて両手を吊るのが関の山である。宿衣の派手な腰紐で彼女の両手を吊り上げる。両手を高々と差し上げて、彼女は最初から非常に協力的であった。

「これなら痛くないからね」

独り言をいって、鴨居に縛りつける。僅か一本の腰紐だけでは張合いがなかった。やっと私の脳裡にプレイの本領が蘇ってくる。

だんだらの古縄で、乳房を挟んで、かなりきつく巻いて縛る。ついで別の縄で臍下から腰の辺りを巻き、一本の縄を胸の縄に通すと直線的に、一気に股に通して、背でぐっと引き絞った。いきなりあられもない股縛りをされて、恵子は流石にビクッと体を震わせた。両足の間を通して、双丘に深々と陥没した縄のきしみに、彼女は膝を上げしばらく腰を振っていた。

「痛い？」

「いいえ、大丈夫です」

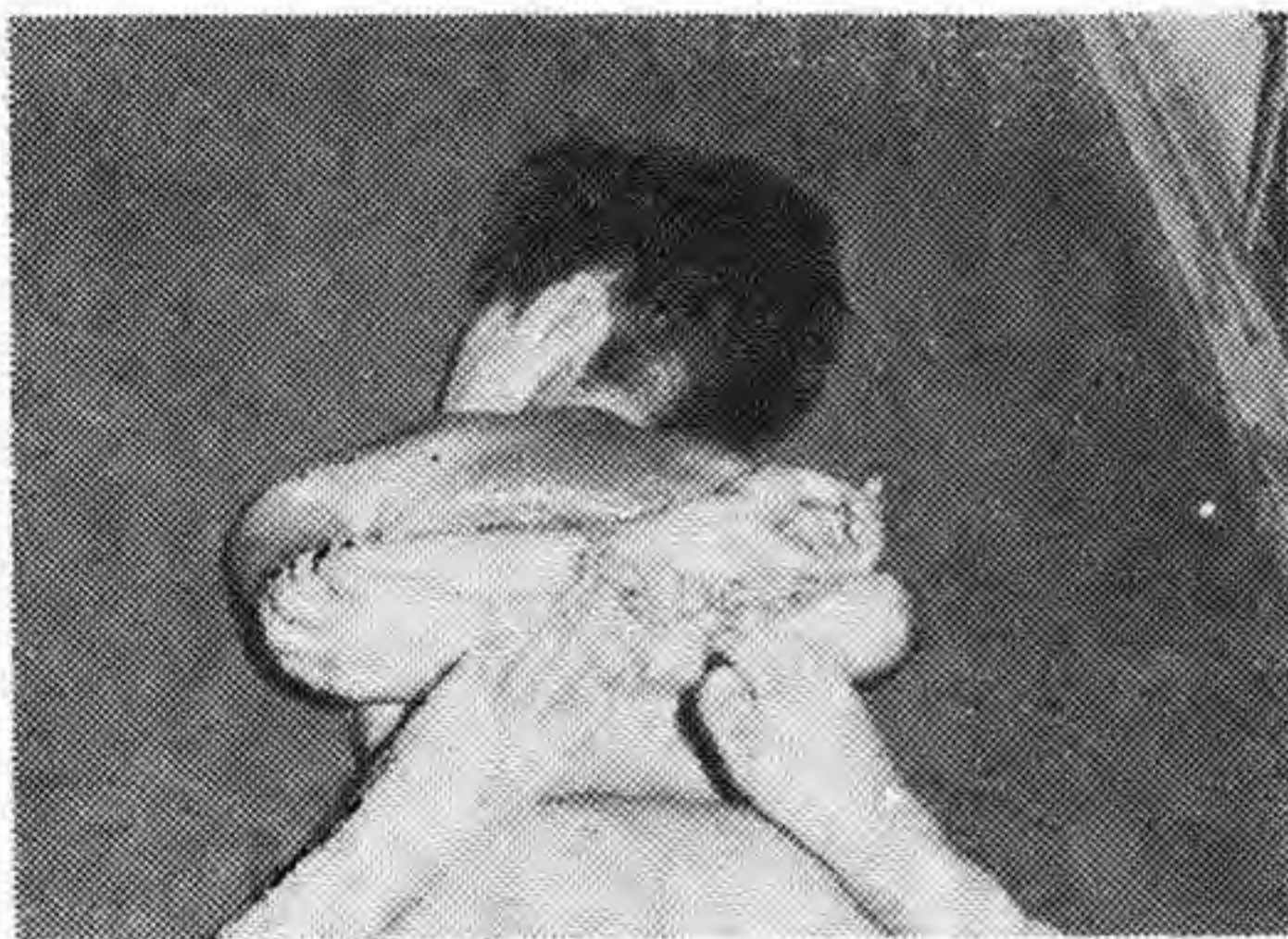
「少し首をそらし体をだらりとして、ぶら下るようにして御覧」

「こうですか」

美波恵子は鴨居の上で組んでいた両手を離

し、爪先立ちの踵を落してダラリとぶら下るポーズになった。腰が、くの字に歪んで、膝がしらが曲っている。鴨居が女体の重味を受けてギクギクと揺れてきしんだ。下半身カットしたフォトを撮り終り、私はやっと気がついて、紙クリップをとり出す。

「かなりバネがきついよ。さあ、舌を出して御覧、ぐっと一杯に。あなたの希望通りにし



てあげる」

彼女は素直に美しい舌を長く出した。その舌に深々とクリップを喰い込ませる。舌の自由を奪うと、声は出せても言葉にならなかった。アウアウと何か喋べろうとしているが、全然意味不明である。私はそっと外してやった。ハアアと彼女は大きく息を吸い込む。

「何かいっていたようだけど、クリップが強いのか？」

「そうじゃないんです。もっと金属製の強いバネのを挟んだことありますから、それはいいんです。このポーズで関谷夫人の様に鞭打ちしても構いませんわ。余り激しいのは辛抱出来るかどうか分かりませんが……私も一度そんな経験してみたかったです」

艶を含んで若い娘が、平然とした口調で、私に鞭打ちを要求したのだから、これは正に一驚に値する発言である。

「あなたから言って貰えると、とてもやり易いよ。まあホドホドに試してみよう。泣いて知らないよ」

「無茶に叩かないで下さいね。じゃあ、もう一度クリップ嵌めて下さい」

積極的な彼女に、私は内心驚喜しながらも顔には現わさず、白いロープを少し長いめに

握った。クリップを改めて舌に挟みなおすと私はロープの先端を発止と恵子の双丘に走らせた。ピシりと小気味よい音が私の官能を疼かせ操らせ、一挙に燃え立たせる。

「アウ、アウ、ウウウ」のけぞってぐつと右足をふんばる。チラリとくつきりした眉をしかめ、恵子は私の方を監視した。ピシリピシりと連続して小さく、腰や背を打ってゆく。肌に微かな条痕がうっすらと赤く走る。ぐらぐらと、鞭打ちにつれて女体はゆらめきのけぞる指が、ひしと鴨居を握っていた。

私は恵子の片脚をとると、かなり高々と挙げ、一本足でよろめく女体の臀部に、更に数回、ロープの鞭の雨を浴びせる。

ウワ、ウワと言葉にならぬ呻きが大きくなり、タラタラと唾液が、唇の端から顎にかけて尾をひいてこぼれ落ちた。かたちよい胸が激しく弾み、鼓動は高く躍っていた。

「どうだ、こたえるか？」

「ア、アウ、ウウウ」

私はポツリと突き出た乳首を、二本の爪先で軽くはじき乍ら、又しても数発つづけさまに腰から双つの盛り上りへかけて打ちならした。両足をヨタヨタさせ、廻転しそうになる体を必死に支えて、私の攻撃を耐えていた。

鞭打ちによる被虐の陶醉が、ジーンと体にこたえるかのように、鼻息がはげしくなってきた。私には恵子が今日只今、始めて鞭打ちを受けたとはどうしても思えなかった。それ程に彼女は、女体に歓喜をまざまざと浮かべていたからである。白い肌のあちこちが、かなり赤く染まっている。それは手加減しながらも、つい思わず力をこめて振り下す、ロープの鮮やかな烙印の痕であった。

ロープを投げ出すと、私はクリップを外してやった。唾液でクリップはベトベトに濡れていた。

「一寸、激しかったかな」

私はニヤリと笑う。この素晴らしい協力者の鞭打ちに対する反応を確かめたかった。

「矢張り痛いすわ。でも時々フツと気の遠くなるようないい気持ちになります。鞭も叩き方によると思いますわ。当って凄く痛い処と余り痛くない処がありますのね。脇腹を叩かれた時は息がつまるくらい痛かったですわ」

鞭打ちに対して、こんなにハキハキ見解を述べる娘は稀有であった。

「でも矢張り舌責めされてる方が、何だか私の好みに合うようです。クリップに何か重いものをぶら下げて挟んだら、どうなるでしょうね」

うね

「やってみようか——」

感嘆しながら、私も試してみたくなくなった。生憎手頃のものがない。私はもう一度クリップを舌の奥深く挟み込んで、両手でぐいと引っ張った。舌を濡らす唾液で滑って、パチンとクリップが外れる。

「あッ、痛いッ！」

舌端をはげしくバネうたれて、彼女は思わず大声で絶叫した。

「御免御免、引っ張ったら外れたんだ」

「ああ痛かった。舌の先が痺れちゃった」

ペソを搔いた表情で、恵子はしきりに口の中で舌端をモグモグさせ、唇の裏でさすっていた。私は縄を解いてゆく。かなり強かったのか、縄痕がくつきり五体をいろどっていた。

解かれた手を足に挟んで、恵子は堂々と、私の眼前で、縄擦れした箇所を撫でていた。

二十一才という年令に似ず……く、なでる音がかすかに私の耳をそばだたせた。大胆なしぐさを恵子は平然とつづけている。私はそれに意を強くして、初対面ながら、羞恥責めしてみたい意欲に燃え始めてきた。この娘の羞恥の限界を確かめたく思ったのだ。

私の緊縛は引続いて始まる。

乳房を圧迫するようにして巻いた縄はその
俣にして、別の縄で、深々と両手を組ませて
後手に縛ると胸の縄につながとめた。赤いジ
ュータンの床に俯伏せにして転がすと、ぐっ
と膝を折らせて、足の踵がおしりに密着する
まで曲げきると、太腿の辺りでぐるぐるとつ
よくしめつけてゆく。左右の足がかたちよく
整うように、もう一本の足も力一杯折り曲げ
て、同じように縛り上げる。これはかなり苦
しい下半身の緊縛であった。俯伏した俣、美
波恵子はフウフウと大きく喘いでいたが、よ
してくれとは言わなかった。

両足のかかとが、ピッタリと双丘に密着し
ている。逆八の字に腿が開かれ、眼前間近に
ぐっと弓なりになった造形美が鮮やかに展開
していた。

幾多のハントの女性に試みようとして、な
かなかなし得ないこの両脚の、超彎曲のポー
ズに、私は血をたぎらせて、近々とカメラを
近づけていった。ピッタリと膝を折って、し
かも双丘に密着させるといような荒技は、
過去試みたどの女性も痛がって果せなかった
のである。美波恵子のスラリとよく伸びた脚
線の柔軟さが、案外たやすくこのポーズをと
らせてくれたのであった。両脚がしびれてき

たか、流石に彼女は呻き声を上げ始めた。

露わに剥き出された、遮ぎるものは何もな
いこの鮮やかな、汚れを知らぬ双丘の起伏線
目掛けて、縄の鞭を一闪振り降す。

「あッ——ウウウ」

脚指が激しく反り返ってけいれんする。か
なりの痛撃が彼女を襲ったようだった。私は
洋服タンスを開くと、素早くズボンから革パ
ンドを抜きとった。痛撃は革の鞭に代って、
更に強まるだろう。

一振りして発止と、標的におどる。

「ヒーツ、くく、い、いたいッ……あー」

鞭の激しさにたえかねてか、肘を掴んでい
た後手の指が、ぐっと筋張って尖って空を掴
んでいた。バンドの撥ね返った皮膚が、みる
みる赤く染まってゆく。

俯伏せの胸を圧迫された苦しい姿勢で、恵
子は五体をふるわせ、ねじらせ、よじらせて
鞭打ちをたえた。私のSの燃焼は弥が上にも
くすぶって行く。

彼女の前髪を掴むや、ぐいと頭をもちあげ
る。粗暴になりつつある行動は、いよいよ拍
車をかけていった。彼女の被虐に耐え得る限
界を、陶酔の悦虐の過程を、急速に被虐に追
いやる心理の動きを、この眼でじかに感じと

りたかったのだ。顎を突き出して、引揚げら
れた恵子の、苦悶の表情の眼尻に、うっすら
しめりが光っていた。

「大丈夫？」

「ええ」

短く判っきり答える。

私は傍らに落ちているクリップを拾い上げ
ると、舌を出さして深く挟み込む。これで彼
女は発音の自由を奪われ、疼痛にも悦虐にも
啞音に似た発声しか出来なくなった。その俣
そろそろと体を横倒しにする。突き出た乳房
が震えて息づいていた。バッグに入れてきた
ローソクをとり出すと、点火して、にじりよ
る。ジュータンに蠟滴をこぼさぬよう、充分
に注意を払いながら、そろそろ蠟滴を腰の辺
りから、臀部へとポトポト垂らしてゆく。

恵子は激しく身をよじった。蠟滴がポトポ
トとジュータンにこぼれる。あわてて、ぐい
と体重を預けて、女体の上にのしかかると、
更に腰から双丘の辺りへとしずくをこぼして
ゆく。

鼻孔より発する叫喚の呻きが、一入高くな
る。私の体重の下で必死の身悶えがあった。
部屋に蠟芯の焦げる匂いが漂う。私は、やっ
と火を吹き消した。腰のあたりに点々と蠟骸

がこびりつき、女体は静止し、鼻息は鎮まった。蟬骸をつけた尽のフオトを数枚とり終ると、ついで、このポーズで体勢を変えさせて美波恵子の神秘をかなり剥いでしまった。動かしただめだろうか、腿や脛に、縄は強く喰い込み、見た眼にもそれは痛々しかった。解かれた足縄の痕はひどく深かった。上半身の縄をその尽にして、私はふらつく足でピースに火をつけた。激しいプレイの連続で、酔いが更に深まって、体内をかけ巡り、足はともすればもつれていたのだ。深い疲労がどっといつときに押しよせてきた様であった。考えてみれば早朝に車をかって名古屋入りして以来、プレイ、プレイの連続であったのだ。美波恵子に関する限り、彼女の積極的な協力にもかかわらず、未だ余りフオトを撮っていなかった。せめてもう一息頑張ろうと、私はやっと気をとり直して椅子より立上った。出来ればこの尽、女中が敷いていた隣室の、フワフワした布団の上にゴロンと転がりたかったのだが――。

「もう少しいい？」

「いいですわ、手首少し痛いけど、我慢出来そうです」

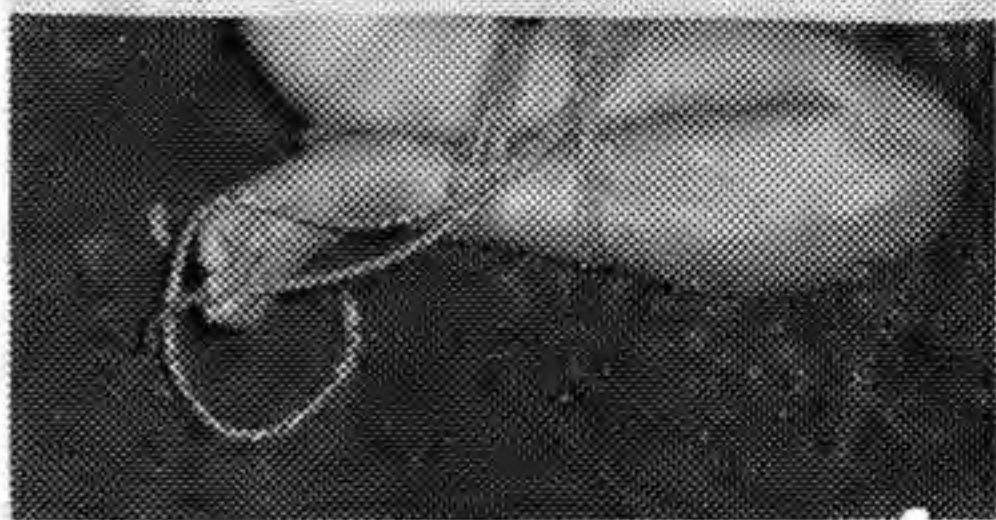
事実、美波恵子の忍耐強さは抜群だった。

胸の縄は、もうかれこれ三、四十分以上も縛り放しであった。

私はクリップをとり上げると対面して坐る恵子の、鼻にグイッと挟む。スラリとした形よい鼻梁が押し潰され、鼻孔はクリップの強い弾力で、完全に閉じられてしまった。

グエーッと喘ぐ大きく吐く息吸う息が、徐々に激しくなり、恵子は大きく口を開いてハアハアと呼吸した。体を俄破と押しつぶすようにして仰向けにジュータンの上に倒すと両脚を握って、力任せに屈曲させる。今度は先程の逆で、膝が深々と乳房に接触するぐらいに押えつけて、足首の上辺りで、腿と脛をきつく縛って行く。両脚の作業を終って、ぐっと腰の下を通して両脚を上げるように引き絞る。

体の下になった両手が痛いのか彼女は腰を浮かすようにした。極端な屈曲縛りである。ハアハア喘いでいる恵子の呼吸が、のしかかった私の顔に甘く振りかかる。うなじを廻して、彼女はこの羞恥の極の緊縛をじっと耐えていた。否応なく女体が私の前に開かれてい



た。遠写、接写と、ぐるぐる周囲を巡り、私はこの無慚のポーズに白い閃光を次々走らせる。否応なく私の手が動く。みの虫のように彼女は悶絶寸前の叫喚の呻きを洩らして、左右に体をゆする。

Sの男性なら究極に一度は希む、赤裸々なめくるめくポーズであり、女性にとってはこれ以上の屈辱はない浅ましい肢態であった。しかも鼻腔の呼吸をとめられた上、胸は圧迫されて苦しく、吐く息は刻々切迫しつつあった。この尽女体の奥まで探究してゆきたい意欲は私にもあった。始めて会う女性に、最初からこの様な極限のポーズをとらす緊縛をす

るなんて、私もどうかしていた。その原因が余りにも易々諾々と応じ、しかも自ら進んで被虐を求めようとする彼女の誘導にあることを、私は感じていた。ひとつは酔余のなせるわざでもあったのだが――。

「苦しいかい」

「はあ、ああ切ないわ」

喘ぎあえぎ彼女は眼を細めた。その切なげな唇の喘ぎに、私は、ムラムラと情熱を覚えた。どの様にでも自由に料理出来る立場にあった。ともすれば理性も、旅空の酔いに押し流されそうである。

私は膝を揃え、その前にかがみ込んだ。女体特有のにおいがスーッと鼻先をよぎる。

悦虐の快楽が、じりじりと美波恵子の体をさいなみ始めていた。まぎれもなく、私の体験から通して、彼女の処女性は失なわれていた。それは詮索もすまい。唯、私の心をフトよぎるのは、始めてハントに応募した女性にしては、余りにも被虐の悦楽を知りすぎていることの疑心であった。

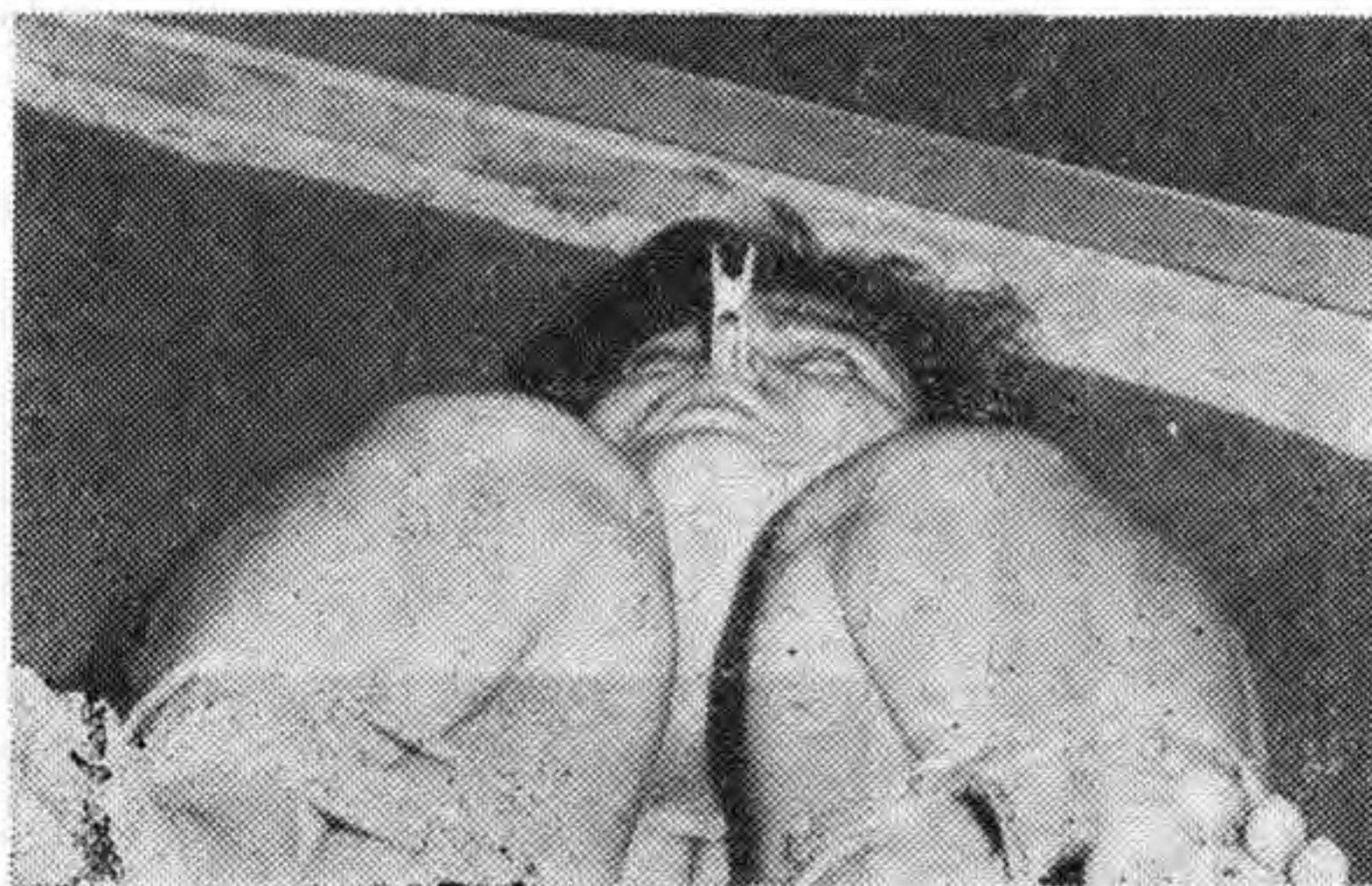
「いいのよ、ああ辻村さん、好きなようにして……」

それは女体の最後の歓楽の叫びであった。

x

x

x



又してもペッティングに終わってしまった。意馬心猿の私の心にもかかわらず、疲労と酒の酔いが、私の意志とは相反する方に向かせてしまったのだった。

ゆるゆると私は縄をとく。何もかもが煩わしくなる。満たされぬ尽の自己嫌悪のひとつ

きであった。

恵子は両脚を広げたり縮めたりし、更に屈伸させていた。フト気付くと、鼻梁のクリップは未だ依然として、彼女の鼻に喰い込まれた儘であった。慌ててそれを外す。

「少しきつかった様ですわ」

ホッと息を吐くようにして、彼女は寝そべった先刻のポーズの儘で、ケロリとしていった。相当強烈な嗜虐に対しても、彼女は予想外に耐えられ、しかもそれが悦虐の快楽を伴っていたことを私は判つきりと知った。このM性はどうして培われたもののだろうか。始めての経験なら、大抵の女性は恐怖と驚愕と痛苦とで、かなりショックを受けるべき筈なのに、そうした態度が彼女には不思議になかった。私は全裸の尽の彼女の上半身を抱き起してやり、椅子にそっと坐らせた。

「あなたは不思議な人だ。プレイは始めてじゃないでしょう？」

私の疑惑の想念が思わず口をついて出る。彼女は黙ってうつむいている。再び言葉をつなぐ。

「正直って、今のプレイは初心者の人にはかなり強烈なものなのだ。それなのに、あなたは案外ケロリとしている。どうしてなの」

「分ります?」

「やはり……経験したんだね」

美波恵子は妖しく笑った。まるで妖精のよう……。その笑顔に淫らな媚態がさつとにじんだ。やはりそうだったのか。探求心がムラムラと湧き上ってくる。

「白状するまで帰してやらない。言ってごらん」

「やはり辻村さんのようなベテランは欺せませんわ。本当のこといいます」

「ウン、やっぱりね」

「私、伯父夫婦に世話になっっているなんて嘘なんです。飛驒の高山から、中学校卒業と同時に名古屋へ集団就職して、そこをやめて、今の春日井市の伯父といっている人の家へ、住込みで勤めたのです」

「どんな商売の人?」

「自動車の部品製造の、小さい会社の社長さんです。秘書みたいな仕事するようになってから、この人のプレイの対象になりました。春日井市のS・Kといえば、直接購読していただきますから、きっと編集部の方も御存知の筈ですわ。社長は奥様の眼をぬすんで私を誘い出すと、いろいろと、口でいえぬようなプレイの対象にしました。鼻責めや舌責め、乳房責

めなど、その人の一番好む責め方なんです。

今度、辻村さんにお会いする様、編集部宛に出した手紙や一切のことは、社長さんの指図なのです。社長は責め方に大分ゆきづまり、その挙句、私に一度辻村さんに責められてこいと申しました。それで私、かなり積極的に申上げたのです。社長は今日のプレイの写真を必ず貰う様、約束してこいと申しました。

それだけは、どうぞ叶えて下さい」

「分りましたよ。ありそうなことです。しかしあなたは我慢づよい。かなり強烈な責めをうけて来られたんでしょう。逆吊りなどされた?」

「ええ、社長は好きです。だから、そんなことの出来るホテルを選びます。辻村さんのハントに出てくるフォトや、分譲フォトを次々求めては、その殆んどすべてを私に実行してきました」

「それで奇クを読まされたってわけ?」

「ええ、毎月かかさず……」

「道理で最初、ハント書くよといった時、平気だったわけが分りましたよ。成程——」

それで合点がいった。

「失礼だが、その割に体は綺麗ですね。余りくずれていない」

「彼は戦前、外地にいた時、ひどい病氣にかかりましてから、ダメになったそうです。だから虐めることで、彼自身欲望の捌け口を見出している様ですわ」

「奥さんが可哀そうだね、それじゃ」

「今の人は三度目です。何か噂では、適当によろしくやってるそうです。私判っきりしらないけど」

謂わば、美波恵子は、社長の嗜虐のいけにえとなった半処女であった。彼女の肉体は、セックスにかわる方法で、社長によって散々弄ばれているに違いなかった。

「私のボーイズカットどう御覧になります?」

唐突な問いであった。

「さあ、あんたの好みじゃなく社長の……」

「そうじゃないんです。去年の冬に私が社内のある若い人とオカシイと、勝手に疑ぐってそれ迄は腰のあたりまであった髪をバツサリきりとして、ザクザクと、まる坊主に近い頭にしてしまわれたのです。近頃やっと恰好つきました。二カ月前まで、コマチヘアをかぶっていましたのよ」

聞けば聞く程、数奇をきわめた運命であった。私は社長が、或いはこの犬山まで、そつとあとをつけて来たのではないかという危惧

に襲われ出した。執念の鬼はそんな行為もやりかねぬかも知れない。

私の酔いは、いつしかさめ果てていた。

「辻村さんは矢張り紳士ね。ハントのことは本当でしたわ。私、その場になって、それだけですむものかと、ちょっと疑ぐって見たのですけど……」

結局未然に終ったことを指しているのだ。

「でも、構わなかったのです。若しそうなくても……」

恵子は椅子から立上ると、いきなりハダカ of 俣、私の膝にさっと乗って、両手で私の首を巻いた。

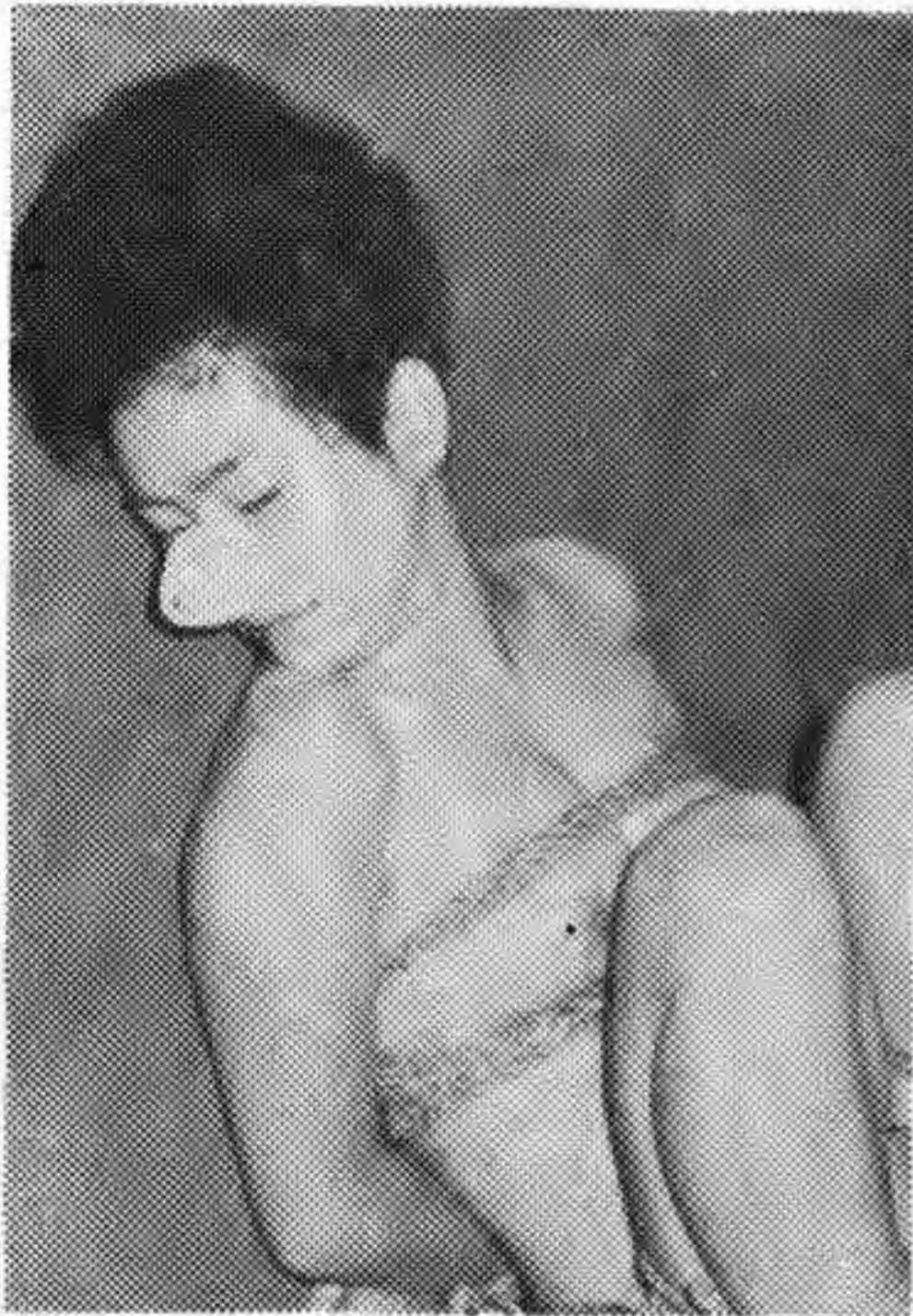
「ねえ、お別れのキスして」

じっと私を見つめる彼女の眼はキラキラと輝き、誘いこまずにはおかぬような、妖しいなまめきの唇が、私に近々と迫ってきた。

「社長のところをどうして逃げないの？」

その魅惑をそらすように、唇を近づける彼女に、息の触れ合う間近で問う。

「愛しているからよ」



「どうして？」

「プレイの時も、日常もすごく可愛がってくれますわ。私のあるところにイレズミしたいなんていってたわ」

「一生とれないよ」

「構わないんです。それだけ愛してくれるのなら。ひよっとすると近く、今の奥さんと別れるかも知れないのよ」

「機能不全の彼を愛してゆけるの？」

「愛する方法はいくらだってあることを知ったの。自分はダメでも、私をすごく欲こばせてくれるわ」

「いくつなの？ 社長」

「さあ、もう五十才ぐらいでしょう。たしか大正七年生れだったかしら」

「私より三才上だよ」

「あら、全然——。辻村さんものすごく若く見える」

「そんなに彼を愛しているのに、私とキスしていいの？」

「辻村さん、私にキス以上のことしたでしょう。今更そんなこというの可笑しいわ。ちよっとの違いだけじゃない」

彼女は眼を閉じて、唇を突き出した。私はぐっと熱いものがこみ上げてきて、むさぼる様に力をこめて吸った。

かなりの長い時間であった——。

「帰りますわ。ねえ、約束して、フोट送っていただくことと、今日のことと在りの俣ハントに書いていただくことを」

「社長又あんたの頭をジャリジャリやるよ」

「いいの、ジェラシーを起こさせて、それでハッスルさせるのよ。彼にとって責める口実が又一つふえて喜ぶかもしれないわ、反って……」

私は何もなく本当によかったと、しみじみ思った。開いた女体は、あの時、確かに私を待っていた。それに代る方法で彼女を悶え

させたことが、私にとって後味のよいものに
変っていった。

終始、美波恵子は行動的で協力した。今、
ピヨコンと私の膝から飛び降りると、素早く
素裸をひるがえして、下着をつけに走った。

支度に十分もかからない。

「送ろうか、春日井市まで——」

「いいわ、独りで帰ります」

「そう、じゃあ……」

私はプレイの契約の紙幣をとり出して、小
さくたたむと、彼女に手渡すべく、そっと握
らせた。

「いいんです。貰っちゃいけないっていわれ
てるんです、彼から……」

「それじゃ、いくら何でも」

「いいえ、本当にいいんです。少々痛いめも
したけど、愉しかったですわ。いずれ彼も辻
村さんがお差支えなければ、会っていただき
たいって言ってました。私、帰る間際に白状
するつもりだったんです。一寸タイミングが
早くなっちゃったけど」

超断髪的美波恵子は、颯爽とミニのワンピースをなびかせて、私より先に立って、階段
を降りていった。宿衣の尽の姿で、私は立関
先まで見送る。

「又、きつと逢って下さいね。約束——」

彼女は宿の女中のいる前で、何のてらいも
なく小指を出した。照れ臭く私は自分の小指
をそれに絡ませる。

「まあ、今からお帰りですかお独りで——」

女中の声にうなずいて、美波恵子はさっさ
と数歩、正面きって歩いた。ぱっと振返って
バイバイと手を振る。

「いいんですかハイヤーお呼びしなくても」

女中は、しきりに気を使っている。

「なーにいいんだ。どこかで拾うだろうから
好きな様にさせておくさ」

私はいつまでも恵子の、後姿を見送ってい
た。その後方の闇に、くろぐろと一台の車が
テールランプの赤のみくつきりさせて停車し
ている。やはり直感は当たっていた。彼女はま
っすぐにその車へと足を向けていった。

まるで、妖しい魔女に魅入られた様なめま
ぐるしい半日であった。ハントする筈の私の
方が、むしろ彼女に翻弄されていたのかも知
れない。犬山を指定したのもすべては社長の
指図による魂胆かも知れなかった。浴場へ行
った時、旅館名ぐらい、いくらでも電話で連
絡する時間があつた筈だ。

それもよし、異常な体験を私自身も重ねた

のだから——。

プレイのあとを反芻するように、私は甘い
夜の外気を大きく吸って、カラコロ下駄をな
らしながら、ひなびた鶴沼の夜道を当てもな
く歩いた。

フト見上げる彼方に、黒く聳える白帝城の
中天高く、月は煌々と冴えわたり、眼下に流
れる木曽川の激流が、月影を岩にくだいて、
白く散っていた。

私の悦虐のプレイカルテに、こうして又、
今宵新らしく、一人の女性の名が書きこまれ
ていった。

〔編集部よりお願い〕

辻村隆氏のハカメラ・ハントVは、毎月美
しい女性の登場に依って華やかに誌上を飾っ
ていますが、更に錦上花を添えてファンの眼
を楽しませるため、勇気ある女性の登場を待
望いたします。御希望の方は編集部まで、お
便りをお寄せ下さい。住所氏名職業などの誌
上秘匿にしましては十分御意向に添います
から御安心の上お申込み願います。尚謝礼そ
の他詳細にしましては、通信に依ってお打
合せいたしたく思います。〕

△編集部V



『痛クナイお産』・・・

・・・について思う

茂野 礼

本誌に瀬沼四郎氏、高野原美氏の妊婦物に関する作品が載る回数は、余り多いとはいえないと思う。私は本誌を購入する度に、期待しながら目次を繰って、それらに関する記事がないか探すのであるが、何号かに一回は探し当て、その頁を開くまでの間、胸の高鳴るのを感じる。

そもそも人類の存続ということを考えれば論を俟つまでもないが、女性の妊娠なくして今日の人間はないのであって、私達の誰一人として、これに関心のないものはあり得ない筈である。

女性美を主題とした絵画には、女性の持つ豊満な肉体を流麗に表現したものが沢山にあり、これらは今日に至るまで名作としての評価を与えられている。

即ち、真の「女」を画布の上に描き表わす

上には、その女らしさ、言い換えれば、滑らかで、しかも繊細な曲線と、豊かなボリュームというものが、大切な要素の一つとなっていることは明らかである。

この様に見てくると妊娠した女性に、偉大な美しさと、憧れさえも感じさせる要素が含まれているのは事実であろう。

ところで、美人といわれる基準は、社会の実状の影響などを受け、時代と共に変わって来ているが、今日の都会における活動的な場所では美人といわれている人々も、その肉体の姿をみれば、何と味気ない姿をしている人が多い事か。こう感ずるのは果して私だけであろうか。

顔は美しくとも、その水着姿や振り袖姿において均勢が整っていても「女」としての美しさに欠けてはどうかであろうか。

この様な見方をすると「女」というものについての出発点そのものを定義してから議論にかからねばならないことになり、その意見は多くの先生方によって種々あることと思われるが、私のここに述べ様とする本題ではないので深入りはしないことにする。

戦後、靴下と女性は強くなったと言われるが、強さを増すと共に女らしさも変化して行ったようだ。

即ち、女性は、要求を出しさえすれば男性はそれをかなえるために全力をあげるものと考えているらしいし、また社会に対してさえ同じような態度で要求を出し、時には代議士の先生方さえ、たじたとさせられているようなことを時に見聞する。

このような筆法が、出産が女性だけにまかされているのは不公平だと言うような考えを

醸成し、苦痛は真ッ平と言う考えに至るのも無理のない話ではある。

また半面では、科学技術の発展が、苦痛を減らすいくつかの方法を可能にしたので、益々苦痛に「耐える」ことを避ける風潮を作り出して行ったことは事実であろう。

最近では週刊誌でもスター級の女優さん達の妊娠後の状況、すなわち出産についての記事が時々載ることがあり、また日本テレビの木島則夫ハプニング・ショー第二回（昭和四三年五月二五日放送）で「痛クナイお産」が放送されるや俄然評判となり、一つの問題を提起した形になったので「お産」や「痛さ」について少し見てみよう。

週刊誌に載っていたロミ・山田さんの出産時の陣痛との闘いの様子や、朝丘雪路さんの記事などを考えると、個人差や胎児の条件が異なるにせよ、豊かな肉体を持ち、ブラウン管面で視聴者の側から見て馴染みと親近感のある美女が、陣痛に耐え、産みの苦しみを味わって身二つとなる状況を想像しただけでも出産に関心のある私は身体がゾクゾクして来るのを感じる。

記事によると、ロミ・山田さんは、麻酔など用いない自然遂娩を、勇敢に自ら望んで母となる決意で出産に臨んだが、横胎であったので、十数時間も陣痛に苦しみ、それまで敢

然たる態度で陣痛に立ち向い、耐え忍び、頑張ったが遂には耐え切れず悲鳴をあげて泣き叫び、麻酔の使用や帝王切開をねがい、その他所期の事以外のことを可成り泣き叫んだとのことである。

ロミ・山田さんは夫君の岡田憲和氏と共にカソリック信者であるが、それでこのようである。もっとも医師も、間もなく帝王切開に切替える必要時期が来ると判断していたとかで、その限界に近かったという事を考えればロミ・山田さんの忍耐は、むしろ賞讃されるべきものと思われる。

しかし、思うに今日の女性は、自然の摂理に従った自然遂娩に対し、一般的なことがらは強くなったと言われるのは逆に、何と弱くなったものであらうと感ずるのは、私だけだろうか。

助産婦さんの言によれば、最近の女性は皆さんお産が上手になったので軽くなりましたよ、と言うが、また反面、何と我慢がなくなっただけかと思つています、とも言っている。この傾向は、特に中産階級のインテリ・クラスに著しい現象らしい。

苦しみや痛みの中には示唆や連想、暗示に基づく部分があるので、まわりから赤ン坊が生まれる時には天井の棧や、障子の骨が見えなくなるなどの話を聞かされて恐怖感があ

ると、特に初産の時には影響があり、助産婦の介助の効果がなくなるようである。

それで助産婦としては暗示誘導に勉めるわけ、お産は生理現象で病気ではないから何等心配の要らぬものであり、助産婦の指導する通りに振舞えば楽に安産出来ること間違いなし。私はすでに何百人もとりに上げており、大船に乗ったような気でいなさいと話をする事になる。

朝丘雪路さんが、NETテレビのスター千一夜に義母と出演し、語ったところによれば私（雪路さん）には母が亡くなっているので多勢のファンの方々が心配して下さり、お手紙を沢山頂きました、という。

お産の時は何せ私は初めてなので大騒ぎしましたが、お腹が痛み始めてから三時間ちょっとで産まれ、皆様からは大変軽く安産だと言われましたと慎ましく語っていた。

しかし、週刊誌の記事によると朝丘雪路さんは悲鳴一つあげずに産んだとあり、安産ではあったようであるが、三五〇〇グラムの赤ちゃんの出産に、声を立てないところなど、女性としての務めの自覚と嗜みに大きな違いがあるように思われてならぬ。

義母を立てる嫁として、夫を立てる妻として、テレビや映画などでは、歌手、女優として、また、ポインと呼ばれるのが将にピッ

りの豊かな肉体と、柔い優和な微笑を常に顔一杯に湛えた美女。その上、適度なエロチシズムも持っている彼女は、近来稀に出来た女性であると思っている。

彼女とて高年初産の部類に入ると思われるのだが、出産直後のあの天にも昇るような爽気似た快感にひたっているかのように見えた。

彼女は母乳は豊富に出るが、授乳していると当分の間仕事が出来ないので、普通は薬を使って母乳を止めるのであるが、薬を使わずに出なくなるようにしたと言う。

唯、気になる事は、彼女がホステスに復帰した日本テレビの11PMのホストの大橋巨泉氏は、彼の奥さんや子供と別れ、田舎さむらいのような風格の持主であるが、とかく才子は他の人々との協調性に欠け、彼は彼なりに全力投球的サービスをしている心算であろうが、素直に言って、婦人、女性、おんな、ホステスなどの区別については少々難がある人物のように私には思えるので、折角、大橋巨泉氏と朝丘雪路さんがブラウン管の上に醸し出し、発散させていた後あじの良い淡泊なエロチシズムとでもいうような雰囲気、今後も見せ続けて欲しいと願う人々の期待を裏切らないようにして欲しいことである。

私の職場にお転婆で向う見ずな女性がいる

が、この女性が最近結婚し、このころようやく外見からでも妊娠しているのが分る程になって来た。

しばらく前までは悪阻で、トイレの中で押し殺してはいるようだが大きく響く声で内容のある小間物や、何もなくて胃からこみ上げて来る嘔吐を盛んにして、食事が進まぬらしく青い顔をしていたが、先日は血色も良く嬉しそうな顔をしているので、「どうしたの」と聞くと「この処快調で、彼氏（彼女は夫君のことをこう呼んでいる）もすっかり張切っちゃっているわ。食事食べられて、食べられて。二人分ですものね」と言う。「それは良かったね、だけど栄養の事を良く考えてやらなければいけないよ」と忠告をしたが「それから、余り過度に及ばぬように」と付け加えて置いた。彼女は「アア」と言う顔をしたが、「何でも分るのね」とそれ以来、何かにつけて相談に来るようになった。

そのうちに「赤ちゃんがお腹の中で動いたの」と報告に来る。

「始めて動いたのを感じた時には驚いたわ。胃を突き上げられるような感じがして気持ちが悪かったけど思わずお腹を抱えちゃったわ。赤ちゃんもきっと私のようにお転婆なのかしら。丈夫な赤ちゃんが産まれるといいわ」

「でもお腹の中で余り大きくなり過ぎるとお

産が苦しいんですってね」

「病院が良いのかしら」

「帝王切開だと痛くないんですってね。けど三人までしか出来ないんですってね」などと、やがて母となる日を想像してか、嬉しうに語り続け、黙って聞いているときりがない。しかし、胎動する子供を腹に宿して、心なしか腹をかばうような姿勢は今までの彼女に見られなかったもので、将に母性本能ともいえようか。

出産に対する知識がこの程度では心もとなと思ひ、女の生理で病気ではないのであるから順調なら何等心配する必要はなく規則正しい健康的な生活を続けるように説明した。

なお、今日の女性には帝王切開が無痛であるかのように言われているが、勿論、手術中は麻酔のため痛みはないが、麻酔がさめる時のあの苦痛を知っているのだろうか。それは不快なものであって、二度帝王切開する人は大変少なく、三度目は希望する人がないくらいである。もっとも三回以上は医師の方から止められるでしょうがねと、説明する。

出産時の痛みは健康的で、その唸り声にしても元気があって、赤ん坊を太陽の下に送り出してやろうという意気込みのこもった明るさがあるが、麻酔のさめた帝王切開のうめき声は、まるで病人そのもので、聞くに耐えな

いものだというと、黙って聞いていた彼女は自然分娩を決心したようだ。

私が寮にいた頃、自宅分娩をする人があったが、出産する人の部屋の前には、近所の奥さん方が沢山集っており、妊婦の唸り声に合わせて力んでいる光景を見たことがあり、経産婦、未産婦の既婚者でも分娩には非常な関心を持っていることがありと窺われた。

三十才過ぎた産婦とかで陣痛を誘発、増強していたと言うが、唸りと叫びの連続、絶叫に近い悲鳴、はく息もいきみを伴っているので迫力がある。

やがてその激斗が一段と強まり、齒軋しりや、鼻汁を吹き出す苦悶の様子、ガタガタというような振動的な気配を感じ「ム、ム、ム……」と息を押し殺すような音がしたと思っただが、この時に産まれたらしい。

孤々の声を聞いた途端、眉にしわを寄せ、齒を噛みしめ、拳を握りしめ、息を詰めて入口あたりに金縛りにあったように締めき合っていた奥様達は、大きな吐息と共に笑顔を取り戻し、尾籠な形容だが、丁度おならを百箇ばかりまとめて放つような爽快感を覚えると話し合い乍ら帰って行った。他人の出産を聞いてこれであるから、我が身の出産ならいかにばかりであろうか。

日本テレビの木島則夫ハプニングショー第

二回「痛くないお産」は昭和43年5月25日(土)放送される予定であったが、無痛分娩の実況中継は急に取り止めとなり、同局で昭和42年2月23日に放送された、「夢の中のお産」が再映された。

このフィルムは純然たる学術的意味を目的として作られたものであって、この中で映し出された妊婦の無痛分娩を通じて、世の女性への幸福のために協力された姿については、この放送を見たすべての人々から語られるのを耳にし、モデルになった妊婦の理解並びにこの方法の無痛分娩の研究を行なった病院関係の諸先生方、及びこれを企画し構成、取材した放送局関係など全員の協力あって始めて為し得たものと、私は絶讃の拍手を送りたいと思っている。

モデルになったこの妊婦の人は、心臓に病疾があるため、出産の母体への影響を軽減することを目的として、心電図などの技術を駆使しながら行なわれたものである。

このような医学的成果を良い意味に実際に活用して行けるならば、人類にとって一つの幸福を与えたことになるのではなからうか。

ただ、このテレビを私と一緒に見た人の個人的な意見には種々あって、病人とはいいいながら陣痛が始まると顔を歪めて、あたかも自己の関与しない災難を受けた時のように、憎

しみを訴えるが如くに身を揉んで悲鳴を上げる様子は、女性が持って生まれた業という立場を全く持っていないかのように見えて、嫌な気がしたという女性もあった。身体が悪くて出産を好まない、或は好ましくないと考えるなら、他に然るべき方法や道があるのではないかとつけ加えていた。

出産が子孫繁栄につながるには、出産に耐えられぬ母体からの赤ん坊の出生については一考を要することになりはしないだろうか。

この場合のように、母親は胎児の出生したのも知らず、又、胎児も母親に施した麻酔により、孤々の声をしばし挙げられぬというような点は、女性としての義務や責任を逃避されたような感じがするという男性もあった。

丁度、出産し終り麻酔マスクの外される時に写った状況は、汗と涙と、唾液で光っている顔を拭かれながら、感情のない口を少し開いた安らかな顔で、医師から終りましたよと呼び起こされ、語りかけられても、麻酔がかかっているのか、返事がしばらく返って来ない姿ではあった。

要するに、出産は女性の生理であるので、自然の摂理に対して順応して行って欲しいと言う意見が多かった。

テレビの中の討論出席者にも、このフィルムについての賛否の意見や、別の見解を述べ

る人が沢山あった。

出席者には自然分娩でお産した人や、精神指導法によるものや、腰椎麻酔法によった人もあるし、又女性のみならず男性も多数含まれていた。

ただ無痛分娩は、この時のフィルムで紹介された方法だけでなく、他にも種々な方法のあることは、ここで特に注意して置かねばならぬであろう。

発言者の意見のうち、注目し、考え直して見たいものに、助産婦から、出産は自然分娩が望ましいのではないかという意見と、助産婦なしで、臍の緒切りから取り上げまでを産婦一人で処理し、すでに十一人も産んだ主婦のいたことである。

勿論、痛みがあるのは当然だが、私には自信がありましたと言う、極くどこにでもいる普通の人と同じ感じのその人の姿には、見る者に女としての何かを感じさせる、力強い何ものかがあったのは事実である。

この番組のプロデューサーの渡辺みどりさんは、(6月10日号女性自身にて)週刊誌の記者の質問に答えて、私は妊娠の経験はあるが、流産したので出産の経験はない、科学的な内容のものなら主人の同意があれば私自身がモデルになっても良いし、私は無痛分娩には賛成である、ストリップショーと同じよう

に興味本位に見られる事は女性に対する冒瀆であると言っている。

しかし、そう言っているだけで何もしないならば、その間にも多くの産婦が陣痛に苦しんで分娩が行なわれているに違いないのだがこの現実に対して、何の解決が与えられることになるのだろうか。

これは、すべからず、女の大役を救済する前向きな姿勢で考えられねばならぬ問題である。

丁度、女性の職場進出が盛んに行なわれた頃、不浄の身で何が出来るかと男性側から言われたり、少し古くなるが、女性の海水浴がとも考えられず、男と女とは別に海に入るなどのことが行なわれた時代のあった事実を思い起こせば、妊娠腹を抱えて通勤し、又職場で立派に活躍している現在、そして夫婦のみの核家族の盛んな状態においては、今一歩前進し、出産の科学的指導とその普及には、もっと力が入れられて良いものと思われる。

久里千春さんも五月二十三日に女児を出産したそうであるが、週刊誌の記事によると、彼女はすでに一女の母であるが検診台に上るのがいやで、六カ月まで医者に行かなかったと言うので、医師からはびっくりされたと言う。しかしあの検診台は、余り上って気分の良いものではあるまい。

久里千春さんは麻酔による無痛分娩法を行なったが、彼女が酒呑みなので麻酔の利きが悪く、普通の人の二倍を注射したという。

非常に安産で、二、三時間で、眠っているうちに女児を分娩、こんなに安産なら男児が産まれるまで何人でも子供を産みたいと語ったと言う。

病院の入院に当たっても、陣痛が来るまで、夫婦で買物に出たり、食事したりして、担当看護婦をあわてさせたというから、いかにも久里千春さん、山崎努さんの夫婦らしい。

しばらく前の本誌には、ミモザ館や悪徳の栄えなどの中で、健康優良児コンクールや、妊娠中絶の記事があり、瀬沼四郎氏や高野原美氏の妊婦ものもあるが、その分量は決して多くはない。

最近では切腹ものが多く、妊婦の写真が時々掲載される程度であるが妊婦拷問、腹裂き、帝王切開、麻酔を使用しない出産、分娩、妊娠中絶、流産など題材はまことに豊富と思われる。

私はそれら、女性の微妙な器管を対象にした読物のためにもっと紙数を開放されるよう熱望するものである。

生理衛生に関する講座で藤本医博は、例えば痔や直腸の検診のために肛門鏡を使用され

たり、婦人科でのクスコの使用は、多くの場合、異物感、拡張感は苦痛として受けとられるが、生理的な排便などによる局所の拡大には、何等痛みと感ぜないのみならず、太くて長いのを元氣よく排泄した場合には、快感さえ感ずるのが普通である。これは生理的な自然の摂理であって、ここに精神的無痛分娩の効果を見る余地のあることを講義された。

ここにいう無痛は痛みが与えられないの意味ではなく、分娩の生理を十分に理解するならば努責感や拡張感、焼けるような激痛の中の或る部分は、生理作用の中に没し去ることが可能であることをいっているのである。

従って、この方法による無痛化の条件は、医師を信頼し、生理を十分に認識し、且つ母となる強い自覚の上に立つて分娩に臨むことが絶対に必要であって、無責任な人の話や、あれこれと自らが迷い、不安に陥るが如きは害あれど何の益なきこととなる。

人類の半数を占める女性の一つの幸福を達成するため、より良き生理の理解と、出産の無痛化を指導する内容で、出産の要領、テクニックの普及を意図した作品が毎号掲載される日の一日も早く到来することを望むと共に又希望があれば産婦に対する分娩指導や、その出産状況を、産室の神聖を犯さないため、隣室からマジックミラーを通して実際に会員

が見学出来るようなグループによる会を作り健全な子孫繁栄に対する思想の普及を図りたいと思うので、貴誌の事務局で音頭をとるなどの考慮をわずらわしいと思う。

味噌汁の女優として広い層にファンを持つ池内淳子さんが痔の手術をした時に、その痛みに耐えかねて、ヒィヒィと悲鳴をあげて泣いたというのを、彼女のファンの一人が語っていたのを聞いたが、肛門のまわりは、毛細管静脈が多く、且つ筋肉や神経の発達した所であるから、出産のような生理的なものと異なり、外科的に手術をすれば彼女ならずとも泣き声を挙げるのは当然で、痔の手術の経験のない人には理解はむずかしからう。

彼女はアルコールの方はウイスキーの角ビンを空けるということであるから、手術の麻酔の利きも悪かったであろうし又、長期麻酔の方も余り効かなかったのではなからうか。

本誌にも痔を扱ったものが時にあるが、正統的な痔を扱ったものは殆んど見られず、浣腸ものの患者として扱われているようだ。

このように痔に関しては、その疾病が肛門の内外、すなわち腸の末端に位置しているもので、場所柄とその機能から見、手術前には常に浣腸を徹底に行なうので、浣腸ものとしても見逃がせない材料の一つではある。

尚ついでながら、医師によっては、手術後

は約一週間ぐらい排便を止めるので、腸内膨満の感と、軽い頭痛と発熱を伴う不快感があるのは止むを得ない。この時期になると排泄欲が起こってくる。

この場合の手術後始めての排便は、便所に設けてある金属製の力み棒にしがみつき、それを握り潰さんばかり、七転八倒の思いで脂汗を流して排泄をすることとなり、両手の掌は肉芽だらけとなり、それも血マメになるのが普通である。

幼児も赤ん坊に対しては、それなりの興味を持っていて、母親に「赤ちゃんはどこから来るの」などと質問して若い母親を困らせている場面を良く見かける。

しかし、「このとりがつて来るの」などと返事をしようものなら「ちがうよ、お母ちゃんのポンポンの中で眠っているの、出て来るとお目めあけるの」と病院などで見た掛図を思い出してか、このようなことを言う。

もっともどこから生まれて来るのかなどは良く分っているわけではない。「男の子がいの、女の子がいの」と聞いても「ボク二人もいらなの、赤ちゃんが欲しいの」という程度である。

いろいろと述べて来たが、本誌への「産科もの」に対する私の希望が早く誌上で実現されることを熱望して筆を擱く。

探

奇

考

料

——羽塚隆成師『基督教の淫楽と惨虐』

の紹介、並に西洋式拷問法——

斎 藤 夜 居

性風俗や性科学の資料として、最も珍重さるべき、図譜や図鑑式の出版がある。△絵▽や、近代では△写真▽を主として、それに説明を加えた資料は、事典（辞典）類においても欠かすことはできないものだ。グラフ・絵画・写真は事柄をあらわすのに一目瞭然であって、多くの言葉を必要としないから、昔から訓蒙図彙と云った図書も多かった。例え卑俗だと云われても、江戸時代の艶笑刊行物には「嫁入り道具」の一つに数えられた新婚初夜訓および性生活への手引書（春画）として

の絵入本が行なわれていたものである。特に性行為の態位の説明などは、俗に四十八手などと伝えられ、ずいぶん複雑したものであるから絵で示すことが一番分り易かった。今日ではかえって法律の発達したおかげで、この種の行為の説明のためには不便ばかり多くなっていて、中途半端な刊行物が横行して、欲求不満や苛々を増長しているだけである。そこにつけ込んだ商策的出版は汗牛充棟で数限りがない。

性資料としての図譜図鑑式出版は過去（と

云っても明治以後）においては大抵非公開の秘密出版か、会員頒布の特別資料、学術論文に副えられた専門家の資料……というのが全部で、趣味的出版でも性画を主としたものは地下出版に多く、それも無事に刊行されたものは少なかった。また、図譜物は文章の活字化よりも、製版過程にめんどろがあり、多くの人の目にさらされる危険率も高くて、完成に至らず途中で押収された例も多い。又、軟派出版というのは不況時代に最も盛んだったということとは、好景気の時代には印刷所がそ

んな危い仕事には手を出さないからだ。

従って絵画・写真の性風俗関係の出版は、一般に市販されている不備な点の多い名画集や、浮世絵集を別にして、その数は非常に少ない。また、艶笑・性科学的な文献で正誤表と称して伏字の穴埋めを行ったように、画集などについても、直接購読者には全図写真を密送したりしたこともあったが、扱ってその時代を離れてしまったら、その揃物の完全資料を探すというのは容易なことではない。

そうした意味で、羽塚隆成師が昭和四年二月に刊行した、

『基督教の罪惡と惨忍並に宗教裁判、露骨な



『基督教の淫樂と惨虐』

本文解説書表紙四六判仮装

性の遊戯的芸術に関する、批判と図譜略鈔』

と云う一書は、その発行意図が宗教批判のための書であったとしても、副えられた立証を目的とした欧州各国における性芸術資料図譜三卷二一〇図、特別附録十一図は貴重な性風俗・性科学の資料であった。

著者の羽塚師については、斎藤昌三（少雨莊）は、『あまとりあ』（二ノ十二、昭和27・11）所載の「近世性研究家列伝」第四回に梅原北明・長尾桃郎・清水帰一（了仙寺）、実川延若などと一緒に述べているからご参照ねがいたい。その要点のみ左に記す。

羽塚隆成

明治26年9月名古屋に生る。大谷派本願寺の浄信寺の住職だった。大正八年頃名古屋監獄署の死刑囚専門の教悔師となった。続いて政友会の川口彦二知事時代に、巡査教習所講師として微罪赦放運動につくし、少年審判所の創設に当っては唯一の民間人として参加し、その功績多大なりと時の保護課長から二万円を贈られ、それを基金として外遊、欧州視学の途についた。各国の宗教と反道德的な方面を調査し、上記図書発行を企画した。図譜は日本国内では製版上の難点があるので、予め上海で作って来た



同書、図譜前編ケース一枚々々バラで納っている

のである。その苦心もさること乍ら、用意の点でも万全を期したのである。

製本後は非売品として、全国の神仏各宗派の管長クラス、師範学校、府県警察部並に検事局、等々に宗教の仮面と研究資料として送呈した。一部の住職には猥本と勘ちがいで、告発問題を起したりしたが、調査の結果は無罪となった。勿論、学術書として認められたからである。——この書は、梅原北明の手からも、その知友に分けられた。現存する本書は北明から、竹酔の手を経て来たもの。

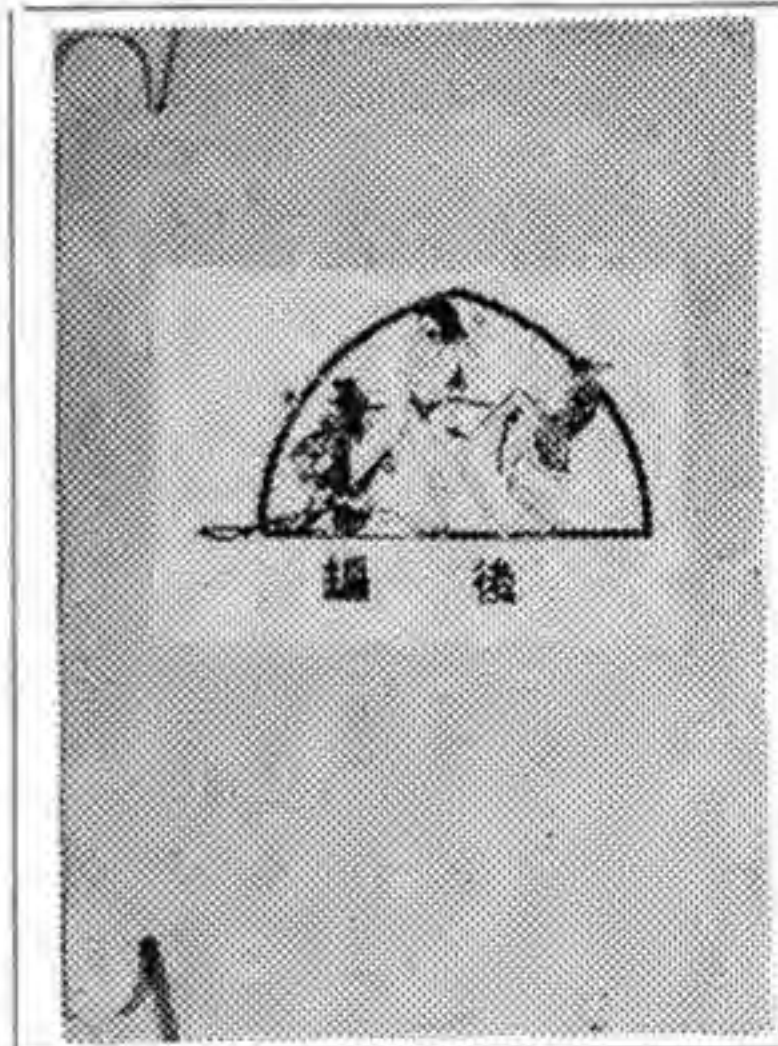
本書は余りにも題名が長いので略して『基督教の淫楽と惨虐』とよばれている。その総序に——論述的詳説を略し、ただ実証として反映的に図鑑・絵巻物・パノラマ式とした、と述べている如く、各図版とその説明とに依って、解説書(一五八頁)、図譜前編、後編特別号(附)と四部一体の書と成っている。図譜内容は、

〔寺院の性彫刻、壁画、宗教裁判、姦淫僧禁慾尼僧の鞭打、性的祭礼行事、寺院売淫貞操帯、獣姦、戦禍と惨虐、ポンペイ壁画希臘神話の性的神像、西洋婦人と犬……等々〕

尚、羽塚隆成氏には、文芸市場社より談奇館随筆第五巻として『ナポリの秘密博物館』ジュール・ラクウル原著の訳本があるが、挿絵はスケッチが数図あるだけ。別刷頒布の写真版は押収されてしまった。この時代の市場社刊行の画集には、バイロスやロップスの秘画集、バルカン戦争の画集などもあった。『基督教の淫楽と惨虐』より「宗教裁判」の項のみ左に紹介する。

宗教裁判はいづれの時代に於ても、王権と共同共謀し、法王権により建設せられたる防

同 書、後 編



禦並に攻撃の一機関にして最も惨忍酷迫を極めた。左に拷問方法の手段並に器具について述べて見よう——と述べ、実に九十数種類の西洋式拷問を解説し、図譜四十点以上を副えている。その方法は次の如くである。

- 被告の片足又は両足を縛って高所に吊り下げる。
- 被告の片手又は両手を縛って吊り上げ、足に大きな重りをつける。
- 女は髪の毛で高所に吊り下げる。
- 両足を縛って吊り下げ、首に巨大な石をつける。
- 被告を十字架に引き懸け、又は逆に頭を下方面になして十字架に釘付けとし、或は被告

の身体に蜜を塗って十字架にかけ、太陽に曝し、蜂や蠅等の小虫にささせる。

○被告の片足を折りまげさせて膝頭に鉄輪を嵌めて固定せしめ、その足首を縛って吊り下げ、他の片足には鉄の重りをつける。

○両手の拇指を縛って吊り下げ、足には重りをつける。

○片足を縛って吊り下げ、その頭の下で火を焚き、数人にて被告の身体を杖にて打つ。

○両足を縛って吊し、鉄鎚でその被告の頭を打ち砕く。

○両手を背中に廻させ縛って、首と足とに重りをつけ天秤吊りとする。

○両手を背中に廻させ縛って吊り下げ、背の上に幾つもの砂袋をのせ、口に猿轡代用に被告の悲痛な叫声のできないように木片等をつつき込む。

○被告の頭の下から楔を打ち込み、それにて吊り下げる。

○大きな輪に被告の身体を縛りつけ、石塊の多い所へ突き転がし、又は車輪に縛りつけてある被告が死ぬまで曝し者とし、或は被告の身体を車輪に縛りつけ廻転させ、その下には鉄の針が植えてあって、被告の身体を無惨に傷けさせ、または鉄針を植えた上

をば被告を縛りつけた車輪を引き廻し致死せしめる。

○軸の固定した輪に被告を縛りつけ、その下にて火を焚いて廻転させる。

○地に打ち込みたる杖に両手を縛り、更に両足を滑車に結びつけて被告の身体を引きのばす。

○圧縮台に被告を入れ、砂糖汁や植物性油を絞り採るように、絞る。

○大石を被告の身体の上にのせ押しつぶす。

○被告を滑車で釣り上げ、下に尖った石を沢山ならべ其上に急に落す。

○木台の上に被告を横たへさせ滑車等を用い

て、その身体を引き延ばす。

○地に打ち込んだ杖に両手を拡げて縛り、杖にて打つ。

○両の手足を別々に細紐を以って縛り、数人して四方に烈しく引く。

○多くの被告を柱に縛りつけ足蹴りにしたり拳や石で顔腮等を死ぬまで殴りつける。

○鉄の尖った数百本の杖の上に被告を横たへさせ、その上から杖にて打ち、又は両手足を縛り、苦痛を強烈ならしめ、無惨にも棒にて強く殴る。

○木製のわくに両の手足を縛り松明で焼き苦しめる。

○滑車にて頭を下に吊り下げた被告を松明で火責にする。

○焼けた陶器の上へころがす。

○煮え油を注ぎかける。

○肉炙器の上で被告の生き身を焼く。

○煮沸せる鉛や油の釜へ、被告を頭から突き込む。

○鉄鍋へ入れて炙り殺す。

○煮沸せる熱湯鍋の中へ投げ込む。

○頭や手足を切断して鍋で煮る。

○牛型鉄製の腹中に入れて焼き殺す。

○鉄棚の上に横たえさせて下より火を焚く。

○鉄の衣服を着せ焼けた鉄靴を履かせる。

○鉄の椅子に縛りつけ焼けた鉄の帽子をかむらせる。

○松明で眼を焼きつぶす。

○腋下に焼けた鉄をあてる。

○焼けた炭の上に寝させる。

○煮え松脂をあびせる。

○焼けた炭の上を歩行させ、頭上から煮え溶けた松脂や鉛を注ぎかぶせる。

○燃料満載の船に被告をのせ火をつけて海に流す。

○燃焼大竈に投げ込む。

○大樽に被告を入れて火をつける。

○一室に被告を閉じ込め火をつける。

○火焰台の上にのせて被告を焼き殺す。

○四本の杖に被告の四肢を縛り其下から火をつける。

○杖に縛りつけ被告を焼き殺す。

○焼炭が充塞せる穴へ被告を投げ込む。

○子供達に刃物を持たせ被告をなぶり殺しにする。

○斧で四肢を切断する。

○咽喉へ短刀を突き貫す。

○矢で被告を射殺す。

○被告の頭を斧で打ち砕く。



特 別 号

同書、特別号。これには
珍奇写真が多い

- 刀で被告の首を切る。
 - 槍で突き殺す。
 - キリを被告の脇腹にもみ込む。
 - 短剣で一撃す。
 - 被告の背中に釘を打ち込む。
 - 被告を棒で殴る。
 - 鋸引きにする。
 - 被告の舌を切り取る。
 - 被告の歯を抜く。
 - 女は乳房を切り取る。
 - 顔、或いは総身の生皮を剥ぐ。
 - 被告の股を裂く。
 - 被告の手足の爪の間にキリを突きさす。
 - 香と炭とを混ぜて掌にのせ、これに火をつけ、被告が苦しみの余りその香炭を落す時は、改宗者と認められる。等々。
- 著者の羽塚師は、表紙（書影）にも示した意図のもとに、未知不解のままの多くの日本人たちが、紅毛崇拜におちいらないようにとの極端なる考えから、この書を編纂されたものであって、刑罪のみならず肉慾の点においても、叙上の観点からだけで、欧州人の野獸性を立証することの試みは、甚だあぶない議論ではあったが、図録として示した為に、宗教家の間よりも、むしろ美術史家や性美術・

〔伝言板〕○分譲品目録は作成が大変遅れておりますが予約お申し込み下さった方には出来次第間違いなく発送申し上げます。○分譲品のお申し込みは大阪阿倍野郵便局私書箱第14号箕田京二宛に願います。○従来本誌上に広告してありました代理部分譲品はここ二年乃至三年ぐらい以前のもものは在庫

しておりますから未入手の方はお申し込み下さい。○尚御注文はすべて△略号▽にてお願いいたします。○切手代用にての御送金も結構ですが高額切手や紙に貼りつけたものはお断りいたします。○本誌旧号の在庫は漸次減少しておりますから、御希望の方はお早目にお願ひします。第二希望品がございましたら、お書き添え下されば幸いです。

風俗研究家に珍重され、更にこの書は珍書屋や風俗雑誌の出版屋に特によろこばれ、多くの恩恵を与えた。これから転写された画譜は当時から戦後にいたるまで様々なかたちで利用されて来ている。羽塚師が特に云いたかった説は、分り易く言う、西洋人は悪のみならず（その善とする点においても）、人生をエンジョイする思想がじつに強烈で、個人享樂主義に加えて、人を殺し、性をたのしむ点でも、技巧上手である——ということとは、娛しみを長びかす術に長じているということでは、それは彼等は露骨に本能を意のままに発揮するからだ、と。仏教徒としての本然の資質が西洋欧州の思想を、その本質をからだで感じ取って来たのである。

然し、羽塚師はユーモアの人でもあって、本書中には次のようなおもしろいコントをも伝えている。

師がある時、フランスの娼婦に、
「貴女よ。あなたの接した男性と国籍別と回数はいくつ多いでしょう？」と問うたところ、その女は問いには応えず、
「先生はどちらから来たの……」
と、その返事としては、余りにも突拍子ではあったが、
「シベリヤ經由の汽車だったよ」
「そお」とうなづくと、そのパリの娼婦は、
我が意を得たりとばかり、
「わたしがね、今迄に接した国籍別と回数は若し殿方たちの珍宝の数を継ぎ合わしたら、先生が乗って来たシベリヤ鉄道のレールと同じ程の長さになるでしょう」
と、答えたという。交合を数ではなくて、距離で表わしたのである。愉快な話ではないか。



奇クと共にここ三年

堀

夏

彦

夏彦雑感(その一) (昭和四十一年)

昨年夏、「夏彦蛇行録」でさんざん勝手な
 啖呵を切っておきながら、約一年全くダンマ
 リをきめこんだが、最近の奇クに我意を得た
 嬉しさに思わずペンを執る次第。

今年も漸く秋色を深め、この深更、降るよ
 うな虫の音に耳を傾け乍ら、又勝手なたわご
 とを、穴ごもりの前にくどくど。

さて最近の奇クに我意を得たということだ
 が、一言で云えば一年前に夏彦の願った傾向
 に充実してきたということ。変にもってまわ
 った理屈や高踏的な評論が減り、ぼつぼつ新
 人の飾り気のない告白や創作が徐々に増えて
 きている。特にここ二、三カ月の奇クにはこ

の傾向が顕著である。

十一月号で鬼六旦那が、全くピッタリ吾が
 心境を云っている。彼は何とも云ってないが
 「俺の蛇行録」読んでもの当時、同感の意を
 表していたに違いない。これは思い上がりかも
 知れんが、兎に角同志を得たつもりになった
 俺は、大いに意を強くし、やたら嬉しくなっ
 てペンを動かした始めた——あーあ、俺も単純
 な男だよね。

特に俺を感動させたのは、彼が「花と蛇」
 を書くときの心境だ。何もかも知り合ったM
 子と別れ、欲求不満が彼を刺戟して一気にあ
 の華麗な責め場を描かせる。そして彼の欲情
 している、所謂、交尾期が最も充実し、悪魔
 的になった時であり、芸癡を高めて一気にペ

ンを走らせる。その気持解るな。一介の読書
 子である夏彦でも解るのだから、所謂奇ク作
 者諸氏はいたずらに批判などに走らずに、大
 いに彼を激励し再び(もうそろそろ店じまい
 にかかろうか)などと弱気を起させないで欲
 しいものだ。

だが鬼六旦那も今月号の静子の責め、——
 ニカ所責め、三ところ責め、いやそれ以上か
 かも知れない。正にクライマックスとも云え
 そうだが、最後の火花かとヒヤヒヤする。ど
 うか長続きするようじっくり願いますよ。

× × ×

今枕頭にある十一月号だけについて云えば
 最高調の「花と蛇」について「痴人の糧」が
 圧巻だ。それにここ二カ月ばかり島田啓子の

浣腸体験記がのっているが、これは素直でいい。

彼女の旦那様、何てしあわせな奴だろう。

若い御夫婦らしいが、夏彦など四十をこしたし、長いつきあいでありながら、まだ手前の女房をすら充分に飼育できないで、手こずっているというのに――

辻村旦那も、益々おさかんで何よりです。

もうあの位、有名人になり、その道に徹し切ると羨ましいより畏敬の念を禁じ得ない。

これからもぞくぞくとハントして我々を楽しませていただきたい。ただクリスター実施記が今のところ増田夫婦を最後に途絶えているように記憶している。『可愛い小悪魔の群れ』のマスミとは相当発展させているらしいがこの辺で一つ我々マニアの意を満していただけぬものか？ マスミとの一夜綺麗事ではすまなかったと今月号に告白しておられるがどうもビール壺の使用法が気になる。まあ俺なりに想像を逞ましくしているが――

夏彦雑感(その二)

前の原稿書き放しておいたらもう十二月号が手に入る季節になってしまった。

辻村氏が今月号で持望久しいクリスター実

施記をユリコ君において発表してくれた。それはいいが他人事乍ら彼女自身のカメラに凄けになるだろうといっているのは、本当に惜しいね。尤も彼には少しドライの要求が重荷になってきているらしいが……。心憎いプレイボーイぶりだ。同じ男性の一人として益々羨望と尊敬の念を禁じ得ない。マイリマシタ。

前月号あたりの充実ぶりに嬉しくなって筆を執ったが、十二月号は本年の掉尾を飾る傑作揃いだ。『花と蛇』――大丈夫かなと心配になるほど最高の場面の連続――全く耽美の極致だ。心から色々な意味で少しでも長続きするよう祈る。『痴人の糧』にも同じことが云えるが、これはまだまだこれからという感じで山本氏一層の健筆を期待している。又前から私が望んでいた新人の告白手記が増えて真に心楽しい。特に三木氏の『女性の羞恥願望を衝く』や少し夏彦好みではないけれど、『バラの刑罰』なんか実感がもっていて良かった。その他『生尿』では芳野氏あたり大いに気を良くしてニタニタであろうし、『女アソビ』のプレイでは大方のM諸氏は御満悦だろう。橘氏ではないが十二月号こそ正に百

花撩乱といっている。

夏彦雑感(その三) (昭和四十二年)

前の原稿送れないでいる内に又、年が交ってしまった。二年前に勝手な事を云ったまますっかり御無沙汰した勘定になるが、一号も欠かさず、それこそ子供の頃少年倶楽部の発行をまちかねるような気持で、二十六日か七日に書店へ行っていたんです。

でも言訳じみるが、この頃満足してるから文句の種がないんですよ。又編集の仕方がダレたらオールドファンとして、又奇クを生きる支えとして一読者として、ズバズバ云わしてもらいますよ。

夏彦雑感(その四) (昭和四十二年)

今、七月二十八日、明け方、午前三時、夏彦は一昨日入手した九月号を一気に読了。

枕頭に今年の四月号と七、八、九月の四冊をおいて感慨にひたっている。ここ数カ月の中ではクリスマニアである夏彦にとって一番印象に残ったのは四月号、特に秋根氏の「狭き門」は強くイメージが残った。やはり或る年齢の到達した円熟した人間味と、豊かな体験のみがあのように充実した飼育を可能にし

文章を生かしたのだと思う。今でも繰返し読み、夏彦の生き方の糧にし、可能性を信じて夢みていられる。まだ俺も四十代そこそこ、きつと二つや三つ、そんな対象が現れるにちがいないと。この号には立川令子氏の「浣腸実験要員誕生」があつてこれもほほえましく読んだ。

× × ×

七、八月号に秋山夫妻の残酷ショーがとりあげられている。実は夏彦もこの三月頃千葉県松戸のM(明星)劇場でこれを見て相当ショックを感じ、詳しくルポを書きたいと思つてゐる内に、辻村氏に八月号に麗筆で紹介されてしまった。

関東と関西と離れていても同好の道は案外近いという実感が湧いた。でも始めて見たときは、近頃では少しのことでは感じない小生も、二晩位、ローズ秋山の縛られ経過や姿態の一つ一つが現われ順を追つて記憶を反覆してまとめるほど、興奮させられた。最初あの狭い小屋に入ったとき、超満員の観客の頭越しに、女の呻き声がしていたのでまずドキドキときた。つまさきだつてのぞきこむと夏彦好みのやせ型の美女が舞台中央にこれも夏彦好みの姿態——俯伏せで片足に縄をからま

れピンクピンクとうごめいている。しかも腰に赤いツンパ一つの姿で——。

もう少し早く入れればよかったと思い、それ以後のストリップ嬢のたいくつな特出ショーこれも婦人科的、露出そのもので初めは興味があつたが——を異常な忍耐力でこらえ、その間に人の波にのつて一步一步舞台の袖に近づいていった。やっと秋山夫妻のショーの始まる頃、夏彦は立見席の最前列にでることができた。しかもローズ秋山が俯伏せにころがされる足元の方にある。俺の動悸が早くなる。こうしてこの時二回、それから一人で又二回見にいった。その後関西で彼等のショーを見たという、読者の短い画入りの紹介があつたが、六月には好評に応えてか又松戸のM劇場にかかった。この時も夏彦は二度見にいった。莫迦々々しいとは思ひながら、経過は同じでも又演技とは承味しつつも、何か迫真の熱演の中に例えばローズ秋山の呻き声一つにも足のもだえにしても見る回毎に微妙なニュアンスに富み、夏彦はその価値を高く評価したが故にである。箕田編集長、辻村氏のフオート及び麗筆で八月号に詳細が載せられ“見る目は同じ”と少なからず近親感を感じると共に、夏彦はわずかに先に見られたことを幸

せに思ったものだ。

このところ夏彦、蛇行癖が烈しくなり、方々に出歩く。カジバシ座にも行ったが、秋山夫妻のショーには歯がたたない。ただ八月三日より五日までイイノホールで金ぺい梅その他の再演が劇団「赤と黒」によって行なわれる由。又押上のS(昌和)ミュージックホールに一昨日の夜行ってみた。尼さんをいたぶる劇、本当にキッスをしたり、乳首を吸ったり程度だ。ただ夜光塗料をぬった女を黒人が鞭でいたぶり冒す踊りがあつたが、型だけ。しかし想像に余韻をのこす踊りであつた。この時の出演のストリップ嬢の顔ぶれは若さと美しさでは皆つぶよりであつたのはみつけもどつた。

又七月末まで船橋のW劇場(若松)で女子プロレスと小人の試合がかかっている。前にも——たしか去年の暮——かかったが、女斗美ファンでもある夏彦には見のがせないの深夜でも又でかけて見るつもりだ。

九月号の所感をかくつもりが脱線したようだ。とに角、今年の奇クは今の所、前述のように「充実」八五%満足というところか。

夏彦雑感 (その五)

○盛夏二十七日十月号読了。続けて三度読んだ記事がある。勿論辻村ダナのハント——「甘い羞恥」。遂にやってくれた。長い間、待ち望んだ、クリスマニアの夢をかなえてくれた。大島さんと云う好モデルの協力があつたとは云え、三回に亘って実施したと云うのだから氏の読者へのサービスというより、彼自身の燃焼と執念を感じた。特に二回目辻村氏一人で大島さんとプレイしたときの模様は強烈に脳裡に焼き付いた。掲載のフォトは三回目分譲フォト用のものと思われるが、その一枚に三面鏡用の丸椅子に腹ばいにさせられたのがあり、夏彦の何回も体験した好みのポーズで感慨深かった。

○中河恵子氏の「あすなろうの道」着実に成長している彼女、今後が楽しみだ。羞恥責に憧れ静子を空想する中河さん——今度は彼女のクリスハントを辻村氏に願いたいものだ。

○一昨日、思いきって俺の恥かしい告白「背信の記」を送付した。長い間の彼女との葛藤を、厚い手紙の束と、俺自身の苦しさを綴ったノート六冊からまとめるのに苦しんだ。途中いやになって半年近くも放って置いたが、俺の短いかも知れぬ人生を考え、思いなおして兎に角まとめた。未完のままだが。

○これで俺は大した秘密もなくなった。アブにしても大したものではないことを自認する。これからは素直な気持ちで余命を大切に仕事にも全力でぶつかりたい。又すでにどうしようもない俺のもう一面の性癖もできるだけ探究していきたいと思う。

○茶の間で晩酌のビールを楽しんでいるところへ「パパ郵便！」と下の娘が大封筒をもってきた。何気なく裏を見ると編集長の名、ドキッとしたが何気なく手許におく。没になったが労に報いて十一月号寄贈かと心にきめたが何となく落着かず、そっと書斎に入って開封、目次を見ると久しぶりに夏彦の名がのっている。ありふれた体験なので入選するのは本当に思っていないだけに嬉しかった。

○いつも楽しみにしている「ハント」と「ルポ」だがこの号では山本氏のフォトの方に魅かれた。左近麻里子さんの美しい軀の線、特に背面が素晴らしい。

夏彦雑感(その六)(昭和四十三年)

又年が変って昭和四十三年も六月になってしまった。「雑感」没を承知で送ろう送ろうと思ひながら、仕事の忙しさと無精から今年も夏を迎えてしまう。例によって深夜、六月

号と七月号を枕頭に並べてあれこれ妄想を逞しくしている内に、何かたまらなく吐出した欲求に駆られて兎に角ペンを執る。これも又私流の発散法なんだから仕方ない。去年の十一月号に久しぶりに投稿した告白「背信の記」を入選作として発展していただいてから約半年、穴ごもりしてしまった。しかし月末だけは必ず浅草で奇クを求め、じつくりと諸兄の活躍ぶりを伺っていたんだ。

○ここ半年では六月号が夏彦には楽しめた。特にいまさら云うのも恥ずかしいようだが辻村旦那の「ケメ子早春譜」と一章さんの「谷山久美子の巻」のルポ記事とフォト、クリスとアヌスにはグッと参った。ケメ子氏といい久美子氏といい夏彦好みの魅だしMの気もあるようだがルポ記事のみによると久美子氏の方がその気が強いようだ。

○「その後の奴隷妻」の山本氏のつりには正に驚き入ったが、夏彦にはN。4鎖にしめつけられた奥さんの可憐なヒップのフォトが素晴らしい。

○城山ほずみさんの呼びかけの勇敢さ！どうです——「ハンサムで逞ましい男性の方プレイしませんか」という呼びかけの裏に「若くて」という言葉がかくれているのは当たり前だ

と思うが関東の不良オジサマを自認する小生では——辻村旦那ほどの不良性はなく、文才もなく、フォートの技術もないが——小生の告白物を全部読んで予選に通過したら改めて呼びかけて下さいな。

○「私の夢」の婚期をすぎ財産有の園部さんSMの二面性をもっておられるようだが、夢の夫がみつかる前に四十男とスマートに見たり聞いたり試したりいたしませんか。気が多いようだが、夏彦の終焉までに夢ももう一度という切実な願いかな。

× × ×

六月四日朝、久しぶりに電車で出勤し、何気なく駅であるスポーツ新聞を買って映画演劇案内欄に目を通したら「残酷ショー」秋山夫妻と細かい活字を発見。何回か昨年一昨年見てまわった記憶が鮮明に甦えり、一人コッソリ墨田の昌和ミュージックまで足をのばす。

特出しは松戸の方が派手にやるが、それでも割と可愛い娘が四、五人踊った後、寸時幕がおりて例のハーレムノックタウンが聞えてくると場内のライトは暗くなる。そんなにこんではないなかったが、恥も外聞もなく、カブリツキのローズ秋山が足をのばすのであろう方に陣取る。ローズが独りもだえ、俯伏せに足

を開いて揺れるヒップを見たときその双丘に無数の黒い斑点をみつけた。二年以上も毎日二回以上公演の度のローソクによる傷跡か？それに以前はツンパをつけていたが、前だけわずかに蔽っている上を通して、細い紐が二本に分かれ、それぞれの白い丘をグッと引きしばっている。即ち双丘の辺りは何も蔽われていない。夏彦の陣取った場所は最高。憧れのものが覗けるかと目を凝らしたが、照明の見合とローズの足を開いていてもヒップの筋肉の巧みな締め方でダメ。秋山登場、その後の進行は全く交らないがその迫真の演技に観客は水を打ったようにシーン。奇クなどを通して有名になったせいかかつてのように弥次一つとばなかった。一つ気になったのはローズの左のわきの下に赤い五センチばかりの傷がみられたこと。舞台での演技では縄のかからぬ部分だけに夫妻の生活に想像をはしらせた。余り無理しないよう。一言多いぞ！なるほど夏彦も下町育ちだよな——。

夏彦雑感 (その七)

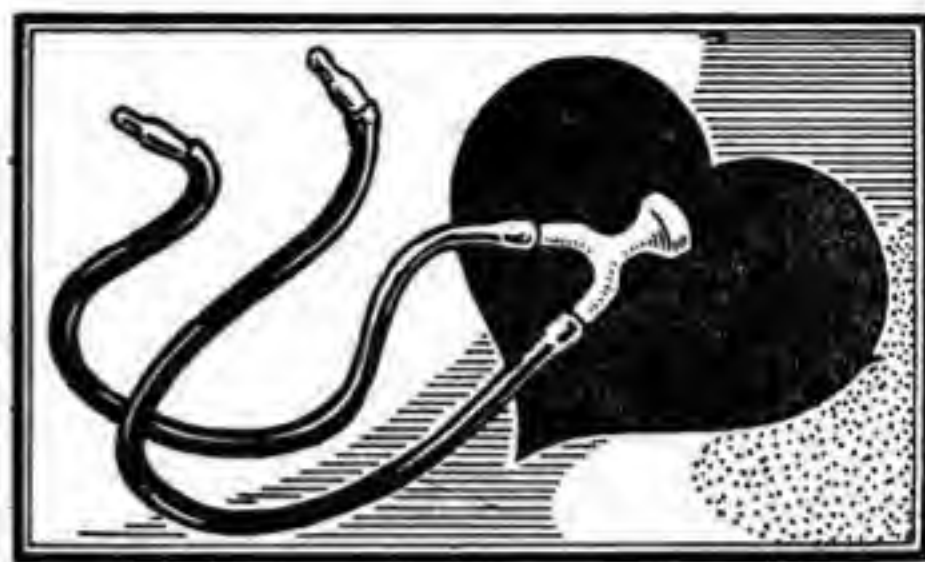
○六月号に田中八郎さんが「愛する奇クよどこへいく」で大いに奇クの在り方、行き方を憂えておられた。夏彦も、根本では同感だ。四十年頃の奇クの編集が少し評論や理屈が多

くなり、小生も「夏彦蛇行録」で貴君と同じようなことを云ったおぼえがある。常連という言葉を多く使用したので芳野、氏夜野氏、橘氏あたりからズバリ、又はチクリ。一年に一度や二度云いたいことをいってハッとして穴にとじこもる奴がいるというようなことが誰かに書かれたっけ。それでも、夏彦の気持は毛頭痛痒を感じない。田中氏と同じ純粋な憂え心からのことだから——。

しかし、今考えると少し大人気なかったと思うことがあるし、理屈をぬいてあの人たちも奇クの存続する養分にはなっていたと思うし、全然名を見ないと淋しい気もする。芳野氏一人は健在だが——

たまには田中氏のように喝！とやる人もあっていいと思う。しかし彼も少し調子にのりすぎてカメラ・ハントやルポ、夫婦プレイまでこきおろしていたが少し勇み足の感じ。だから七月号で三木氏のような反論もでる。独善なんて云われる。田中氏よ、三木氏よ、そして常連？ 諸氏よ、理屈はいいんだ。兎に角おもしろい。奇クの蛇取りをたのみますぞ！

○芳野眉美さん——浅草のバーを経営されているとか。小生も戦災以来、所謂ベッドタウンに住居を構えたが遊ぶときは浅草が一番いい男、一度面会を乞う。



S・C・R 性問題相談室 回答欄

「浣腸マニアの悩みについて」

医学博士 弓削達人

はじめに

現在までに十数通のご質問をお寄せ戴きましたが、紙数の都合もありますので、なるべく多くの方のご参考になると思われるものを選んで回答致します。他のものにつきましては、自宅宛を希望しておられる方は自宅へ、そうでない方々は、誌面の許される限り、順次、誌上回答をして参りましょう。尚、質問をされる方は性別、年令、結婚、職業を明記して下さい。

質問要旨 (29才、男性、独身、会社員)

私は小学校の頃より、大柄の女性から体をきつとりあつかわれながら浣腸をしてもらうところを空想していました。この空想を實行に移したのは24才の時、就職してアパートに住むようになってからです。しかし女性からして貰ったのではなくて、約5年間いつも自分で自分自身に浣腸したのです。現在では週に一回位、グリセリン液を20CCのガラス製浣腸器で10回ぐらい、約200CC注入しています。量も少ないのに浣腸したあとで少量の出血があります。未だ女性からしてもらったことはなく、そのような女性を求める気持ちもありますが、現在、結婚話が持ちあが

っており、これを機会にやめようかとも考えています。私のような浣腸マニアは、どうしてできるのでしょうか。また結婚したらなおるでしょうか。治療法はないものでしょうか。

回答

性的な問題のある人、あるいは自分自身でなんでもないことを性的異常だと思いこんでいる人が、それについて真剣に悩み始めるのは、多くの場合、結婚という問題に迫られてからのように思われます。私たちの処へ治療の相談にみえる方も、結婚問題解決がその動機になっていることが多いようです。

あなたの場合も、恐らくはここ5年間というものは、多少の悩みはあったでしょうけれども、まずまず浣腸マニアの生活を、それなりにたのしんでいられたものと思います。

それだけに、^{よい}30になろうとしている現在に於て、結婚問題の解決を急速に迫られるようになったあなたの困惑は、よく理解できるつもりです。まじめな男性であるあなたの立場。よい縁談を次々に持ちこんでくる好意あるあなたの身内の方の立場。恐らくは未だ童貞であるであろうあなたの、女性に対する憧憬と恐怖。これからの人生に対する設計と、その設計の中に未確定要素として入りこんでくる、浣腸マニアとしての性癖。

これらから来る困惑は、決してあなただけの悩みでなく、多少なりとも性的な遅れを持つ人に共通する悩みであります。

それではあなたの質問について、一般的なことと、あなたの場合についてのことをお書き下さい。尚、この回答に対してあなたが更に疑問をもたれましたら、遠慮なく何回でも質問して下さい。しかしその際、誌上では他の人への回答が待ち受けていますので、なるべくなら個人回答の方がよいと思います。

○

(1) あなたが浣腸マニアになったのは、なんらかの理由によって、性感が肛門部に固着したものと考えられます。(どのような理由から、なぜにそうなったかということは、更に高度の分析をせねばならず、お手紙の内容だけでは判断することができません)

(2) ではなぜに肛門部に固着するかということとは、最も一般的な分析的説明をすれば、次のようになります。

人間は生れおちた時は、最初全身が性感帯となつていますが漸次分化を遂げ、口唇期より肛門期を経て性器に統合されるものです。統合されたのちも、口唇部、肛門部、眼裂など皮膚より粘膜に移行する部分は生殖的にはなんの関係ありませんが、強い性感を備えたところとなつて残ることになります。

この性的発達の各段階において(1)無意識的な性的外傷、例えば記憶に残らない幼児期に受けた具体的な性的外傷(老人よりの性的ないたずら)あるいは、より象徴的な性的外傷(両親の性行為を目撃すること)を受けたり、(2)もっと成人してはつきりと意識している性的な外傷を受けたとき、例えば青少年期に年長の男性より受身の同性愛を強い

られるとか、看護婦より浣腸を受けた時に快感を感じたとかいった外傷を受けると、その受けた時期、即ちこの場合は肛門期に性的発達が滞ったり、あるいは一度発達した性的成熟度がその時期、たとえば肛門性感の時期まで退行したりし始めるのです。

そしてこの部に性感が固着し、浣腸などを繰り返すために、性的快感と浣腸刺激がいよいよ密接に結びつき、その部分の条件反射が強化され一つの『性癖』として確立してしまふわけがあります。

(3) ではその『性癖』が結婚によって、完全に治癒するものでしょうか。ハッキリお答えした方がよいと思いますので卒直に申し上げます。『完全』に『治癒』するということはまずないように思われます。しかし結婚することによって、一般的なリビドーが充足されるために、浣腸に対する強迫的な欲望が低下することはあるようです。また一時、全くその性癖がかけをひそめてしまった方もありました。しかし『結婚』によって『完全治癒』を望むことは、まず無理のようです。

(4) それでは、この性癖の医学的な治療とはいえば、残念ながら、あなたのいわれるように、入院してでもよいからという熱意にもか

かわらず、内服薬、注射、電気などによる物理療法といった、いわゆる『医療』による、『確実』な治療法というものはありません。

しかしながら精神分析療法などの方法（これも勿論医療の新しい手技であります）で随分と軽快された方はたくさんいらっしゃいます。けれども、このためには、必ずしも入院の必要はありませんが、根気強い通院が必要となります。

性的な癖は仲々になおりにくいものですがこの浣腸マニアというのは、特に治療しにくいものです。しかし、性的な癖はすべて治療不可能であると思いきいんでおられる方が、非常に多くありますけれども、その種類によっては、精神分析的な手法、あるいは神経生理学的な手法で、わりあい簡単に治癒するものです。そして幸福な結婚を得て平和な家庭を築いておられる方も多いものです。

(5) 次に、浣腸マニアに限らず、自分の性的な癖のために悩んでおられる方に対して、私は次のように申し上げたい。

第一に、それがどのような性癖であろうとも、そのような性的傾向は程度の差こそあれ誰にでもあるものだということ。

次に、あなたと同じ性癖を持っている人、

あるいはそれによって、あなたと同じように悩んでいる人は多いものだということ。

そして、あなたがそのような性癖のトリコになったのは、ある意味では極めて慢性的の胃カイヨウに罹病したと同じことで、そのこと自体には道徳的な非難を加えられるべきなものでもないではないか、ということ。即ち、それ自体が、ある意味では極めて慢性的の、そして極めて軽度の身体的疾患にかかったのと同じことだということです。

従って——これが結論ですけれど——自身を道徳的に非難したり、罪悪感を感じたりすることは全く不要なことだということでもあります。（誰が、胃カイヨウになった自分に道徳的な非難を加えましょうか！）先ず、その劣等感を捨てなさい。

(6) 最後に、医師の立場より浣腸をする際の注意を書いておきましょう。

A、嘴管挿入について——嘴管（しかん）は医療用のきまつた形のものを使用すること。ガラス管、金属パイプをブツ切りにしたものの方を好まれる方が多くありますが、これは傷つきやすい肛門部を損傷することが多いので止したほうがよい。肛門部は出血しやすいし、後述の副作用も考えられる。

嘴管と肛門部に、あらかじめ浣腸液を塗付しておくこと。また直腸は約5センチの間、後方下より前上方に向っているから、オヘソを狙う感じでそ入すると簡単に入る。つかえた時は無理をせず、軽く回転させるか、一度後方に引いて改めて静かにそ入すること。絶対に無理をしないこと。毎回出血する人は医療を受けること。

B、浣腸液について——種類としてはセッケン液（セッケン30gに水500g）が一番よい。グリセリン（グリセリン100gに水100g）は脱水作用があるために、少し刺激が強すぎる。その外にタケダ薬品よりドナソルが販売されているし、生理的食塩水（水1000gに食塩8g）純正ゴマ油、ヒマシ油、（10〜100g）も使用されているが、余り奇を好まずに、セッケン液でいどが無難である。

温度は微温湯（25〜30度C）体温（30〜35度C）とすること。余り冷たかったり熱かったりするとショック状態になることがある。量はセッケン液で500CCが適当で、せいぜい1000CCにとどめるがよい。グリセリンでは1500CC、ゴマ油などで1000CCぐらいが無難である。勿論、解剖学的に

は、直腸及び直腸洞といった空間があるし、上行、横行、下行及びS状結腸の部分だけで4000~5000CCの容量はある。しかし、大量の液体を注入すると腸^{カントン}嵌頓、腸^{ジューセキ}重積などを生ずることがあるから、避けた方が無難である。(誌上発表の体験談の中には、徐々に慣らして行った例が多く、中には医学的にみて首をかしげさせられるものもあるから初心者には事故防止の見地からも十分慎重にされたがよいと思う)

C、注入速度Ⅱ量が多くなればなる程徐々にすること。1分間の注入速度を書いても仲々標準とはなし難いので、無理をせずに徐々にという気持を忘れないこと。イルリガートルを使用するときは、普通その高さは液^{カントン}上面までの高さが70~100cmである。

また余り長く排便をこらえていると、寒気を生じ、場合によっては発熱、ショック状態(実例2例あり)になることもある。

D、副作用Ⅱ参考迄に書いておきます。

① 秘結——浣腸を余りにしばしばしているとそれが習慣になり、浣腸しなければ排便しないということが生ずる場合があります。従って毎朝の排便は排便として便通をととのえ、浣腸はプレイとして行うようにしたほう

がよろしい。

② 急性下痢症——逆に浣腸したために、激しい下痢をすることがあります。これは物理的な刺激のために急性の腸カタルが生じたわけです。直ちに医療を受けて下さい。

③ 出血——浣腸の直後に少量の鮮血の出血をみることがあります。これは肛門周辺が傷つけられたわけですから、挿入する時に注意して下さい。放っておいてもかまいませんが——不潔な局所であるにかかわらず、感染し化膿することは稀なものです——余りしばしば出血するときは医療をうけて下さい。もし黒褐色のタール様の出血があるようでしたら、浣腸とは無関係に重大な余病があると考えられますので、直ちに内科に行き精密検査を受けて下さい。

④ 痔疾患——浣腸マニアで痔のわるい人は少くありません。いわゆる脱肛、キレ痔が多いようです。脱肛は異物挿入などによるものですが、キレ痔は浣腸による下痢便のためです。下痢便で傷がつくとは一見おかしいようですが、実は固い便よりも下痢便のほうが、肛門がひどく傷つけられることが多いのです。その理由は、大便の中には魚の小骨や小石などが想像以上にたくさん入っている

のです。それが水様便と一緒に激しい勢いで排便されるので、柔い肛門部にヒキカキ傷ができるわけで、これより出血したり、痔疾にまで発展したりするのです。

⑤ ガン——浣腸によって(マニアックに浣腸を繰り返すことによって)ガンが生ずるかどうかが、ということは一寸判断に苦しみまします。はっきりガン発生のおそれがあるとは云えませんが、それを全く否定することも出来ません。従ってマニアの方で肛門部に異常を感じたならば、直ちに肛門科により精密検査を受けられることをおすすめします。

⑥ 医療を受ける上での注意——医療を受けるときは、浣腸マニアであることを羞しげらずにうちあけることです。そうしないと、精密検査の重大な参考資料が欠けることになります。医師は多くの場合、人生上のいろいろなことを見聞しており、多忙でもあり、皆さんが羞しがられるようなことに興味は示さないものです。また医師に話しをするときも、秘結しがちなので浣腸していたらクセになった、といえはよいのであって、それによって性的快感を得ているというような説明は全く不要なわけです。必要にしても、最少限の説明でよいわけなのです。

懸賞入選作品

(五回分割連載最終回)

創作

理 恵 女 献 身



《りえ女、仕置きの準備として

齒を抜かれ、城下の街に於て

引廻し、晒刑の上、串刺しの

極刑にて最期を遂ぐるのこと》

沢 潟 し の

まったく、あんなに困ったことはありません。なにしろ恥かし盛りの十四、五のこと、その上、娘から女になって間なしだったから、真赤になってベソをかいていた。

あたしは他所の子供と違って、特に五つ六つの時分から御奉公に上る仕つけを受け、女中のつとめだけではなく、おそばに侍る女としての心得まで、七つ八つの子供心に教え

こまれて、ちゃんと覚悟をきめて上ったのだし、いやと言えない身分なのだから、仕方なしに右腰に手を廻して提帯の打ち紐をとき始めると、面白そうに見ていらっしやった殿様は、囲りの女たちに「手伝ってつかわせ」と仰せられるものだから、皆面白がって寄ってたかって、たちまち裸にされ足袋までとり上げられてしまった。

見物していらっしやった殿様は、身も世もあらぬ思いで小さくなっているあたしの様子をご覧になり、

「いくら涼しいのがよいとて、丸裸では恥かしかろう。つけ帯だけ結んでいるがよい」と仰せられたので、素肌のお腹に二寸五分

の提帯だけ締めて過ごした。

十月の中頃になって、

「もう、そろそろ着ても暑くもあるまい」と仰せられて、着物の着用を許されるまで半年近く素肌で過ごしたけれど、九月になると寒くて困ったつけ。

なにしろ、御錠で提帯の外は一糸もまとうべからずと仰せつけられたのだから、局部屋へもご老女が見えて、簞笥や長持には全部、封印をつけられてしまい、局で休む時も裸でふとんにもぐっていたし、一番困ったのは月水の始末だった。ご老女に相談したら紙ならばよいと言われるので、仕方なく杉原紙を丁寧にもんで柔らかくしたのを、外に見えないぐらいに使ってはいったけど、家来たちは工合が悪いらしく、とるときには苦勞していたし、あたし自身だって何となく工合が悪いので、月事の間はなるべく部屋にこもっていた。

もっとも、あれ以来、薄着に慣れて、冬でも重ね着することがなくなつた。それに、人に肌を見られることにも慣れたのが、今になつて役に立つとは思いませんでした。

遊芸も、このお城にいた頃はいろいろやらされたけど、江戸に上ってから御錠で謡ばかりさせられた。あたしは女の謡というものはあんまりいただけないと思つていたけれども「りえは別式だから、遊芸も男芸をいた

せ」と仰せられて、習っている中にだんだん面白くなって、ついこの間まで続けていたのだから不思議です。普通のお琴や江戸長歌なら、とくに名取りにでもなつていたでしょう。

さて何から始めようかしらと考えてもなかなか思いつかない。こんな不浄な場面で、不浄者があんまりお目出たいものをするのも気がひけるし、それかといつて、「錦戸や籠太鼓」を謡う気にはなれない。「藤戸」は、あまり身につまされて辛いし「鷹」も、切の文句が気に入らない。今のあたしの身の上は、いかなる罪の成れの果ぞや、よしなかりける花の一時を。いつの間にか「女郎花」になっている。声を出して続ける。

謡い終ると、気分が乗ってきたので、順序にこだわることもあるまいと、思う間もなく「笠の段」が出る。

めしうどに下ってから、この三月近く、ともに声を出してものを言えなかったのが、久しぶりに大きな声を出して、すっかりよい心地になり、思い出すままに「善知鳥」「須磨源氏」「松虫」それに「山姥」を、サシから切まで謡うと、さすがに少しくたびれたので、中入ということにして一息入れる。

外には人の気配もなく、向うの牢長屋も静まり返っている。皆様は、さぞあきれかえつておいででしょう。お仕置間近の罪人が、謡を謡って浮かれている。

他所目にはひたぶる狂人と人や見るらん。よし人は何とも見る目をかりの夜の空、西にかたむく月を見れば、いざや我もつれんと、……ただ一声を最期にて、舟よりかっぱと落汐の、底のみくずと沈み行く、わが身の果ぞかなしき。

ここには沈んで行く、自分の死骸を見下す形があつたつけ。いつも上手く行かないで、工合の悪いところだったけど、二、三日中には、きっと上手になるでしょう。

御扇子もないし、なりもなりだけど、立上つて一寸、舞ってみる。敷石が素足に引かかるけれど小さく舞えば舞えないこともなさそうだし、邯鄲や唐船よりは十分広い。

今生の舞い納めは何にいたしましたよう。自分の供養になるようなものと思つても、よいのを思いつかないし、それに罪人の供養はご禁制だから止めにして、そうかといつて殿様のご長寿を祝うようなのも、何となく当てつけがましくていけない。高砂にでもしとけば当りさわりはないけど、つまらない。天下泰

平を謡って、殿様も祝い、少しはあたしにもかかるようなという「難波」しかない。これにいたしましょう。

俵を巻いて隅に片づけ、胸元を直してから囃子のつもりで、笛先から斜めに坐り、待謡から、敷石の間から出ている鉄の場所を一つ一つ覚えながら謡い出す。久しぶりだけれども、さっき大分、謡い込んだので、とても調子がいい。脇能は女には無理なものときめていたけれど、今日はよくできそうな気がしてくる。乗地の掛合を、よい気分です分に謡っておいて、ろんぎから立って扇を持ったつもりにして、謡いながら舞う。石畳だから拍子は軽く、心持だけふんで、大きく開いて、出ている鉄に気をつけながら、小さ目に廻る。「入日を招き返す手に」と招き扇をすると、何だか急に目頭が熱くなってきたのを、こらえて続け「この音楽に引かれつつ、聖人御代にまた出で、天下を守り治むる。万歳楽ぞめでたき、万歳楽ぞめでたき」と舞い納めると涙が噴き出して止まらなくなってしまう。

気丈なつもりでも、女でございます。お仕置に上るのは、恐しゅうござります。お仕置が近いと知って、入陽を招き返すと謡っただけで、胸のつぶれる思いがいたしました。

ああ、わたくしに入陽を招き返すことができた。

人の気配にふと気がつく、いつの間にか七郎どのが背をなでて下さっている。はっとして身を起すと、何も言わずに「少し早いが夕飯です」と、木皿をおいて下さる。

そうそう、これから齒を抜いていただくところだった。それで夕飯が先にでるのだ。

「はい、ありがとう存じます」と言ってからちよつと俯向いて、お腰の裾で涙を拭くと、七郎どのは左手を背に当てたまま、いつもの通り小さく握ったおにぎりを、一つずつ、ゆっくり食べさせて下さる。

お薬がきたので、少しはなれて坐り直す。ここは呉器口がついていないので一々錠を外して、戸口から出し入れする。足輕が行ってまた、二人きりになる。

「お仕置と申すものは、仲々お物入りなことでございますなあ。あたくしは、今少しお手軽なものと思って、お受け申しましたのに、これほどお上のお手をわずらわしたのでは、かえって申しわけないような気が致します」

「いや、常のお仕置は仰せの通り、手早く相すませるがよしと、申し伝えております。しかし今回は、事情が事情故、りえ殿に限って

特に丁寧に行うことにいたしました。このたびのように、晒しに引き渡しを加え、さらに大手門外の生き晒しと申すのは例のないことで、今後もおそらく行なわれないでしょうから先ず、りえ殿かぎりと申すことで、文字通り前代未聞のお仕置になります。それにしても、りえ殿を私の手でこのような極刑にいたすことになるのは、思いもありませんでしたなあ。ところで、りえ殿は、いつ畜生に下られたとお思いですか」

「先日、このお役をお受け申した時ではありませぬか」

「いや、それはお身柄の扱いを改めただけです。実は、お城に上られた時に、ご実家の人別を改易になられたのでござります。ご奉公の心得をお聞きになられたでしょうが」

なるほど、それで合点が行きました。家はないものと思えとか、いつにても一命を差し上げる覚悟でいよとか、ばかにしつこく聞かされたっけ。

あたしは、並のお奉公とは違うことは、おぼろげながら知っていたけど、いつ殺されてもかまわぬようにされていたとは、あきれてものも言えやしない。

「あの時、ご実家の人別書のりえ殿の行に、

故ありて七才にて改易申しつけらる、と朱書して人別を削られたのでござります。その後あらためて御奥のお手元鳥獸控帳に人身畜生牝一頭、りえと名づけらる、と書き加えられたので、それ故、終身小姓役と定められ、お腹様になることも許されず 二度までも流産させ申したのでございます。また、他の女中衆にはなされぬような、おなぐさみも、りえ殿にだけはかまわず申しつけられたのも、りえ殿ならば、たとえそのために落命なされても少しも差しつかえなかったからでした」

あの頃から、そのつもりで仕立てられていたとは驚きました。役向から畜生扱いされているとも知らず、剣術まで習って刀を差して別式だと言って嬉しがっていたんだから、いい面の皮。

「そのような身分とも心得ず、知らぬことは申しながら、お役向にもいろいろご無礼をいたしました。そのような定めでは、よほどきびしいお仕置にかけていただかなくては相済みませぬなあ」

「りえ殿は鯉の生作りを召し上ったことがありませんかな」

また、変な話を持ち出してこられたけど、御相伴でいただいたし、おいしかったのを覚

えているから

「はい、二度ばかりいただきました。まことに好味なものでございます」

と答えると、

「りえ殿のお仕置を一口に申さば、その生作りでござります」

と、さも普通のことのようにおっしゃる。

これは、えらいことになった。しかし、そう言われると、たしかに思い当る。鯉の生作りは、生きた鯉に包丁を入れて鱗を剥ぎ、わたもえぐり出して、姿のまま刺身に作ってあり、箸を入れると尾鰭を動かしてはねるのをそのままいただくわけだけど、あたくしは生作りにされて、お皿に盛られ、皆様にご覧いただきながら死ぬわけだ。髪を切られたり剃られたりしたのは鱗を落とされたようなものだし、それからいろいろのことをした上で、ようやく串刺しのお仕置が始まるんだそうだから、鯉より手がかかる。

「なるほど、そう申されると、そっくり生作りでござります。すっかりすませていただくまで気を張っていなければなりませんなあ」
「手配りは、私が指図いたして遺漏なきようにいたします故、りえ殿はご心配なく、ゆるりとなされていて下されば、よろしゅうござります。さて、申の刻過ぎに御役です。しばらくご休息なされませ」

また、手を打って足輕に戸を明けさせて、ご免、と出て行かれる。恐ろしい話をして人をこわがらせて得意になるのは、七郎どの小さい時の悪い癖だったけど、今だに直らないところを見ると、一生、直りそうもない。

一度立ち上って、食事の前に敷かせて下さった俵を真直ぐに直して裾をよく合わせ、きちんと坐り直す。存分に泣いてしまったのですっかり気が晴れたし、声の使い納めということだったのに、めでたく舞い納めました。こうして肌を隠すものを着させていただけのも、今日かぎりでしょう。

大手御門外の晒というのは、おすてさん流にいえばお姫様扱いというわけだろうけど、石田三成のような名のある大将でさえ、都で晒された時には、破れた古布子一枚の肌もあらわな姿で、門前の馬つなぎにつながれたと何かで読んだことがあるし、お江戸で見た火焙り者の女も、丸裸のまま縛られていた。

串刺しの方が火焙りより重いんだから、あたしも覚悟していきましょう。

さっきから、しきりに舌の先で前歯を舐めている、この歯とも間もなくお別れか。

六つぐらいで生え変ったんだから、二十何年、命を支えてくれた功臣です。しかし、このままでは串が通る時、苦しさの余り、思わず嘔みついてしまうでしょうから、手足を縛られるのと同じに、齒も抜いていただいておかなければならない。

久方ぶりに大きな声で謡ったせいかわれがでたようで、頭がぼんやりしてきた。しかしもう何も思ひ残すことはなくなったし、覚悟は二十年前からできていたようなものだし、ゆったりした気分で、膝に手を置き、しゃんと胸を張って外を眺めていると、人声がして四、五人、近づいてくる。

戸口が開いたので平伏していると、一番後から入ってきた七郎どのが、外から錠をかけ、るのをたしかめてから「始めい」と低い声で指図される。

手足を持って抱き上げられ、俵を除けた石の上に寝かされる。手首、足首に細引きが巻かれて大の字にされると、丁度よい具合に石の間から出ている鉄に、それぞれ結えつけられ、また候、六尺棒をくわえさせられる。道具を持った非人が、胸の上に馬乗りになったかと思う間もなく、大きなヤットコのようなものが目の前に迫る。ぐいと一ひねりされ、

頭がじーんとなって目の前が暗くなる。何と痛いことと思う間もなく口の中がしびれて、手足が冷たくなる。あまり感覚はない。喉に何か流れこんで、むせそうになるのを、どうにかこらえる。胸が軽くなって非人が枕元の方へ回ってくる。下の齒に金具が当たって痛みが走る。ようやく済んだらしくて、六尺棒を取り羽二重を厚くたたんだものをくわえさせられる。水でなくて薬湯に、浸してあるらしい。

ああ、痛い、痛い。何て痛いんでしょう。お焼印やら何やらで、痛いのや苦しいのには大分、馴れているから、こらえていられるけれど、並の女だったらとてもこの目を廻してしまおうでしょう。

「しばらく静かに休んでいなさい」と言い残して、皆出て行ってしまう。

大体、役人という者は身勝手なものだけどもこれは又いわずもの事を仰せられました。身動きもできないように大文字に張りつけられている者に向って、静かにしていよ、とは結構なご挨拶ですこと。

それでもしばらくすると、痛みもいくらかずつ柔らいで行くようだし、とても眠くなってきた。

錠前が鳴って気がつく、外はすっかり暗くなっている。案の定、湯もじをとられてから手足の縛めをとかれ、後手に括りなおされて外に出る。

ご牢内に戻ると、口にくわえた血止めの布を新しいのと取りかえて下さり、お縄を外され、さつきまでのと違う別の湯もじらしいものを渡されて牢に入る。

目が馴れると、お婆さんはいなくなっている。手に持った布を広げて見ると、附け紐のついた湯もじだけど、身巾も丈も、とても小さくて、丈は一巾らしいし、立ち上って巻いて見ると、身巾もかつしかかないけれど、着けさせていただけのでもありがたいと思つて、もう一度ひろげて、きちんと巻いてから紐を結ぶ。くらやみにすかしながら手さぐりして見ると、蒲団もあたしの分だけになっている。

とにかく痛さも痛し、その上、お薬のせいで気分もよくないので、お蒲団の上に横になると、ほっとする。こんな時、一人で寝られるのは、ありがたい。心が休まります。

目が覚めると雨が降っている。口にくわえて寝た血止めの羽二重は、いつの間にか枕元に落ちてゐる。痛みは殆んど治まったけれど

口元がとても変な工合になってしまつて、たよりない。

朝飯には、大きな井に生卵を五つ六つ割り込んだが出る。お腹が張ってかなわないと思うけど、少しずついくどもに分けて、すっかりいただく、さすがに薬湯は、いつもより濃い目に煎じたのが少な目に入っている。

人の気配がするので、急いでいただくと、直きに呼び出しがかかる。

また、晒縄がけ足枷つきのなりで、奮に乗せられて町に入る。雨のせいか、ご見物もあまり見えない。大手口の方へ出ると、お堀端に縄囲いをして、中には屋根のついた柱が立っている。お晒し柱は大分、手の込んだ作りで目通りほどの高さのところに腕木が二本並んで前に出ており、抱え上げられてその上に馬乗りに跨がらされて、膝を曲げて足枷を後の柱に結えつけられ、身体も襟元と腰を柱に括られると、番人の人足どもを残して役人と足軽たちは帰って行く。

大分、雨が大雨りになってきたけど上にはちゃんと屋根があるから濡れる心配はない。このお晒柱は何かに似ていると思ったけれど、高張提灯の柱にそっくりだ。提灯の代りに、あたしが架けられているんだから、どこから

でもよく見えるでしょう。

ぽつぽつと見物が集ってくる。大抵の人は縄より、ずっと離れて見ていらっしゃるのに、町家の手代か何からしい若い者が一人真前にしゃがみ込んで、ニヤニヤしながら見上げている。無礼者め。

左手の向うに、供に唐傘をさしかけさせ、帳面を持ってあたしを見つめている、道服姿の人がいらっしゃる。大分、ゆっくり眺めていらっしゃったが、やがて矢立の筆をとって描き始める。御用の画師らしい。描いていたからには、なるべくちゃんと描いていただきたいと思うけれども、こういう場所での目の据え方はとてもむづかしい。うつむいてみると、まるで悪いことでもしたようで、おかしいものだし、高い柱の腰乗せ枠に、女だてらに馬乗りに跨った恥ずかしい姿では、あまり胸を張って上を向くのもおかしい。それに明日の大役を控えている身だし、これが勤めなのだから、固くならないように肩を落して身体を楽にして、ご見物衆を見返さないように、向うの家の屋根のあたりを見ていることにする。こんなあられもない姿を画に残すのは羞かしいけれど、御説だからどうすることもできない。

夕方になって西の空が明るくなったから、明日は晴れるでしょう。

柱から降ろされる頃には、雨もほとんど止んだ。女には辛い一日だったけれど、ご見物衆の中には、気のせいか他国者が二、三人いたようだから、お役目は果たせたような気がする。

牢屋に戻ると、おかゆとゆで卵がでて、その後、丸薬やら薬湯をどっさりいただいて休む。

表に人声がしたので目が覚める。呼び出しまでに起きて、ちゃんとしているつもりだったのに、すっかり寝過ぎてしまいました。急いで蒲団を片づけ湯もじの裾を直して戸口の前に坐る。まだ東の空が白んだばかりだ。役の人達が戸口の左右にたつて、足軽が錠を外すと、

「元江戸表小姓役相勤候女、りえ」

と改まって呼ばれたので、おすてさんから習った通り

「はい、私でござりまする」

とできるだけハッキリ答えて、くぐり戸をスーッとでて土間に坐って平伏すると、七郎どのの隣に立った年配の侍が「お見事」と言つて下さり、縄がつくと直ぐ水責場へ行く。

侍衆は外に残って、足輕三人ほどが中に這入り、いつもの通り行水させられてから、お縄をとかれ、両手を左右に吊られて剃毛される。始めての時には、うろたえてしまったけど、今となつては何ということもなく、眉毛からはじめて手の甲や足の脛まで、髪の外は身体中、さっぱりする。

また、早縄姿で牢の外鞘に戻ると、足輕の一人が氣を利かせて、物置場から四斗樽の蓋を持ってきて下さったので、その上に坐ってお縄をかけかえていただく。

さっき、お見事と言つて下さった年配の侍が後に廻り、七郎どのは前にこれ、後の方が荒縄をさばいて、丁寧にかけて下さる。とても念の入った縛り方だけでも、いつもの柔らかな細引とちがい荒縄なので、締めつけられるたびに肌がヒリヒリして、とても痛いけれど、そんなことにはかまわず腕や肘などは七郎どのが身体を押さえ、後の方は背中に膝を当てて、力一杯引きしめて結ばれる。胸には幾筋も縄がかかり、乳房の上や左右、それからお腹にかけて結び目がきれいに並んで、肘を後に引きしめ、手首は背中のお焼印のあたりまで吊り上げて、きっちり交叉して結えつけられ、すっかりしびれて感じがなくなつ

てしまった。

お縄がつくと直ぐに引きたてられ、外に出ると空もすっかり明けはなれている。

仲間が二人、小樋を持って待っているのかと思つたら、薬湯だった。今さら、と思ふけど、五合ぐらいあるのを、すっかり飲み干してから、畚の上に坐る。畚も大分、乗りなれたし、今日は足枷がないから楽に坐れるのはありがたいけど、肌を隠すものは何もない。かえつてサッパリした気分なので、膝を合わせて足首をピッタリ身体につける。

お城の内も手配りが出来ていて、どの木戸もスーッと通り抜けて、お白州口の前まで乗り打ちする。畚が下りて、足輕に囲まれて立つと、使いが来て木戸を開けたので先に立つて入ると、縄とりがあわててついてくる。

玉砂利の上だし、きつく縛られた身で、あまり小さく坐ると、よろけそうなので、羞しいけど膝を開いて男坐りし、腰を落ちつけてから一息、吸い込み、息をととのえてから静かに平伏する。

「元、小姓役、理恵。其方儀、先般来数々悪行を重ね来り候罪状、重々不届至極に付、串刺申付」

と、よく通る声でキツパリ読み渡された。

前からわかつてのことだけでも、こうして正式の席で申し渡されると、やっぱり一瞬、息が止まって目の前を光るものが走る。

どうにかこらえて深く一礼し、ゆっくり身体を起こすと、正面のお奉行は、もう立って行かれるところだ。縁先近く坐っている侍が「立ちませい」と叱りつけるように声をかけるので、なるべく落ちついて正装のときと同じように左膝を立て足首を起してから、きつと立って足を揃えると、少しやわらかい声で「引きませい」と、つぎの声をかけて下さる。これは縄とりへの指図かも知れないと思ふけど、直ぐ右の爪先をひねって後を向き、ゆっくり歩き出すと、塀の際に控えていた小者が左右について、三人がかりで木戸口まで小走りに押し出される。

木戸口の外に七郎どのがおられたので、何となくホツとする。七郎どのは自身、縄尻を受けとって引き立てられ、さっききたのとは反対に、お城の内へ歩かされる。

二の丸に入ると、奥御殿の方へ行かされるので、おやおやと思つている中に、境の木戸の前に出ると戸が開いていて、向うには女役人が四、五人、待っており、七郎どのから縄尻を受けとる。思いがけないことなので、び

っくりしていると、棒を持った端女が両側に
つき、あたしを先に立てて御長屋の方へ引き
立てて行く。

江戸屋敷では、急な御錠で局には戻らずに
下げられたので、ここで改めて定法通りにさ
れるのだと、気がつく。

案の定、長局の縁先には下方の女たちが目
白押しに坐っている。本来なら、あたしの前

に出ることも許されない女たちが、さも憎さ
げに、それでいて嬉しそうに見下ろしている
前を、ゆっくり歩かされて行く。これは表向
きのお仕置じゃないんだから、かまわず一人
一人の顔を見ながら行く。

「よい気味じゃ」「まあ、あの浅ましいさま
は」「よく恥かし気もなく、立って歩けます
こと」「畜生でござりますもの、平気なはず

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞 金

- 一、第一席 五万円 若干名
- 一、第二席 参万円 若干名
- 一、第三席 貳万円 若干名
- 一、第四席 壹万円 若干名
- 一、第五席 五千元 若干名

要 項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女

性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の
別は問いません。奮て御応募下さい。
一、写真選衡にパスした応募者の方全員に
対して一名につき金壹万円の賞を呈し、更
にその際撮影した写真を誌上に発表し、読
者コンテストの投票の結果、第一席より第
五席まで標記の賞金を進呈いたします。
一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の
概略を記載の上、手札型写真を同封してお
申込み下さい。選外の際は一件書類は、返
却いたします。

一、写真並に書類にて選衡にパスした方に
は賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに発
表の写真を撮影し、コンテストの結果は追
って御通知いたします。

一、写真撮影のための旅費などの費用一切
は本誌にて負担いたします。

一、モデル・コンテストに対する読者の投
票については、いづれ誌上に発表します。

でござります」

勝手なことを、聞こえよがしに言い合っ
ている。しかし顔が合って先に目を伏せるのは
向うだから面白い。

広い御奥の局部屋先を、一つも残さず廻っ
て行く。お三の間やお次には、大分知った人
たちがいる。昔、お世話になった人や、遊び
相手だった人たちに、こんな姿で対面するの
は、やっぱり羞かしい。殿様の御錠でお役を
つとめているのだから、心中では何の羞かし
いことはないし、とても晴れがましい役目だ
と思っっているけれど、あたしの中の女の性が
羞かしいといって顔を紅潮させ、頭を俯向か
せる。いつの間にか顔だけでなく全身、足の
先まで湯上りのように真赤になって、気のせ
いかいつもより乳が張っている。両手はすっ
かりしびれて、あるのかないのかはつきりし
なくなっていて、手首が当たっている背中が冷
たい。別の棟にかかるたびに、左右の端女が
「お手すきの皆様は、見物さっしやりましよ
う。お仕置者の引渡しでござります。ご定法
を破りし女の畜生姿をご覧なさりましょう」
と、よく通る声で触れて歩く。処々細目に
開けてある障子の中から、年寄りや中臈方も
見物していらっしやる。牢役人や町人どもに

見られるのは、それほど苦にならなかったのに、知り人や同輩だった女中に見られるのはとても羞かしい。穴があったら這入りたいという言葉の意味が、骨身にしみる。

どうにかすっかり廻って元の木戸口についたのでホッとすると、

縄尻が七郎どのに渡され木戸が閉まると、少し小声で

「御役、御大儀でした。これより大手御門からお出します。江戸よりの御説で、本日は大手門より出し申せ、とのお言葉でした。前例のないことでござります」

と言われる。長局の引き廻しが余分についた埋め合わせかと思ったけど、これは身代りで人柱に立つ、あたしへの殿様のお心づくしでしょう。

ご内々のお言葉だから、お礼を申し上げようかと思っただけでも、齒なしになつてはハッキリした言葉は言えそうもないから、ただ静かに頭を下げるだけにする。

どうひいき目に見ても、御門から正面切つて出る姿じゃないと思うけど、まんざら悪い気もしないから、勝手知ったる城内を、先に立って足早やに行く。侍方や仲間衆などが、あちこちの物蔭などから、さりげなく見物し

ていらっしやる。

肩や胸のあたりのお縄が肌に喰い込んで、ヒリヒリする。今までの柔らかい細引のお縄と違って、ごわごわして毛羽立った荒縄を、手加減せずに力一杯引きしめて縛られた上、こんなに歩かされたのも始めてだから仕方がない。

御門の前にきたので立ち止まり、後に向き直つてご本丸に一礼してから、お江戸の方に向かい丁寧に礼をする。それから今生の見納めに、石垣から御門の屋根まで一わたり見渡してから御門を通り抜け、さっさと歩いて橋を渡ると、昨日のお晒場は取り払われて、きれいになくなっている。広場の向こう側に行列が待っていて、馬が三頭ばかりおり、列の中ほどのところにいる馬には、あたし用の鞍がついている。

この間中は湯もじ一枚でもつけていたからまだ人目をしのげたけれど、このなりで馬に跨がるのかと思うと、また顔が熱くなるけど考えないことにして、どんどん歩いて馬の横に立つと、直ぐ抱え上げて跨がられ、ちゃんと腰を落ちつけるのを待って、太腿を荒縄で結えつけられる。

供は非人らしい人足が三十人ほど、あたし

の前後につき、先頭には足軽が三、四人いてご検視役などの侍衆は後の方に並び、その両側にも足軽やら仲間が十人ほどつくから、大分立派な行列になる。

前には紙の幟りと木の札が立ち、幟りには平仮名で筆太に「くしざし」とだけ書いてあり札にはこまかいことが書いてあるらしい。後から足軽がやってきたので振り向くと、人足が三尺ほどの小さな紙幟りを持っており、あたしの背中のお縄の下に差し込む。後腰まで通して鞍の穴に突っ込んで止めたので、背筋はしゃんとなったけど、木の柱とちがって節があるので、ごりごりしてあんまり具合のよいものじゃあない。道理で今日は、背もたせの柱がないと思った。この幟りには、申し渡しのとおりに「元小姓役相動候」と肩書をつけて、大きく「串刺女」と書いてあるけど女だけ余分なように思う。幟りを背負っている罪人を見れば、馬鹿にでもわかる。

後から「出立いたせえ」の声がして、行列は動き出す。家々から見物衆が道まで出てくるのを、先頭の足軽が開かせて行く。今更はずかしい気も起らないので、人々の視線を浴びながら、家並みや人達のなりなどを、のんびり眺め、馬の背にゆられて行く。頭の上で

紙の轆りが、かさかさと鳴るのを聞きながら思うともなしに、いつかあたしが世話をして縛り首になった女のことを思い出す。

あの時には大変な重罪人だと思ったけれども、今から思うとあれは特別軽いお仕置だった。あたしの罪は逆罪ということだから、こうしてさまざまな目にあわされ、生恥を晒させられているけれども、江戸以来、多勢の男役人や人足の手にかかってきたのに、肌はけがされなかった。おすてさんからは、罪人は非人などにはずかしめられると、おどかさされたので、あたしもその覚悟をしていたのに、人足や小者には必ず侍衆がついていて、それだけは守って下さった。あたしは女小姓で、一生ほかの役につけないことになっていたかわり、殿様には若様時代からずっとお身近に仕えていて、お清でないことは皆様ご承知だから、それで特別にいただいたのかもしれない。

江戸にもここにも、奥仕えの女は大勢いるけれども、こんなお役を仰せつけられて素直にお受けできる者は外にはいないんだし、先代の別式女で祐筆だった人も、やっぱり他人の代役で晒し首のお役をつとめたという話だから、今度のお役は、あたしがつとめなければ

仕方がないでしょう。

十間ほど先を捨札が行くけど、一体全体あたしの犯した罪というのは、どんなことなのでしょう。

江戸屋敷のお茶室で今度のことを承った時森田様がくわしいわけを話して下さろうとなされたのに、殿様は

「森田、女と申すものは三従の教えといって人の言葉にだまって従うしつけを受けているのだ。仕置を承知してくれたのだから、そのようなくどい話は聞かせるにおよばぬ」

とおっしゃると、止めさせておしまいになったし、申口書も罪状は後からしかるべく書くということ、白紙に書判したのだし、さっきのお仕置附も、ただ不届至極とだけで、罪状らしいことは何一つ聞かされなかったから、結局あたしはどんな悪事を働いたのか知らないままで、百年ぶりとかのお仕置に上るわけだけれども、今頃になって何だか妙な気がしてきた。

しかし、こんなに嚴重に扱われて重い刑に処せられるんだから、多分、極悪非道の罪人に違いない。まあ、くわしいことは冥土へ行つて閻魔大王にでも教えてもらいましょう。

大分、日が高くなって、巳の刻を過ぎた頃

街道に出て海沿いに進むと、間もなく竹矢来が見えてきて、見物衆も大勢あつまっている。馬を竹矢来の中まで乗り入れて、あたしは降ろされる。囲いの真中あたりに、鳥居のような高い井の字形のお仕置柱が横たえてあり、それを立てる穴も掘ってある。役人衆は外で馬を降りて入ってこられ、あたしを乗せてきた馬も出て行く。足輕に代って七郎どのが縄尻を持つと、向うのご検視の方へ行かされ、二間ほど手前に立ち止まると、ご検視役はあたしを頭の上からゆっくり見下ろして、足の先までご覧になり、また上に見返して行かれて顔が合ったところで「りえっ」と呼ばれたので「はっ」と答えて軽く一礼する。ご検視役は後の七郎どのに向かって「よし」と下知され、七郎どのは横で待っている。非人の人足に縄尻を丁寧に渡される。あたしが、ちゃんと歩いて行こうとすると、たちまち抱え上げられ、四、五人がかりで罪木の上に寝かされ両足を別々に持って引かれると、冷たい金物がお尻に通る、そのまま左右に開かれて、腰の関節がぐきりと鳴る。痛みは耐えるけれど人足どもは無理矢理、足首を横木に結えつけてしまう。痛さに肩で息をしていると、別の人足が弓の弦を持ってきて、太腿

の中ほどに巻きつけ、二人がかりで力一杯、引きしめながら十回ほど巻き、掛け声をかけてしめ上げてむすぶと、右足も同じにくぐられて、膝から先がしびれてわからなくなる。また、さっきの人足が入れかわって今くぐった上から荒縄で横木に結えつけ、腰も三巻きして結えつけると、また腰骨が鳴る。もう二度と立つこともないけれども、キリキリと痛んで、本当に腰の番い^{つが}がどうにかなくなってしまったのかしら。両足をすっかり結え終ると、後手のお縄を鎌で切つて外す。なるほどご用心のよろしいこと。

とつくにしびれ切つて、まるっきり動かなくなっている両腕を左右に伸ばされて、さっきから肩に当たっている腕木に手首を括られると、また弦師とかわつて肘の上を弦で巻きしめられる。横目で見ると、腕が七分か八分ぐらいにくびれているから、足も同じように骨の太さだけに括られているに違いない。荒縄の者が入れ代ると、肩口と肘近くを念入りに結えつけ、さらに胸へもタスキ形に縄をかけて人足は下り、七郎どのが頭の近くに寄って見分してから、人足に合図をなさる。

今度は、大きな絨^{まさかり}を持った者が出てくる。いよいよ七郎どのが話し通りらしい。人足が

あたしの足元の方へ廻つて無造作に立つと、絨を振り上げる。

痛いというよりは、しびれてわからなくなつてしまったような感じで、弓弦で縛つてあるせいか、血は余りでていないようだ。土の字に張りつけられたまま、すっかり人間の生作りになつて身動きもできない。

人足どもが寄つてくると、頭らしいのが、「それっ」と声をかけて指図し、大勢で一氣に柱を起こすと、柱の根が穴にズウンと落ちこみ、金具が腰に喰い込んでキーンと頭にひびく。下では穴に土を入れてつきかためていくらしく、柱にズンズンひびいてくる。

正面の矢来の向うには、ぎっしりご見物衆が集つていらつしやる。百人ではきかないでしょう。

串刺しは姫方に限つたもので、常の罪人にはないことでござりますと、おすてさんは羨ましそうに言つていたけれど、なるほどよくわかりました。義理で死ぬ身に、こんな晴れがましい死に方はないでしょう。

それにしても、女が死ぬときには両足を縛らなければいけないと教えられてきたけれど、こうして前代未聞とかの極刑というお仕置に上つたあたしも、ちゃんと両足を結えつけて

いる。女が足を縛つて死ぬのは、苦しんでも見苦しい姿にならないためだと思つていたのに、あたしは死んだ後までこの浅間しい恥姿を見ていただくために縛られているのだから一口に縛ると申しても、ずい分、種々な縛り方がありますこと。

ご検視は、正面より少し右寄りの、矢来のそばに床几に腰かけて、まぶしそうにこちらを見ていらつしやる。

下の人足どもが柱からはなれて行くと、代つて串取りの非人がでてくる。さあ、いよいよ最後のお役をつとめましょう。

非人は、横にして持つてきた長い串を、槍のように一つ素振りしてから、あたしの目の前に突き出して見せて下さる。なるほど話に聞いた通り、六尺棒ぐらいな太さの六角の木棒で、先は三角に尖らしてあり、六角の身の所々に下から削ぎ目が切り込んである。背負っている罪木と同じ、梶の木でしょう。

更に二回、顔の前に素突きして見せると、真下へ近寄つてくる。立派にしていなければと思ひながら、ご検視の方を見返していると直ぐ下のほどよい所に非人が身がまえた。

ああ、この時を三月も前から待つておりました。目をつむりそうになるのをこらえて、

声を立てると口が乾いて、なお苦しくなる
 けど、仕方がない。取りすました御殿女中が
 畜生の本性に返って、あられもなくもがき苦
 しみながら、死にきれずにいるところを、皆
 様にご覧いただくのが役目だから、羞かしい
 といって苦しいのをこらえては、お役が

つとまらない。

もう先が出る頃だと思って、顔を仰向けて空を見上げる。とても、まぶしい。空のあちこちに光る物が飛んでいる。

串の妨げにならないために、わざわざ前歯を抜いていただいてあるんだから、今から口をあけている必要はない。第一、だらしなく見える。

頭も動かなくなってしまいました。棒を呑んだようにと言うけれど、身体はさっきからどうもがいても、まるつきり動かない。もう大丈夫、見事な串刺女になりました。うれしい、うれしい。やっぱり、あたしが思っていた通り磯なんぞのように見苦しいものを出さず、塩焼の鮎のように、きれいな姿が見えるようです。本当に、こんなによい心持になれるのなら、いくどでも生れ変って串刺しにしてくださいとうございます。よい気持でございます。本当にうれしゅうござりまする。

空が真暗になってしまったけど、光る物は数がふえて、さかんに飛び廻っている。この間、死罪になった人達が迎えにきて下さったのでしょかしら。

串が、ぼんやり見える。どうかいつまでもこのままにしておいて下さいまし。これが、

りえの極楽成仏の姿でござりまする。お蔭をもちまして、生きながら極楽世界の佳境に遊ぶことができました。

お役目が果せてうれしゅうござりまする。うれしい、うれしい、殿様あ。

りえ女は意識を失った後も、なおしばらく口唇を振らせていたが、間もなく力が抜けて静かになった。

最初の一突きから絶命まで、四半刻だったという。

彼女は仕置が開始されて激痛が起ると、間もなく感覚が倒錯して恍惚境に入ってしまったけど、実際には三十分ほどの間、串の先で腹腔を破壊され、恐ろしい唸り声を上げながら、わずかに動かせる頭だけを左右に振って、もだえ続けていたので、ご検視役人からも「早くとどめを……」という声が出たというが、処刑の下知が発せられた後の執行は穢多の受持ちであって、検視役といえども、ただ見守る外なかったのである。

りえ女のお仕置殻は、少くとも一カ月間はそのまま放置して晒される予定であったが、国家老の意見は、将来りえ女の処刑を公儀に証明する必要を懸念し、奉行等もまた、同意

見だった。それ故、りえ女の死骸は塩漬にして長く保存されることになり、処刑の翌日、役向が再び刑場に行き、死骸を刑架から降ろさせた。

りえ女が知らずじまいだった企てというのは、藩の有志が江戸城の大奥に手を回し、暗愚な將軍に緩慢な毒薬を盛って、その死期を速める計画だったといわれている。しかし途中で、企てが公儀のお庭番に嗅ぎつけられた疑いが起ったので、先手を打ってりえ女一人のたくらみのように話をこしらえて、処刑したのだと伝えられている。

この仕置を見聞した城下の者達の、その処刑についての批判が強く、中に夜陰にまぎれて、落首落書の類をバラ撒く者が現れたという。

塩漬にされた、りえ女の箱は長く保存され毎年一回、蓋をとって点検し、塩を入れ替えていたそうだが、明治六年に牢屋敷が取り払いになった時には、見当らなかつた。事情を知らない役人が、いつの頃にか捨ててしまつたらしい。

かずひこのノートから

||この神秘の味を私は愛する||

とやま かずひこ

今昔物語

今東光和尚の著『今昔物語入門』の新刊広告がハデに発表された(4月16日朝日新聞朝刊)そのコピーのなかに、

……『マゾヒストの恋の話』という一節があるのが眼にとまる。

こうなると、見すごすワケにゆかない。

その日に書店へかけつける。

私のカンは、あたった(当りまえだ。今昔物語とあれば、われらが愛して止まぬ大先輩平中侍従のことにきまつてゐる)

予期した内容で、挿入された絵の平中のすがたもまたすばらしい。

おまけに、そのあとがきで和尚は平中の行状を、共感の目でみつめ、現代に至っては、

ある種の人とのあいだでは、固体をうけるための、専用の金のサラと、フォークが存在し(これは初耳)液体を「スプーン」と形容し、

「そんなモノを呑んだり食べたりする(逆にいえば、吞ませたり食べさせたりだ)するのは、外国のその方面の本にはしばしば出てくる」つまり、西洋では、おかしくも、めずらしくもないことと、東光和尚は、理解しているらしい。賛成。

ただし、平中を「マゾヒスト」ときめつけるのは、どうかと思う。

平中は、あの物語だけから推論すればけっ



してマゾではなく、フェチか、コプロかということになるのではなからうか。

私は、学者でないの、これ以上のことは差しひかえるが、どなたか平中の精神分析を試みる研究家はいないだろうか。

痴漢？

デパートなどで、トイレのドアのカギを完全にかける女性は、ぜんたいの七〇パーセント。あとの三〇パーセントは、ろくにドアもしめないで、使うという。

ここは、国電川崎からわかれて、立川駅とつながる『南武線』―矢向(やこう)駅のトイレ。

いなか駅のここは、三つならんだ個室の、手前二つが男子用、おくのひとつが婦人用と指定されているが、昼でもうす気味わるく、若い女性のすがたはほとんどみられない。

それが、めずらしく、足ばやにかけこむすがたをみたので、つい？ フラフラと、あとにしたがう。四月下旬のある日のこと。

べつに、なんの目的はないのだが、仕切り板のむこうで、いかなる音響を発するか、探究してやろうというわけ。

おそらく、いちばんおくのを使うだろうから、こちらは、その手前、つまり、三つ並んだまん中を使おうと、見当をつけて、いきおいよくドアを開く。

私より、一と足はやくかけ込んだ、若い女性のすがたは、すでにそのときなかった。

「キーンッ」

ドアを開いた私の目前で、すごい悲鳴。

おどろいた！

よりによって、彼女、まん中の男性用を、しかも、カギをかけずに使うんだもの。

とっさに、赤い下着と、しろい肌がチラリと目にうつる。

本能的に、彼女はヌッと立ち上がった。聖なる作業の半ばというのに、それでなく

ても物さびしいトイレの中、スワ痴漢！とびっくりしたらしい。おしいかな、中がうすぐらくて、しかとはみえなかったが、これものぞきのひとつか。さて、このばあい法的に私は痴漢だろうか？

代用品 2 種

デパート、上野松坂屋新館の玩具売場で、すばらしいモノをみつけた。

よく婦人用のストッキングの展示用に実物の女性の脚を見かける。シームレスなどを穿いて、ニョッキリと立っているあれだ。

それを、イタズラオモチャとして二本一組で売っている。

ねだんは、二五〇円とペラポーな安さ。

このオモチャ、ビニール製で、ゴム風船のように息を吹き込むと、その恰好といい、着色といい、ごていねいに、うす茶いろのソックスをはいたところといい、まるで、ホンモノの脚を腿のツケ根から切断して、ごろんところかした感じ。二五〇円とは、なんとも安い。それは、ホンモノを鑑賞するようにほかなないけど、これは、どこまでも、こちらの思い通りになるところがミソ。

ほんらいは、たとえば、ベッドの洋かけの

あいだから、ニョッキリださせたり、自動車の座席にころがして、通行人をギョッとさせたり（ついでに目をたのしませてやったり）そんなイタズラが目的なのだが、ズバリいて、脚フェチの人々だったらとびついてしまふはずだ。

かわいいつま先を、口のなかにスッポリふくんだり、そのふくらはぎで、のどをしめてもらったり、ゆたかな双の脚に顔を埋めて深呼吸しようが、いっさいご自由。

「いやらしいヒト！」

「エッチねえ！」

など、おごごとは、いっさいいわれないのが、うれしいではないか。とにかく、そのたのしみ方は、無限にちかいと思う。

本誌の代理部も今すこしワタを拡げて、こうした品物の取次ぎをやったらどうかなどと考えるのも、経営コンサルタントという本職のしからしめるところか。

ペンがいささかそれたが、森永製菓でだしている、「森永ハニー」という、蜂ミツのいれものもよい。

これは、ふつうのビールコップ大のポリエチレンの容器に、ネジこみ式のフタがつき、フタの中央には、赤ちゃんの哺乳ビンと同

じ『吸い口』がついている。

そういえば、哺乳ビンという品があるじゃないの、といわれそうだが、哺乳ビンだとかへ液体をとるのがめんどうで、われわれの特殊用途につかうには不適当なのである。

その点、ハニーのは広口だから、なかへいれやすく、いっぱいにしたらシッカリしたフタが、なかみを完全に守ってくれる。

試みに、私は、いちどこのハニーの空いた空器をあるところに持参、とってもらったことがある。

フタの中央の『吸い口』も、ネジ込み式でシッカリしており、あるていど保温力もありまずまず使用した感じでは満足した。

実物を、目でたしかめたうえでないのではイヤだとゼイタクをいうより、こうしたすぐれた代用品をドシドシとりいれて、空想をたのしむのを、いぜん、私は『ロマンティック・マゾ』と名づけて、体験を述べたことがある。すばらしいアイデアで、たのしんでもらいたいものだ。

チーズ

代用品といえ、こんな話もある。

東京で発刊の、レストラン関係のPR雑誌

『味の味』4月号に、一読食欲をそそられるチーズのあれこれを紹介されている。

ナポレオンの、有名なチーズのはなしはい、チーズの香いには、なにか女性と関係ふかい連想をさせられるが、外国には、すばらしいにおいを放つのが間々あるそうで、おしかな、あまりの強烈な『香り』が、日本人の口に合わないため、輸入はされていないが、あちらの趣味家は、この芳香にとりつかれてひそかに愛用するとか。

そんなチーズと、高級な化粧品を枕もとにおいて寝たら、最高のムードで酔うことができそうな気がする。

ほんものを追うばかりがプレイではない。平中だって、つくられたものに陶醉したのではないか。香りフェチのかただったら、こうして、芳香をもつ品々を集めて、その花園のなかにあそぶのも一興と思うが、いかが。

い　ろ

デパートの薬品売場で、パツタリ友人F君のおくさんと会う。目のきれいな印象的な人だ。めずらしいとこで会った。

Fとは親しい交際をし、その自宅へも五、六回はいつているので、せっかくのことだから、と、スペシャルルームのお茶に、さそった。世間話のすえ、ポツリと、

『あたし、アレルギー体質で、ふつうのかぜ薬ではだめなんです』

おくさんはい。十人に一人とかの特異体質で、かぜをひいても、よく効くというクスリでも、いっさいダメ。

『尿のなかに、なんとかいう物質がでるんだそうで、毎日の尿には、よく注意するようにいわれてるんです』

ドキリとすることを平気でいう。なにか、めずらしい病気のうたがいがあって、毎朝いちばんの尿を採り、これに試験片をひたして、色の変り具合をみる。

あらかじめ、医師に教えられているようにその試験片の色が、変色しなければ、その日は異常なし。

万一、赤とか、茶とか、試験片のいろに異常がみられたら、その日、なるべく早く来院するようにいわれてるという。

『めんどうなんですよ、その試験片が、ウチから一時間もかかる、このちかくの薬局にかおいてなくて』

買いおきの試験片を、使い切ってしまった

ので、きようは、はるばる仕入れに都心まで出てきて、ついでにデパートの内覧会をのぞき、そこで私と会ったわけ。

ハンドバッグから、わざわざその試験片をとりだして、見せてくれる。

プラスチックの筒におさまった、幸福なる試験片たち。うらやましいかぎり。

「おくさん、一々めんどろな試験片など使う必要はありませんよ。ボクが、そのかわりをやっただけです」

と、いったら、このうつくしいおくさん、どんな表情を示すだろう。

そんな空想をたのしみながら、頭からあてがれのもののなかに、たっぷり漬けられる幸福な試験片を見入る。ふと、ご用済み後のこれをほしいな、と思ひながら。

ストレス

『平凡パンチ』4月2週号かの特集からこの号のトップは、うれしやSMのトピックス。

こうした雑誌に堂々と、SだのMだのあれこれ、しかもデカデカとるのは、時代というべきか。

そのなかに、わがあてがれのものが、ちゃんとでてくるのだ。

あるわかい男性は、週に一回、これをたしなまないと、ストレスになるとか、大きいのを、口にする者もあるとか、一般人むけの読物だから、そう深刻には書かれてなく、むしろ、明るくおおらかに表現されているが、でも、やはり、こうしたところで、こうして活字になると、あらたな興味が湧くのが、うれしかぎり。

マンガ

これも『週刊マンガサンデー』5月15日号から。この号では、杉浦幸雄の作品が、三十ページにわたり特集されている。

そこでは、ママが堂々と便器にかけていたり、男子禁制の女湯風景があったり、

『結婚記念日、さあ、はずかしがらずに！三年前に、ここで君を見染めたんだから』

という説明いりで、赤ちゃんをおぶった、

おくさんが日本式トイレ（水洗ではなさそう）を、いまや使用する寸前のところを、ハズ氏がはきだし口から見上げていたり、

『たのしきバス旅行』というページでは、

『どうだ、オレの計画はよかったろう』

『うん、途中でもっと飲料水を仕込もうよ』と会話いりで、かぞえたら、十六人の女性

が草むらで思い思いのポーズで、排水作業のまっさい中。マンガとはいえ、ぞくぞくするようなシーンである。

このごろは、とかく一般人むけの本や雑誌に、こうした傾向が、さかんにとりあげられる。流行というべきか、それとも、おとこの郷愁というべきか。

ただ、それら作品の作者の眼や、理解のしかたがちがうのは物たりない。

興味本位に扱うのだから、深みがない。私はこうしたものをみかけると直くスクラップするが、このごろは、けっこう忙しい。

紙包み

私の事務所は（といっても五坪位の、ささやかなものだ）国電飯田橋駅ちかくの高台にある。

鉄筋四階建、一階が事務所、二階以上は住宅のゲタばき。四世帯が住んでいる。

つい先日、下水の配管工事があり、作業の必要上、二十四時間、いっさい水の使用をストップの、お願いがまわされた。

水道はもちろん、トイレも使えない。いちやく、三世帯は、ホテルや知人宅へ、一と晩逃げこんだが、一人ずまいの白人女性だけ

が行き先がないとかで残留した。

この女性、丸の内の貿易会社につとめるキーパンチャーだそうで、美人というほどではないが、白人女性にやわい私には、雲の上の存在だ。

彼女、表札には、サリー、とか、かわいい名がでている。アメリカ人だそうだ。

さて、断水が終った、あくる日の朝。

出勤するミス・サリーが、階段をおりしなに紙包みを一個、ポリ容器にすてていった。平然とした表情でアイサツしながら。

さて、なかみはなんだろう。外食のミス・サリーだから、ふだん出すごみの量は、すくない。それが、偶然にもすてるのを目撃したことから、私の好奇心は湧いた。

階段に、ひとけのないのを見すごし、すばやく、それをひろい、部屋にもちかえる。

念のためトイレに持ち込み、ドアに錠をかけて、おそろおそろ開いてみた。

ショックだった。

ふだん、あこがれてやまぬミス・サリーのそれが、外字の月刊紙に無造作に包まれているではないか。

新聞紙は、しっとり濡れ、想像したほどの臭気はない。

私は、まじまじと、捧げるようにした両手の上の、それに見入った。

チャンスは、正に今をおいてない。

でも、どうしたとか、いつものようにすなおに手がでない。

というのは、管理人のはなしでは、ここ二三日、サリーの男友達がこっそり泊まったらしいのだ。

契約の居住者以外は、宿泊できないという取りきめを無視されて管理人は、おこっている。

だから、このサリーの落とし物も、一〇〇パーセント、彼女のものとは断定できないではないか。

その保証がないじょう、もしも泊りこんだ男のを始末に困って、こんな方法で処理しかんじんのご本人は、会社のトイレでも使われたら、目もあてられぬ。

多少おいしい気がしないでもなかったが、私はもっぱらながめるに止め、そのまま水洗で流してしまった。

流してしまったあとで、みれんにもしまったとも思う。

もう、こんなチャンスは二度とはこないであらう。だったら、よいいなことなど考えず

まっしぐらにかぶりついてもよかったのではなからうか。

まして、それが逆にまちがいなくサリーのものだったとしたら、チャンスをむざむざ逃がしたことになるう。

気のせいかな、かすかに、におう手のひらをみつめながら、私はくよくよとそんなことを考えた。

それにしても、断水のためとはいえ、日本人なら、ぜったいにこんな方法では処理しないものを、やはり外人はオープンなんだなあと感じた。

なぜならばごみでないものを、堂々とごみいれにすてる。

その物体を清掃車に乗りこんだ作業員が、手をよごして処理することは、サリーだって知っている筈。

知っていながら日本男性に処理させようとする、その合理性というか、無関心さはたいたしたものだ。

外字紙をひろげ、そこで、とったであろう彼女の姿体をおもいうかべつつ、私はおもいにふけた。五月一日、メーデーの朝のできごとであった。



浪花談

続・けったいなほんまの話

能美

積

最近の大阪では、一時悪名の高かったダンブカーに代って、質の悪いタクシー運転手が問題になっている。私に言わせるとタクシーの運転手なんぞは、今でこそ大きな面をしているが、一昔前であれば、いわゆる雲助、なのである。雲助どものたちの悪いのは当然であって、相手が相手なら、利用する客の側もまともに付き合っただけ必要は無い。もっとも、運転手にもピンからキリまであって、私のように品行方正な？ 者もいるし、手のつけられない野郎もいるのだ。

うちの社では、そういう不良運転者は極力使わないようにしようということになってい

るのだが、御承知のように人手不足だ。免許証を提示して、使ってくれと行ってこられたら、会社としては必ず使う。但し最初の一カ月間は臨時の形で採用する。そして三日位はその道のベテランが側乗して、指導しながらその人のテストをする訳だ。

調私のような、口うるさいベテランは、其の指導の役を仰せつけられる訳であるが、大阪市内のタクシー会社は、総て渡り歩いたと云ったような連中は、実に人をだますのがうまくて、仲々、本性を現わさないものだ。したがって本雇いになるまではおとなしくしているが、実習期間を過ぎると、人が変る。本

採用にした以上、組合にも登録され、さて誠にするととなると種々、うるさいのだ。

Sと言う男がいた。実習期間中、私が面倒をみて本採用にしたのであるが、お客さんから投書があった。『車の中に怪しからん仕掛けをしているから注意してくれ』というのである。一台の車を普通二人が交替制で使っているの、相棒を問い訊すと、『ルームミラーのことでしょう』という返事であった。

調べてみると、Sの乗務の際はルームミラーが本来の役目をせず、まるで他の方角を向いている。なんの事はない、ルームミラーと別に、客席の真上に隠し鏡を設置してあって

いながらにして客の状態が見える仕組みになっていたのである。勿論、女性専用のものであって、超ミニスカートから垣間見える、この世の天国を覗くのが目的であった。

運転手にも斯ういうタチの良くないものいるが、お客さんにもひどいのがいて、車の中でペッチングをやらかしたりするもんだからS君の工夫の程も解らないでもない。くれぐれも御注意ありたい。

Sに注意すると、彼曰く

「なにをいってるんです、書記長。これはねえ、お客さんの忘れ物を見つけてやる装置なんですよ」

と、ぬかしやがった。

忘れ物があると、お客さんに、いち早く教えてやる、のならいいが、次の客を拾う前に自分のポッポにいれてしまう、算段とみえたが、一応筋が通っているもので、誠には出来ず今日に至っている。それにしても、古参の人に聞いてみると、乗客のマナーが随分低下しているのは確かなようだ。特に若いアベックがひどいそう。私なんぞ最近余り乗務しなければ、随分めぐり会っている。テレビな女性には、随分めぐり会っている。例のグループ

プサウンズの登場と同時に、キャアツとたたまう、非常識な、こらえ性のない女性が、車の中でも、その本性を発揮する。奇クファン

その日の客は新婚さんであった。旦那の方はどうでもいいが、新婦は仲々の美人であった。

の諸君の中でも、Sのようにルームミラーを利用したい方もお有りでしょうな。

だいたい私は、客の顔を余り見ない事にしている。後部の客を見るより、車外を歩いている女性の方が観賞し易いせいもあるが、客は人間でなく商品とされているから、一刻も早く目的地に、運ばねばならない。ある時などは、客を拾ったつもりで走っていて、ヒョイとルームミラーを覗くと誰もいない。よくある事だが、客を降ろした後で料金メーターを還元するのを忘れて、弁償する破目に遇うことがチョコチョコだ。乗せたと思って走っていて乗せていなかった、のだと錯覚し、慌ててメーターを起して、手の上った客の側に停止した。処である。あれっ、どうしたの? という声。みると居ない筈の客がいた。なんの事はないお二人はソファアに重なっていたという次第。

たしかに女性は強くなった。そのサンプルを、運転手の立場から一、二紹介したい。

新大阪駅。御存知新幹線の終着駅である。

決って冗談ではない。運転手が客を拾う行先を指定される。その瞬間にコースを選定しなければならぬ。右折禁止、一方通行、進入禁止等々の道路が多いので、発車して、あすこを通過して、此っ方へ廻ってなんぞと考

新幹線を利用する位だから、社用族は別にしてお客さんも大変気がよろしい。大体運転手をしていると、チップが月に七千円位はあるものだ。例の、釣銭は要らないというものから、態々、別にくれる客も必ずあるし、前記したように運転手は柄が悪いと思われている故もあって、私などは、実に気持よく乗せてもらった」と言って余分に頂戴したりすることが多い。

えていたのでは商売にならない。指定される

と同時にコースは決まっていた、後は走りながら、別の事を考えているのである。だから時には斯う言う失敗もあるのだ。

話を元に戻そう。

新婚さんは阪急ホテル迄であった。小型車であったから料金百九拾円也、である。ホテルに着くと、私は日報をつけながら新婦の後姿を眺めていた。ドア・ボーイが鄭重に一礼して扉を開き、彼女を迎え入れる態勢をとった、処で、新婦さんが私の方を振り返った。見ると美しい眉が八つの字になっている。どうしたのかな、あんまり見つめたんでお冠りかいな、と思った時、

「君い、お釣りを下さいよ」

新郎さんに催促されてしまったのだ。全く私の手落ちであった。二百円を受取っていたから拾円也の釣を渡さなければならぬ。が長い間の習慣で、新婚さんは大抵内祝の意味でチップをはずんでくれる、すくなくとも拾円ぐらいは、という考えが私にあったのだ。あわてた私は急いで拾円を渡したとき、新婚さんが急ぎ足に戻ってきたのだ。

「あんた、なにしてんの」

「お釣りを待ってたんですよ」

「いくら」

「いくらって、拾円」

「冗談じゃあないわ、あたしの立場も考えてチョウダイ」

彼女の言いたいののは、ホテルの玄関で入るに立往生させられた事なのであろう。

「済みません」

新郎が頭を下げた。新郎がでありますぞ。

新婦は私に千円札を差し出して

「ごめんなさい、グズなんだから」

流石の私もあつげにとられて黙っていた。

新婦は、新郎を引き立てるようにして、ホテルの玄関を入っていったが。入口でもう一度振り返ってニッと笑った。これから第二の人生を踏み出そうという大事な夜を前にして、なんたるサンチャ。……私は新郎に心から同情して、彼の瞑福を祈ったのである。

男女一組が乗り込んで来た。

「その辺をグルグル廻ってよ」

と男客がいう。

こういう客の落着く先は、だいたいがさかさくらげと相場が決まっている。女が渋り、男が口説く。それも常識だが、最近のように性道徳が低下していると、嫌がる女を無理矢理連れ込む、なんて図は余り見られず、実に堂々たるものである。

々たるものである。

ところで、私が拾ったこのアベックは、まだ交渉が成立していなかったとみえて、車の中でクドクドとやりだした。どうやら女は神戸らしく、男は大阪。送って行くから一時間だけ付き合ってくれ、と言っている。その付き合う場所が問題で、深夜映画を観た後の時間であるし、ホテル以外には無いという訳。やっと交渉が成立して、お茶を飲むだけならと女が承知した。ホテルに入ってなんにもしない男なんている訳は無いから、グルグル廻った料金だけ、損をした勘定であるが、こんな場合は此の程度の出費も止むを得まい。適当なホテルを頼む、と男が言う。

序であるが一言、タクシーの運転手は大抵、さかさくらげとタイアップしていて、お泊りの客なら五百円、時間休憩の客で参百円というように連れ込み手当が貰える仕組みになっているので、彼女を同伴する場合には、ホテルの手前で降りて、自分で歩いてお行きなさい。安くあがる筈である。

さて私は車をホテルの玄関にピタリッと停める。

車の扉をあけると、狭い入口から嫌でも応でも中へ入る以外に出口は無いように停車さ

せるのも、芸の内である。折角、希望に胸ふくらませている彼氏たちを、此処まで来て彼女に逃げられたんでは同性としては可哀相だから、此の程度のサービスはしてやるのだ。

もったも、女性に同情して反対側から逃がしてやった事もある。彼女が脱兎の如くかけ出すと、その後姿で信憑性が読めるから後を追って拾ってやる。女性からは感謝されるが、男からは口汚なく罵られる破目になるが……。

その彼女は、「泊ったりしたら、お母さんに叱られるから待っていて下さい」と、私に言った。

冗談ではない、待ちメーターがあるにはあるが、状況次第ではどうなるか解らないアベックをのんびり待つ程、私はお人好しではないのである。したが、おもしろい話は結末をみないでは済まされぬ野次馬根性。結局、私は待つ事にした。

待っている間に、例に依って又しても横道にそれるが、私は表題に記したように、けったいなほんまのはなしをしているのである。この種のはなしはゴマンとあるが、出来る限り奇巧的話題を提供しているから、いささか荒唐無稽と思われるかも知れないが、実話で

ある。奇巧の読者に作り話をする程、私は悪くない。

さて二十分もすると、女の方が一人で出て来た。『彼がくるまで暫く待って欲しい』と言う。手持不沙汰であったから

「どうです、ご感想は」

といてやったら、フフッと笑った。どうみても其の道のベテランには見えないこの若い女が、僅か三十分足らずで、コトを済ませたとは考えられない。

云い忘れたが、このホテル普通ではない。いわゆるゲテモノ宿なのである。風呂が交っていて、湯口が男性のシンボル、湯槽が実に巧みに女性の象徴を形どってあるだけでなく各室に趣向がこらしてあって、鏡の間というのに一度お世話になった事があるが、総ての鏡がマジックミラー。顔が長くなったり、胴が短くなったり、ケラケラ笑っている間に、なんとなく打ちとけて、スムーズにむつかしいことが運べるという長所があり、他にもベッドが回転したり、私好みのそのものズバリ変態用の室もある。

十分程も待ったが、男が現われない。

「どうしたんです、彼は？」

「そうねえ、……解けないのかしら」

「とけないって、何が」

女は、フフッと笑って

「あの子、いきなりキッスしようとするの」と言った。

「そりゃあ、あんた。此処まできたら接吻ぐらいさせてやらなくちゃあ可哀相ですよ」

「そうね。でもよ、キッスだってなんだって許してあげるけどさ、こんな処に連れてきたら、もう自分の物って思う根性が嫌なのよ」

「そんなものですかねえ」

「当り前よ。だってくせになるもん」

私は、ルームミラーの中の彼女の顔を、しげしげとみた。これがつい先刻、泊ったりしたらお母さんに叱られる”と言った同一人物だとは、とても信じられない。

「それで、どうしたんです」

「彼ね、床に両手をついて、愛している、君の総てが欲しいって、そういうの」

「……………」

「だから、少しからかってやったのよ。私がシャワーを浴びる間、温和しく待っていたら許してあげるって」

「……………」

「壁に種々な道具があるのよ、手錠とか足にはめる鎖とか」

「……………」

「それを嵌めてやったの。そして私が裸になったら、女王さま、っていうの。フフッ、馬鹿みたい。ネ、そうでしょう」

私は情けなくなった。元来、手錠とか鎖とかいうものは、女体に使用するもの、むくつけき男に似合う筈がない。

「それで、どうしたんです」

同じ質問を、私はした。

「どうしたと思う？」

「……………」

「なめさせてやったのよ」

「……………」

「彼、私の足をペロペロやってたわ」

「それで、どうしたんです」

「それで終りよ。今夜、彼に許すのはそこまです。後はこの次の楽しみにとっとくの。それで充分だわ」

私は、全くあきれけえったネ。女もだが、その男野郎もぶん殴ってやりたいぐらい。

「玩具の手錠でしょ。すぐ解ける筈なのに、なにしてんのかしら、あの人」

そして女は、又、フフッと笑った。

「男なんて優しくしたらつけ上るんですよ。うんとこらしめておかないと」

「お客さん、九百八拾円貰います。ゼニを払って降りて下さい」

「あらっ、どうしたの」

「どうもしません。ただね、あんたみたいな女、僕の性に合わんのです」

「……………」

「彼はね、君を抱きたいばかりに、君の要求に応じたんですよ。今頃は口惜し泣きをしていますよ。あんまり男を甘くみるといて下さいよ。大きな面をする程、あんた美人でもない」

「……………」

「失礼だが僕に言わせると、あんた程度の女ならその辺にザラにいますよ。でも彼にしてみれば美人にみえるんだな。君が欲しくって仕方がないんだ。そいつをコケにするなんておもしろいところだ」

「……………」

「さあ降りて貰いましょう。胸糞むなくそ悪い」

客の女は黙っていた。

「降りなさいよ、他の車で帰ってもらおう」

「ご免なさい、おじさん」

「僕にあやまったってしゃあないですよ」

「あたし悪気はなかったのよ」

「……………」

「もう一度戻るわ。お金、払います」

「戻って、どうします？」

「あやまる……わ」

その後、どうなったかは私の関知しないことだが、この女性、決して異常ではないのであって、こういう風に、初めて彼氏とホテルに来て、彼氏を手錠、足枷で拘束して、おまけになめさせた、なんぞということを平気で仰有る女性の心理が私には解けないのだ。つまりは、女性が強くなったという訳けなのだが、それにしても女性本来の羞恥心が、まるでないのは気に入らない。女が強くなったという事は、それだけ男がだらしないのだから止むを得ないとしても、矢張り女性には女性らしい、はにかみがあつたほうがいいように思うのだ。羞恥心のない女性なんて、私にいわせると無価値に等しいのだ。

つい此の間も、三人づれのハイティーンガールを拾ったが、

「あたいこの頃、オッパイがたれさがった気がするの。それに乳首にさわるとものすごく痛いよ」

「あんた、変なことになったんちゃうか。そやったら、早いとこ始末せんと、四カ月すぎておろしたら、お乳が出るそうやでえ」

なぞといている。びっくりしたねえ、ほんまのはなし。ルームミラーの位置をかえてお顔を見直したら、どうみても十七か八。その道の商売人では勿論なさそうである。

「あら、おっちゃん。みてんのね、エッチ」
「そんな子供のべっちゃんこのをみてもしやあないやんか」

「なにいうてんねん。べっちゃんこか、どうかみせたるか……」

「ほな、ちょっとみせてんか」

「みせたるけど、ボイーンやったらどないするねん」

「車代ただにしとくわ。ええカッコウやったら、コーヒーぐらいおごるで」

「ほな、みせたる。どこぞで停めてえな」

これが一周りほど年の違う私と小娘との会話なのである。飛田（プロ）の女とではありませんぞ。暗い処でたっぷり拝見させてもらったが、大きかったです。

はなしが例によって脱線したが、要するに恥かしくもなんともしに、そういうことの出来る彼女らに私はげんめつを感じるのである。えっ、なんですって。そりゃあまあ、悪いことはおまへんけど、やっぱり女としては大切にすべきもので、矢鱈とみせるもんじゃ

あないです。

おまけに、もう一人、勇敢な？ 強い女性を紹介しよう。

私は大型特殊免許を持っているので、非番の時を利用して、万博の敷地造成工事に時々出掛ける。キャタピラ付のショベルカーを運転して夕方五時から十時頃まで山を削って整地作業をする。と参千円程の日当になる。女房には、ちよいと散歩にという事にしておけば帰りには現金で支払われるから、かつこうのみしろになるというわけだ。大阪の方なら御承知だろうが、万博開催地は千里丘陵という、いわば山の中にある。万一の事故に備えて二台のカーが、一定の距離をおいて作業を進めるが、それこそ人っ子一人の姿もない淋しい処だ。それでも時々、物売りのおっさんが現われたりする、或る日、若い娘がやって来た。信じられないようで私は、狐狸こりのたぐいではなかるうかと真剣に思ったものだ。

娘は、私がエンジンを停止して車を降りると、チューインガムを差し出して、バカになれなれしく世間ばなしを始めたが、その内「一枚でええねん、遊んでくれへんか」とおいでなすった。つまり手持ちの品を売

りに来たわけである。

年をきくと二十一だという。私は千円を渡し、この広い山中でならさぞかし爽快であるうな、とは思ったが、どうにもその気になれなくて、千円分だけ世間ばなしの相手をしてもらう事にした。きくと五月一杯で赤線地帯が廃止（作者註、大阪に隣接した兵庫県に全国的に有名な赤線で初島、神崎という処が現存していた、売春防止法など有名無実で、私など知人の親爺人けったいなほんまのはなし参照）と縛りプレイを楽しむ為（に日参した）になつて、喰えなくなつて、万博工事に目をつけたのだそうである。

彼女の着眼に私は感服した。然も一人で飯場の連中が不自由しているのではないか、と思いついた。というのであるから、大した商才である、と思うのである。

彼女は、商売をするのは土方に限り、学校の先生はいやらしいことをするので嫌です、と真面目な顔でいうのである。特に三、四十代ともなると、することがえげつない。そこへゆくと若い人は必要止むを得ずやってくるから精一杯サービスをしています。等々。一時間余りも私の質問に応じてくれたのである。揚句には、サツと横になつて

「おっちゃんかて、エエカッコすることないやんか」

という。そこで

「おっちゃんはない、ちよいと交っててな、女の子にサービスして貰うより、いじめるのが好きなんや。いじめさせてくれるか」

といったら彼女、急いでとび起きて後退した。無理もない、広々とした荒野のただ中、なのだから。

「いちいち交渉すんのは、しんどいわ。もう諦めてかえろか」

私は、なんとなくあわれに思えて、愛用の単車で彼女のためにセールスをして歩き、三人ほどだが注文をとってきてやった。後で、日当を貰った連中から一人千四百円ずつ集めて、彼女に渡すと、

「おっちゃんみたい、ええ、人知らんわ。思い切って、ただでいじめさしたる」

と、けなげなことを言う。大体一時間程で三人の客をまかなった筈であるから相当疲労の色が濃い。お断りしておくが私はやくざのヒモよろしく彼女に売春をさせたわけでは決してない。仕事が済むと単車の後ろに彼女を乗っけて市内に戻り、序でに馴染みのバーでごちそうをしてやった。彼女、注文のにぎり

を食べ終るとカウンターのの中に入って、お客にサービスを始めた。私はなんとなく微笑したものである。

店の名は「いこい」という。安くて、ママが美人なことで繁昌している。私も常連の一人であった。

たしか五月頃であったと記憶しているが、春斗（去年）で追い回され一月ほど遠のいていたが、久し振りに銭が入って飲みに行ったと思はし召せ、彼女がいたのである。びっくりしましたねえ。もちろん、あの夜以来のご対面であって、働いていたとは夢にも知らない。

「ノーさん。保証人は一応あんたになつてんのよ。彼女、大丈夫なんでしょうね」

ママに言われて、二度びっくりである。

「はじめまして。広子っていうの。どうぞよろしく」

彼女、しゃあしゃあとしている。一カ月ほどなのに仲々の売れっ子振りで、ここでも商才をいかんなく発揮しているようである。ママは私さえ保証してくれるのなら、居て貰うつもりです、というのだが、とんでもない話である。かんばんまでねばって、私は広子を説得したが、絶対に迷惑はかけないという。

「それにしても俺の名前、よく覚えていたなあ、おそれいった女だ」

「一度きいたら、絶対やわ、ほらあの事も」

「……………」

「おっちゃん、ママと関係あるのん」

「馬鹿を言え、ママの旦那と知り合いだ」

「だったら保証人になってチヨウダイ」

「困るよ、それは。助けてくれよ」

「その代り、おっちゃん。あれやらしたる」

「あれって、なんや」

「ほら、へんてこりんなことやんか」

ギョツ、である。バーでの私は、あくまでも私であって能美積ではない。だからといって広子にシッポをつかまれている訳け、という程の事もないが、とにかくアレを口外されては絶対に困る。結局、今すぐ騒ぎを起すこともなさそうだし、その件は一応うやむやにしておいて店を出た。

それから三日後、私は再び「いこい」に出掛けた。近くの喫茶店によび出して、店の主人と私との関係をくどくどと説明し、町重に保証人を断わったのである。広子は案外素直に納得してくれ、店に戻った。ママにはなすと、

「いいわよ、そんなこと。店がきにいいい

るようだから。うちだって助かるし」

「しかしね、彼女の事についてなにもしらんのだし、もし盗へきでもあると迷惑をかけることになるからねえ」

「盗られるもんなんかありませんよ。それにああいう処で苦勞してきた子は、しっかりしてるから」

「知ってんですか、彼女の前身？」

「本人からききましたわ。店の名を傷つけるような事は絶対しないって約束してるし、ノ一さんからそのことだけを注意しといて下されば、後は私がなんとかします」

ビールを呑みながら、私は広子を觀察したが、成程客扱いが上手く、元赤線出身とはど

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

うしてもみえぬ愛らしさ。まして、単独で万博に協力するような名案を考えついた女丈夫にはとても見えない。暇をみつめて寄つてくると

「そない、じろじろみらんといて。お店がはねてからママにはなします。でも今は営業中なのよ、だからいいでしょ」

「適当な保証人はいないのかい」

「奄美大島なら両親がいてはるけど、保証人なんか、なつてくれへんわ」

「そんな遠くからなんで一人で出て来たの」

「きいて、どうすんの」

「次第によつちやあ保証人になる」

「ほんと……じゃあ、はなす」

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮て御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇く編集部▽

「今でなくていい。そうなれなれしくすんなよ、あっちのお客が睨んでるやんか」

それから半年程あとで、私と広子は奇妙な関係になってしまった。私は日記なぞつけないが女房がつけている。夫婦喧嘩、それも痴情が絡んでるので三頁にわたる大作になっているから、一生の記念になるそう。広子に好きな男が出来たらしい、とママが言ったのは、勤め始めて三月ぐらい経てからであった。相手は某製薬会社の課長の息子で、いつも開店早々にやってきて、ビール一杯(中瓶)呑むと真っ赤になり、後は店の子に腹一杯喰わしたり呑ましたりするそうだが、上客といっても此の種の客は警戒を要する。店の子と交な事にならねばよいが、と心配したママは男あしらいのベテラン？であり、男なんかには絶対だまされなれないという広子に、なるべく相手をするように頼んでいたのだが、ミイラとりがミイラのたとえで、広子がおかしななった、という訳けだ。

一度その男に会ってみて様子を探ってほしいとママはいうが、私は別に気にもとめてはいなかった。処女ならともかく広子が男にだまされて肉体を奪われたからって、どうとい

う事はないのである。客と関係が出来ると、ママは女の子を解雇する規則にしていたから問題があるとすれば広子がやめるという事であらう。

「アラッ、うまい処に現われたわね、あたしの保証人のおっちゃん」

その日の広子は、しこたまきこしめしていて、ろれつがまわらぬ。

「今日限り、やめるわよ」

「そりゃ又、どうしてだい」

「ママがそういうの、出ていけって」

そのママも、ヒステリー気味であった。

「ノーさん、お願いだから連れて行って。お客さんの迷惑になるのよ」

「よっしゃ、解った。広ちゃん、出ようや」

よたよたしながらも広子は、ママに買って貰った着物を脱いで、出ていくんだ、とわめきちらした。ママが小声で

「捨てられたらしいの。可哀相だけど、あなた、良くいいきかせて、納得させたげて」と言った。外に出ると広子は、ホテルへ行く、というなり、私を振り切って、さっさと歩く。そして時々振り返っては、

「なにしてんのよ、すけべのおっちゃん。早よおいでえな。抱かしたるわあ」

と大声で怒鳴る。酔客ばかりとはいえ、素面の私は通行人にげらげら笑われ、頭に血がのぼった。広子は勝手知ったる歩き方で、ホテルに入ると、

「ワンタイム。おっちゃん、お金払ってよ」という。室に入るとベッドにでんっと引っくりかえって

「さあ、抱いてんか、……」

私は黙って酔態を眺めていた。

「そうや、忘れるとこやった。おっちゃんは抱くのん違うのやろ、いじめても構へんで」

冷蔵庫からビールを出して、勝手に私は飲み始めた。

「なんや、よういじめへんの。神様やあるま

いし、ええかつこうせんときいな」

このぐらゐ毒ずかれれば、誰だってその気になるだろう。私は矢庭に広子をひっくりかえすと、着ているものを引っぱいで、後手に縛り上げ、序でに脚も括っついておいて

「男に振られたぐらゐで、ギアギア騒ぐな、このどすべた」

横っ面をひっぱたいてやった。広子は私をねめすえていたが、間もなく、わあわあ泣き出した。縛られた女ほど美しいものはない。

私は、いつか広子に見惚れていた。

社から帰ると、女房が若い女と向き合っている。顔色が硬ばっていた。

「お客さんかい」

そう声をかけておいて、私は洗面をすまし朝酒を飲んで寝るために、もう一度室に戻ったが、あっと息をのんだ。客は女ではなく女みたいな服装の男であった。赤いスエーターにスラックス姿のその男は、じっと私をみつめていた顔が真っ赤である。みるとビールが一本、空になっていた。

「君は、一体、誰なんです」

「おばさんにきいてください」

「おばさんって？ 女房のことかい」

「はい、そうです」

「冗談じゃあない。うちの女房は、まだそんな年じゃあないよ」

私は笑ったが、内心笑いごとではないのである。ビートルズスタイルのこの吐き気の出

ような若者と女房との間に、なにがあったというのであらう。まさか亭主の眼を盗んで間男なんて。そんな殺生な。が、女房の顔は尋常ではない。夫婦の縛りプレイにすっかり馴染んで、そろそろ赤ちゃんが欲しい、なんぞとのたまう女房が、秘かに縛られることに反

抗心を抱いていて、間男をするなんて、そんな無茶な。

「なにがあつたか知らんが、説明してもらおうじゃあないか」

「おじさん、あんたが悪いんです」

「私が？ なぜだ」

「甚いことをしたじゃあ、ないですか」

正直なはない、私はくらくらと目まいを感じた。ああなんちゅうことかいな。私はび動だもせぬ女房に怖れをなして、自分でビールを取り出し一本空けた。さんすくみのだんまりは、その間つづいていた。

「とにかく私がなにをしたかは別として、それをとがめだてする君は、一体なんだい」

「ぼくは広子と結婚するんです」

「広子……な、なんだって」

女房の間男のうたがいは晴れたが、どえらい事になってしまった。その日遂に私は一睡もさせて貰えなかったのである。

教訓、ただより高い物は無い。

広子と彼とがもめたのは、ポンポンが大きくなったので都合が悪い。式を挙げるまでに流せ、という彼と、ノーという広子。前記した強い女というのは此処である。のみならず両親の（男側）反対を押切って結婚に踏み切

り、その上、仲人をこっちに持ってきたのは恐れいったネ。

「君の事、全部知っているのか？」

「知らないでしょ。はなした方がいいかしら

ママは隠してもいいっていうんだけど」

「止めとけ。それよりなんで俺とホテルへ行った、という事をしゃべったんだ」

「ご免なさい。おどかしたの」

「君とは何でもなかった。そういつてある。それもそうしとくんだな」

式は公民館を利用して、三万円で挙げた。

列席者は、私等夫婦、彼と彼女の友人四名だけである。それでも、もうすぐ二世が誕生する筈である。

房代との結末をお約束していたが、とうとう空手形に終り、誠に申し訳ない。深くお詫び申上げる。元々、私と房代との痴話喧嘩の結末などどうでもいい事で、このおはなしが掲載される頃は時効になってもいる事だし、代りに馬鹿ばなしをもう一席ぶっておひらきにさせていたきたい。

非番の夕方、事務所で帖簿を整理していると、大切なお客があるから箕面まで（野猿で有名な処）送ってくれ、という。空いている

車で一っ走りして帰路、黒人が手を振っているので一応、停った。非番である旨説明し、町重にお断わりしたのだが

「ミナト」

といって乗り込んで来た。途中いろいろ会話をぶつてみたが、まるで通じぬ。そのくせ盛んにわけの解らぬ言葉をしゃべる。

「港のどこにつけるんです」

「おお、ハーバー。ね」

学生時代習った記憶では、たしか港はハーバーであつたと思うから、弁天埠頭に直行して、「へい、ハーバー、オッケイ」と言ったら、

「ノン、バア、バア」

といって、ものをのむ仕種をした。なんの事は無い、バアに行けというのである。バーと連呼するから錯覚したのだ。Uターンしたら、ブシュンツとパンク。

「おお、パンクね」

降りてきて手伝おうとする。パンクつてのは英語だったのかな、と思案しながら、人のよさそうなこの黒ちゃんにすっかり魅せられ道路にぺたんつとへたりこんで

「酒をのむのなら、なにもこんな遠くへ来る事はあるまい、近くでのめばよいはず」

と、手ぶり、身ぶりよろしく解説したら、外人のいない外人ばかりの店で外人が一人でのものは大変怖い、というややこしい結果が出て、

「ユウのような、ジャパンの友達が案内してくれると、是非行ってみたい」

という。これだけを了解するのに三十分はかかったろうか。例によって物珍しのが好きな私のこと、国際親善に一役買おうと

「ヘイ、ハイボールサービス、キャマン」

とやったら、単語の継ぎはぎですぐに通じたようである。車を走らせ始めてすぐ

「オウ、ユウ、ヘイ、ヘイ」

という、みるとストリップの立看板。日報の白い個所を指でさし

「白いボインの体、みたいんだろ、その気持ちよくわかる」

とやったら、日本語？ で「ウッフッフ」と笑った。

二人分二千円の出費は痛い、案内しているのだから礼金ぐらいははずむだろうと、さもしい考えは胸の内。駐車場に車を放りこみ、遊んで帰る、と社に電話をしておいて劇場へ入った。三番目かに特別出演の青い目の踊り子が現われて、踊りながら黒ちゃんとペ

らぺらやる、私にも「通訳さん、タイヘンですネ」とはなしかけ、値段以上に商品を披露する出血サービス。

次は残酷ショーであった。悪家老が三人の腰元に、殿様の意にしたがえと強制する。嫌だというのを一人ずつ拷問にかけ、遂には皆殺しというえげつないもの。それでもやたら露出過度におちいらないう、長襦袢をうまく使って手を代え品を代えての責めせっかん結構見せた。黒ちゃん、手を握りしめての観賞で、一回終っても周囲の客が帰らないので、まだあるのだろうと動かない。結局もう一回観ることにした。最初に責められる役の女が、失神したの思い入れよろしく私の前どころがって

「兄ちゃん、好きそうやなあ二回目やんけ」という。俺はどうでもいいが、黒ちゃんが態々観にくるほどのお熱だから、精々サービスしてくれや、とたのんだら、はあはあえいで、縛られたまんま転がってくれたのには堪能したね。

踊りの場面で、その子が自家製のものを、一本ぬいて和紙に包んで黒ちゃんに渡したり家老にふんしたコメディアンが、

「許して下さいだと、なにぬかす。外人にも

わかるようにあやまれや」

「英語でなんというのよ」

「許しては知らねえが、勘忍ならアイアムソーリイカムカムてえんだ。な、そうだな」

とかなんとか冗句をとばして、客はゲラゲラ。黒ちゃんもすっかりご満悦の様子であった。劇場を出て階下の一杯屋でホルモンを喰わしてやった。店の親爺にしきりと質問しているの、親爺が

「通訳さん、なんていってらすんです？」

「ホルモンてのは、どうしてホルモンていうかきいてるよ」

「そうすねえ。なにね、内臓は昔、人間さまは口にしなかったでしょ。つまり捨てるもん、ほうるもんだから、ホルモン」

嘘だかほんとかわからないが、腹を抱えて皆で笑った。最後は馴染みのバー。落着く処に落ちつかないと、私は一滴も呑めないのだから車を車庫にいられてタクシーを拾う。最早、損得はぬきで、一言も通じないくせにすっかり意気投合したから不思議である。

酔う内に黒ちゃんは、踊り子から貰った例の土産をみんなに見せた。が中味ではなく、どうやら和紙がお気に召したらしいので、頼んで上等の懷紙をどっさり買ってこさせ進呈

S.C.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

すると、まるで貴重品でも扱うように一枚をぬきとって香料をかきながら唇にあてる。ホステスが自前の風呂敷に包んでやると、どういう訳か、涙をうかべて感激していた。タクシーで拾った処まで送って別れようとしたが襟首をつかんだのはなさない。肩を抱いているつもりだろうが背丈が違いすぎるのである。中米の×××共和国と書いた領事館らしい処まで連れてゆかれ、迎えに出た日本婦人の通詞で、いろんな事をきかせてもらった。「お礼ではなく、支払って貰った代金を取ってほしいそうです、帰国すれば日本円は不要ですから取って下さい」

という、帰りの車賃をふくめて二割ほど余分にいったら、それ以上出してくれて、ほんのちよっぴり、胸が痛んだ。

「それにしても、人生最大の感激だったと喜んでいきます。バーにいくというから心配していたのですが、どこを見せていただいたんでしょう」

「ざんこくショーです」

「はあ？」

「じゃあ、バイバイ、お休みなさい」

黒ちゃんは、私の手をしっかりと握った。

(おわり)



——女性乗馬——

アマゾネス考

佐野 寿

「アマゾネス」又は「アマゾン」は古代ギリシャ語から由来したもので、古代ギリシャ人やローマ人が彼等の東に当る、つまり黒海北岸にいくつかの植民地を求め、そこで貿易を行った時期に、ギリシャの有名な歴史家ヘロドトスによって、当時としては克明に記され

ているのは有名な事実であり、アマゾネスの存在が単なる空想的かつ仮説的存在とは云い切れない。

最近の或るソ連の考古学者の説によれば、アマゾネスをスキタイ人と断定しており、BC五世紀にどこか遠いアジアから、ウラル山

脈とカスピ海との間の門戸を通過して東欧の平原に浸入し、コーカサス及び黒海北岸、西岸へ定住するに至ったことを示して居る。

スキタイ人と云うのは一つの集合体の名称をさしているもので、決して単一民族を指すのではない。勿論遊牧生活を送るものもあり、農耕生活を営んだものも当然あった。ここではすでに成長権が分化しており、奴隷制的支配を行い、相当大的な勢力をこの地方に占めて居た。農耕の器具は主として木製鋤が多かったと云われている。スキタイ人の中には後世のスラヴ人種の先祖も含まれていることがわかって来た。

去年の事だが、或るソ連の一考古学者が黒海北岸ドニエプル河口の町ニコラエフで一体のアマゾンの25才位の女の骨格と、そばに青銅製の両刃剣及びおのを発見し、更にすぐ近くに馬の骨も出て来て、研究の結果うたがいもなく古代の女騎兵隊の隊長にちがいないと断定しておる。副葬品として発掘された銀製の壺がスキタイ模様であったので、その証拠となったのであろう。又ブルガリヤのガリチ出土の数種の装飾品の中で、直径15センチ程の金属製の鏡の裏にスキタイ模様と一緒に、まぎれもなく女性の騎馬像が刻みこまれてあ

るのが発見された。又ギリシャの金属製又は土製の壺には、少々物語り風なアマゾンの戦斗模様の図柄が少くない。

彼女等はアルテミス、又はダイアナ女神を信奉し、多くが大きなかぶとを被り、両刃剣槍あるいは斧をし三日月形又は卵円状の盾を持ち、皆馬に乗りすみやかに移動し、戦斗に従事した。有名なトロヤ戦役にも参加した者もいたとされる。

よく伝説的に、弓を引き易くする為に片方の乳房を切り取ったことがもっともらしくいわれるが、今日の科学的見解ではそれは否定である。筆者自身もそうは思わないし、何も乳房を片方切らなくても充分弓を引け、馬にも跨れ、又戦斗行為はむしろ女性の男性化又は中性化を意味した文学的表現であろうとするのが妥当であろう。当時はよく衣裳を斜めに背^{かた}から下げ、その上に鎧をしていたので片方の乳房しか見えなかったのであろうと云う説もある。

又同様に『彼女等は女だけで集団をなし、仲間の数を繁やす為に同一族、又は他族の男性を急襲して子供をつくり、用がすめばそれ等の男性を殺すか一生不具にした……』とあるのも、当時実際そういうことが皆無ではな

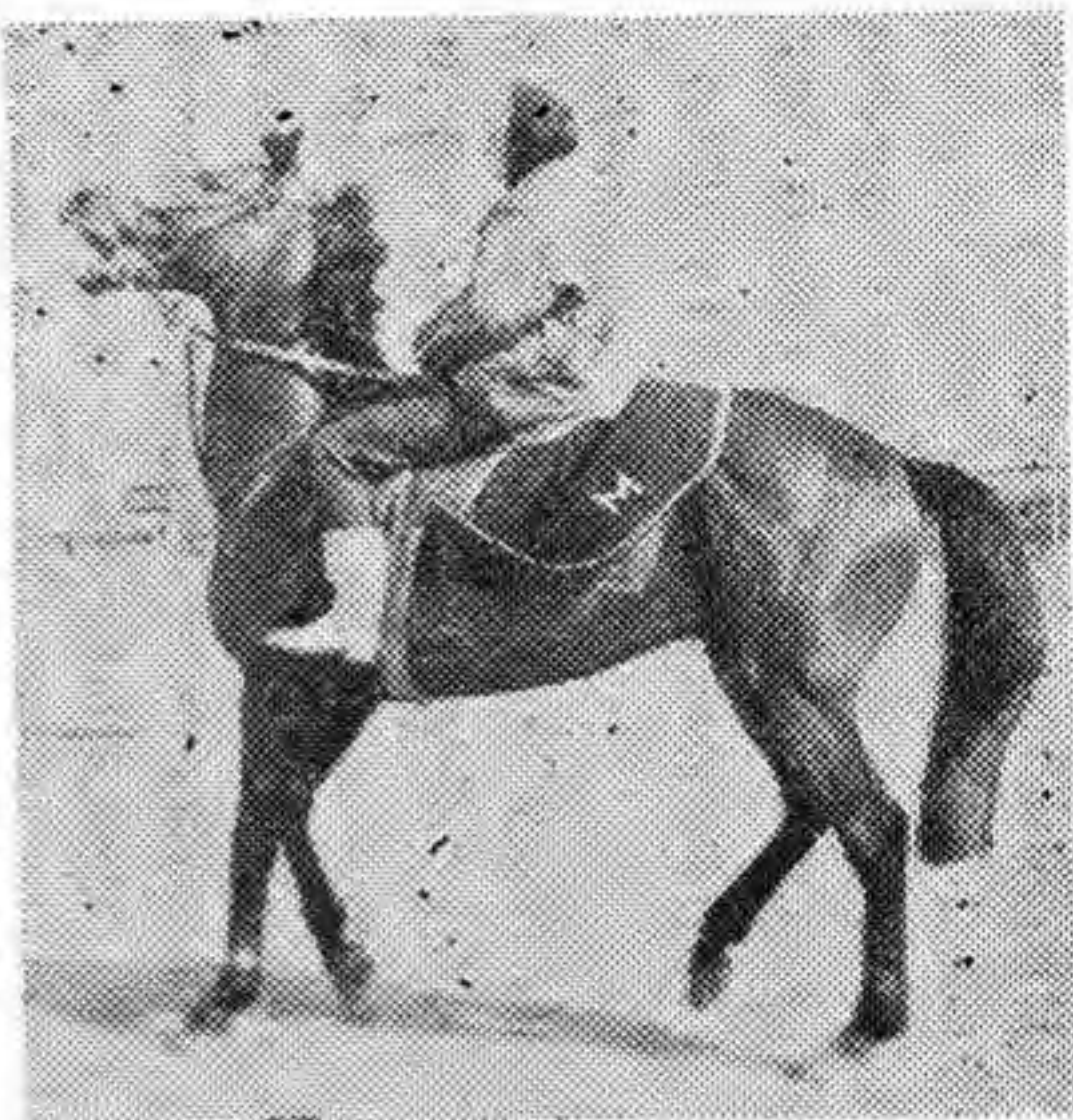
いけれどもこれも何かのたとえかおおげさな表現で、この民族では相当女権が強力であった事を意味するものであろう。当時の文明国ギリシャ、ローマ人の男尊女卑の習慣に従っていた人々から見れば、野蕃なスキタイ人の異教的風習はするように奇異に感じられた事であろう。つまり女性権力がアマゾンネスにあつては意外に強かつたのである。

余談になるが、今日の学説によれば世界で最も早く騎馬組織といわゆる乗馬用具を採用発明したのは外ならぬスキタイ人であり、その騎馬風習は、当時のあらゆる野蠻人も文明人にも影響を与え、特に有名なのは匈奴^{キョウド}族に影響を与え、後にゲルマン民族を圧迫し有名な大移動を起さしめ、中国では匈奴の漢民族の北辺をおびやかしたのも騎馬利用無しには考えられない。スキタイ人はじめて青銅製の鎧、くつわ、はみ、星状の拍車を作り、最初に利用したのである。当時ギリシャにもローマにも、騎手の足をのせる鎧や精巧なくつわは発明されていなかった。6世紀のゴードの歴史家ヨルダネスによれば、彼等の多くは白色に近い金髪^{キンヘ}の毛を持ち、又一部はアジア人の影響で多少暗褐色の髪をしていたといわれる。ギリシャの有名な詩人ホメロス又は

ホーマーは、アマゾンの女隊長の一人を「輝ける青いひとみ」と表現している。

彼女等アマゾンの集団が、よく当時のギリシャ植民地に出没し武勇をふるった事は間違いない。戦斗のない平和時の彼等の生業はやはり第一に牧畜で、牛馬はもとより、多くの家畜を有し、彼等のもともと住んで居た所、つまりドニエプル河辺は「家畜のために最も優れた最も整った牧場を提供しているし、その供給する魚類は比類なく秀逸で、かつこの上なく豊富であり、飲料水としても、これ程美味なものはなく流れは澄んでおり、その沿岸には最も優秀な穀物を産し、播種されない土地には牛馬に与える良質な草がぼうぼうと生い繁っている。さらに河口では塩が天然に産する」とヘロドトスが記しておるように、非常に豊饒であつた。彼等の墓所から各種の農具、馬具が発見されるばかりでなく、出土した壺の底に穀物の痕跡が発見され、その中には黍^{キビ}や燕麦が多いと云う報告がある。

『アマゾンのグループは、又狩猟にも大いに関心を持ち手工業も或る程度専門化され、製陶術、金属加工、武器や馬具の製造、特に部厚い良質の鞍^{クラ}や鎧^{ヨロイ}の製造、又彼女等を美しく飾る宝石細工、金、銀細工の仕事場の跡も今



日、考古学的に実証され、それも単に自家消費を目的としたのではなく、明らかにギリシヤ人等との市場を考慮に入れたものであることが仕事場の規模から想像され、平時は相当活発な商業取引も行って次第に裕福になり、金銀を所有し馬群や多数の武器を所有して居た」と、イオアンエフェスキは記述して居る。

アマゾネスがダイアナ女神を信奉したのも尤もな話で、騎馬生活で平和時は狩猟が成功する様に、又戦時は馬に乗って敵を撃破できる様に、その加護を女神に祈ったのである。

然るに、このようなアマゾン族も長く歴史に存続し得なかったのは多くの理由がありそのうちで考えられる事のかかなりの部分はゲルマン民族移動に際し同化されてしまうか、スキタイの男尊女卑が復活して女権がおとろえたか、又は不幸にして中央アジアから来襲する匈奴の様な蕃族に滅亡せしめられた一団もあろう。一部はローマ帝国の北辺エトルリア王国に入り、そこで尚活躍した者もあり、時々映画でおめにかかる場面が出てくる。

つい最近又見た「ローマの女戦士」なるイタリア、フランス合作映画で、主演は英国のシルヴィヤサイムスの演じた映画はそういった背景を我々に見せており、その一部は少なくとも歴史的事実と合致しよう。題は忘れたが数年前にもイタリア映画で古代ギリシヤローマ時代の女騎馬戦士アマゾネスを扱ったものを興味深く見たが、おそらくイタリア映画が最も上手に当時の状況を再現するテクニクを持っていると思われる。それは古代ローマとスキタイ等の北方蕃族アマゾンと共通な歴史、神話、伝説を有するからで、その活躍した土地も比較的地理的に近かったからであろう。特に「ローマの女戦士」には痛く

感銘を受け、筆者は風俗を研究する上でも、又そのような映画を見たいと思って居る。

余談になり恐縮だが、筆者はやはり六年程前にアメリカ映画「ハジババと四十人の女盗賊」を観賞したことがあり、美しい総天然色でうっとりさせられた。これは何かアラビヤンナイトからもじった様に思われ先述の「ローマの女戦士」程は歴史的背景は乏しいけれども、主役ハジババが荒野で四十人のうるわしい騎馬の女盗賊団に急襲され、連れ去られてしまうシーンが生々と記憶に残っておるがそこで一つ感心したのが彼女等の武装やいでたちが、ヘロドトスやギリシヤの精巧な壁画や壺の絵にあるアマゾネスの着用しているのと寸分のちがひもなく一致していた。又イタリア映画のにおとらず、女盗賊のアクロバットのような馬術がきわめて巧みで、大いに楽しめた。場所もペルシヤで起った物語りだから、スキタイ人のコーカサス辺とあまりかわらないからそうでたらめでもあるまい。彼女等はコーカサス山脈を南下し、イラン高原や草原で実際、武装盗賊団、又は武装商人として活躍して居たのに違いない。

成程古代アマゾネスの活動した時期は永続しなかったが、女性騎馬隊に関する別の物語

や伝説は他にもあり、イギリス、北欧、インド等にもある。インドには可成多数のものがあり、中でも「ウイクラマーデ王物語」にアマゾネスが多数出て来るとされる。又独乙とスカンジナビヤ共通の神話に、オージン主神に仕える軍神であり女神であるヴァリキュリアは有名であり、よくワグナー歌劇に登場するものである。女神ヴァリキュリアは白馬に跨り戦場を駆けめぐり、傷ついてたおれた戦士をヴァルハラと云う極楽へつれて行くと云うシーンは有名である。彼女はギリシャ神話の狩猟の女神であり、軍の女神であるアルテミスに対応するもので、卵形の盾と槍を持ち駿馬にうち跨って戦斗や猟におもむく。

近世におけるアマゾネス研究はドイツで盛んである。ミュンヘン博物館ではルーベンの「アマゾンの戦斗」なる堂々とした彫刻が飾られ、又ベルリンの博物館にはフォン・トアイロンの作ったアマゾネスの巨大な青銅製の騎馬立像が見る者を圧倒する。これは一八九五年に出来たもので、まわりにギリシャ風の柱の廻廊がある。又、H・V・クライストの悲劇「女王ペンテシレア」は一八〇八年に完成したものであり、トロヤ戦斗の際のアマゾンの女王の戦死を画いたものであり、又、オ

ペラでは一九二四年にドイツのシェックが同じくペンテシレアをテーマにしている。

しかし、なんと云っても彫刻像のオリジナルは、古代ギリシヤのパルテノン神殿から出たフイジアスや、ポリクレトの女神アテナとか、女王ペンテシレアの大理石、及び象牙製の立像であらう。後世これにならったものがヨーロッパの各国で続出するようになり、あらゆる芸術の上でのこの上ないうるわしい觀賞の対象となったのである。

更に最近、アメリカやイタリアの豪華な総天然色映画として、総合芸術として無数のエントウメント（娯楽のこと）を我々に提供してくれるようになったし、又、考古学の発展のお蔭で、更に史実に即したアマゾネスの描写が可能になり、ますますアマゾネスの存在が史実として、把握できる様になってくれるのである。筆者がエンサイクロペディア、ブリタニカで確かめたことによればスキタイ人のみでなく、サルマチア人の中にも勇猛な女武族が実在していることが書かれており、ヘロドト



スの歴史記述と合わせてアマゾネスの実在が肯定できよう。彼女等の活躍範囲は、やはり黒海北岸からずっとギリシヤ、ローマ植民地にひろがり、なかななくギリシヤ人にとっては彼女等のしつこい襲撃は恐怖の的であつたろう。女王ヒッポリュテが最終的にギリシヤの英雄ヘラクレスによって帯と下着を脱がされ征服される迄、ひんぱんに侵略が続いたと述べられている。又、小アジアのエペソ迄アマゾネスは軍を南下させ、そこでアルテミスの神殿を築いたことも、新約以後の使徒パウロのエペソ伝道の記述にあらわれ、又、証明

もされている。

新約聖書のパウロのその記述から見ると、エペソの町は性道徳が極めて廢頹しており、アマゾネスの以前信じたアルテミス信仰は、全くエクスタシー的な性的無秩序な女性群の行っていたいかがわしい宗教であり、エペソの人はキリスト教で禁じられている偶像崇拜を行い、好色この上もなかったと云われている。パウロはそこで、人々は金で女神を鑄造してアルテミスにささげ、日毎これを拝んでいたと記している。キリスト教の初期においてはきわめて禁慾的、戒律的であったので、これが広まるとアマゾネスの行っていたアルテミス信仰は自然になくなってしまったのであろう。又、古代キリスト教では女性が男性を尻に敷いたり、男性を支配したり、いわゆる馬に跨ったり、飲酒をして好色にふけることを嚴禁したのにちがいない。

それから中世の暗黒時代を通じて女性騎馬は蔭をひそめてしまったし、ルネッサンス時代でさえ、女性はヨーロッパでも馬に乗る時は横に腰かけ、変に不自然な婦人鞍を使わなくてはならなかった。19世紀も後半になってやっとスポーツとしての女性乗馬が許されるようになり、普通の鞍に男同様に跨る様にな

ったのは、やはりヨーロッパでも一番最初に女性解放の行われた北欧あたりからであり、例えばスウェーデンでは一八五八年にグレンワルによって、はじめて婦人乗馬クラブがあらわれ、その面で完全に男女同権になったのである。

しかし同じヨーロッパでも、或るカトリック教国では婦人が昼間堂々と馬に跨って町を歩くことは、男性を極度に刺激させるので禁ぜられ、ごく田舎で、しかも夕やみせまった頃、頭布をかぶって乗馬をするのに限られていた様である。

二十世紀に入ってから、どんな大胆な婦人の乗馬も非難されなくなったのである。婦人の水着の解放と並んで、これは特にカトリック教国よりプロテスタント教国の方が大胆に、新しい事を積極的に取り込むのは事実である。又、一九一四年に第一次世界大戦が始まるや、フィンランド等北欧諸国では婦人義勇兵の組織が出来、看護兵としてのみならず一部婦人騎兵とし、連絡や補給の手伝いもするようになり、軍馬や軍用犬の世話とかオースドックスな、そしてきびしい乗馬訓練が行われる様になった。別名ロッタとか「青星」とも呼ばれるが彼女等は平和時でも積極的に

これに参加し、生来のアマゾンの性質から考えて特にこれに向いているのであろう。

ロッタ達は実に勇敢で、落馬を恐れないうし、乗る荒いあばれ馬に乗ってもあわてず冷静に乗り鎮めてしまふし、又、普通の人がかわくて早く走れない様な野外の狭い傾いた道や崖のそばの道も、平気でギャロップしてしまう。タフでスタミナがあるので、三時間も四時間も楽しさにまぎれて乗ることがあるが馬の方がかなわないであろう。特に金髪を軍帽からのぞかせ、堂々とした体格とのびのびした脚と安定した腰付きと太腿で馬腹を圧する姿は氣品にあふれ、いたく記憶に残って忘れ難い程である。普段は虫も殺さない様なやさしそうな彼女等も、一旦愛馬に跨ったら最後サジスチンになり、馬と云う奴隷に対して飽くことない暴君になり、彼女等に対して徹底した服従を強要するのであり、これは今も又アマゾネスの古代もその心理的要素は不変である。

しかるに古代アマゾネスの方が更に勇猛であり、武器を取って戦斗に直接参加し、又、敵と組み打ちをし相手をダウンさせて、縄でしばりつけるか槍や刀でその場でさし殺した事であろう。アマゾネスは好んで狩猟をし、



その生肉を食べきわめてスタミナ旺盛になり性的にもより早熟になり本能的に乗馬を好み又、宗教的にはエクスタシーをもよおせしめるアルテミス信仰につながり、武芸にはげむ様になった事は容易に想像される。かようにアマゾネスを生んだスキタイ、サルスチア族もギリシャローマと貿易や奴隷売買を通じて今日想像する以上に深い関係を結び繁栄していたのであろう。

スキタイ人の文化遺産としては、先ず動物模様のついた金属製品と、スキタイ轡や鎧や

星状の拍車等である。スキタイやサルマチャ族の滅亡とともに、アマゾネスも地上から惜しくも消滅はしたが、この風習は例えば他のインド、ヨーロッパ族、特にゴード族によって形を変えてひそかに保たれたものと考えられ、それによってアマゾネスの伝説も各方面に拡がったと考えるのが適当であろう。禁欲的なキリスト教、特にカトリックのきびしい監視にも拘らず、女性乗馬の風俗習慣はヨーロッパで生きつづけたのはその強い本能的な乗馬に対する憧憬が死滅せず、近年又女性乗馬が復活したのである。

すでに英国をはじめ西欧諸国や北欧では、乗馬クラブの会員は妙齡な婦人によって大半を占られており、彼女等の高貴な気品を示す為にも無くてはならないものとなって来て居るし、我国でも特に私立大学の乗馬部では女性の方が多くなって来た。アメリカの各州立大学や女子大学では、寄宿舎と並んで乗馬施設は殆んど例外なく設わっているのはうらや

ましい限りである。アメリカの多くの雑誌の後の方の広告では、学校の生徒募集の力所に必ずと云っていいくらい、乗馬設備の事が出て居る。

さて以上の通り古代から現代に至る迄、歴史的にアマゾネス、つまり女性乗馬の伝統や流れを概観し考察した次第である。歴史の父と云われるヘロドトスも、アマゾネスの研究には不可欠の材料を提供してくれたし、彼のお蔭で古証学的にアマゾネスの活躍を史実としてつかむことができたが、未だ依然として不明な点が多い。しかし、たとえば将来ソ連の考古学者の発掘調査によって更にこまかく解明されるかも知れない。現在の所、アマゾネスの主要な活動領域は今のソ連のウクライナ地方、黒海北岸とされているのが有力である。御承知の如くヴォルガ下流近いスターリングラードの大血戦場であり、第二次大戦でファシスト・ドイツを破ったその場所に、石造の五十四メートルもある、正に世界最大の女子戦士が右手に剣を持っている像があるがこれも私に云わせればスラヴ民族の血の内にあるアマゾン崇拜の痕跡に違いない。同類の石像がアルメニアにもある。

ついでながら、ソ連の女戦士も有名なので

少しふれたい。

彼女等は男子と同様な軍服に長靴をはき、自動小銃を背からつるして勇敢この上なく、対独戦にも、又、我々にはにがい思い出ではあるが対日戦にも参加し、或る者は歩兵、他のものは機甲部隊、及び驚くべきことには騎馬で重砲を引く手伝いもして居た。体格体力男子になんら遜色なく、あたかもアマゾネスの子孫の様に勇猛で、敵をして驚がくせしめ、満洲や樺太でもその力を発揮し敵をせん滅したと云われる。大変な力持ちで味方の兵士がたおれるとそれをかつぎ上げる様にして介抱し、又、ショックな事には出血でたおれてる敵には、彼女等は冷酷に長靴で敵の顔をふんづけたり体をサジスチックにけるとの戦記物を読んだことをおぼえている。

ソ連のアマゾン兵士は、又、トラックや重戦車も運転して、敵の死傷兵やたこつぽにひそむ敵兵の陣地を戦車でおしつぶしてしまう様な残忍さもあり、又、捕虜を彼女等が馬にのって長い道をシベリヤ奥地に強制労働の爲連行することとしたのである。この事實は同朋の一部も経験したことで、このにがい思い出は今だに新しい。第二次大戦でソ連は数百万も男子が戦死し、どうしても勇猛無比の女

兵士の鼓舞なしには強敵ドイツを撃滅出来なかつたろうと思われるし、婦人の方も戦争で夫をかり出されて孤独になったり未亡人になるよりも、アマゾネスの勇猛心を發揮して、女兵士として男性を助けることを切望した者も無数に居たからであらう。白兵戦に直接参加して惜しくも落命した女兵士も少なくなかつたが、多大な犠牲を払いながらもついに目的を達したことから、決して大祖国戦争の女兵士の手柄は過少評価さるべきではないであらう。

勿論、彼女等は平和時は、例えばオリンピックではメダル獲得に大いに貢献し、体力の優秀さを証明して居り、又、女性らしさの追求、つまり洋服のモードにも余念がない。又、つい最近の雑誌ではフランスで開かれたミス・アマゾン、つまり未婚女性の馬術大会ではエレナ・ペトウシコワと云う生化学を専攻するモスクワ娘が栄冠をかく得たし、又、ヘアスタイルの国際コンテストでもグランプリを得る等、西側におとらぬ程各方面で活躍している。やはり勇猛なアマゾネスと云えども、平和時には熱心に女性らしさや美学の各面を追求していることは、古今東西を問わな

紀元前からすでにスキタイの女性は多くの金の腕輪、首飾りや鳥獣の模様のある鏡や化粧品や香水を入れた美しい壺を沢山あつめて楽しんで居たらしく、ペンテシレイア女王も生来の輝くばかりの美ぼうに加えて、戦陣におもむく前に化粧をしたことであらう。惜しくも彼女は武将アキレス等と戦って槍で殺害されてしまったが、アキレスが彼女の黄金のかぶとを取り去るとペンテシレイアの美しい顔があらわれたが、時すでにおそく彼女の息はたえ、アキレスは悲嘆にくれたと伝説は云っている。又、英雄ヘラクレスと斗って敗れた女王ヒッポリューテにしてみれば、生来の美と力にかがやくアマゾネスも不思議に短命であり、年24才程であえなく戦死してしまい悲劇の典型とされるのである。美人短命と云うより、むしろ我々にアマゾネスは永遠に若く美しいものだとの印象と先入観を与えている。百年戦争時代英国の侵入からフランスを守ったジャンヌダルクにしても同様であらう。カトリック国フランスでは彼女は最大の聖女にされて、今でもフランス人は彼女を慕っている。アマゾネスを慕う無数の芸術家が絵画、彫刻、劇、作詞等あらゆる面ですこにテーマを見出し追求を続けているのも当然

であると云わねばならない。

現代のいわゆる総合芸術としての映画でも先述の如くアマゾネスの活躍を描写したのも二三あり、中には単なる興味本位にとどまらず、我々をして幻想の世界へとさそい込めしめるのである。ユナイテッド映画の総天然色「ローマのアマゾン」は、英国のスター、シルビア・サイムスがヒロインのクレリヤ（アマゾネスの女隊長）を演じたが、実に堂々としたもので彼女のひきいるアマゾンのグルー

プが、ローマ式のかぶとと鎧に身をつつんで縦横に馬を飛ばして居た。特に敵に追われ騎馬で渡河するシーンや、浅瀬を水しぶきを立てて駆ける所、及びクレリヤに引卒されて敵を攻撃する為に近道として地下水道を馬に乗ったまま通過する所、及びクライマックスの戦場で全速力でギャロップしながら攻撃する所や馬をのりつぶす所、敵の矢で馬が倒れる所、いずれもショッキングで手に汗をにぎらしめるものであった。彼女等は鞍の代りに

赤い毛布を馬のせにのせてそれに跨って居り革ひものローマ靴をはいていたが、拍車なしでよくあれだけ早くギャロップできたものと思ひ、それが不思議である。又、彼女等の陣地内で各々の馬を世話する所や、納屋の様な寝室も出て来て興味深かった。そこで働いている白色の超ミニスカートのブーツ姿のアマゾネスの脚が、くっきりとスマートでいかにも楽しそうに見えた。女隊長クレリヤが落馬する所や、赤と黄金色の鎧に身をかためたアマゾネスが集団で乗馬の練習をしてるシーンも忘れ難い。又、護衛をつけたりらしいアマゾネスが、隊列をなして馬に乗って行進する所も印象的であった。ヒロインのクレリヤが隊列を従えて神殿の前方で馬に乗ってる姿は流石高貴で、見る者をして圧倒した。シルビヤの演技も申し分なく終始上品さと優美にあふれて居た。特に赤皮の鎧と金色のかぶとがよく調和しており、赤いブーツも脚を美しく見せる様あらゆる工夫がされて居た。西部劇にもおとらない彼女等の蕃族とのクライマックスとも云うべき騎馬戦の後ローマ軍の助けをうけるが、惜しむべし若いアマゾンの女副隊長が蕃族の矢を胸に受けて戦死する。

（カット及び写真・筆者提供）

新発足 懸賞／告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

体験▽原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさ等は求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

緋

ひ

縮

ちり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第五回)

白鳥大蔵

《救いの手》

思いがけなくお絹を自分のものにする事ができて、銀三は有頂天だった。

まだ完全にお絹を抱いたわけではないが、ここまでできたら、もう自分のものにしたも同然だ。

兄貴分のまむしの源次から「お前の自由にしろ」と、縄つきのまま手渡されたお絹である。

源次に命令されて、同心の八木沢左内を刺

し殺し、その褒美にもらったのが、このお絹というわけだ。

廻米問屋大津屋の箱入り娘お絹。

拘摸の銀三が、逆立ちしたって抱くことのできないお嬢さまだった。

それが、なんとという幸運か。天からくだったように、自分の腕のなかへとびこんできたのだ。

すでに、八木沢左内の執拗な魔手によって足の指のあいだまでなめつくされたに違いなのお絹だったが、白い美しいからだは、見たところ、すこしも汚れてはいない。

いや、すこしぐらい傷ついていても、銀三はありがたく頂戴したことだろう。

うしろ手に縛りあげてあるお絹を、銀三は地下部屋から、上の部屋へ追いあげる。

おれは、左内や源次のように、あんなうす暗い地下部屋で、犬のようなさもしい真似はしねえ。ちゃんと布団を敷いて、枕も二つならべ、人間らしく、ていねいに、ゆっくりと可愛がってやるんだ。

縄だって、解いてやる。手足を自由にした上で、念を入れて女にしてやる。この銀三さまを、忘れられねえからだにしてやる。

たよりないほど細くて白いお絹の襟くびにかかる乱れ毛に目をやりながら、銀三はぞくぞくした。

地下部屋の階段をのぼりきると、そこは土蔵の中だ。その土蔵の金網扉をあけると、すぐ外は裏庭で、稲荷の祠がある。

銀三は、なおもお絹をひきたてる。裏庭伝いに歩いて、母屋とは別棟になっている離れへ、お絹をひきずりこむつもりだ。

自分の意のままに従ってくるお絹に、銀三はいきなり抱きしめたいほどの愛着をおぼえている。お絹にしてみれば、うしろ手に縛りあげられて、その縄じりを取られているのだから、銀三に従うより、仕方がないのだ。

「待ってろよ、お絹。いまずぐに縄を解いてらくにしてやるからな。いままでは地獄だったろうが、これからは、このやさしい銀三さまが、極楽往生させてやる」

しかし、この銀三も、運の悪い男だった。お絹をひきたてて、離れへの飛び石を伝っているとき、大津屋の用心棒、寺尾半九郎に見つかってしまったのだ。

立花屋久六の白状によって、花屋敷とよばれるこの建物のなかに、二人の娘が監禁されていることを知った大津屋彦兵衛は、寺尾半

九郎に命じて、娘の奪回を計ったのである。

腕に自信のある半九郎は、表門から堂々とのりこんできたが、この広い邸内のどこにも人影はない。なるほど、拘摸の親分の隠れ家らしい、奇妙な屋敷だ。

裏庭の土蔵のなかも、金網扉の外側からのぞいてたしかめて見たが、女が捕われている気配など、まったく感じられない。土蔵特有の、かびくさい湿った空気がよどみ、死んだような静寂があるだけだ。

こいつは久六にだまされたかな、と思ってもう一度裏庭へまわってきたとき、銀三とお絹を発見したのだ。

半九郎は、大津屋の背後に飼われている用心棒だから、伊勢町の店へは、ほとんど顔をだしていない。

したがって、捕われている姉妹の顔もよく知らないのだが、裸にされて、うしろ手に縛られている娘をみれば、これが大津屋の姉妹のどちらかと思うのは当然だ。

「おいッ」

と、半九郎は、銀三にむかって声を発し、大股に近づいた。

いきなり背中へ声をかけられて、銀三は、ぎくっとうりかえる。

「きさま、立花屋久六の子分だな」

と、半九郎は傲然と胸をそらせてたしかめる。

「てめえはだれだ。だれにことわって、この屋敷へ入りこみやがった」

と、銀三が、たじろぎながらも虚勢をはって向きなおった。

それにはこたえず、半九郎はこんどはお絹にむかって、

「お前は太津屋の娘だな。姉のほうか、妹のほうか、どっちだ？」

と、きく。

ふいに現われた浪人者の険しい視線を全身に浴びて、お絹は新しい恐怖にすぐみあがった。裸の身を縛られているという羞恥よりもこの場合、恐怖のほうが大きかった。

お絹は、じりじりと二、三步後退した。

そのおびえすくんだ表情をみて、半九郎にも、これが太津屋の娘の一人だということがわかる。

「安心しろ。拙者は、おぬしの父親にたのまれて、助けにきたのだ」

いうと同時に、半九郎の腰から大刀がひきぬかれ、さっとひらめいたかと思うと斜め下から、逆に斬りあげていた。

あいくちの柄に手をかけるひまもなく、
「うわッ」

とさけんで、銀三はのけぞる。地上に倒れる前に、半九郎の刀は鞘におさまっていた。気のみじかい半九郎の居合い抜きにあって銀三はたちまち冥土行きとなる。

「うじ虫を一匹、退治した」

いいながら、半九郎はお絹の縄を解いた。この人相のよくない浪人者が、敵ではないとわかって、お絹はようやく自分の名をいった。

「そうか。お前がお絹か。なるほど、いい娘だ。ところで、妹のほうは、どこに監禁されているのだ？」

縄を解かれたとたんに、へたへたとその場にすわりこんでしまったお絹を見おろして、半九郎はたずねたが、その問いに答えるだけの氣力が、いまのお絹にはない。白痴同然になっっているのだった。

「仕方のない娘だな。よし、拙者が背負ってやる。元気をだして案内しろ」

両腕で自分の乳房を抱えてうずくまるお絹を、無理やりだき起こして背負った。

もしかしたら、私は本当に助かるかも知れない。ぼんやりと、そう思いながら、お絹は

やっと腕をのばして、おずおずと半九郎の肩につかまる。

恐怖がすこし去って、こんどは本能的な羞恥がよみがえる。

裸の身を、この男くさい浪人者の背中へ、ぴったりと密着させなければならぬのだ。

左手をお絹のまるい尻にまわして、うむ、これは役得だな、と半九郎は思った。やわらかい。悪くない感触である。

半九郎は、思わず二度、三度と、餅でもこねるように、強く撫でまわした。

ああ……と、お絹は尻をすくませ、全身をよじる。この浪人者も、やっぱり悪い人で、私はまたひどい目にあわされるのではないかしらと、不安が胸底からつきあげてくる。

しかし、逃げたり、抵抗したりする氣力はもうお絹には、一片も残っていない。

「さあ、妹が捕われている部屋はどこだ。早く教えろ」

なおも両手をもぞもぞとさせながら、半九郎がさいそくした。

しかし、心身ともに疲労し、半死半生になっっているお絹には、半九郎の言葉も、はっきり耳にひびかないのだ。

その上、自分がどこをどうかつがれて、地

下部屋の中へつれこまれ、また、どこを通過してこの裏庭まで出てきたか、それすらも、ほとんど記憶がないのだ。

「なんにも覚えていないのか。仕様のない小娘だなあ」

半九郎は舌うちして、なおも広い屋敷内をぐるぐる歩きまわったが、どうしても妹のお雪を発見することはできない。

片腕を斬り落とされて、瀕死の重傷にうめいている立花屋久六の口から、二人の娘は花屋敷に隠してあると白状させたが、さすがに久六は、土蔵の下の地下部屋のことまではしゃべらなかつたのだ。

そのへんが久六の、しぶといところであるう。うっかり全部をしゃべったら、殺されるかも知れない、と計算したのだ。

掏摸の親分であり、香具師の元締でもある立花屋久六が、念を入れてつくりあげた隠し部屋であった。

外部の人間が一巡したぐらいで、その入り口が発見できないのも、当然であった。

しかも、この屋敷は、どうしたわけか、ほかに猫の子一匹いないのだ。つかまえて泥を吐かせる人間も居ないのだから困る。

あの男を斬るのではなかつた。生かしてお

いて、妹の監禁場所を白状させるのだった。と半九郎は自分の短気を悔いたが、もう間に合わない。

銀三は、血の海のなかで、完全に絶息している。

探しあぐねて、半九郎はいらいらした。

もしかしたら、妹のほうは、べつの場所へ移したのかも知れないな、と思った。

それならば、とりあえず、この姉のお絹だけを、大津屋へ送りとどけよう。

門の外に駕籠が二挺、待たせてある。

その一挺に、お絹をのせた。あとの一挺は無駄になったわけだ。

まる裸のお絹をみて、駕籠かき共は目をまわくしている。半九郎は、垂れをおろして、

「伊勢町の天津屋へやれ。いそげ」

と、命じた。自分は駕籠の脇について歩きます。

それにしても、あの屋敷は妙だな、と歩きながら半九郎は思った。無人とはいいいながら怪しい気配は、たしかに感じられるのだ。屋敷内のどこかで、なにかが、うごめいているのだ。

真心影流の達人だけに、目には見えなくとも、なにかの、ひそかなうごめきだけは、察

知できる寺尾半九郎であった。

まあ、いい。姉のお絹だけは無事に助けだせたのだから、面目は一応たつわけだ。

橋場へもどったら、もう一度立花屋久六をしめあげて、ほかに女を隠すような場所はないかと訊問してやろう。

このへんで、用心棒としてひと働きしないと、これまでおれを生かしておいてくれた大津屋に対して、義理がすまぬからな。

と、寺尾半九郎は、ふところ手で駕籠の脇について歩きながら、そんなことを考えている。

駕籠のなかのお絹は、自分が救われて、いま父母のいる大津屋へ向かっているのだということを、まだ信じきれなかった。十九歳の娘にとって、あまりにも無残な出来事が続いたからである。

《白い肉塊》

三尺余りの竹の棒の両端に、お仙の左右の足首が縛りつけられていた。つまり、三尺の距離を置いて、足首と足首は離れたままなのである。

「ちくしょう、な、なにをしゃがるんだい、

ば、ばかな真似をすると、承知しないよッ」手拭いのさるぐつわがはずれて、お仙は口汚なくわめきはじめる。いまは唇と舌しか、抵抗する道具がない。

両腕は背中に、高手小手に縛りあげられているお仙だ。

やや肥りすぎの感じだが、女盛りのむちむちと肉のついた肌へ、縄がぎゅぐゅとくいつんでいる。

やわらかい肉のなかへ、縄が陥没して見えなくなるほど強く縛られているので、口さきだけは威勢がいいが、お仙は氣息えんえんだった。

その上に、なおも両足は、三尺の竹の棒で屈辱的な形に固定されてしまったのだ。

「やい、源次、お京、あ、あたしをこんな目にあわせて、おぼえていやがれ、親分が帰ったら、お前たち、ただじゃおかないよッ」

いかにも拘摸の親分のめかけらしい、歯切れのいいタンカがとんだが、源次もお京も、ビクともしない。

お仙がくやしがり、苦痛にもがくさまを、心地よさそうに眺めている。

いままでさんざん自分たちを酷使し、威張りくさっていたお仙の、羞恥をむきだしにし

て、それをどうすることもできない、ぶざまな姿がこころよいのだ。

とくに女のお京は、このお仙のために、何度かひどい仕打ちを受けているのだった。

「痛い、痛いじゃないか。こ、この縄を解きやがれ。なんのために縛るんだよ。あたしやね、お前たちに縛られるいわれは、なんにもないんだよ。ああ、痛い、ちくしょう、死にじまうじゃないかよ、やめとくれ、縄を解いておくれようッ」

「うるせえ、静かにしろ。だまらねえと、おめえも、左内のように、あの世に送っちまうぜ」

源次は、凄みのある声でどなった。

お仙は咽喉をつまらせ、おびえたような、血走った目の色になって沈黙した。

八木沢左内が、銀三のあいくちで刺し殺される場面を目撃しているお仙は、源次の一喝に、さすがに恐怖を感じたのだ。

その左内の死体は、まだ向こうの部屋に放りだしたままだ。血のおいが、ここまで流れてくるような気がする。

左内は殺され、お仙は縛りあげられて、こちの部屋に運ばれてきたのだ。

大津屋の娘のお雪もまた、この部屋につれ

もどされている。柱に縛りつけられたまま、お雪はうつろな視線で、銀次とお仙の乱暴なやりとりを眺めている。

自分の手足をさまざまに形に縛りあげて苦しめ、肌のあちこちをいたぶり続けて悲鳴をあげさせたお仙が、こんどは逆に縛りあげられて泣きわめいている。

そんなお仙を眺めながら、もはやお雪にはなんの感情も動かないようであった。十六歳のお雪は、疲れきっているのだった。

「ちくしょう、親分が帰ってきたら、お前たち、八つ裂きにしてやるよッ」

お仙が、またわめきだした。

いままで自分の下で小さくなっていた子分に、突然裏切られたことが、くやくしてたまらないのだ。

「おい、お仙、そんなに旦那の帰りが待ち遠しいんなら、ひとつ、教えてやろうか」

源次は、煙草盆をひきよせ、余裕のあるしぐさで、煙管に粉煙草をつめながら、にやりとしていった。

「おめえの旦那の立花屋久六はな、もう、この世にはいねえんだぜ」

「えッ？」

お仙は、一瞬、ポカンとした顔つきで、源

次を見た。

「殺されたんだ。大津屋の用心棒に、斬られちまったんだよ」

浴びせるように、源次はいった。

「う、う、うそだ。あ、あ、あのひとが、そんなにあっさり、死ぬはずはない！」

「残念ながら、嘘でも冗談でもねえんだ。いまごろは久六親分、閻魔大王の前で、娑婆の悪事を、残らずしゃべらされているところだぜ」

「……」

お仙は沈黙した。顔色が青くなっている。

源次の言葉は、どうやら嘘やおどかしではないらしい。お仙の全身から、血の気がひいていく。自分の身体が、どういう屈辱的な形で縛りつけられているかも、寸時のあいだ忘れた。

源次の横から、お京が小気味よさそうに、顎をしゃくりあげていった。

「だからさ、この立花屋一家は、きょうからこの源次と、あたしのものなんだよ。面倒な八木沢左内は、銀三にうまく殺させたから、あと邪魔なのは、あんただけなのさ」

「ちくしょう、そうだったのか……」

お仙は、齒噛みして、犬のように低くうな

った。

「といつても、おめえほどのいい女だ。殺すなんて、もったいねえことはしねえから安心しな。宿場女郎に叩き売ってやる。が、その前に、これまでいろいろ世話になった礼がしたいのさ」

源次の握っている煙管のさきが、目標をきめて、ついつとのびた。

「ひいッ、熱うッ！」

お仙は、ぎくんとおけぞり、白い咽喉を天井にむけて悲鳴をあげた。

三尺の竹の棒の両端に、がっちり縄で固定された左右の足首である。どうもがいても避けることはできない。

尻を畳の上に落として、横転しないように両膝に力をこめているのが、せいっぱいの抵抗だった。この形でひっくり返ったら、それこそ羞恥と屈辱で、死んだほうがましだ。

「あ、熱いじゃないか、ひどいことはやめておくれよッ」

勝気なお仙が、ようやく弱音を吐きはじめた。

「なにを言ってるんだい。あたしたちを一人前の拘摸に仕込むために、久六だってあんだだって、もっともつと、ひどいことをしたじ

ゃないか」

お京が、笑いながらいった。お仙に対してひとかけらの同情もない。あるのは、憎しみだけだ。

「源さん、そんなことじゃ手ぬるいよ。もつと思いきってやったらどうだい。こんなふうにさ」

いざとなると、女のほうが残忍である。

お京は、源次の手からきせるを引ったくり右手に持ちかえると、ねらいを定めて、乱暴にお仙を責めたてた。

「あッ、痛いッ、ひ、ひ、ひいッ……ち、ち

くしょう、そ、そ、そんなところを……ひ、

ひどいじゃないか、お、お京、ま、待ってお

くれ、悪かった、あたしが悪かった……だか

ら、ゆ、ゆるして……あッ、あッ、ひいッ」

お仙の顔面に汗が浮かび、すぐにそれが粒となって、顎の下にしたり落ちた。

縄に胸を固くしめつけられて、いっそう大きくふくれあがった乳房が、その汗を受けて濡れた。

おぞましい苦痛を耐えるために、お仙の顔はいつのまにか前に突きだされている。

両腕はたかだかと背中から肩へと縛りあげられたまま、前こごみになっているお仙の呼

吸が、時がたつにつれて、だんだん苦しく、せつなくなってくるのだ。

白い脂肪で光る腹の肉が、ひくひくとあえいで、汗はそこにもぎらぎらと光っている。

「ひいッ……お、お京、悪かった、あたしが悪かったよう……か、かんにんしておくれ、もうやめておくれ……あッ、痛い、痛いようッ、あ、あ、あ……やめておくれ、だ、だめだよう、あ、だめだ、だめだ、や、やめて、あ、あッ……」

長良川の鵜飼いのように、お京たちが奪ってきた獲物を、全部吐きださせて、そのおかげで、この拘摸の親分のめかけは、ぜいたくな暮らしをしてきやがったのだ。

そのうらみが、きせるの先にこめられる。執念をこめて、復讐の手先にする。低いうめき声とともに、白い肉塊のすみずみから、ねばったあぶら汗がにじみ出てきた。

「まだまだこんなもんじゃ、あたしの腹は癒えやしないよ」

お京は、せせら笑いながらいった。

「お京、かまわねえから、好きなだけやれ。おれが手伝ってやる」

源次が、おもしろがっていった。

女の急所を心得たお京の巧妙な責め方をみ

た。

「いいんだよ、源さん、殺してやるよ。ただし、あたしの殺し方は、ちょっと変ってるけどね」

お京が、悪戯っぽいふくみ笑いをしながらいった。

凄絶な光景がはじまった。

久六親分も、掟にそむいた子分を仕置きするとき、男女のべつなく、ずいぶん手荒な、ひどい折檻をやったが、こんなすさまじい逆さ吊りをしたことはなかった。

お京のこよりが、陰湿な活動を開始した。

狙う場所は、自由であった。

うしろ手にくくりあげられた白い肉塊は、竹の棒に縛りつけられた両足を上に、天井から吊られているのだ。

すべてが、無抵抗であった。どこを狙おうと、お京の意のままであった。

「ひいッ……ひ、ひ、ひいッ……あ、ああ、な、なにをするんだよう、き、きちがいッ、や、やめないか、やめてえッ……」

虫の息だったお仙が、また激しくひきつるような悲鳴をあげ、全身はみるまに、水を浴びたような汗で、濡れて光った。

滑車が、音をたててゆれた。

源次は、あきれかえったように、お京の攻撃を眺めている。この女が、こんな真似をするとは思わなかったな。あきれたもんだ。女はこわいや、と腹の中でつぶやいている。

あぶら汗が、お仙の逆さになっている頭の下に、ポタポタとしたり落ちた。長い髪の毛が、汗にまみれてびっしょりと濡れ、黒い猫が悶えているようにうごめいている。

その髪のおい、汗のおいにまじって、女だけが放つ、なまぐさい特有の臭気が、源次の鼻さきにただよってきた。

源次の目は、吸い寄せられているように、お京のこよりの活躍をみつめている。

「う、ううッ、あ、あ、だ、だめだよ、そ、そんな、ああッ、ひいッ……」

お仙の顔が、まっ赤にふくれあがって、なぐられたようにゆがんでいる。

お京はやめない。やめるどころか、夢中になっている。お京の顔も上気している。

「あ、あ、あッ……ぐ、ぐ、ぐうッ……だ、だめだよ、ああッ、ひいッ……」

指にからまっていたこよりが、汗に濡れてついに切れた。

お仙のからだ、重苦しいうめき声をあげてけいれんした。切れたこよりを指から離す

と、お京は勝ち誇ったように笑った。

眼前で展開しているおそろしい光景に、十六歳のお雪は、耐えきれず、柱に縛りつけられたまま、失神していた。

《裏切り用心棒》

駕籠にのせたお絹を、大津屋の裏木戸の前まで送りとどけてから、寺尾半九郎は橋場のねぐらへ戻った。

庭に面した四畳半の部屋に、立花屋久六が目をとじて寝ていた。

ほかに、だれもいない。彦兵衛も、伊勢町の店へもどったのだろう。

「人質を置いたままで、不用心だな」

と、半九郎はつぶやいたが、廻米問屋大津屋の当主ともなれば、いつまでも久六如き者の見張り番をしているわけにはいかないのだろう。

もっとも、見張りが居ても居なくても、いまの久六の体力では、とても逃げだすことはできない。

高熱はひいたが、傷口の痛みは、まだ相当なものだ。寝返りをうっただけで、ずきずきと脳天にまでひびく。

とても一人で起きて逃げだすことはむずかしい。彦兵衛は、それを見越して、この家を留守にしたのだろう。

「おい、久六、まだ生きているのか」

と、半九郎が、立ったまま久六の顔を見おろした。

それがきこえたのか、久六の片頬がひきつれたように笑った。

「腕の一本や二本切られたって、死ぬような久六じゃございませんよ」

仰向けに目をとじたまま、久六は答える。

「ふん、しぶといな。しかし、もうすこし、お前に生きていてもらわなければ困るのだ」
いいながら、半九郎はどっかり久六の枕もとに坐った。

「大津屋の娘はどうしました。うまく助けだせましたかい？」

どことなく皮肉な久六の口調だ。

「姉のお絹だけは、裏庭にるところを助けた。が、妹娘のほうは、まだだ。いくら探しても見つからない」

「お絹が、裏庭に居た？……」

久六は、不審を感じた。

地下部屋に押しこめてある大切な人質の娘が、裏庭へなんか出ているはずはない。

第一、お絹に惚れきっている八木沢左内がしっかり抱いていて、離しはすまい。

「そうだ。きさまの子分に縄で縛りあげられてな。それも裸だ。ひどいことをする」

吐きだすように、半九郎はいった。お絹を背負いながら、その裸の尻を、存分に撫でまわしたことは、もう忘れていた。

「お絹と子分が、裏庭に居た、はあてね？」

久六は、同じことを、またつぶやいた。

どうも、不思議でならない。

八木沢左内が殺されたことを、久六は無論知らないのだ。

源次が銀三が自分を裏切って、立花屋一家を乗っ取るうとしていることも、知らない。

「その子分は、拙者が斬りすてた。生かしておいて、妹の隠し場所を吐かせればよかったのだが、おれは短気だからな……」

斬られたのは、だれか。

子分というからには、源次か、銀三か。しかし、それをきいても、半九郎には、源次も銀三も区別がつかないだろう。

あの地下部屋は、まだ見つかっていないのだ、と久六は思った。

お絹は、なにかの理由で裏庭へつれだしたが、妹のお雪は、まだ地下部屋に押しこめて

あるのだ、と久六は判断した。

それならば、まだこっちに打つ手はある。

おれは、まだ負けたわけではない……。

久六の奸才が、きゅうに、めまぐるしい回転をはじめた。

「もし、寺尾さん……とおっしゃいましたね……たしか、寺尾、半九郎さん……」

目をあけて、久六がいった。表情に、すこし血の色がよみがえっている。

「なんだ。気やすくひとの名を呼ぶな」

半九郎が、目をむいた。

「大津屋の娘を二人、無事にとりもどすと、あなたさまは、褒美をいかほどいただけますんで？……」

久六は、妙なことをきき始めた。

しかし、小さなことにはこだわらない性格の半九郎は、さほどの警戒心もなく、卒直にこたえる。

「そうだなあ。……五両か、多くて十両だろう」

「安い。安いと思いますよ、そりゃあ……」

と、おうむ返しに、久六はいった。

「ほう、安いか」

つられたように、半九郎はこたえた。

「あたしだったら、失礼だが、それだけのお

働きに対して、千両はだしますがねえ……」

「千両？……大きなくちを利くな」

「しかし、娘二人のいのちと、それから、抜

け荷の割り符が賭けられているんですぜ。ご存知でしょう、あのオランダ歌留多の半分に切れたやつを……」

〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変った体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変った蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお待ちいたします。

一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されれば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。

一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。

一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。

一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として「応募原稿」の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

「そうか。なにかいわれがあるとは思っていたが、あのオランダ歌留多の半片は、抜け荷の割り符だったのか……」

ううむ……と半九郎はうなった。

「そうですよ。あの割り符を取りもどすことができなかったら、大津屋の損害は、さあ、どのくらいになりますでしょうかねえ。……五千

両、いや、一万両……」

うす眼をあけて、半九郎の表情をちらちらとうかがいながら、久六はいった。

あのオランダ歌留多の半片が、いまどこにあるか、知っているような久六の口ぶりだが実際はわかっていないのだ。

ただ彦兵衛の口ぶりから、彦兵衛の手にもどっていないことだけは察している久六だ。

「ねえ、寺尾さん、あつしと、手を組む気はございませんか」

ずばりと、久六はいった。

「なんだと、きさまと手を組む？」

半九郎の目が、ぎろりと光った。半九郎にとっては、思いもよらない久六の言葉だ。

「あつしと手を組んで、大津屋をゆするんださあ。妹娘は、まだこっちの手に押さえてある。勝ち目は十分にありません。儲けは山分け。軽くみつもっても、三千両ずつにはなり

まずせ」

「三千両か……ううむ……」

「と申しても、ご信用いただけねえでしょうから、手つけとして、まず、千両差しあげましょう」

「そんな金、どこにある」

「自慢じゃねえが、立花屋久六、千両ぐらの金は、どこにでも置いてあります。あの花屋敷の中だって、千両箱の五つや六つ隠してありますよ……いかがです」

半九郎の動揺をみて、久六はここぞとばかりに、なおも押した。

「こんな橋場の片隅で、毎日酒をくらって、ごろごろしていたって、仕様がねえでしょう……ええ、寺尾さん、まとまった金が入れば町道場のひとつも……」

「しかしなあ……」

半九郎は、腕組みをして、天井を仰いだ。

「大津屋彦兵衛には、拙者が江戸へ出て来て以来、世話になっているからなあ……」

「いくら世話になっているからといって、金の額にすりゃあ、せいぜい二十両か三十両、百両ほども世話になっているわけでもございまずめえ」

「言われてみれば、まあ、そうだ。この家に

留守番代りに住まわせてもらい、飯と酒をあてがわれて、どうにか餓えずに毎日を送らせてもらっているだけだ」

「それごらんない。この立花屋久六、けっして嘘は申しませんよ。ねえ、旦那、あつしを助けて、ここから花屋敷まで運んでくれれば、お礼に千両、その場で差しあげましょう……いえ、嘘じゃあねえ。もし、嘘だったら残っているこっちの腕も、すっぱりと切っておくんない。こうなったら、逃げもかくれもできねえ立花屋久六だ。ねえ、寺尾さん、あつしはお前さんに惚れたんだ。いえさ、お前さんの、その腕に参ったんだ。あつしの味方になっておくんないよ」

イチかパチか、傷の痛みを押して、熱弁をふるった。

痛みのために、大きな声はだせないが、自分の生死がかかっているから、久六の舌には異様な説得力がある。

半九郎の心が、次第に動いてきた。

千両といえ、まさしく大金だ。

三千両手に入れば、一生なんの不自由もなく、遊んで暮らしていける。

大津屋と立花屋、どっちの投げる餌がうまいか、ここは一番、考えどころだぞ……。

寺尾半九郎は、ふかぶかと両腕を組みなおした。

その半九郎の表情をみあげて、しめたツと久六は腹の中で手を叩いた。

この浪人者は、もう、こっちのものだ。

金でころばない奴はいない。

ようし、やってやる。どうやらまた運がむいてきた。この浪人をうまく使って、こんどは彦兵衛の女房のお静をひっさらってきてやる。

おれを嫌って、大津屋の女房になった憎いお静。あのとときの礼も合わせて、存分にいたぶってやる。

彦兵衛め、おぼえていやがれ。いまに吠え面かせてやる。

からだを動かすことのできない久六だが、頭の中では、反撃の計画を火のように燃えひろげさせている。

しかし、この不死身の久六にしても、源次が自分を裏切ったことを知らない。めかけのお仙が、源次とお京のために、すっ裸にされて縛りあげられ、ひいひい泣きわめいていようとは、夢にも思っていないのだ……。

(つづく)

奇クに望む

ヤセ犬の

遠吠え

系 振 昇



先般来、誌上には「奇クはどうあるべきか？」の問題についての論議が盛んなようである。随分古くからの愛読者の多いらしい中にあっては、私などは新参者もいいたく、大層な口も利けないとは思っているのであるが、その「愛誌」ぶり、その「ファン」ぶりに驚いている。さしずめプロ野球なら、グラウンドにとび降りて審判に談じこむどころか、最良チームの監督までヒッパリ出してトッチメルかも知れない。まことにたのもしい(?)

私もここ二年ばかり読み続けているから、キャリアは乏しいが「愛読者」には違いないと思う。しかし、さほどの「熱愛者」ではない。だが、この風変わりな性というものに興味を持て、その幾多かの心情に共感出来るような気がして、つい買ってしまうのだからやはり、アブ的心理は持っているのだろうがいわばヤジ馬的臭いが強いのは確かである。こんな人間が書くことだからどうせお気に召さないとは思いますが、一応投稿してみようとペンをとった。

この「奇ク」という雑誌にかくも熱烈なファンが蟬集するのは、それら読者の投稿を最重視するというばかりでなく、自分の責任とばかりはいない難いもの、つまり、生来の宿命的な性向を理解し肯定してくれる雑誌だからというわけであろう。その希少な理解者の袖の下で十分に羽根をのばして飛びはねてみた

い心理は誰にでもあるだろう。私も、顔さえみれば、偉くもないのに偉そうな顔をして、偽善ぶった説教ばかりするオヤジの家より、白髪頭を振り立てて、私と共に女の尻を追かけまわる叔父の家の方が遊びに行っても居心地がいい。

奇クは一、二の例外(?)は除いて、読者の投稿によって埋まっていると思うが、それだから真実性が強く、作意が少いだろうと思えただけに、発見し、読みふけた最初のころは、その生慥のすさまじさに驚き、圧倒される思いで引込まれたものだった。しかし、最近私は自身が成長(?)したのか肚黒くなったのかしらぬが、誌面の上の作意が読みとれそのデフォルメぶりが感じとれるようになりそしてそれが、その筆者の夢であり、願望の吐露なのだろうと理解出来るようになったつもりである。いきおい近ごろは、そういう姿勢で奇クに対するようになっていく。

何月号かに「虚構」の問題について幾人かの人が論じられ「その空しさ」から「ある程度は……」という容認、さらに「必要」となり、そして「権利」にまで進展したようだ。それぞれのほうが、それぞれの思考からの意見だから、それはそれで尊重すべきだろう。

と、同様に私の如きヤジ馬の「意見」も書く自由だけはあるだろうと思うのだ。事実、創作というものは虚構の塊りともい

えるだろうし、それなくてはなし得ない理想境が小説というものだろうが、奇クのみに限定してみると、筆者の独りよがり臭が強すぎるのでないかと思うのだ。その虚構の目的が申し合せたように、Sの場合には裸女緊縛、羞恥責、隷属。Mの場合の被征服、奉仕、虐待、神酒に尽きている。それが誌上に表現し得る極限かも知れないが、どれもこれもがその繰り返しではウンザリもする。

精魂こめて(?)書かれていて方達にはまことに失礼ない分とは思うし、そうなるのが当然で、だからこそ筆も進むのだとは思うのだが、自己陶醉の臭いの強い創作は、たとえそれが主人公の苦悶の連続のものであってもノロケ話を聞かされているようで、私は読む気がなくなる。そうして欲しい、こうありたいというものは創作ではなく「告白」であらう。だが、虚構の上に立った告白ものはこれまた読むに耐えるものではあるまい。どなたかが、稚拙な文でもいい、たどたどしいなかに溢れる告白こそ尊い、オクラになっっているであろう真の告白を発表すべきだと云っておられた。一理も二理もあると思う。私も読んでみたい。だが、それについて想像してみると、クライマックス、というか、その真の値打ちなるものが奈辺なるものか、火をみるよりも明らかに思える。だからこそ発表すべきだとする提言は、編集長を困らす

以外の効果はないのではなからうか。

私はヤジ馬的軽症者(?)だから云えるのかも知れないが、なぜ奇クには、いや、奇クの投稿者には「受感性」を強調される方が少いのかと不思議に思うのだ。或いは新米の私が見知らないだけで、既にそこは通り越して、ムード派は現実派にその誌面を譲り渡してしまったのかとも思うが、七月号のサロンで、M派の「町中での受感」(押敷氏)があるところをみると絶滅したわけでもないらしい。

私個人の好みからいうと、ある事柄から次の場面を想像出来る余地が欲しい。つまり、朝、目が醒めて起き上り、寝巻のままトイレの前まで歩いて行って、トイレの扉についているノブを右手で握って捻じり、扉を押し開き足を出して中へ入り、トイレ用のスリッパを……云々式の親切すぎる描写にはヘキエキするのだ。時と場合によっては必要なのだろうが、親切の押し売りみたいに感じ、新興宗教の強引な折伏ぶりを連想してしまう。そして私は、その親切は、親切の度を越えた自己陶醉だと感じてしまうのである。

それこそおまえの勝手だ、と叱られそうな気もするが、極端な例をとれば、そこに女が縛られていた、という一句からいろいろな想像を為し得る読者も少くはないと思うのだ。軽症者だ、ヤジ馬だといいいながら大変に熱心者のようなことを書いている、とわれなが

ら思えるのだが、投稿する以上は採用してほしいから一生懸命なのだ。

ひと頃、力道山健在なりし頃のプロレス界で、ルール厳守の正攻法では客が飽きるから反則を意識的にやり出し、更に進んで血を見せるリングが現出し、失神のまま担ぎ降される演出となった、というようにことを写真と見出し活字ばかりバカデッカイ新聞で読んだことがある。現在でもそうらしいが、一時ほどの人気はないと聞く。とすれば次には、リング上で手か足でも折ってブラブラするのを観客に見せるか、更に進んで絶息するかだ。そしてそれにも慣れてしまったら……というぐらゐのことは誰でも想像するだろう。

つまり人間の欲望とか刺激とかいうものには限度がないということ云々を云いたいのだ。上を望み、更にその上を望む心理、慾があつてこそ人間なのだが、それと同様に現在の奇ク執筆者及び読者が、更に更にと上りつめていった場合、奇クは全頁白紙で店頭に並べられることになるかも知れない。編集長は手間が省けて喜ぶだろう。

奇クのタイトルにある「風俗文庫」という意味について、手許の辞書(広辞苑)で確かめると、やはり「風俗小説」の範疇に入るものと思う。即ち「世態・人情・風俗の描写を主とする小説。思想性を欠き社会の本質を描かず、表面的・現象的な風俗描写を主とす

る』……ものを……『筆録または印刷されたもの』……というわけだ。奇くはその内の、「アブノーマルな面の事象を集録」しているもの……という私の解釈は間違っていないかったのだ。

編集部の楽屋裏を知る由もないから想像以外にテはないのだが、編集長としては、投稿山をなしている(?)ものの中から、掲載に値するものを選び出して、レポーター的態度で雑誌形態にまとめていられるのだろうと思えるのだが、発表文の中には往々にして自己正当化を強調しているものがあるようだ。思想抜きの現象どころか、性革命を志す斗士よろしきアブ擁護論的な文に出合うと奇くは反社会、既往道徳打倒のノロシを上げる立派な思想書の如き錯覚に陥るが、編集長の意はおそらくそうではあるまいと思う。

六月初旬の読売テレビ11PMをご覧になった方も多いと思うが「悪書悪盤」と題しての風俗番組の中で、山羊の箱から取り出したとする悪書の山を前に、大阪の主婦連の代表者三人の役員さんが云っていられた。「たとえばこんなにしぼり上げたり……」司会者の藤本義一氏がそれを受けて「ああサディズム、いけませんねえ」と答えていた。

次いで、週刊誌発行側からの二人との対談(対決?)がごく短かい時間行われたが、主婦側の「青少年の為に自粛を……」の申し入

れに、発行者側は「なまじ隔離しようとするから余計に興味を示すのでは……」といううなことを答え、その目的は「セックス文化の確立」にあるといったし、主婦連は「いくら蠅を追うようなものだといわれても、根気強く、一生懸命にとり組む」と、その気構えを表明した上に「大阪の女を甘くみてもらっては困る」と胸を張っておられた。その次に、放送規制によって、電波には乗せないと決した音盤に移り、その数やら決定基準の簡単な説明やら歌詞の紹介があつて、司会者藤本氏の作詞でこの規制にひっかかったものの紹介があつたが、問題の箇所は「フーン」(?)とかなんとかいう女の溜息だそう。

しかし、藤本氏は、オタカさんが歌った後で「ここがいけないということ……」とはいったが「いけませんねえ」とはいわなかった。私はこの番組について書くつもりはないが良書、悪書の区別はともかくとして物事総てについてまわる「運用方法」が、不問に付されていくような気がしてならない。

「ねばり強い安全運動」をしていられることとは思うが、交通事故は跡を絶たない。クルマは人間にとって便利だから、その運用方法をやかましく云うだけで、自動車を造るな、走らすなとは、どなたもおっしゃらない。酒もたばこも、その害は喧伝されながら、禁止しろともアルコールやニコチンを皆無にしろ

という運動のことは聞かない。未成年者は法律で禁止されているが、絶対に買えない状態とか、目に触れない方法が完全に講じられているとも思えない。……自分では云いたいことにひっかけて書いていくつもりが、ちょっと怪しくなってきた。気取るのは止めて、卒直に結論(?)へ進もう。

結局のところ、私のいいたいのは、ずばりいって「人間は利己主義」だということだ。だから、意識するしないにかかわらず、自分にプラスすることは可とし、良としたいものなのだろう。私もそうだ。なればこそ、軽症のヤジ馬が素直に読めて、自分好みの連想を揚げられる余地のある小説類の出現を願いたいと思うのだ。それはどういうものかといわれると困る。それがはっきりわかっていたら自分で書くだろう。もっとも、奇くは重症者向きだといわれるのなら何をかいわん。私はシッポを巻いて週刊誌でも漁らねば仕方がないのだが……。

映画「猿の惑星」で試みられているが、他の生物が人間の都合によってこともなげに犠牲にされているのを逆に考えてみた場合、私はゾーッと恐怖とともに、求めるものに近い感じもする。とやかく云っても、生あるものを飼ったり、実験したり、殺して食ったり出来る人間ほど、残酷な生物は他にないだろう。私の受感性とはこういう意味である。



|| マゾヒスチック・ファンタジー || . . .

蒸 発

保 藤 久 人

ひとりの人間を形成しているパーソナリティ……とくに性的性格というものは、誠に複雑きわまる微妙なものであるらしい。

心理学者の言によると、幼少時の生活環境や、まだ記憶にもとどまらないころ不意に出くわした現象が、個々の人間性を左右し、運命まで変えてしまうことが多いと言うが、その時点では、おそらく本人は意識していないだろう。

それでいて偶然のキッカケが、その人の心身両面の体質を変えてしまうことがある。

高下雄三の性傾向も、そんな形で表面化したようだ。

文豪と言われる谷崎潤一郎の本を読んだ。「少年」という題名だった。

小学校から中学校へと移り進む年ごろだったから、あるいは彼が、人並以上に早熟だったためかも知れないが――。

物語は始めのうち、少年ふたりしてひとりの娘ッ子をいじめていたのに、いつの間にか、まるきり立場が逆になってしまふ。

読んでいて雄三は、このあたりから急に、

体中にむずがゆさを覚えたものだ。

ロウソクを立てられて人間燭台となり、齒を食いしばって蠟涙の責苦に耐えている少年の姿を思うと、ひとりでに体が熱くなってくる。変な気持ちだった。

吐月峯^{はいつき}におなりと少女に命じられて――

雄三も、小説の中の「少年たち」と同じように、ポカンと口を開いていた。

精一ぱいに開いている少年たちの口の中へ少女は物を投げ込んだり注ぎ入れたりする。

が、少年は手向かうことができず少女の言

いなりになって、口の中へ入ったものは、なんでもクチャクチャと噛んで飲み込んでしまふ。少女はふたりの少年に対して、常に女王として君臨するようになった――。

雄三はこの部分を何度も読み、読むたびにま新しく感動した。

とくに、末尾にある“urine”という横文字の単語が、すぐ彼を刺激した。新しく買ったばかりの英和辞典をひろげて正確な語意を知ったとき、思わずゴクツと生ツバを飲んだものだ。

おぼろげだがその場の情景が想像できた。すると、後頭部がビーンとして目が眩むよう、背筋を貫いたおのきは手足の先にまで及ぶ。奇妙なことだが、なんの不潔感も異和感さえも感じられず、むしろそれが当然なことのような気がして、知らぬ間に、痺れた脳の描く幻覚に溺れていた。

一段と、恐ろしいような感覚が全身を貫通する。こわいけれども快い質のものだった。

そのあとになって、なんとなく自分の考え方の不合理を悟り、その自覚につれ、われとわが身に虞れをなし、蒼ざめた表情になりシユーンと意気を失ってしまう――。

◇

◇

“天国よいとこ一度はおいで

酒はうまいしねえちゃんはきれいだ”

なんていう、A・Gソングの流行っている一昔以上も前のことだが、そのころから彼は、自然に“きれいなねえちゃん”に憧れるようになっていった。

年齢とともに嗜好の度合も変った。

“きれいなねえちゃん”への憧憬心に変化はなかったが“urine”には、少なからぬ抵抗を覚えるようになった。

その代り……と言ってはおかしいが“きれいなねえちゃん”を形づくってささえている二本の脚に強く惹かれはじめた。

なぜだか自分でもよくわからなかった。

が、多分、健やかな二本の柱が支えるものそこには、まだ見知らぬ豊麗にして神秘的なものがあるらしい――。

そんなことを本能的に嗅ぎつけたのであるうか。そしてその思索が、彼の性的感覚を誘導していったのかもしれない。

以来、彼の思想は変ることなく、それどころか年々歳々、思えばかりがつのり積って、心の中に鬱々としていた。

そのころから十数年――。

女性の衣裳は大変革を遂げた。

絹靴下はナイロン・ストッキングとなり、

更にシームレスという新製品も出回り、色合いも見るからに好ましい優美な肌色となり、思わず口づけしたくなるような麗しい脚線美が、そこを往き来するようになった。

加えて、まるで女性特有の、本能的とも言える露出欲を充たすためのような、ミニ・スカート、ミニ・ドレスの流行となり、世の中は奇態なミニミニブームの最中ともなった。

もちろん、華麗なファンデーションやランジェリーもこれに付随して男の目を魅く。

ますます雄三は女性の美しい脚に惹かれるようになったが、いつの場合も、彼の願望は空想的な色彩が濃厚だった。

高下雄三の精神に作用を及ぼし、定着しつつある感覚は、明らかにフェチズムの要素の豊富なマゾヒスティックなものであったがその対象をと客観視した場合、ともすれば概念的に、肩いからせたとげとげしい痩せぎすの女を連想してしまう。見るからに意地悪そうな顔付きの女性が浮かび上ってくる。

それには雄三は閉口してしまう。

彼は、もっと女らしい女を求めている。

しかし現実の問題として、そんな甘い夢をいだいているうちは、いくら彼が力んだとし

でも、そうやすやすと理想の女性は見られな
い。それでも彼は一向にあきらめようともせ
ず、自分の理想像を追いつづけてきた。

とは言うものの、彼の目指す女性が全然い
なかったわけではない。たったひとり居た。

それも、ほん、身近かに――。

彼の勤務先の社長の末娘でルミ子という。

彼女は短大に在学中から、しばしば社内に
顔を見せ、そのたびに彼は胸をはずませた。

しかし、真実を言うならルミ子は、彼が心
の底から愛敬したがっている品が良くて優美
な女性というには、おおよそ縁遠い姿かたちで
美人とはいえない難かったが、気位が高く、いく
らか横柄なところがあり、いかにも現代ッ子
らしい行動派の、若鮎のように潑刺とした小
気味の良い娘だった。

彼は、ルミ子のふくふくとした小柄な容姿
が気に入ったし、なによりも、こりすのよう
にクリッとして、いたずらっぽくよく動く眼
を愛らしいと思った。形良く端の切れ上った
唇の口もとチャームングだ。

短いスカートからのぞいている太腿から膝
小僧、小柄な肢態にふさわしいスマートな脚
線に、目をそばだてたのは言うまでもない。

彼女は学校を卒ると父親の顔ききで、ある

会社へ道楽半分のタイピストとして勤務する
ようになり、やがて、活発な才気を認められ
秘書に抜擢されたが、それでもチョコチョコ
顔を見せ、笑いをふりまいては去ってゆく。

ルミ子を知ってから彼の態度は急変した。

もともと生家が裕福で、かじる胫も太かつ
たので勤務ぶりも生半可だったのに、積極的
に仕事に熱を入れはじめた。

一つには、自分の怪しげな欲望をまぎらわ
すためでもあったが、一方では社長に、はた
また、ルミ子に注目されたいという下心も芽
ばえてきた。つまりは欲が出たのである。

彼の懸命の努力は物の見事に適中し、社長
の目にとまって勤務評定も過大視され、しだ
いに重用されるようになった。

ところが、皮肉なことだが、彼の地位が向
上して、将来に折紙が付けられるところになっ
て、会社は吹き荒れる倒産旋風のおおりを食
って経営困難となり、遂に業務整理という最
悪の事態に陥ってしまった。

曲がりなりに残務が終ったその日、雄三は
社長の私宅へ招かれた。

「……君たちには気の毒なことになったが、
わしはもう疲れた。十年若ければ奮激の氣勢
も残っていただろうがな……」

ここ数カ月の経済面のやりくりで、社長は
確かに疲れている。額に刻みついた太い皺が
その憂苦を物語っていた。

「……あとは黙って郷里へでも逼塞するより
ほかに手はない。幸い、と言っては変だが、
息子夫婦がいるので老後の心配はまずないと
思うが……問題はルミ子のこと――」

雄三は緊張した表情で、おそろおそろ社長
の顔色をうかがっていた。

「君も知っての通り、あいつは年端もゆかぬ
娘だてらに、親の家をきらって生意気にもマ
ンション暮らしをしている。困った我儕娘だが
親の欲目かもしれんが、じゃじゃ馬ながらに
自分ひとりで暮す術も知っているらしい。そ
れで、まあ安心してゐるのだが、かと言って
いつまでも、あのままでは放っておけない」

社長の言葉はいやにしんみりとしてきた。
「今になってこんなことを言うのは愚の骨頂
だが、わしは君に目をつけていた。ルミ子に
最も適した男だ、と思っていた。ただし、あ
いつはあの通りのハネツ返りだから、君の意
にそうかどうか疑問だったし、もちろん、
強いつもりはなかったが――。しかしルミ
子はともかくとして、君という人間の誠実さ
と将来性だけは買っていた――」

全く、思いがけない話だった。雄三は半ば茫然として、すぐには言葉も出てこない。

「君の今後については、わしの知人に紹介状を書いておいたから、多分、就職の心配はないと思う。また、自力で一からやり直すのもよいだろう。すべては君の意思しだいだし、当分は身辺もあわただしいことだろうが、君さえよければルミ子の行状監視の意味も含めて、交際してくれるならわしも安心だ」

かたわらにいるルミ子の母も、夫の言葉に満足しているふうにならず、ルミ子に似たきれいな眼を細め、優しく彼を見守る。

雄三の胸のうちに妖しいむら雲がひろがってゆく。はじめて知らされた社長の意中とその温情はうれしかったが、肝心のルミ子の気持ちは全く不明である。それが不安だ。

「お嬢さんは、ぼくのことご存じですか？」
「いや、改まって確かめてはいないが……」

なぜか社長は、言葉尻をにこした。

けれども社長の一言は、彼の心に明るい火を灯した――。

◇

◇

急速にルミ子とのデートがふえた。

いわば公認である。少しも遠慮することはなく、ルミ子の方もまんざらでない様子を見

せるので、向かい合っているうちは心がはずむのだが、いざとなると、自分の怪しげな性傾向に対する劣等感が先立って、つい、話題も途切れ勝ちになり雄三は戸惑う。

第一、ルミ子に向かって「君の脚はすばらしい……美しい！」なんて、キザッぽいことは言えないし、まして「足を……愛撫したい！」と言ったふうな異常な願いごとを告白するのは、なおさらできない。

そんなことを言ったが最後、たちまち侮蔑の嘲笑を浴びそうだし、少くとも、エッチな男だときめつけられるのが目に見えている。

自然にドギマギとして口ごもってしまう。そんな自分の様子が、ルミ子にはなんとも歯がゆい煮えきらぬ男と映るのではないか。めめしい男だという印象を与えているのに違いない――そう思うと一そう気がひるむ。

ある夜の別れぎわ、

「で、雄三さん。新しいお勤め口はお決まりましたの？」

と、さりげなく尋ねたルミ子は、まだです

――と言う彼の返事をきき

「じゃ、いっそのこと、わたしの会社へこられたらどうかしら？ 父の紹介状もあるんですよ。ぜひ、そうなさいな。わたしもうしろ

から専務をつついてさしあげますわ。でもね オッホッホ……」といかにも愉しそうに笑ってから言い継いだ。「その代り新入社員よ。わたしの下で、さんざん、こき使ってあげてよ――と。

また一しきり愉快そうに腰を折って笑う。雄三は内心を見透かされてギクツとする。実を言うと再就職を渋っていたのは、ルミ子と同じ会社に勤めたいという気持が働いていたためだが、それではまるで、ルミ子に対し野心たっぷりなような気がして、思いつくらっていたのである。

しかし、ルミ子の言葉と意味有りげな笑い声を耳にした瞬間、彼は彼女のためになら、世にいうところのマゾヒストが願望する、奴隷と同じ状態になったといいと思った。秘めてきた異質の欲望に火が点いたのだ。

◇

◇

日曜日の午前十時に少し前――。

高下雄三は暑い日差しの中を、流れる汗を拭いながら坂道を急いでいた。

眼が充血している。頭も二日酔い、同様にガンガンしていた。睡眠不足なのである。が今の彼はそんなことを言っていられない。夜中うつらうつらとして、朝方になって少

し眠り、目がさめたらもう陽が高い。

それで、大あわてで、約束の時間に遅れまいと素っ飛んできたのだ。

昨夜、ルミ子はしなだれかかって彼の抱擁を許した。そればかりか唇も――。

自分から差し延べてきて、彼のむさぼるのにゆだねた。

そして、そのあとでささやいた、

「あした、十時にいらっしゃいな」――と。

甘美な誘惑である。雄三が夜もろくろく眠れず、有頂点になったのも無理ではない。

「十時よ！ 時間厳守よ！」と、繰り返し命令口調で言ったルミ子の声が忘れられない。

ようやくマンションに着き、一気に三階まで駆け上った。

三一二号室――。

教えられている部屋の前で、腕時計をチラッと見て時間を確かめてから、改めて汗をふき、はずむ息をととのえた。

ベルを押す。遠くでチャイムが鳴った。

「どなた？ 雄三さんなの？」

すぐ目の前のマイクがしゃべった。

しばらくしてドアが内側に開かれた。

とたんに彼は、ぼおっと……いや、うっとりして佇んでいた。声も出ない。

「さ、お入りなさい：早く――」

ルミ子は彼の手を取って引き入れた。まだ彼は茫然としていた。

「だれにも見られなかったでしょうね」

あわてて彼は、うなずく。

胸の鼓動は静まらず、魅入られたようにルミ子の容姿を睨んだがその眼がまぶしい。

視線のやり場がない。

ナイトガウンというのは名前だけで、蟬の羽根のような薄絹の下は、同じような透明生地、のべビードールネグリジュ――。

エレガンスでしかも大胆な悩殺スタイルだった。ニュツと生え出た二本の脚は美しい色に映え、私先には、アップリケを飾りつけた赤いスリッパを突っかけている。

はじめて眼の辺りを見るルミ子の肢態は、彼の予想を遙かに上回る、トランジスター・グラマーなのだ。

「どうなさったの？ 驚いた？ こんな恰好でご免なさいね。はしたない女だと思いいになった？」

彼はまた、あわてて首を左右に振った。

新しく湧き出た汗が飛び散ったようだ。

「時間きっちり。あわてていらっしたのね」ウフフと笑う。愛らしい眼がクリッと動い

て彼の様子をうかがっている。

唇の端には皮肉っぽい笑みが刻まれていたが、彼はそんなことには気がつかない。

冷房のきいている部屋なのにとめどもなく汗がにじむ。冷汗かも知れない。

「突ッ立ってないでお坐りになったら……」クルリと背を向けてルミ子は奥へ入った。

「きょうはわたし、安息日なの。だから、まだ横になっていました。雄三さんもゆっくりなさって……ねえ」

その声はカーテンの中から聞えてくる。

そこが寝室になっているのだろうか。

安息日――。ルミ子の言った意味はわからなかったが、大きな吐息を一つして、いくらか雄三は落ち着いた。

室内を眺めた。さして広くない部屋だが、いかにも女性の住居らしく整っている。

彼の居るところは応接間兼用の居間になっていて、片側には仕切りがあり、その中は簡素だが清潔なキッチンらしく、ダイニング・テーブルが置いてある。その向うのくぼんだところがお手洗いと浴室らしい。

振り返って見ると、さきほどは気づかなかったのだが、ドアから入ったところはホテル様式に板仕切りがあり、すぐには中がのぞけ

ぬよう、巧みに間取りが工夫してある。

調度品も立派だし二間つづきだ。

社長夫婦から、娘の暮し向きに関しては心配していないと聞かされていたし、日ごろの服装から想像しても、また、専務秘書という仕事なので、これだけの生活を維持してゆける収入もあるのだろうが、それにしてもかなり贅沢な暮らしである。女性の部屋へ招かれたのははじめてだが、彼自身もアパート住まいなのでおおよその見当はつく。

ふうっと疑惑の影がよぎった。

昨夜のあの積極的な誘惑じみたポーズと、きょう、わざわざ自分を呼んで誇らしげに見せた、あの媚態の真の目的は――。

彼は一瞬、ルミ子を覆い包んでいる妖しい影を見出したように思ったが、今はそれさえも問題ではなく、現実の自分の立場に満足して、むしろおどおどしているのだった。

「ねえ、こちらへいらっしやらない？」

カーテンの中から声がした。

勇を奮って隙間から首だけを突っ込んだ彼は、アッと声を出して瞠目した。

ルミ子が寝室に引き返したのは、着替えをするためだとばかり思っていたのに、彼女はまだ、あらわな姿態でベッドの上にいる。

「オッホッホ。なんてお顔なの。言ったでしょ。きょうはわたしの安息日だって――」

「――」彼はまばたきも忘れていた。

「さ、くつろいで頂戴な。そこにお飲物もオツマミもあるでしょ。好きなものをどうぞ……ね。それに、暑苦しいから上衣なんか脱いじやいなさいな。遠慮はいらないわよ」

「でも……」

「でも、プライヴェートなお部屋では……って言いたいんですよ。雄三さんはマジメ人間だものね。でも、わたしひとりがこんな恰好じゃ照れちゃうじゃない？ あなたとわたしは、オヤジたち公認の間柄じゃなかったかしら。わたしのこと、おいやでなかったらもっとよく知ってほしいのよ」

婉然とほほ笑む。語韻にも押れがある。

雄三はキョロキョロとあたりを見回した。

小型の冷蔵庫がある。サイド・テーブルもワゴンも――。舶来のラベルの瓶がある。

――向こうがその気ならこっちだって……ええい、一ちよやったるかッ――

ようやくその気になれた。

無造作に服を脱いだ。手がふるえている。ブランドイ・グラスに手ごろな瓶の中身を注ぐと、一息に飲みほした。

カーッと咽喉が焼け奇妙な勇気が出た。

「ルミ子さん！ ぼくは……ぼくは……」

陳腐なセリフだが、何を言っているのか自分でもよくわからない。夢中だった。

ルミ子の体を被っている薄い掛け具を強引にひっぱがし、小柄な肢態を押えつけた。

とたんに派手な音と声がした。

「何すんのよッ。このバカッ。バカバカッ」

憤激の声と女とは思えぬ鋭い平手打ちだ。

それでも彼はひるまなかつた。

さんざん、濃艶なセクシー・ポーズを見せつけられ、情意を煽られたあとである。

理性も何もかもふっ飛んでしまっている。

欲情ばかりが激しく堰を切った奔流となつて、すごい勢いの暴力と変化して荒れ、あとは、男と女のすさまじい闘争となる。

こんな情景は、彼の性情や念慮からして言うなら、きわめて異例な蛮行ではあったが、それなりに理由もあった。

昨夜、ルミ子と熱い口づけを交した瞬間、これなら脈がある――と、そう思った。

――もしも、機会に恵まれたなら――

と、一晩かかって考えぬいた苦慮の果て、その結果だと言ってもよい――。

異物崇拜症とか変痴崇物症とか――。

女性窃視願望に被虐行為願望――。

それらは皆雄三にとって、その文字を、その語句を、見ただけで聞いただけで、空恐ろしいような自覚を強いる、強烈な刺激性たっぷりなもの……性的倒錯の実態である。

人為化され、技巧化された享楽のための手段ではなく、それが自己本来の姿であり、性情なのだと思うと、いやが上にも、ある種の引け目を感じせぬわけにはいかない。

好ましい女性にめぐり会えばなおさらに、劣等意識はふくれ上り、妖しい心理動向も燃えたぎってゆく。

ルミ子に対する場合がそうだ。

とてもものに、告白できそうもない自分の真実の性傾向を、隠蔽し糊塗しつつ、なおかつその上でおのが願望を満たすには――。

機会さえあれば、まず、相手の肉体を制御してそれから徐々に自欲を充足させてゆく。

これよりほかに手はない。

高下雄三が思い悩んだ末に組み立てた、エゴイスチックな自己満足を得るための方程式……その最短距離がこれだった。

現在の状況がその好機の到来だと思った。で、いきり立つにまかせて、強引に挑戦を

試みたのだった――。

その結果、不覚にも彼はうめいた。猛り狂った報いとして、目的を果たすより先に暴走して自然燃焼してしまったのだ。彼は深刻な敗北感、それに加えて、言い知れぬ虚脱感をも味わっていた。

「クウッ、クックク……」鼻にかかった奇妙な含み笑いの声がルミ子の口から出た。そして「アアー、ハレンチ！」――と。

その言葉は疼痛となって肺腑をえぐる。

ルミ子に押しつけられ、ベッドから床の上に転がり落ちた雄三は、そのままの姿で動くことができなかった。

ルミ子は、あっさりと出ていった。

浴室で、激しく、また、さわさわとした水音がする。その音をききながら、彼は味けないう放心状態を噛み締めていた――。

◇

◇

ルミ子が戻ってきた。

シャワーを浴びた体はバス・タオルをたたいた一枚身にまといつけただけで、あらわな肢態のそここはまだ濡れて潤い、肌が美しく輝いて見えた。

ベッドに腰を埋めた彼女は、珍しい生き物を見るような目付きでしげしげと彼を見た。

高く組みかさねた脚の先にある真っ赤なスリッパが、彼の醜体を嘲弄するかのごとくりズミカルに動く。彼の魂は疼いた。

「知ってたんよ。あんたのことはみんな！」ハッとして彼は息をのみ、思わず喘いだ。

ルミ子の言葉には今までになく、生れ故郷の関西弁が入り混じっている。

本来ならその語調は、男の情火に油を注ぐ甘い歌声に似ているはずなのに、情勢は主客転倒して、女のほうが勝ち誇っていた。

「わたしの前ではいくらお体裁ぶってもあかん。隠し立ては通用しません。専務さんの秘書という職掌柄、わたしは調査室の人とは顔馴染みなんよ。わたしの言うことなら二つ返事で聞いてくれます。あんたのことはもうすっかり調査済みや。だって、パパがせっかく候補者として選んでくれた人やけど、三十を過ぎてもまだ独身やなんて……だれが考えてもチョットおかしいもん……ね」

彼の全身は、おののきが貫く。

射すくめられているような感じなのだ。

「でもアカンらしいやないの？ 自分でも認めるわねえ。ついさっきのだらしない有様が一切合切を立証したようなもんやわ。そうでしょう、ユウ――」

最後の言葉、いくら尻上りの彼に対しての呼びかたは、雄三の「雄」を親しみと侮蔑をないまぜたものともとれたし、横文字の「you」と呼び捨てているようにも聞こえ犯し難い威厳も交錯しているように思えた。

すべてが暴露されて男のてらいが剥脱され尽した今、悄然として床に坐っている彼にはただ、ルミ子の素足が眼にまばゆい。

彼女は、面白い見世物を見る眼差しで、あきもせずに彼の様子を眺めている。

好奇心が露骨になり、妖しげな微笑が顔中にひろがり、やがて、ニヤツとした。

「スリッパを脱がせてー。手を使わずに！」

命令口調で、おどけて言ったあと、

「好きなようにさせてあげるから……」

と言って、ゲラゲラと笑い出した。

◇

◇

十余年に及んだ高下雄三の夢想はルミ子のはなやいだ笑い声で破られ、幻像から脱け出して現実の姿かたちになろうとしている。

彼はこれまで、多くの本を読んでいた。

それらは皆、おのれの性を空想の世界に浮遊させることの可能な、彼にとっては必要なものばかりで、それが、恍惚とした桃源境への誘導体となる場合も多かった――。

◇

◇

女性の素足を愛でるというテクニックは、かなり古くから東洋人の間で流行している。

古代の中国では、貞節・服従・誠実が、淑徳婦人の最たる条件だとされていた時代もあり、その思想がやがて、すぐれた性愛技巧の一つである。「足愛」技術を産み出し、多数の妻妾制度が通俗化した世相は、更に高度な巧妙さに傾き、とうとう婦人の自由を束縛する「纏足」という奇想的な形態の創造へと発展し、その風習は近世にまで及んだといわれているが、そんなことは雄三にとって、畸形視する以外の何者でもない。

彼は、純然とした生の素足、その表情と感触に惹かれるのだ。

淡い肌色に彩られてふつくらとした女性の素足は、^{あしのうら}蹴や踵までがやわやわしく、両の手に包み入れるとき、男の心に意外なほどの喜悦を与え、女性もまた、耐え難いくすぐったさの中に錯綜する微妙なものを感知し、それが得も言われぬ、甘美なものとなることもあると言う。

雄三の脳裏に描かれている幻想は、自分好みの女性へのマッサージとともに、「素足」への愛着だった。

マッサージは、掌での軽い圧迫や指圧、それに、やんわりと揉む動作が主体となり、足首から始まって、膝、腿、腰、背、胸へと移り進んでゆく奉愛に終始する。

女性の性感帯というものは、全身、到るところに分布されていると多くの書物が記述しているのを、彼はよく覚えていた。

とくに膝関節のあたりは重要な部位で、裏側や表面の微細な窪みは、女性の感受性によつては、急所とも成り得るともいう。

夢想するだけで雄三はある種の恍惚をすら覚えたものだ。この想念が雄三を夢中にさせるのだ。

それが今、敬愛するルミ子の実態に対して現実に、許されたのである。

雄三の背筋を、恐怖じみたおののきが幾度も貫き、皮膚はことごとくが粟立った。

慄える手を差し延べて女の臍を奉持した。ドキン、ドキンと鼓動は高く、自然に呼吸もはずむ。犬のように舌を出して息をしながら、唇を押し付けて夢中で舐めた。

軽く歯を当て、かじるようにした。指は一本ずつ、あるいは大きく頬張る。愛らしいルミ子の足の指は、口の中で伸び縮みして暴れまわる。

気味の良い暴動がつづき、その間動物じみた奇怪な影がつきまとう。

最初のうちルミ子は、両手をうしろへ置き反り身になった上半身をささえて、皿のような真ん丸な瞳で、不審げに男の挙動を見詰めてただけをくねくねと動かしていた。

それがいつの間にか、真剣そのものの男の動作に誘われて、優越感の付随する、いまだかつて知らなかった不思議な征服者の心地を覚えた。

「——、ハ・レ・ン・チ……」

小さな叫び声とともに上体がぐらつと揺れて、ベッドの上に仰向きになった。

わずかな身動きにも、甘酸っぱいような香りが発散してきて、快く雄三の嗅覚を刺激し陶然とした境地へ誘い込んでゆく。

踵を片手でささえ、もう片方の掌を膝の裏に当てて、なめくじの通った跡のように唾液が伸びやかな脛に残った。

彼の唇は、とうとう膝小僧を越えた。

ルミ子の自由な片足が翻って、トンと彼の肩を蹴った。

寸前までの許容がまるで嘘のように、すり抜けて悠然と床に立ったルミ子は、転倒した男を冷ややかに見下していた。

その姿態には、ごく自然な、持ち前の驕慢さがにじみ出ている。

あわてて身を起こし、四ッ這った形で息をはずませ、おそろおそろ女を仰ぎ見る雄三の姿は、餌を求める犬にそっくりだった。

「アッハッハ……その恰好、まるで犬！」

男のような哄笑を浴びせ、傲岸に床を踏みしめて立つルミ子の姿に、雄三の身も心も、完全に慥伏し尽していた——。

◇

◇

「ユウ！このままここで暮す気はない？」

しばらくしてルミ子は言った。

男の正体……その本性を見極めた上での、自信に満ちた声音だった。

高慢な女の勝鬨と言ってもいいだろう。

「——？」

雄三はがくツとして女を見上げる。

「ただし、いろいろと条件がつくけど……」

そんなことはとくに覚悟してるわねえ」

ルミ子は放縦な姿で歩きはじめた。

「わたしって、ほんとに気まぐれなのよ」

腰をくねらせてかがむと、そこに脱ぎ捨ててある男のズボンから素早くバンドを抜き取り、試すように弄んでから、なにげないそぶりで二度、三度と振り上げる。

「こんなのが丁度手ごろだわ」

小さなひとり言である。だが、ルミ子の動向のすべては鋭く雄三の胸芯に突きささる。

「就職なんかおやめなさい！男ひとりぐらい、わたしがじゅう分に食べさせてやるッ」

ぼおとした眼で、雄三は動き回るルミ子の姿態を追っている。どのような返事をすればいいのか、全くわからないのだ。

「ボーイフレンド、いえ、それ以上の資格を与えてあげます。わたしの夫……いかが？」

平然と顧みて、男の心を試し探るような艶ッばいながし目を送ってくる。

「そうすればオヤジも安心するもん。でも、それはあくまで外見だけ。実質的にはね」

言葉を途切らせてクククと忍び笑う。

「ほんとは、男一匹を飼ってみたいの——」

ググツと、こんどは雄三が、蛙が踏みつぶされたような声でうなった。

「ユウは只今からそのままの状態！この部屋から一步も外へ出てはいけない。つまり、外部との接触を一切断つよ。友人はもちろんのこと、親兄弟との連絡も許可しません。この部屋がユウの世界になるんよ」

「——？」

ルミ子の言う真の意味が、もう一つ雄三に

はのみ込めない。啞然として彼は、ルミ子の顔をうかがうばかりだった。

「わたしの生活には干渉せず、何事もわたしの言いなりになる！ 服従——それが絶対の条件。わかったでしょ。はっきり言えば、わたしに従属することを誓う、ド・レ・イ！」
 ウー、ウツと、雄三はうめいた。

思わず知らず、腹の底から絞り出すような声でうならずにはいられなかった。

特定の女性の奴隷になる——。

そんなことを、夢まぼろしで描き見たことはあるが、現実となると考え込んでしまう。

「どうなの？ 本心をおっしゃい！ 本当は悦んでいるでしょ。はっきりとお言いッ」

「で……でも……そんな……それは……」

「なにが、でも……なの。わたしは高下雄三という男がどんな男だか、なにもかもちゃんと知り尽しているのよ。怪しげな雑誌を読み耽り、妖しげな行為にウツツを抜かしていることだって——」

「でも、あんまり急な話だし、それに……」

「それに……？ どうしたって言うの？ わたしのほうは最初からそのつもりで、だから昨夜、必ずだれにも告げぬように、だれにも見られないように、こっそりとお出でなさい

と、くどいほど、念をおしたはずよ」

「しかし、アパートの始末だけでも……」

「そんなもの、放っておきなさい！」

雄三に皆まで言わせず、ルミ子はピシッと庄し伏せる。峻厳な威嚇の声音だ。

「そんなことを言われても困ります。このままの恰好では……せめて着替ぐらいは——」

「そんなもの、なぜ必要なの？」

「なぜって……？ じゃ、ぼくは——？」

「そうよ。それでいいじゃない。そうやっているほうがユウには良くお似合いよ」

雄三は呆然としてわが身を眺めた。

ルミ子は知らん顔をしている。

「首輪——。それに、つないで置いたための鎖が要る。ロープも入用だし……あとで、手ごろなのを捜してこよう」と

まるで歌でも唄っているような調子だ。

「そんな……そんなこと、無茶だよッ」

さすがにあわてて彼の声はふるえた。

「お黙んなさい！ 内心では悦んでいるくせに——もっと素直になつたらどうなの！」

「喜ぶなんて、馬鹿なッ。そんなことが……」

「おや？ うれしくないともいうの？ じゃ証拠の品、高下雄三という男の本性をむき出しにしたものを聞かせてあげます」

ルミ子は小踊りするような私どりで、鏡台脇のケースから携帯用のテープレコーダーを取り出すと、サイド・テーブルの上に置き、しなやかな手捌きで操作した。

「よく聞くといいわ」と、にんまりと笑う。

しばらくは音がなかった。が、すぐ

『ああこの人？ なら、よく知っている。だって、あたいの上得意だもん。ウフフフ』

若い女の声だ。雄三はギョッとした。

『で、よくくるの？ この男の人——』

男の声に変わった。質問しているらしい。

『さあ——二た月に一度ぐらいかな。あたいの体つきが好きな人によく似ているんだって

さ。代用品なのよ、あたいは——。でもね、

とっても大事にしてくれるのんよ』

『そのとき、どんな様子なの？』

『困っちゃうな——だ。ほんとに弱っちゃうわ。プライバシーの侵害だもの。あた

たち、意外と義理堅いのんよ。だってさ、お

しゃべりは慎しまないとお客さんが寄りつか

なくなっちゃうもの——。あらッ、こんなに

たくさん？ 困ったわ。弱っちゃったなあ』

何かを訊き出そうとして、男は金でも握ら

せたらしい。聞き取れぬ低い声がした。

『あのね、でもこれ、ほんとに内緒よ。でな

いと、あの人に悪いもん。とってもよくサービスしてくれるのよ。あたいのほうがお客みたい。はじめはエッチな男やと思ったけれど、このごろは、あたいのほうがマイツチャウの。とってもすごいんだから——わりかしカッコいい男やから、あたいのほうも気の毒みたいだし、可哀想にもなってきたやう」

「すごいって、どんなことをするの？」

「そんなこと、ウフフフ、ここじゃ言えやしないわ。立派そうな人やけど、あんなのがマゾヒスト、変態性とちがうんかしら。お客さんの中には変った人が大勢いるから、あたいたち、割と平気だし、このごろいろんな本に出てるでしょ。だから、わかったようなカッコして、慰めてあげるようにしてんの」

「もっと、具体的に聞かしてくれないかな」

「いやーだッ。あんたもエッチね」

雄三は両手で耳を閉じて突ッ伏していた。

「やめて……もう、やめてくれッ」

首を激しく左右に振って言う声は、抗議ではなく悲鳴と言ったほうがいい。

「白ばくれて、わたしを誑^{たが}そうとしたってダメだってことが、これでよくわかったでしょう。調査網はしっかりしているのよ。どう、おしまいまで聞く勇気がある？ このトルコ

嬢さん、なにかも洗い浚いにしゃべってくれたので大いに参考にさせてもらいました」

雄三は震慄した。一瞬、スーッと頭が軽くなるように血の気が失せてゆくのが自分でもわかる。が、すぐ、カーッと、頬も全身も火が点いたようにほてりはじめた。

羞かしさに居たたまれず、おろおろとして「でも……でも……」と意味のない言葉を繰り返す。その前へ、足がスーッと近づく。

「ほしくないの？ これでもイヤッ？」

雄三はますますうろたえた。頭もクラツとする。しかし、もうそのことが義務づけられてでもいるようにその足に口づけしていた。

「せいぜいうまく飼ってあげます」

ルミ子の高笑いが頭上で響いた。

見失っていた彼の理性が、その笑い声でわずかながらによみがえった。

「でも、このままで、こんなことを……そんなことができるわけがないッ」

「あらッ、どうして？ そんなこと平気よ。」

ユウが心配することはないわよ」

急に、ルミ子の声が優しくなった。

「心配ないって……どうして？」

「だってさ。蒸発しちゃえばいいのよ。人間ひとりぐらい消えてしまったって、なんの不

思議でもない当節だもん」

「——蒸発——？」

おおむ返しに言ってから彼は慄然とした。骨髓まで、スーッと冷たい風が吹き抜けてゆく感じだ。茫洋としたうつろな瞳で、無我夢中で逃げ場を捜すように、キョロキョロとあたりを見回していた。

ルミ子は彼を見守っている。自分の言った言葉に対する反応を確かめるかのように——

◇

◇

——蒸発！ そんな言葉があつたなあ——

床に坐ったまま、雄三はぼんやりと考えていた。しかし、自分自身のこととしてなら、およそ、考え及びもつかぬことなのだ。

今の状態だってそうだ。

ルミ子への愛執がかさなり、その想念の重荷に耐えられなくなって、噂話にきくトルコ風呂をめぐり歩いた時期がある。

確かに、性倒錯気味の客に対して、適当にあしらう術を心得ているトルコ嬢も多く、中には、そんな客を好む者さえいたぐらいだが、どの女性も、容貌肢態が彼を満足させるまでにはいたらず、マネーしだいという露骨な態度には興醒めてしまう。

やっと見つけたマユミと言う女が、いくら

か彼の燃えたぎっている異質の欲望を充たしてはくれたが、それさえも、ルミ子に比べれば問題にならない。

ルミ子は違う。彼女は生れ育った環境がそうさせるのか、茶目ツ気な中にも毅然としたプライドと、高尚な品格を兼ね備えている。

彼は、ルミ子を見知ってから、夢想では彼女のドレイとなることを望み、羞恥にみちた屈辱きわまる、あらゆる情景を心に描きながら、なんの恥じることも抵抗も感じず、逆に思いみることで、自分の醜い欲望を抑制してきたと言ってもよい。

が、さて、現実の問題となった場合は……実は、そんなことは夢にも思っていない。たとえルミ子と結婚できたとしても、彼の夢は、やはり夢だけで終わってしまうだろう。それでもじゅう分だと思っていたのだ。

それが、思いもかけず――。

マユミと呼ぶトルコ娘の談話が、テープに納められていることが彼には致命的であり、同時に、進退を決する重大事となった。

◇

◇

「どうなの？ 誓う？ 約束できる？ わたしは今すぐ返事が聞きたいのよ」

彼の様子をじっくりと見詰め、しばらくた

めらったふうを装おっていたルミ子は、不意に、そう言ってから、ウフッ、ウフフ……と、妖しい笑いをまき散らしたあと

「そうね、これならどうかしら？」

と、少し離れた場所に足をひろげて立って傲然と彼を見下した。

「ここまで這ってくるのよッ」

急に言葉が険しくなった。

ベルトを振り上げ床の上に叩きつけた。

鈍い音が這って流れ部屋中に響いた。

ビクッとして、雄三は虚脱した瞳で見た。

ゾーッとした。全身の皮膚がそそけだつた。

しかし奇妙なことだが、それは悪感とは違っていた。麻薬に酔ったような、ある種の恍惚感のともなう不可解な気分だった。

無意識のうちに、無思慮に、彼は動物と同じに四ツん這いになって進み、真ッ赤な顔を起して一点を凝視し、精一ぱい首を差し伸ばしていた。

それが、ルミ子の試問に対する、心底からの彼の応諾だった――。

有能な青年がひとり、不意に世間から姿をくらましてしまった。

いわゆる「蒸発」である。

その男は、かつて、自己が内秘する倒錯の

性におびえて煩悶をかさね、空想の世界でのみ遊ぶことで憧憬をまぎらわせていた。

ところが、突然変異に似た状況のもとに、

空想から脱却して現実、ある境地へ足を踏み入れてしまった。

人間性を剝奪された男には、一匹の家畜としての処遇よりほか、与えられないはずだ。

男が強いられることは、ひとりの女性に対して、より美しく、より健やかに、より充実した生活を営むための諸現象であり、自由奔放に振舞う女のコヤシになることだろう。

ときには男の目の前で、女が自分のより良き理解者だと考慮し、生活の基礎を依存している異性と過すこともあるだろう。

ふたりの好奇の視線の中で、男は浅ましい醜体を曝し、屈辱の涙を流すかもしれない。

あるいは逆に悦びを深め、一段と女を崇敬し、意欲的に献身ぶりを発揮するか――？

おのれの立場を男がしあわせだと感じるかそれとも、悔恨の情にさいなまれるか、そんなことは予測することはできないが、男は必ず、現実と非現実との相違の大きさを、身をもって痛感することだろう。

とにかく男は、こんなふうにして蒸発してしまつた。自己の持つ特異なエネルギーに負けたのかも知れない。

△おわり▽

映画通信



極秘・

女拷問

佐度喜男

映画「極秘・女拷問」——ひさしぶりの本格的責め映画だった。題名はD社のヒット作だった「秘録おんな牢」をもじったような感じで甚だピンとこない。以前にも誰かが書いていたが、これは当然「美女拷問」とでもつけるべきだろう。出演者の中に中国人らしい名前も見受けられたので、題名「女拷問」からは内容の見当がつかず、憲兵拷問ものか？と考えたほどだった。

開幕——まずオヤと思う。

いかめしい顔つきの男と、その傍にしどけなく眠る愛妾らしい美女。夜中目ざめた男の起き上がるところへ刺客の侵入——白刃がひらめき首がとぶ——一瞬の惨劇——風のように消え去る暗殺者——気のついた女の悲鳴——とこまで書けばあとは説明の要はないだろう。

明治四年正月に起きた例の広沢参議暗殺事件にはかならない。

彼と同衿していたのは愛妾福井かね。

この事件、複雑な政府部内の勢力争いと、

維新直後の殺ばつた気風が背後にあっただけに、愛妾福井かねに対する取調らべは峻烈をきわめ、科学的捜査方法もなにもない当時のこととて、解決を焦った司直による、ようしやない拷問は正に地獄絵図だったという。

旧幕時代そのままの苛酷な方法による拷問を体験した、おそらく最後の女性だったと思われる彼女は、四年半にわたって数十回におよぶ苛責に耐え通して史上に不滅？ の名をとどめているのだが、それだけに映画や小説には絶好の材料で、今までの種の映画にとり上げられなかったのがふしぎなくらいだ。したがって筋はわかっているだけに興味は責めシーンの出来だけに集中する。

型どおりの導入部のあと、いきなり吊るしの答うち責めが展開される。

腰のものひとつの裸体にむかれた無惨な女体が、きびしく後ろ手にいましめられ、頭上高く吊るされている。答がうなり、怒号と絶叫、そのたびに両足がむなく宙を蹴り、のけぞった腰の豊かな乳房が悶える。女体にかけられた縄目も一応菱縄縛りになっているのが嬉しい。このあたりは拷問映画に手なれたこの監督の演出ならではといったところ。かなり迫力のあるシーンだ。

ここから、お定まりの回想シーンと筋の進展を示すぬれ場をはさんで拷問場面が何度かくり返される。

この拷問シーン、当然お目にかかされると期待していた石抱き責めの出てこなかったのは甚だ残念。“江戸の拷問”といえはまずこの石抱きが連想されるくらいおなじみのものだしこの事件の記録にも容疑者を石抱き責めにかけたと出ているのだから、これの見られなかったのは惜しい。

かつての『拷問刑罰史』における、女中の石抱き責めシーンが哀切きわまりないもので強烈な印象を残しているだけに一層その感が強い。そのかわり？ 木馬責めという思いがけないものが登場。責め木をまたがらせた両足を獄吏が引っぱって苦しめるところや、むき出しになった太ももの奥から血が流れて責め木を染める凄惨なお色気とでもいうシーンもあった。

しかし総体はこの責め場面は少々荒っぽい演出で、牢内の拷問というよりヤクザのリンチ的印象が強い。これは責められる側の囚人と責める役人の立ち場がはっきり捉えられないからで、残酷な制度である拷問を、役目とはいえ冷然と執行する責め手の事務的な非情

さと、地獄の苦しみに悶える囚人たちがはつきり区別されてこそ、拷問のおぞましき、責められる女体の哀しさが見る者の胸に迫ってくるのではないだろうか。それにムヤミヤタラとなぐりつけ、引きずりまわすのでは囚人役俳優も大へんだが、役人の方もごくろうな話。もっと演技によるふん囲気描写という手はないだろうか。

たとえば、答のうなる音、肉の鳴るぶきみなびびきにつれて、身をのけぞらせ、あるいはえびのように曲げて激痛にもだえる囚人の表情、きびしい縄目のかけられた後ろ手の指先のわななき、脂汗をしたたらせ、血の涙を流す女囚の顔……など、もっとキメの細かい場面がほしい。

しかし幾分の不満はあるものの、この映画なかなかいい線を行っていると思う。話の筋がはっきりしているので、拷問の必然性が了解できるし、明治時代のことなので、ちょんまげ姿で現代語という、不自然さも逃れられる。

主役に谷ナオミを起用したことも成功の大きな因で、彼女の熱演ぶりは楽しめる。谷ナオミのやや古風なオトリした容ぼうと肉感的な豊満な肢体はこの主人公のイメージにぴ

ったりで、この点は夢が実現したといってもよいのではないか。

明治維新といえば、もうひとつ忘れられない『女拷問』がある。例の清川八郎の愛妾お蓮の取り調べで、役人を斬って姿をかくした八郎の逃走先をめぐって町役人の苛酷な拷問を受け、遂に獄死したというものだが、この方は映画『暗殺』の中にも登場したようだ。しかし場面も短く、とても満足できるものにはなかった。

そこで明治百年にちなんで？ この『お蓮責め』も場面を牢内に限定して『責め映画』として作ってもらえないものだろうか。もちろん石抱きやえび責めなどの拷問チャンピオンたちに十分たんのうさせてもらう。この主人公お蓮は病身だったというから谷ナオミの肉体美というわけにいかないが、辰巳典子あたりならピッタリというところか。彼女のやや細身の裸身がきびしい縄目にいろどられ、脂汗にまみれて悶えるのは残酷美の極致だろう。

ただし、あくまでも『格調高い』お定め書きどおりの拷問でお願いしたい。八郎とのぬれ場などをはさめば、楽しいものになると思うのだが……。

夜の潮騒

葉 夜 田 澄 尾

1

哲司は、ふと、こんな生活がいつまで続くのだろう、と考えた。その解答は、はっきりしていた。少なくとも哲司が大学を出るまであと最低六年は続くであろう。この先の六年間は、気の遠くなるような時間に思えた。

なんの必要で、なんの目的のために俺は大学などへ行かねばならんのだろうか？

哲司は、いままで母親の美也子との間に数知れぬ、いさかいをしてきた。母一人子一人で、頼りにしていながらも、決して美也子は

哲司に負けてはいなかった。そして、次々と哲司にとっては、身の毛もよだつような事実をあばいていった。

見知らぬ男が、母と共に夜具の中にいるのを初めて目撃したのは六才のときであった。「母さん、あの男の人となにをしていたの」男が帰るのを見定めた哲司は、まだ露わなままの胸の汗をぬぐっている美也子に訊いたものであった。さすがに、美也子もこのときは驚いて、

「オやお前、外で遊んでいたのではなかったのかい」

と、こわい顔をした。それから哲司を、ま

だ暖さの残っているふとんに引っぱりこんで抱きしめ、

「こうやって、おじちゃんを抱いてあげていたんだよ」

と、いい放ったものであった。

六才の哲司にも、その振舞いはあまりに獣じみたものに感じられ、あわてて美也子の腕から逃がれると、

「母さんのバカ、バカ！」

と叫んだ。そして、涙のあふれそうなのをこらえて、にらみつけている哲司を、美也子はいきなり押えつけて、身体中をとろろきらず、力いっぱいぶちながら、

「母さんがこうして稼がなくては、二人とも食べていけないのだよ。それがお前にはわからないのかい！ このわからずやめッ」

と、これも涙声で怒っていた。

哲司は、こうした種類の幾度かのあらそいによって、私生児と呼ばれる自分の出生も、売春婦からまがりなりにも身を起こして、今では女性の十人余りも置くバーのマダムにおさまった母親のことも全て知った。

ペツタリと鏡台の前に坐りこんで化粧に余念のない美也子の背後に立ったまま哲司がいった。

「俺、大学へいくの、止めたよ」

鏡の中の美也子は急に険しい目になった。

「なぜ、なぜなのよ。また、そんなことをいって、母さんをくるしめたいんだろ」

「ちがう。俺、何で大学へ行く必要があるのか、わからなくなっちゃったんだ。ただそれだけだよ」

「お前はこんな間もそんなこといったわね。そんな気持ちになったのもみんな母さんのせいだといって、私をさんざんぐったね。今日もそうして気がすむのなら、母さんをぶっておくれ。いくらぶたれてもいいから、大学へ行

かないなんていうことは、今後一切、私にきかせないでおくれ。ね、頼むよ、哲司」

「わかったよ、母さん。もういわない」

「ありがとう、哲司。さあ、その代り、気のすむまで母さんをいじめていいよ」

「いいんだよ、母さん」

「バカだねえ、哲司は母さんの可愛い一人っ子じゃあないか。遠慮することないのだよ。母さんの軀は、哲司のためにいろんな苦しみ耐えてきたんだ。母さんは哲司にぶたれるのなら、いくらぶたれたって平気だよ」

「母さん、また、悪いくせが出た」

「そんなこわい顔しないで、さあ、哲司、そのバンドを抜いて、母さんを思う存分ぶっておくれ。そしたら少しは気も晴れるよ、両方のね」

こうなった美也子は、要求通りにしてやるより他にどうしようもなかった。

哲司が小学校の五年生になった頃、美也子は家の玄関を改造して一杯飲み屋を開いた。哲司は、もう母親が知らぬ男をよろこばせなくとも母子が食べて行ける、と思い、胸がいっぱいになるようなよろこびを味わった。事実、美也子は、それまでのように男を座敷に

上げるようなことはなくなった。

だが、暫くして客も帰った閉店時間の頃、美也子がべろべろに酔って座敷にあがって来たことがあった。哲司は仕方なく見様見まねで店の火をおとし、店仕舞いをした。

美也子は、座敷にころがってうたたねして

いる。
「しょうがない母さんだな。そんなところで寝ては風邪をひくじゃあないか。さあ、着がえて、ちゃんと寝なよ」

と、大汗をかきながら、寝巻きに着がえさせようとした。とたんにいままで眠っていると思った美也子が、ぱっと目を開いた。

「本当にわるい母さんだね。今晚は哲司が母さんを折檻しておくれ」

「どうするのさ」

「押入から麻縄をもってきて、しばらくだよ母さんを」

「いいよ、そんなことをしなくても」

「いいから、そうしておくれよ。でないと、また、母さんは前のように男の人を連れてきて、哲司に悲しい思いをさせてしまいそうだからさ。早く母さんの軀の中から悪魔を追出しておくれ」

哲司は肯いた。美也子の軀から悪魔を追

出すためなら、やらざるを得ないと思った。

哲司は急いで押入れから麻縄を引っ張り出してきて、美也子にいわれるままに、両手を背にくくった。

「もっときつく、しっかりと」

哲司は夢中で、きっちりと結わえた。次は足首であった。そして、足首と手首を一本の縄で連結し、軀がそれるだけそらして、しばらく合わせた。

「哲司、そうしたら、煙草に火をつけて、母さんの軀のどこへでもいいから、押しつけてもみ消しておくれ、消えたらまたつけてね」

「そんなの、可哀想だよ、母さんが」

「いいんだよ、悪魔を追い出すのだから！」
 そういわれると逆らえず、哲司は茶ダンスの引き出しから美也子の煙草をもってきて火をつけた。

「哲司、その前に、母さんの口に手ぬぐいをまいておくれ。悪魔がくるしんで叫び声をあげるといけないから」

哲司は、いわれるままにさるぐつわをしてから、恐る恐る煙草の火を美也子の腹部に近づけた。その手が、わなわたとふるえた。哲司は目をつむり、思いきって煙草を美也子に押しつけた。

「ぐえッ！」

というような美也子の声で、哲司はあわてて手をはなした。美也子の顔をみると、目がかあっとみひらき、

「ぶう、うう……」

と、もっととやれ、と催促している。

哲司はなぜか急に、美也子が、いや悪魔が苦しんでのたうちまわる姿をみたい、という気持にかられた。そして、手当り次第に肌に煙草をおしつけた。そのたびに悪魔は、封じられた口から、苦痛をうったえる呻き声を上げ、転々と不自由な軀をのたうたせた。

それから時々、哲司は、この悪魔退治の儀式をやらされた。それが何時頃からか、美也子の一方的な責任感から、哲司に折檻をせがむようになって来た。

今日も、その悪魔の再来に違いなかった。

身につけていたものを、自分の手でいつの間にか脱いで、先刻から、哲司のバンドの打撃をその軀全体で受けとめている美也子の顔に、一目でそれとわかる恍惚の表情が浮かび上ってきていた。それをみた瞬間、哲司は火の棒が軀の芯をつきぬけるような思いに駆られて立ちつくしていた。

哲司の心の奥底に、何時ともったともしれない美也子への憎悪の火が、その勢いを急に最近、増して来ていた。

哲司は、学校にいてもマンションの自室にいるときも、美也子をやっつけ、自分から引き離す方策ばかりを考え続けていた。美也子が身近かにいる限り、上品で、いかにも教養があるようにみえる生活は望めそうもなかった。うすよごれて、ほこりっぽく、包みかくすべき劣態を、何の恥らいもなく母子がさらけ出し合っているようないまの生活は、いつ止まるとも知らず続く思いであった。

哲司はその生活から抜け出そう、と考えるたびに、美也子への憎悪の炎はその火勢を強めるのであった。

「もう？」

身をおこしかけた哲司に、晴江が不満そうにいった。

「ああ、文句あるのかい」

「だって、私、まだ……」

「バカヤロー、偉そうなこというな。俺のやることに不服があるのなら、いつでも俺は別

れてやるぜ」

「そんな……。哲ちゃんはずぐに怒るんだから、うっかり口もきけやしないわ」

「男が女を支配している限り、女は男の奴隷さ。女がもう結構ですっていうまで、主人の男が奉仕する必要はないさ」

「ごめんね、哲ちゃん」

晴江に対する哲司は、帝王である。

晴江は哲司の同級生であった。哲司が心に描いている文化的な生活を、晴江は当然のような顔をして享楽していた。晴江は、その美しい顔と共に、一六三センチのすばらしくのびのびした肉体の持ち主であった。逆境に育った哲司の眼に映る晴江は、何の不足のない満ち足りた家庭の、満ち足りたお嬢さんであった。その晴江が、憧れを以って眺めていた哲司の夢を破ったのは、頭脳の悪いことであった。哲司は落胆と同時に、煮え湯をのまされたときのような激しい怒りを感じた。

「松本君、うちへ遊びにこない？」

哲司はさりげなく放課後、晴江を誘った。

「お宅、どちら」

「青山のSマンション」

「まあ素敵！ 私一度でいいからマンションに行ってみたいと思っていたの」

晴江は何の疑いももたずに、喜々としてついて来た。美也子の出掛けた後の室内は乱雑であったが、別に気にもせず、

「まあ、自動車があんなに小さくみえる」

と、窓から下をみてよろこんでいる晴江であった。哲司は、そんな晴江を見やりながらゆっくりと身につけているものをとっていった。そして、

「松本君！」

と、呼びかけた。

「なあに？」

と、ふり向いた晴江は、一瞬、顔をこわばらせたが、すぐに気をとりなおしたように、

「木戸君、私がほしいの？」

と、意外なほど、冷静な声でいった。

「ああ！」

「いいわ」

晴江は、自分から服をぬいで、カーペットの上に、大の字になった。

「ベッドの方が……」

といいかけた哲司に、

「このじゅうたんの肌ざわりが私、大好きなの。さあ、早くいらっしゃい」

晴江は想像通り、処女ではなかった。

「晴江、いままで誰が相手だったんだ」

「パパよ」

「なに、パパ？」

「義理のね。パパはママと私をいっぺんに可愛いがるの」

「それで、ママはだまっているのかい」

「ええ、だって、いまのようなぜいたくで平和な生活が送れるのもみなパパのお蔭ですもの、それぐらい仕方がないっていつてるわ」

哲司の夢がガタガタ音を立てて崩れた。理想の人と描いていた晴江が、自分よりももっと忌わしい生活をしていることに、いいしれぬ落胆を覚えた。それと同時にそんな汚れきった生活に何の抵抗も感じない晴江に、殺してやりたい程の激怒を覚えた。「こんなヤツは人間として扱ってやることはない。獣だ、ブタだ、牝犬だッ！」

哲司はその瞬間から晴江を支配するようになった。そして、幼い頃のいまわしい想い出が、晴江の顔に母の顔をダブらせた。フト、哲司の頭にある計画が浮かび上った。

「おい晴江、お前、パパとバーへ行ったことがあるかい」

「ないわ」

「いつか一度行ってこい」

「行ってなにするの」

「俺のお袋とお前のパパを逢わせるんだ」

「それなら何も私がバーへ連れ出さなくたって、二人を外で会わせれば、それで済むんじゃない」

「ちがう。お前はパパにこういうんだ。『パパ、マゾの女と遊んだことある？』ってな」

「ええ？」

「そういえばパパは必ず興味を示す。そうしたら、私、マゾの女の人、知ってるんだけどパパに紹介しようか」っていうんだ」

「うん」

「パパは必ず乗ってくる。ここで、ただ、お金がちょっと高いのよ」といって、三万円前金であずかってくるんだ」

「なるほどね」

「あとはオレがうまくやる。それから、パパには、相手の女と余り余計な口をきくな、っていっておけよな。そうしないと後で、うるさい奴が出てくるってな」

「わかったわ」

「じゃ、お前、もう帰れよ。あとは俺がうまくやっておく」

「母さん、お願いがあるんだ」

「なあに哲司。いってごらんなさい」

「この間、晴江といるところへ変なのが出て来てさ、強迫されてるんだ」

「あら、それは大変」

「まあ、何とか一応は話をつけたんだけど、そいつ、どうもサドらしいんだ。それで晴江を一度、貸せていうのだけれど、晴江はまだ、子供だろ。何も知らないのに、いきなりいじめられでもしたら、気が狂ってしまうと思うんだ。それで……」

「わかったわ。私に身代りになれば、っていうのね」

「そうなんだ。そうしないと、本当に晴江がやられてしまうのだ」

「わかったわ。哲司と晴江さんのためですもの、母さん、どんなにいじめられても我慢してみせるわ」

「明晩、晴江がその男を連れてバーにいくから、余り余計なことはいわずに、いう通りにしてやってくれよ」

「わかりました」

3

美也子はいかにも疲れた足取りで帰って来た。その姿をみた哲司の心は、嵐のように吹き荒れ、樹々がこすれ合うように激しくゆれ

た。哲司に自分をいじめることを強要していた美也子が、今日はその意思とは全く無関係に、晴江の義父の思うままのなぐさみものにされ、傷つけられたに違いないのだ。

「お帰り、母さん」

「……」

「どうだった？」

「……殺されると思ったわ。これをみて」

とあお向く美也子の首に、まだ縄目がはつきりと残っていた。美也子のもつれる足を踏みしめるようにして着物を脱いで行った。そしてパンティと白たびの奇妙な恰好になったとき、見詰める哲司は思わず「ごくり」とつばをのんだ。

白い肌に細いみみずばれが肩から背、胸、太もも、ふくらはぎにまで走っており、手首や乳房、足首には首と同じ縄の跡が深く刻まれていた。

「母さん苦しかった？」

「ええ。いくらこんな母さんでも、哲司のためでなかったら、こんなにされるまで耐えられたかどうか……」

美也子は、ものうくいった。

そんなにまでひどかったとは、自分の計画ながら哲司も思い及ばぬことだった。

「母さん！」

哲司はこみあげてくる複雑な激情に支配されて、思わず美也子をだきしめた。

「痛ッ！」

美也子が、哲司の胸の中で小さく叫んだ。

「母さんのこの傷だらけの軀、美しいよ」

「哲司、本当にそう思ってくれる」

「思うさ。俺を、こんなになってまで守ってくれた母さんの軀だもの」

その夜、哲司は床に入っても、なかなか眠れなかった。頭脳が妙に冴えてくるのを感じながら、考えていた。先程感じた母への愛憐の念は整理され、再び憎悪のみが湧き上ってきた。

「だめだ。みる、母さんはますます美しくなってきたじゃないか。その欲望を充足している。これでは何ものなりはしないではないか。他の方法で母さんをいじめなくては、晴江のパパに任しておいただけではとてもだめだ」

哲司は眠られぬままに、その方法を考え続けた。そして一つの方法が思い浮かんだ。

同級生数人からいじめさせるという思いつきであった。哲司の空想は広がっていった。腕力が強く、若さをたぎらせ、もてあまし

ている連中でなくては面白くない。早川に時枝に……、増田でいい。この三人はそれぞれ剣道部に、レスリング部に、相撲部に在籍しており、頭脳のいい方ではない。

この三人をうまくたきつけて、決して公けにならぬことを保証してやれば、奴らの爆発は恐らく想像以上に美也子をさいなむであろう。哲司は、今度は自分も目撃しなくてはならぬまい、と思った。美也子の苦しむ態を心ゆくまで見てやるのだ。

4

「おばさん、早くぬぎな」

剣道部の早川がいった。

美也子は裸電球一つが灯っている体育館に連れ込まれて、おどおどとしながら恐ろしうに周囲をみまわした。

「早くしろよ」

美也子は、いわれるままに帯をとき、次々と脱いで、思いきりよく裸身をさらした。

「今日も哲司のためなのだ。何をされようと絶対に弱音ははかないから。私は殺されたって恐ろしくはない！ さあ、どうともおし」
美也子は心の中でつぶやいた。その自己への攻撃が、すでに美也子自身をマゾ的昂奮へ

と、かりたてていた。

「さあ、この竹刀を持ちな」

早川が差し出す竹刀を美也子は、いぶかし気に受取った。早川は別の竹刀を取って素振りしてくれながら、中央へと進み出た。早川の筋肉がびんしょうに動いていた。

「さあ、来い！」

美也子ははじめて、剣道の相手をさせられるのだと悟った。

「こんな責められ方は始めてだけど、どうすればいいのだろう。あの男をなぐってやろうかしら」

美也子は竹刀をとり直すと、一心に早川につっかかっていった。竹刀は宙を舞い、とたんに背中に焼け火箸でもおしつけられたような激痛と同時に、バシッ！という、大きな音がした。「ぎあッ」という声と同時に美也子は床にはった。

「さあ、起きて、かかってくるんだ」

美也子はその声に、夢中で起きあがり、男に立ち向った。

肩をしたたかに打たれた。次は乳房、そして尻、腰、太もも、……起きてはなぐられ、なぐられてはたおれ、いつか美也子は、
「これが本当のリンチというのだろうか。こ

んな苦しい、こんなつらい思いをいままでしたことはない▽

と考えながら、もうろうとした意識の中でなお立とうとしていた。

「おい、ばあさんがのびたらしい。そろそろ交代だな」

早川が相撲部の増田にいった。

「じゃあ、いっちゃんもんでやるとするか」

増田は立ちあがって、ゆっくりしこを踏んでから、床にのびている美也子にバケツをもって近づいた。頭から冷水をあびて、美也子の意識はもどった。

「さあ、起きろ」

増田の手にすがって美也子は、やっと立ちあがった。

「さあ、今度は相撲だ。オレにぶつかって来い」

美也子は夢中でぶつかっていった。がしつと受けとめられたと思った瞬間、軀が宙に浮き、床にたたきつけられた。

「ぐえッ！」

△今夜は本当に殺される。それも少しずつ苦しめられて……▽

美也子は、いくらいじめられてもいいが、死ぬのはいやだと思った。おきあがろうとし

たが、軀がしびれていうことをきかない。男が何かをわめいて、美也子の髪をつかんだ。

頭髪がばりばりと音を立てた。美也子はその痛さにたまらず必死で起きあがった。そしてまた、いやという程、板の床にたたきつけられた。そのくり返しが何度か続けられた。もう髪を引っばられても起きあがる力がなかった。

△早く髪が全部抜けてしまえばいいのだ。そうすれば、この苦痛からのがれられる▽
そう思いながらも、美也子は、めくるめくような被虐の歓喜が渦巻く、るつぽへとかりたてられていった。

どこかずっと遠くで、

「もうだめらしいぜ。交代だ」

という声をきいて、美也子が失神した。

また冷たい水があびせられた。

美也子は鼻に叩きつけられた水にむせて、正気づいた。

「よし。それでは最後に、俺が足腰たたないようにしてやるか」

とレスリングの時枝がいった。

いきなり両足がもちあげられ、一メートルばかり上体が床をこすったと思った瞬間、ふわりと体が宙に浮いた。そして、くるくると

ふりまわされた。美也子は目をまわした。床におろされて、逆えびにされた。美矢子は息がつけなくなってきた。

「まいったか」

と男がいったが、美也子はくるしくて返事が出来ない。しばらくそうしていて男は、美也子を床になげだし、あおむけにした。そしていきなりあらゐ息をついている美也子の顔の上に両足で立った。苦しみに悶える軀の上を男は踊るように調子を取って、丸木橋でも渡るようにして歩き、幾度か往復した。

もう声を出す力もうせた美也子は、それでもその激しい苦痛と同時に、軀の芯からこみあげてくる歓喜を覚えながら、押しひしがれて体中がバラバラになりそうな激痛に悶えに悶えた。

何杯もの水で汗と脂とほこりをあらわれた美也子は、尚も被虐を求め歓喜の末に、意識のない一個の肉塊としかいいようのない時間が続いた。

美也子の軀がどうにか動かせるようになるまでに十日かかった。毎日、午後六時頃、美也子は店に電話をし、バーテンに、いろいろ

頼んでから、

「きつとこのうめあわせは、私の軀でするか
らね」

といった。

それをきいていて、哲司はカーッと頭に
血がのぼった。あれほど三人にたたきのめさ
れても、まだこりないのであろうか。

哲司は早川、増田、時枝から、それぞれ五
千円ずつ、まきあげていた。

その日、哲司は晴江をホテルに連れ込んで
いた。

「おい、自分で腹を切ってみな」

哲司はつめたくいって、折りたたみの小刀
を晴江に投げあたえた。晴江はぎょっとして
哲司と小刀を交互にみやってから、

「カンニンして！」

と、床に額をこすりつけた。

「だめだ。お前が切らないというのなら、切
るというまでムチで打つ」

「打ってもいい。自分でお腹を切るのがこわ
いの。哲ちゃんが切ってくれるんなら、切っ
てもいいわ」

「だめだ。自分でやれ。初めてというのでは
なし」

哲司のムチがいきなり、晴江の背に横線を

残した。

「きゃあー」

晴江の声が狭い室内にこだました。

ムチは逃げまわる晴江を的確にとらえた。

百打も続いたころ、

「切腹するから打たないで！」

と晴江が叫んだ。

「私は哲司さんの鞭が痛いから切腹するので
はないわ。こうして、私自身と、哲司さんの
心をなぐさめているの。哲司さんはもう鞭で
打つのにあきてきたらしいから、今度は切腹
してみせるの。哲司さんを私につなぎとめる
方法はこれしかないんだもの」

晴江は膝をそろえて、鞭をもって仁王立ち
している哲司の前にバスタオルを敷いて正座
した。そして、ゆっくりとした動作で晴江は
小刀をひろい、自分の腹に目を落した。

傷跡が赤黒く幾条も通っている。ふと晴江
は傷の上をもう一度切ろうかと考えた。これ
からも哲司と自分のために何度か切腹せねば
ならないだろう。このままではしまいに切る
ところがなくなってしまうのだ。切る深さは

せいぜい五ミリぐらいだが、それでも出血は
相当なものだ。また、左から右へおよそ三十
センチも切り裂くことは、相当な激痛に耐え

る精神力を要した。普通、ケガをする場合は
殆んどが咄嗟のことなので、傷つく段階での
苦痛も極めて瞬間的なのである。それが刃物
で自分の皮膚を切り裂くとなると、やってい
るのが自分であるだけに、つい切るのを中止
したくなってしまう。その心とたたかうだけ
でも大変なのだ。と共に大きな魅力だった。

晴江は、

「哲司さん、いつものように首を……」

と、ふし目がちにいった。

哲司はだまって、晴江の背にまわり、日本
手ぬぐいを晴江の首にまきつけた。徐々に手
ぬぐいがしまってくるにつれて晴江はあえい
だ。カッとみひらいた目はうるみ、顔は歓喜
の色にかわった。

晴江はこの瞬間をまっていた。そして、い
きなり、左脇腹へ小刀をたたきつけた。糸で
切先が止めてあるところまで小刀は突きささ
った。どうせ五ミリ程度の傷では死との直面
にはならない。ただ、痛みに耐えるだけの遊
びなのである。それで考えたのが、この方法
であった。

晴江にとっては、呼吸を失いつつ、死と直
面したと思いきや瞬間、切腹する苦痛は全
身をしばれさず、最高の快楽と感ぜられるの

だ。晴江のこの特殊な感受性は、どうして芽生えたものか彼女にもわからない。ただより陶酔の境地へと誘う力があつたのである。

首の手拭いが除かれたが、晴江は完全にちっ息状態にあえいでいるつもりで、右手の小刀だけは着実に腹をきりさいていった。

そして小刀が右脇腹にいたったとき、晴江の首ががっくりと前にたれた。

6

哲司は又、考えこんでいた。いつもと同じ途を往復するように、こんな生活がいつまで続くのだらうと姿のない何か怪物みたいなも

のに問いかけた。だが、答えはかえってこなかった。

ふと、哲司の心にマゾヒズムの想像が湧きあがった。

マゾヒズムⅡ苦痛のよろこび、自己への攻撃……、自虐……。

▲それだけだろうか。つくすということはマゾではないのか▼

哲司は自問した。だが、それにも答えはかえってこない。自分自身にも答えられるものはないのだ。

▲この答は自分がマゾの味をかみしめてみるしかないかもしれない▼

そこに思い至ったとき、哲司は目前に一すじの光をみた。こんな生活でも、そんなに捨てたものではない、と思えるような気がした。

▲だが、どうやって、母さんや晴江に俺を責めさせるような、きっかけをつくらばいいのだろう……▼

つい昨夜まで、憎悪の塊りのように相手を虐たげて来た自分が、どうして急にこんな考え方になったのかという点には、思いも及ばなかった。

哲司はただ一心に、美也子や晴江に自分を責めさせる方法を考え始めていた。

拝啓編集部殿

頑田一徹

うっとうしい梅雨期を迎え万人気持のふさぐ折、編集諸氏にはフンコツサイシンのご様子、心から御同情？ 申し上げます。

さて、はや通刊二百数十号をかぞえるに至

った貴誌を手にする毎に感じることに、この頃とみに残念に思っている事を二、三述べさせていただきます。

小生の貴誌購読は、白表紙以前の創刊第二

号に始まります。貴誌を店頭で発見、手にした時の喜びと驚き。あの時の気持は、現在でも忘れることの出来ない、素晴らしい思い出となっております。

当時貴誌のグラビアを彩っていた数々のモデル嬢の中でも、川端多奈子嬢、春日ルミ嬢は、小生の好みに合った素晴らしいアイドルとなった。

今、こうして貴誌の古きよき昔？ の各号を傍らにこの文を書いていても、実になんともいいようのない気持を覚えるのです。小生の知る限りに於て、その独得の個性、最もユ

ニークで異例な編集内容を持った貴誌を、当時の小生は双手を挙げて迎えたものであります。その当時から現在まで、願れば幾多の有為転変はあったにしろ、『奇譚クラブ』の誌名をもって世にあるは貴誌のみとすれば、この事自体が敬意に価いことがらと云えるでしょう。しかし、今ここで小生が貴誌に問いたいことは、あの当時の精鋭な気骨のあるや、なきやという一言であります。

昭和元禄といわれる今日、悪書追放、青少年育成条例云々に左右され、グラビア及び口絵を全廃し、『自粛の徹底』なる奇文？を巻頭にかかげて発行されている貴誌をみるにつけ、さしずめ余生いくばくもない老人が杖を片手に、世人の同情をあつめるが如き態度に等しいように小生は感じるのだが、如何なものでありましょうか。

小生は、あえて編集子に問いたい。

奇クは、何時いかなるいわれあって、ピンク映画の宣伝誌の如くになったのか。

この種のシナリオ紹介も、一度ぐらゐは交っていいかも知れないが、度重なる掲載はいかなるものか。こんな気持は、只単に小生のみ意見だろうか。この様な貴誌に怒りする小生であります。極言するならば、ピンク映画のシナリオが読みたくてわざわざ貴誌を購うのではない。

シナリオなどに使う誌面があるならその頁を『サロン』に振り向けるべきである。その方がはるかに気の利いた編集態度というべきではなからうか。

同人誌ではなく営利が目的の本誌である。といわれれば、もはや何をかいわんやであるが、小生はなにか一抹の哀れを覚える次第です。現日本の憲法では、たしか言論の自由が認められているはずである。

かと云って、小生はこの自由を身勝手に解釈しているのではなく、何が何でもというわけではありません。書店に於ても、一番奥の片隅で身を小さくしている貴誌をみる度に、言論の自由とは、このようなものかと頭をかじげたくなります。貴誌よりあくどい表紙や内容をもつ週刊誌、月刊紙の類が、堂々と一流書店の表に並べられているのに、これでは余りにも編集子の態度は弱腰だといえるのではないだろうか。

かように申せばすでにおわかりのことと思います。さよう、小生はただ貴誌に、創刊当時の意気をもって編集にあたっしてほしいのです。個性的な画風を持つ四馬孝氏のカムバック。第二、第三の川端、春日嬢の凄美な緊縛姿態を昔のように鮮明華麗なグラビアで飾ってほしいのです。

鑑賞用女性の姿態は分嬢フォトで、という

わけでしょうか。それも或いはいいかも知れません。しかし、それはそれ、これはこれ。誌面の充実とは又別と思うがいかがでしょう。

眠っている子を起すような小さな画など、いっそない方がすっきりすると思います。そうすれば巻頭の奇文にも徹し得るでしょう。貴誌の古本が、古書店では値千金といわれる程の高値で売買されているのは、編集内容もさることながら、今は廃止されている口絵グラビア写真が、その値を左右している事は見逃せない事実なのです。

小生は貴誌で金儲けするつもりはないからどうということもないが、今の奇クが、数年後に果してどれだけの値がつくか、となると馴染の書店のオヤジさんも首をかしげる始末です。古本の値で貴誌を評するものではないことはわかってはいますが、昨今の内容は淋しいと思います。かといって、さし当って貴誌の内容改革に呈する良案ありませんが、過去の幾冊かの再読でも一考願いますようか。

小生の如き一市井人のこんな気持が、果して貴誌を動かせるかどうか疑問ですが、やむにやまれずといった気持でとったペンです。世間では常人とはみてくれぬ我々のような、哀れな人間の代弁誌であり、先達者ともいえる貴誌の、より一層の発展を願うばかりであります。

漫談 千一夜物語

薔薇と蜜蜂

(9)

第四章 うでくらべ (II)

田代俊夫

31

数分後、完敗の女首領、紅さそりは自慢のニューファツションをはぎ取られ、これも自慢の素肌を砂上に晒していました。緊縛の黒い捕縄が豊満な白い肌にぎっちり食い込んでいます。高く盛り上った乳房の上下を、堅く締めつける。高手小手のがんじがらめです。鞭を手にしたサファイアが、その項のあたりを踏みにじりました。

「容赦しないよ。みっちりと仕置してやるからね」

メロンが、その傍に神妙そうに控えていま

す。心配そうな、うれしいうような表情です。一時はどうなることかと絶望的気分になったが、強い細君が最後の勝利を得たので、ほつと安堵の胸を撫で下し、木の枝から降りてきたのです。

一瞬、サファイアの手にある鞭がしなびてぴしりと肌に食いこみました。みるみるうちに白い背中に赤い刻印が浮かぶ。懲戒者の全力投球に、隷属者は悲鳴を挙げてのけぞりました。肩、背中、臀部と続けざまに打ち据えます。

「ひ、ひいーっ。……お、お許しを。どうかお許しを……」

「うるさい！ お前、この子を毎晩、馬にして部屋中、乗り回したそうじゃないか。一体だれの許しを得て……」

と、力まかせに尻を打つ。正妻の自分を差し置いて、何たることをサントルチャ。しかも、大切な亭主を鞭で追いまわして身体に傷までつけるとは！

「この子のお尻の傷跡を、どうしてくれるのさ。蚊にも刺させないくらい大事に扱ってきただんだよ、わたしは」

と、人間国宝保存責任者のようなことを言っ、憎々しげに横腹を蹴りつけます。

よく考えてみると、懲戒や仕置の口実はあ

まりないのです。要するに寝取られた口惜しさだけが、カッカと頭にきているだけなのだ。これは論拠としては薄弱だし、妬心をアラワに表明することは、知性と教養が許さない。しかもメロンが傍にいますのですから、尚更取り乱したりできません。故に、紅さそりの罪状を児童福祉法違反と青少年保護条例違反の二点にもっていく。勝てば官軍、こういう場合には理屈などどうにでもつこうというものだ。

狙いすました臀部への一撃が、炸裂しました。ぎゃあと、はしたない絶叫がオアシスの木々の梢にこだまします。偉大なる双丘がぶるっと震え、大理石の脚がひきつりました。「品のない尻の振り方するんじゃない！子供が見てるんだよ、非行の道に走ったら困るじゃないの」

俗世間の毒草に害されぬよう今まで大事に育てた苦心が、水の泡になると、厳しくその不心得を責め、痛烈に面罵します。一時廃業した教育ママぶりを憶面もなく復活させたようです。ついでだからというので、尾骶骨を蹴り上げる。実際、いい気なものです。

では、正しい英才教育を受けつつあると吹聴される当のメロン君はどうかというに、顔

面蒼白、小さくなって震えています。レスリングは面白いが、血を見る仕置はおそろしいのです。メロン君ならずとも、これが正常な人間の心理であり、しからは或る傾向の一部の人達は、その点、反省すべきであります。

「ねえ、……も、もうそれくらいで許してやったら？」

と、鞭打つ細君の腕に取りすがって余計な進言をしました。むろんこの博愛心の発露は逆効果を生む。

「ふん、お優しいこと！ どうせそうでしょうよ。仲良くして可愛がってくれた女ですからねっ！」

「別、別にそんなつもりで……」

「ヌードだけ見ようなんて、虫がよすぎるわよ。……黙ってなさい！」

サファイヤは立腹して、メロンの耳を掴んで引っ張る。一喝されたメロンは、シュンとなりました。

頭にくる発言をする者を、しりぞけておいて、サファイヤはまた懲戒業務に専念し始めました。

かくて鞭打ち百回、足蹴五十回の完了。姦通者紅さそりは正妻の手によって、完全に報

復されました。息もたえだえに気絶しています。全身、血と砂と脂にまみれ、特に被害の甚大であった臀部は、弾けた石榴かトマトケチャップをふりまいたような惨状を呈しています。

やっと腹の虫が収まったか、サファイヤは依然、緊縛体制にある紅さそりの髪をわし掴みにして池まで引きずっていききました。じゃぶじゃぶと、女賊の身体をきれいに洗い清めます。責め折檻で咽が喝いたであろうというので、親切心を發揮して水を多い目に飲ませてやりました。

洗濯が済むと、同じように引きずって、今度は草むらへ投げ出す。そして、おおむけに寝かせて、再度胸の上にどっかりと跨り、馬乗りになって押えこみました。

「あなた、ちょっと。はさみと剃刀持ってきて頂戴。ああ、それから靴墨と……」

サファイヤは風変わりな数品目を指定しました。メロンはポカンと口を開けて不審げに、

「何に使うんだい、そんなもの」

「黙って持ってくればいいの」

メロンが一旦、その場を立ち去ると、サファイヤは膝下の紅さそりに冷やかな視線を向けました。すでに意識を回復して、豊臀の重

庄に呻吟しています。

「わたしは蟹の床屋でお前は兎の客さ。丁寧な理容師にめぐり会ったことに感謝おし」

と、無茶なことを言う。目玉をくり抜かれたり耳を刈り取られてはたまらないから、紅さそりは真青になって哀願しました。敵は本能寺にあり、サファイヤもそこまで残酷な仕打ちをするつもりはありません。

「よし、それほど言うなら普通のお客なみに負けといてやる。その代り……」

と、いやに恩きせがましくいって割引サービスの反対給付を求めました。青白く光る短刀の刃を、ひたひたうなじに当てて、

「うちの子をどんな風にタラシこんだのか、正直に白状するのだ！」

良妻賢母の両者をもって自任するサファイヤとしては、この点が最も気がかりなわけでした、純真な青少年の心身を蝕む敵の手練手管を究明し、青少年不良化防止に一役買おうという意気込みです。もっとも、一般の教育ママよりずっと利口なサファイヤだから、説教だけで亭主の不良化防止の実が挙がるとは考えていない。毒をもって毒を制する対症療法が最善であることぐらいは心得ています。この種の技術に特許権・専用権などはないか

ら、どこからも文句をいわれる筋合いはありません。悪い商売女の供述は第22節末尾の続きにも当然及びます。政策上、自供内容をここで明らかにすることはできないが、サファイヤは真赤になった顔を大仰にしかめて、

「まあ、そんな。……何てケガラワシイ……で、それから？」

と、職務上そのあとを催促します。

また、寝取られた口惜しさがぶり返してきました。そこへメロンが命じられた指定品目を持って戻ってくる。まったくメロンのすることは、いつもタイミングが悪い。

「あなたっ！ 全部このメス猫から聞きましたよ。何という無節操な……」

突発的落雷現象に遭遇して、メロンは困惑した表情で立ちすくみました。何ともバツの悪い話ではある。紅さそりのやつ、余計なことを言いやがって……。

「言っとくけど、そんな恥しらずなやり方、わたし頼まれたってお断りよ。……ガミガミ……、ぼさっとしてないで石鹸を水に溶かしなさい！」

サファイヤは美しい眉をしかめて亭主の不良行為をなじり、自分の貞淑性をさんざん強調してから、気を取直して理髪店の開業を通

告しました。女理髪師の尻に敷かれている、敗残の女賊は、さっきから沈黙を守っているが、その心境は察するに余りあります。

準備が整うと、早速開店第一号の客の頭にとりかかります。お客が暴れるといけないから、その喉首の上に豊臀を据えて跨り、あぐらを組んで押し敷きをする。紅さそりの首は尻と足首の間に挟まれました。頭だけ突き出している恰好です。いやはや、とんでもない理髪店です。

まず、はさみを手にして栗色の髪を根元から、ばっさりと切り落す。尼さんになるともいわないのに根こそぎ刈りとられた妖艶な女賊は悲愴きわまりない顔付きになりました。五分刈りではない。丸坊主です。断髪の麗人なら倒錯的魅力も感じられようが、蟬丸法師スタイルでは倒錯のしようがありません。メロンは呆然として成行を眺めています。

刈りこむだけでは不充分です。次に、シャボンを塗りたいく、剃刀片手にぞりぞり剃りこみます。紅さそりは、わなわなと唇を震わせてこの屈辱に耐えているようです。メロンが見ているので、一層腕によりをかけ開店サービスに努め、とうとうつるつるの青坊主を完成いたしました。女雲水の誕生です。紅さ

そりは唇を噛みしめ、口惜し涙をポロポロ流しています。

「前よりずっと美人になったじゃないの。全くほれぼれするわ。……ね、あなた、そうお思いにならない？」

女理髪師は心にもないお追従を言って、その仕上げの手際を自讃しました。何によらずほめてくれるのは、待っていてはいつのことかわかりません。美的見解を異にするメロンは、げんなりした表情で、顔をそむけています。腕を組みしばらく出来ばえを観察していたサファイヤは、

「でもこの美顔術、少し気に入らないわね。折角、出家なさったんだから、それにふさわしいお化粧をしなくちゃ」

と美容院の多角経営に意欲を示しました。お顔の仕上げクリームは黒い靴墨です。無免許美容師は情け容赦もなく、ごしごし顔中塗りつけ塗りこみ始めます。

やがて対象物は、タドンのようにになりました。紅さそりの顔を黒ん坊にしてしまうと、やっと腰を挙げその顔の上に立ちはだかりながら、サファイヤはまた一しきり意地の悪い嘲笑を浴びせるのでした。

何か為し残しはないかと思案する。そうだ

わ、と同性のよしみで斬新な趣向を思いつきました。だが、メロンがいては都合が悪い。

「あなた、オアシスの入口に大きな椰子の木が生えてるの。その根元に穴を掘ってきて頂戴。うんと深くて大きいやつを」

「でも、スコップがないよ」

「手で掘りなさい。砂地だから簡単よ」

メロンが行ってしまおうと、砂上に伸びている紅さそりを見降ろし、剃刀片手に石鹼水を叩きつける。

「あ、あっ、何するの！ もう堪忍して」

「悪あがきは、およし。これもサービスのうちさ。すべてお客さま第一主義がモットーなんだよ、わたしは」

客の意向を無視して特殊美容術を強制的にお勧めします。そういえば近頃でも、頼みもしないのに頭を洗いアイロンをかける散髪屋がよくあるようです。

必死になって過剰サービスを辞退する女客ですが、この理容師は強引です。無慈悲な手つきで作業を始めました。教育上、この図はメロンに見学させるわけにいきません。鼻の下を長くして喜ぶに決っているからです。

紅さそりは屈辱に呻き羞恥に悶えます。ほんの一時の差で勝敗が別れ、勝者と敗者とは

かくも大きな差を産むものです。

「……まあ、恥しらず！ 何て下品な！」

赤くなったサファイヤは、口を極めて罵倒しました。自分でサービスしておきながら、接客態度のよくない理髪師です。やがて理容師は荷造師に交じ、一本の細紐にその胴体を真二つに分割された哀れな荷造りが完成しました。紅さそりは呻き悶えて、激しくのたうち、動けない体をくねらせています。罪の償いも、なかなか楽ではありません。

完全荷造りを施行したサファイヤは、一旦その場に紅さそりを残して、メロンの作業現場へ足を運びました。メロンは例によって本領を発揮して怠けていたらしく、工事はほとんど進んでいません。

「だめじゃないの、サボルことばかし考えていちゃあ」

「何故、こんな仕事やらせるんだ」

「ここへ埋めるのよ、連中の死体を」

メロンを叱りつけてから、二人して埋葬用の墓地を完成しました。そして、砂漠に転がっている七名の遺骸を集めて埋める。首のあつたものもないのもあって、個体の確認に手間どります。ストライクのが見当たらないが、この先生はあとでもう一度、登場します。黄金造

りの太刀だけを残し、連中の武器も自分の武器甲冑も全部、穴に捨てて。メロンは死体を見るのを怖がって、仕事の手助けに使えないから、出発準備の方をやらせる。埋葬作業はサファイヤ一人で行ないました。

いかに悪人とはいえ、お経の一つもあげてやりたい。本職の坊主はいないが、好都合にもつい先刻、頭を丸めて得度した女雲水がいるので、それに頼めばいい。一寸修業不足のようだが、この際だから居ないよりマシよ。元の場所に引き返したサファイヤは、緊縛の紅さそりを連行してきました。完全すぎる荷造りで歩きにくそうにするが、縄尻を持って、尻を蹴りつけ蹴りつけ、引致してくる。「お前の子分が、この下に眠ってるんだよ。せいぜい供養しておやり」

数分後、オアシスの入口に芸術作品が完成しました。椰子の木の高い幹に、元GB団女首領、紅さそりは立ったまま、かっちり縛りつけられたのです。それは黒と白が鮮かに強調された神秘的な作品と云えるものです。正に特選のゴールドラベル間違いないの傑作といえましょう。

その傍に立札が立ちました。

○

斬 奸 状

ゴールドデン・バット団女首領紅さそり
(本名ニコチン、僧名梅淋尼)

右の者、長年盗賊団を率いて悪事を恣にし、官を欺き民を苦しめ、……(中略)……
よって之を誅しここに晒すものなり

○月△日

正義のS女

追記。この女はお尋ね者ですので、奉
行所へしよっぱいて行けばドッサリ
御褒美が貰えます。但し早い者勝ち。
よろしくどうぞ。

○

中略の箇所には、罪状が列記してあるので
すが、どういうわけか、「亭主泥棒」の項目
が、欠落しています。頭のよい正義のS女が
物忘れしたとも思われません。

32

その夜、オアシスから出発する際に、また
一悶着ありました。実に下らない夫婦げんか
ですが、本節では、その次第を述べます。
「いつまでやってるんだ。いくら化粧したっ
て、ここは砂漠なんだぜ」
「お月さまが見えますからね」

例によって例のごとくです。

昼間の大乱闘でサファイヤも相当、被害を
受けています。自慢の髪型セット大台なし、
腕といわず脚といわず全身生傷だらけ、むろ
ん顔にも引っかけ傷が残りました。災害復旧
と美容法を同時に行なうのですから、当然入
念ならざるをえないのです。

しびれを切らしたメロンは、オアシスの入
口のところで待っているからと言いつつ、
細君の傍から離れました。

淑女の身躰みをやっと完成して、馬に打ち
跨ったサファイヤが亭主をうしろに乗せるた
め待合せ場所へ急ぐと、けしからん光景が目
に入りました。あろうことか、メロンのやつ
晒しものの紅さそりに水差して水を飲ませて
いるのです。猿ぐつわを噛ませておいた、そ
の布切れが砂の上に落ちています。

たちまちにして美しい淑女の眉がつり上り
ました。つかつかと馬ごとメロンの傍に乗
りつける。

「だれが水をやれと言いましたッ！」

「だって、可哀相だから……」

予期せぬ詰問にあって、博愛主義者のメロ
ンは当惑し、自分の意図を邪推されては心外
ですから、くどくどと弁明を続けます。

しかし、その程度のことでは低気圧は消滅しません。

「あ、そう。道理でメンソレと赤チン、救急箱にないと思ったわ。……わたしの傷なんかどうでもいいんでしょうよ」

「二つとも要らないと言ったじゃないか」

「ああ、そうでしたわね。……親切で思いやりのあるハズを持って、わたし、とっても幸せ！」

急に理解ある態度を示して、目つきだけを除外し、女の幸福に陶醉します。折角、感謝されたのに、メロンはいやな顔をしました。言葉は必ずしも真実を表現するにあらず、故に気まずい空気が漂います。

そもそもメロンの言動からして、よろしくない。命がけで悪の巣窟から救い出し、不良化の温床を潰滅させてやったのに、あまりうれしそうな顔もせず、お礼の言葉など一度も言わない。そのうえ、不潔きわまる敵の女に情けをかけるとは何事であるか。自分の親心がどうして、この子には通じないんだろ。いらいら、むしゃくしゃ……。

やきもちを焼いていると思われてはシヤクだから、頭から叱りつけられないのです。良妻賢母の二役を支障なく演ずるのも、なかなか骨

の折れる仕事とみえる。

メロンはそうは考えません。紅さそりに対するサファイアの仕打ちは、ひどすぎる。ヌード鑑賞用としては傑作と思うが、こんなにまで、ひどい目に会わせなくてもよさそうなものだ。自分だけが見る段には差し支えないが、不特定多数の人間に鑑賞させるための晒しものは感心しない。第一、紅さそりは自分を狼どもから救ってくれたのだし、何も悪いこと？ をしていない。二人ともボクに惚れてるんだから、三人で仲良くやればいいと思うんだ。ヨソの国とちがって、妻は四人まで持てるんだからな。うん。

サファイアが承知しそうにないし、鼻の下が長いと思われては不愉快なので、自分からは口に出さないだけです。このフラチキわまる虫のいい考えを聞けば、サファイアは憤激のあまり卒倒するでしょう。紅さそりへの懲戒も晒しものくらいでは済みますまい。

夫婦の心理を代弁しているうちに時間が過ぎる。メロンは細君の低気圧に気づかない風を装い、その馬の尻に飛乗ろうとしました。

と果然、乗車拒否です。

「いやよ。あなたなんかとの相乗りはお断りします」

「何を言うのだ！ そんな無茶なこと……」

「ほら、向うの百日紅の木に一頭つないであるわ。あれにお乗りなさい」

持主が全員横死をとげたGB団の馬は、砂漠に逸走四散したのですが、女首領の馬だけがいじらしくも主人を慕って逃げないので、オアシスの池の傍につないでおいたのです。メロンは狼狽して、白馬に打ち跨るサファイアの脚に取りすがりました。

「一人では乗れないってこと、お前だって知ってるじゃないか」

「いつまでも子供気分で甘えちゃだめ。馬ぐらい乗れなくてどうするんです！」

きっぱりと、わが子を千尋の谷に突き落す母獅子の態度を示します。第27節で示した親心とは、まるで反対だが、子供は成長が早いから丸一日過ぎれば立派な大人になると信じているらしい。

「……さっき言ったように、赤チンやメンソレを持ってきたのは……」

「それとこれとは別問題ですっ！」

崇高な親心を低級な次元で誤解するので、サファイアは声を荒だて叱責しました。しかし理由はどうあれ置き去りにされてはかなわないから、メロンも必死にねばる。乗車拒否

事件は尚しばらく続きました。二人の傍で、逆Y字型はりつけの紅さそりが、恨めしそうな顔で、そいやりとりを眺めています。

「ね、サファイヤ。そんなこといわないで、後生だから一緒に……」

「あなたを可愛がってくれた女の持馬ですもの、きっと馬のほうでちゃんと乗り方を教えてくれるわ」

と、今度はいささか低級な次元であてこすりを言う。

「そんな！……それとあれとはコトの本質がちがうよ」

「おだまり！ とにかく御乗車はお断りいたします」

「割増料金を払うからさ……」
言論が変な方向へ発展する。

「お客さま。ご好意はありますが、当社ではチップを頂くことを厳禁されておりますの。悪しからず」

「陸運局へ訴えるぞ！」

生憎と東京・大阪のごとくに大都市ではない。

「どうぞ御自由に。この砂漠を徒歩で参りますと、陸運局の事務所へは約二週間で到着いたします……」

その間、飲まず食わずで歩いて行けということです。お客はペシャンコになりました。止むを得ずまた低姿勢になって懇願します。女運転手は依然として高姿勢に出る。元来、物理的にも高い位置にいるのだから当然です。

「歩くのがいやなら、この女とヨリを戻して乗せてもらうことね。わたしより尼さんの方がお好きなようだから……」

と、特選入賞間違った新尼僧へ憎悪の殺人光線を走らせました。メロンは、おろおろして、もう半泣きです。

「誤解だよ、それは。とんでもないいいかかりだってば」

「さあ、どうかしら？ でもこんなとこで夜になると、連中の幽霊が出るわよ、ウラメシヤーってね」

サファイヤは腰にあてがっていた両手を離し、胸の前で手首を下に向けたお化けの恰好を作ると、白眼を剥いて舌を出しました。やはり、ここでもユーレイスタイルは同じとみえます。

砂漠の落日は早い。すでにあたりは暗く、冷光を放つ三日月がさし上っているのです。さてこそ、オアシスに茂る樹木にもその気配が濃厚に感じられる。尼僧はともかく、坊主

と幽霊が死ぬよりこわいメロン君、たちまち大きく目を見開き、恐怖の表情を浮かべて、がたがた震え出しました。

「では、いとしのメロン様、ごゆっくりなさいます」

ぴしりと鞭が尻に飛んで、乗れない方の馬が駆け出しました。わあ、と一声、悲鳴を発してメロンがそのあとを追う。女騎手は、わざとゆっくり、追いつけない程度のギャロップで走らせます。むくむくと、これ見よがしに豊臀を馬上に弾ませて、PR作戦とお預け戦術をとる。だが、そんなことに思いを致すゆとりは、今のメロンにはありません。何か喚きながら、やみくもに女房の尻と馬の尻を追いかけただけです。

数百メートル進んで馬を一時停止させ、うしろを振り返ってみると大分遅れています。気が動揺して足を砂に取られ、何回も転びながらの追跡だからです。その醜態ぶりを砂漠の月が笑って見ている。一幅の絵になる光景ではありませんか。

——薬が少し効きすぎたようだから、これくらいで許してやるとするか。メロンは、やっと追いつきました。今にもぶっ倒れそうな荒い息づかい、全身汗びっしょりです。

「……尻尾にさわると蹴るわよ、この馬」

メロンの情けない様子に、吹き出しそうになるのを必死に耐えて、サファイアは忠告を与えました。大声で泣いて、メロンは再度騎

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらいいという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

乗者の脚にとりすぎりました。汗と涙の区分がつかない。

「ねえあなた、もう少しかけっこしない?」「ワァーン…、もうしません。絶対にしませ

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金がかかりますので御留意願います。△本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お申込み願います。継続のお申込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

ん、勝手に水を飲ませたりはいたしませえん……ウェーン、ウェーン……」

耐え切れずにサファイアは馬上で笑い崩れました。付合いが肝心だから、メロンは尚も泣きじゃくる。そこで運転手は念を押す。

「陸運局は、どうなさるおつもり?」

「アーン、ごめんなさい……ばく、年代を間違えちゃったんです。ウェーン……」

許すことは許してやるが、相手が千年も誤算するような非常識なら、こっちもこっちだとばかり、

「それほど、お望みなら、いやとは申しませぬ。でもお客さま、この車、外車ですので運賃は少々お高くなっておりますのよ。その代り、後払いで結構ですわ」

前払いのタクシーなど聞いたことがない。

また、かかる場所での前払いは不可能でもあります。先程お客の申し出た割増料金すら辞退したのに、にわかに態度を豹変させて基本料金まで高くする理由を、陸運局担当係官に代って審問すると、運転手はしゃあしゃあした顔つきでいったものです。

「うるさいわね、私が勝手に楽しんでんだから、ほっといてよ。作者ずらすんじゃないのッ!」

(つづく)

きみ知るや、おこしまきの効用を……



文と絵・牧高志

日本腰巻党始末記

某年某月、さる処で、いとも妙ちくりんな
党の結成式が行なわれた。時は真夜中、列席
の面々は性別を問わず半裸体に伝統の腰巻一
つ……という、いでたちは少々眉唾ものであ
るとしても、高らかに次々に挙げられる党の

は、何んと水もしたたるような、若い水商売
(などときめつけては甚だ失礼なろうが)
上りの、絶世の美人であったから、御一同こ
れまた殊の外、嬉しいではないか。
どうせ、あとから裸になるおつもりからか

方針を中
心に、活
発な討論
が行なわ
れたこと
は誠に
目出度い
限りであ
る。

いま、
講釈師見
て来たよ
うな嘘を
つきで、
当時のメ
モ帳を繰
ってみる
と、まず
大幹部で
ある党首

紹か紗ないしはナイロン交織の極めて薄手の
白っぽい粋な着物に西陣紗織の袋帯をさりと
と結んで、流石は黨員、腰から下は薄桃色に
美事に下着が透^すけている。

「満場の皆さま、わたくし達の国は過去二千
年も長い間、伝統に伝統を受継ぎしてきた由
緒ある古いお国柄なのであります。それにも
かわらず最近、風通しの極めて悪い洋式の
下着に迷わされ、今日おコシマキが次第に忘
れられようとしていることは誠に遺憾に堪え
ません。党は、嘘も方便で兎角非難のまとい
なっている既成の政党では決してございませ
んけれども、ここに性別を一切抜きに致しま
して、日本伝統(と威張っても恐らくその昔
東南アジア方面から渡来した風俗の一つだろ
う)のおコシマキを、同志として、心から愛
用しようではありませんか。否、卒先して愛
用したいと存ずる次第であります。ではただ
今から厳肅なる党則のあらまし、それから今
日はおろか将来を娛しく約束する党の運営方
針、その他必要と思われる一般議事につきま
して、逐一懇切丁寧に論議を申し上げ、栄ある
党の結成式典を終わりたいと存じます。ホホホ
……会場の皆さま、それでは御免遊ばせ」
会場というのは見渡したところ、さして広

くはない。ただ演壇の真正面にお腰になぞらえた、タタミ四枚分位の大きさの真紅の党旗が、うやうやしく壁に吊るされてあるのは、一寸どぎもを抜く風景であつた。

党首の挨拶が済むと、続いて同じく党の幹部、恐らく三役の一人かと思われる島田雷の姐さんが壇上に上り、黄色っぽい声で党則から朗読し始めた。

「では、あのう——わたくしから一言……日

本腰巻党則、謹んでお読み致します。第一条、日本腰巻党（以下本党と称す）は満十八才以上三十才未満の女子のみをもって構成される。ただし老齡にしてなおかつ、物心ともに党の趣旨に賛成する男子は、この限りではない。つまり、どうぞ遠慮なくご入党の程をと、という意味です。——第二条。党の基本的趣旨と存在が他から蹂躪される恐れのある場合は、党の総力をあげてこれを悩殺する。方法については別に指示する。——第三条。

黨員たる者は常にコシマキを着用し、他のいかなる下着（例えばパンティなど）の着用をも禁ずる。もし禁を犯し、または誤まって他の下着を使用した場合は、金一万円以下の罰金に処せられる。——細則として、コシマキの色は原則として緋または赤色とする。生地

は問わない。白ないし薄く迷彩的な柄模様ものは避ける。上部に必らず白の腰布を付け、左右におのおの50センチ以上の紐を付けること。安易に腰にはさむ横着な女郎式のコシマキは、絶対に着用してはならない。——第四条。コシマキの着脱は党の認可を要し、着用の期間は最低2週間以上とする。ただし裾除はこの限りではない。党本部に新旧のコシマキを持参し、検認を受けること。もし、着用したもので汚れ方の薄く不明瞭なものは、常時着用を怠ったものとして、体刑（例えばコケシ、木馬責めなど）処分を受けるものとする。——第五条。神聖なるコシマキを誤まつて破損したる場合は……」

「議長——議長！ およその筋道は判りましたが何んだか仰言ることが細こまくなり過ぎてはいませんか。もっと折角の異色異例の珍らしい党であるなら、一つそれらしく毅然としたエロティシズムを盛上げて下さい。でないとおたし達赤いお腰一枚で風邪引きそうよ。お願いします」と暗い議員席の方から一発、声が飛んだ。

会場は一瞬静かな池に石を投じたようにざわめき始めたが、いつの間にか鮮やかな真紅のお腰一枚になった党首がやや鳥肌の立つ

た黨員をまアまアと制止しながら壇上に上り「お静かに願います。ではお言葉に甘えまして第五条以下を省略致しまして、早速党の運営その他について原案を示し、皆さまのお知恵を拝借致したいと存じます。ご異議ございませんか……」

もとより、ご異議のあらう筈はない。

今度は、銀座のマダムを赤坂風に焼直したような、若い女将タイプの姐さんがこの場を取ってかわって説明し始めた。

「申し遅れましたが、一応初めに党の組織などを一寸ご披露致しませんといけないと存じますので悪しからず。黨員の動静は、十人に一人の交替式目付役を置きますが、もとより黨員同志ですので暴力的な一方的な監視は致しません。ただ報告の義務があるだけであります。例えば足にまといついて面倒だからコシマキをかなぐり棄てて外出したとか……といった場合は、書式不用密書風な報告を必ず党本部へ提出しなければなりません。そのほか、生理の月日、期間、お床入りの回数なども併せて報告させて頂きます。これは関係外の方々は、恐らく一笑されるかも知れませんが、後日重要な資料となつて金銭価値に強く響くものなのですから……。次に定期の会合

は毎月末に行いますが、本党の圧倒的な催物は何んと申しまして着用コシマキの展示即売会でありまして、およそ三カ月に一ぺんの割合で開催されます。まだ新しい党员の方もいらっしやるようですから、先般某処で行いました会の模様を一寸フィルムと録音でお聴かせ致しましょう……」

成る程、準備万端よろしく便利なものである。おまけに映し出されたのは何んと総天然色カラーとは豪勢だ。

鼻の下の長い野郎共が目の色を変えてしきりに漁^{あさ}っている。鼻持ちならぬ汚れた真赤な腰巻を奪い合ってお勘定場へ馳けつける男の脚をこれまた念入りにすくって転倒させ、はずみで手前^{てめい}までが手にした赤腰巻を諸^{もろ}に頭から被り、ひどく恐縮している男共の姿がクロースアップされる。

「もしもし、これはただの赤腰巻なのはどうしてこう値段が高いんですか」

「一寸拝見……ああ、これは新婚さんので、汚れも倍以上になってますから……」

黙って聞けば幕末三条の河原で乞食の総会でもやっているようである。

「あのー伝え聞いて初めて来た者ですが、よれよれになった腰巻の使いみちを教えてください」

「会場の隅に親切なインハウメーションがありますから、そこへ行って、訊ねてみて下さい」

「もしもし、それはネ、私の知っている範囲内では薬品以上の効能があるって、云いますよ。あっしの甥でひどい喘息に悩まされた男でしたが、それがあなた、この汚れた使い古しの女の赤い腰巻を胸に抱いた瞬間、ころつと喘息が止まり……いえ、そんなにお笑いになっちゃいけませんよ。本当の話で。それから云うもの、毎回の即売会へ来て何枚と云わず買い漁っているんですよ、ヘッヘッヘッ……」

「今だから白状しますがネ、その昔あつしらが若僧の頃は、こんな集りてなもんが無^なえもんだから吉原へ行っちゃ、こそ泥のように敵^{あいつ}娼^{かた}になった女郎^{めい}の腰巻を盗んだもんでした。ひどい奴は手前^{てめい}の神^{かみ}さんに朝帰りの手土産に持って帰ろうなんて涙ぐましいおケチ野郎も居ましたがネ。ご時世で結構な世の中とは成りましたっけ。でももう、いけません。齢が邪魔して目が霞み、折角の赤腰巻もご覧の通り手探りと来ちゃ、からっきし年貢の納めどきでさア。アハッハッハッ」

と、金時の刺青をした腕をまくって、いなせな鳶職風の老人が笑った。カットが変わるとセリ市のシーンが映し出されたが、これは生地、色、仕立、そして汚れの程度が最高と見做されたものだけが改めて入れられる仕組みである。もうお判りと思うが、即売会は売る方がすべて女性で、買う方は不思議にあらかたが男性であるのは当り前として、一際^{ひととき}異彩を放つのはいつものこのセリ市の模様であつた。

「さア、さア、遠慮なく近くに寄ってお手に取って嗅いで御覧遊ばせな。クレオパトラか楊貴妃か、テレビのコマーシャルではありませんが、このコク、この香り、誠に三保の松原に置き忘れた天女の衣裳^{ころも}にも匹敵するこのおコシマキ。丁と出るか半と出るか、さア、張った張った、張った。千円、まだまだそんなことでは。三千円、赤い腰巻がこの通り泣きますぜ。さめざめと涙をこぼしたところで五千円。生地は最高級のメリンス物ですよ。仕立は和裁十年の熟練工だから、どうして。ハイ一万円、いいところへ来ました。もう、一声。一寸^{がくや}楽屋裏を申上げて腰を折るようですが、このお腰は党员中その人ありと噂されたいミス……いや先頃ミセスになられた類^{たぐい}、稀



濡れにぞ濡れし

M 派 二 人

芳 野 眉 美

五月はM派が二人上京された。

その一

恒川文彦氏は三十六年九月号に「或るマゾヒストの手記——屈辱の一夜」、十一月号にその第二話として「おまじない」を発表し、三十七年一月号に「マゾ放浪記——美しき脅迫者」を書いておられる。

（金を拾って部屋を出るとき、私は椅子の上にしどけなく放り出したままの、パンティとサポーターを素早くズボンのポケットにねじこんだが、明美は気付かなかったようだった。その足で留美の部屋を訪れると、彼女は咬え煙草のトレアドルパンツ姿で私を迎え入れた。

「待っていたのよ。送って上げるから少しま

ってなさい」

私が留美と一緒に部屋を出ると、廊下で明美とばったり出合った。明美の眸がするどく私に突き刺さる。

しまった！ と、思っていると、明美はいきなり私のズボンのポケットをさぐった。無言のまま証拠の品をつきつける明美に、私がペコリと頭を下げると、いきなりそれらを私の口へ押し込んだ。

「そのまま帰るのよ。欲しければあげたのに、黙って盗んだ罰よ」

明美は留美と顔を見合わせて、悪戯っぽく笑った。

「ワワワ……」

私は、口一杯に押しこまれた布の隙間から

声とも呻きともわからぬ声を出して、謝罪と感謝の意を表した。

「さあ、行きましょう」

彼女達は両側から私の腕をとった。

快よいハイヒールの音を響かせて私を引っ立てる彼女達の嬌慢な態度。私は唇をあけることもできず、婦人警官に引っ立てられる囚人のような哀れな自分の姿に、胸をときめかすのだった。――

これが「屈辱の一夜」の一節である。かなり印象的だったので、恒川さんに自己紹介されたとき、この作品が頭に浮かんだ。長々と引用したが、自分の好きな文章とか光景は、いつまでも、おぼえているものである。

「おまじない」では、支那服の明美に足を舐

めさせられているステキな挿絵もある。

（——明美はハイヒールで私を蹴って仰向けにすると、支那服の裾をつまんで、片方のハイヒールを脱ぐと、素足を私の顔に乗せる。

「舐めるのよ。黒んぼ！」

形の良い白いふくらはぎが、私の顔の上で邪怪に荒れ狂った。体内の血は沸々と沸きたち始める。足の裏を舐めると、次には口の中へ足の指を突っ込まれた。

「どう、黒ちゃん！ まえの時とくらべてどっちが美味しい？」

明美の顔を見上げると、彼女は嘲笑の眼で私を見下している。私はもぐもぐと、足指をしゃぶった。

「今度は甲のところよ」

私は彼女の為に跪ずかせられた。顔を床にすりつける様にして、足の甲から、可愛らしい、くるぶしと舐めて行った。——

パンティと足舐めはM派の二大願望のようで、この程度なら遊びでも実行できるし、恒川さんの面目躍如というところであろう。

もう一つ忘れていやしませんか、というのが「屈辱の一夜」である。

（——私は両手を天井のパイプに繋がれたまま、香ばしいパンの焼ける匂いに、思わずゴ

クリと生唾を呑み込んで眼で欲しがると、彼女

はわざと如何にもおいしそうにしながら、一人で喰べている。昨夜から何も口にしていない私は、たまりかねて、

「僕にも少し御馳走して戴けませんか。腹がぺこぺこで堪らないんです」

と、恐る恐る伺った。

「ええ、あとでね。あんたにはもっといいものを御馳走してあげるわ」

悪戯っぽい瞳で明美は、ふふふと含み笑いをした。

やがて明美は、食卓のあとかたづけを済ますと、私を床の上に仰向けにさせた。彼女が云う、もっといいもの……と云うのは、想像していたとおりだったのだ。

「いいわね、大きく口を開いて、こぼさないようにしなけりゃだめよ」

明美は笑いながら云った。それは私が夢にまで描いていた恍惚境だった——。

「おまじない」では、

（——縄を解いて貰うと、私は階段を降りて台所へ行った。コップに八分の水を満たして部屋に戻ると、明美はベッドから脚を投げ出して待っていた。私は、その前に跪ずくと、奴隷の様にコップを捧げた。

「ああ、おいしかった」

明美はコップを私に返すと、跪ずいたままにいる私を、じっと見据えた。

「ふふ……」

と、唇に微笑が浮かび、美しい眼がきらりと輝いた。突然、片方の足が挙って私の顔を蹴った。明美はゆっくりと立上ると傍の私のズボンを足にひっかけて、私のほうに蹴ってよこした。

「それ、下に敷きなさいよ」

「えっ？」

私は妖しく胸がさわいでいた。思えば半年振りに味あう夢にまで描いた恍惚境だ——

これで私好みの道具立てが三拍子そろったわけである。しかし、神酒拝受の経験は、恒川さんはどうやらまだなさっていないように見受けられた。

そこで、私の誌友の数々が、ゴヤツカイになったことのある、現実の「あけみ」君に紹介したが、恒川さんが「あけみ」の神酒を拝受したかどうか、私は知らない。

M小説のピンチの奇クに、再登場されると非常に有難いと思うのだが、恒川さんにも家庭の事情が種々とおありのことと思うし、旧作の一部を紹介してみたのである。

どっちかというと、恒川さんはパンティマニヤのほうじゃないかと思わせるのだが、もう一つ印象に残っていたのを付け加えておくと、「美しき脅迫者」の最後の部分に、

（——「有難う、遠慮なく頂くわ」

金をハンドバッグにしまうと、和子は立上って、手早く黒のスクランティをはずした。

「今日はもう何もしてあげられないから、その代りよ。玲ちゃんのも脱ぎなさいよ」

「ええ」

玲子が純白のパンティを差し出すと、和子は自分のと一緒に私に投げてよこした——とある。和子は幼馴染の奥さん、玲子は妹という設定になっている。

三作品とも、私は好きである。

その二

H氏から電話があり、またまた上京したのかと思ったが、長距離で家から電話をよこしたものらしい。上京する日の予告であった。

当日、その気で待ちかまえているところへどこかの読者通信で知り合ったサディスティンがバーのホステスで、バーに訪ねていろいろ話をしてきたと、息を切らせてやってきた。まったく東奔西走でいそがしい。そのサディスティンとはまだプレイをしていず、そ

の後の報告が楽しみというところである。

再三上京しているものの、H氏が私のバーにいらしたのをはじめで、理由はいつもホテルから呼び出しを受けるからである。バーに興味がないのは、H氏がぜんぜんアルコールを飲めないからである。

恒川さんとあけみちゃんの話ばかりしていたので、H氏の顔をみたたん、これはすばらしいスポンサーが舞い込んだ（失礼）ものとうれしくなった。ねえ、あけみちゃんのところに行きましょうよ。あけみさんは明日の約束です。H氏、そのつもりらしい。

明日とならば、今夜はどうしよう。近くのバーのアルバイトホステスで、飲ませてくれるキトクな女性がいたのだが、H氏の好みに合わない。好みにうるさいのが、M派の特色である。S人種より神経がこまかい。

そこで、さて、と考えた。高岡久人氏に処女（神酒の）をササゲタ志麻のことである。電話した。いた。トルコサンである。

運悪く混んでいた。指名が重なって、一時間、待たされた。面倒くさくなって志麻のところ二人で、はいった。これでは、何も出来ない。出来ないが、H氏の好みのタイプだったらしい。志麻の友達の、俺と同じ名札の

トルコサンが遊びに来て、二人ではいいことないじゃない、といった。ホモじゃないよ。ケガラワシイ。看護婦さんあがりで、尿導カテーテルと、肛門カテーテルの話をよく知っていた。

「今度買っていっちゃい。使い方を教えてあげるから」

H氏、熱心にきいていた。牛乳を浣腸してカテーテルで飲んだら面白いだろうと、彼女にいったら、いやだあ、スケベエ。

「マンタンよ」

と志麻がいった。桶にきてくれよ、せめてものサービス。いいわ。

志麻さん、それどうするの、と廊下で声がした。志麻がトイレで桶にしたのを、見ていた同輩がいたらしい。

「飲むのでしよう」

志麻はH氏に桶をわたした。

「いただきます、女王さま」

私は間接は大嫌いである。直接でないと飲まない。従って、コップや洗面器や桶に移したものを飲んだことも、また、飲んでいるのを見たことはない。直接神酒拝受は、いつも二人一緒に遊んでいるから、見ている。

H氏、二人を目の前にして、おいしそう。

「少し、濃いですね」

「がまんしていたし、つかれているからよ、きつと。今日はとても忙がしいもの」

H氏は、ビールを飲んだあとがおいしいといった。やはり、神酒にも個人差があるらしい。好ききらいはあるものだと感心した。

ことわっておくが、H氏は、社会的地位のある方である。別に、精神病院にやっかいになるような方ではない。社会的には、かなり攻撃的な方である。

翌日、早朝アパートに電話があった。あけみちゃんと約束したから、すぐ来いというのである。朝食前というより、起こされたのである。午前中は、私にとって深夜に等しい。あわててアパートを飛び出した。

指定のホテルでH氏の名をつけ、女中さんに案内してもらう。ホモと思ったか、商談と思ったか、そんなことは気にしない。めしは食っていなかったが、風呂あがりの一杯で、冷蔵庫をあけてビールを一本、スポンサー付きだと気が楽である。

しばらく待たされて、あけみ女王のおでまし。何をしているの、奴隷は裸で女王さまをおむかえするのがあたりまえでしょう。で、H氏と二人、脱いじゃった。

女王さまもおめざめしたばかりらしく、ミニスカートを投げ出して、朝食がわりのビール、二人して飲む。H氏は強精剤のドリンクばかり飲む。オトシのセイかな。

あけみ女王、ホテルのゆかたの紐を手にとり、H氏を後手高小手に縛り上げた。慣れている。ミニスカートより、花模様も美しい匂うばかりのパンティを脱ぎ、H氏の口をこじあけて押しこみ、紐で猿ぐつわした。

「酒の肴よ。よしのさん、飲みましょう」

あけみ女王、ミニドレスを脱ぎ肘掛け椅子に深々とおさまると、手を上げてまねいた。

ブラジャーもとる。口調をあらため、

「ビールより、こっちのほうがだろう」

あけみ女王のパンティを口からはみだして呻めくH氏を尻目に、おさきにともしわらないで、まねきに応じる。

「そんなあわてなくても」

甘い声である。と、口中一杯に、あたたかいビールがひろがった。一息つく間をあたえて、あけみ女王は激流を止める。止めなければ、こぼれてしまう。

だす。とめる。だす。とめる。

首を締めつけたまま、H氏に手をのばして猿ぐつわをとり、パンティを口からだしてひ

ろげ、H氏の頭からすっぽりかぶせた。汚れのひどいあたりがH氏の鼻と口のあたりに密着。片目だけだして、

「見ておいで」

二回目の神酒拝受。椅子と椅子にまたがったあけみ女王。這いつくばって顔をもたげたよしのさん。

とめどもなく流出する暖流。

息をするひまもなく、のどから胸に浴びせられ、畳をびしょ濡れにした。

「いいよ、ビールをこぼしたといっておけばわからないよ」

容赦なく体内を通過したビールが降る。息が止まるかと思うほど苦しく、のたうちまわって飲み続けた。雨の中から外に出るわけにはいかなかった。

ようやく解放され、浴室に飛び込んだ。バスタオルを巻いて出て来ると、いましめをとかれたH氏が、あけみ女王の膝下に這いつくばって、おこぼれを飲んでいた。

「ビールを飲みすぎたらしいわ」

と、あけみ女王がいった。汲めどもつきぬ泉を、女王は二人のいやしい下僕に、平等にわかちあたえたのである。

恍惚とした表情が女王の微笑に現れ、含み



笑いが次第に高笑いとなって、女王の熱気を帯びた足の裏が顔を踏まえた。H氏に神酒を与えながら、H氏の肩越しに、足をのばして足の裏を舐めさせる。

休憩。

ビールを飲みながら、

「お前だったら、お皿にしたわたしのをナイ

フとフォークでたべるわね」

と女王はH氏にいった。

「喜こんでちょうだいします。女王さま」

げっ、とあけみ女王は嘔吐の真似をし、お前はわたしのいうことならなんでもするからこうやって会ってやるんだよ、とのどにつまった痰をパツとH氏の顔に吐いた。風邪ぎみ

で鼻をぐすぐすさせていたのである。

「たべたいな、女王さま」

H氏、本当にたべるつもりらしい。

「帳場に電話して、大きなお皿を持ってくるようにって」

あけみ女王も、本当にたべさせる気らしかった。若い女性は便秘性が多いのである。さぞかし、立派なきたい物が、お皿にもりつけられることだろう。

以下、略。これ以上の報告はできない。

「あと始末もするのだろう」

決まっているような口調で、あけみ女王は私を振り返った。

四回目の神酒拝受は豪華な夜具の中であつた。絶対にこぼすことは許されない。急用があつて、E氏が中途退場したときである。

「まだ欲しいかい」

首を横に振った。いくらなんでも、もう飲めない。

「満足したのね」

優しい声であつた。

「あげるよ」

とあけみ女王がいった。E氏の猿ぐつわにしたパンティである。背広の内ポケットにしまった。



三人一緒にホテルを出た。女中に見送られたときだけ、あけみ女王は恥ずかしがった。ミニドレスの下に、あけみ女王は何も穿いていない。暮れかかった街を、三人は肩を並べて歩いた。内ポケットの厚みが心地良い。あけみ女王をマンションにおくり、生ゴムのパンティがみたかったから、レザーの責具

や色とりどりの下着を売っているスナックに二人が寄った。金髪の美女が一人、サデイスチンで、またまたE氏はくどく。飲む、とか、たべるとかの話が、解説つきでなくわかるから、E氏が夢中になるのも無理はない。かなりグラマーで、ネットストッキングも悩ましい。

E氏はいつもの通りミックスジュース、私

もいつものウイスキーのオンザロック。

スナックを出、すっかり興奮したE氏、も

う一軒行こうと電話したが、残念ながら留守

だった。肩を並べ新宿を歩く。

「本当にうかがってよろしいのですか」

「どうぞどうぞ、来て下さい」

「でも、奥様と浮気をする事になっていま

すが」

「奥サンがよければね」

「そんな、きつとヤキモチを焼くくせに」

「いや、面白いですよ。コキユの味もまた格

別です」

「うそおっしゃい」

「隣りから見えますよ」

「とにかく、あけみ女王が保証人なんですか

らね。あけみ女王にウソをつく、これから

奴隷にしてくれませんか」

「わかってる」

M派といいながら、H氏の胸中はかなり複

雑なはずであった。だがH氏宅はあまりにも

遠すぎる。これが東京内だったならなあ。

奥様。御主人は、あけみ女王の前で、私と

奥様が浮気をしていいと、断言したのであ

ります。約束を守らないと御主人があけみ女



王から捨てられますので、ひとつ協力して、正々堂々と浮気（その瞬間は本気）をし、御主人を守ろうではありませんか。

六月号の圧巻は、カメラハントだった。というの、増田夫妻を知っているという、現実感からくる刺激が強すぎるからである。

どんなにすばらしいM小説にせよ、それが絵空事であれば、いたずらに文章の稚拙がめだつて、読むのを放棄したくなるような、空虚な気持をふと、いだかせることもある。辻村さんの筆力も、みゆき夫人を熟知しているだけに、いや、増田喜代司氏を知りすぎているが故に、

—SMのプレイと一概に言っても、所詮は多種多様であることを私はこの時、判っきり意識した。

というように、怒りに満ちた（失礼）文章にあらわれたように、旺盛な筆力となって全編に満ちあふれているのである。

物語性の強い辻村さんの文章の特色は、このような辻村さんの内心の爆発が、ときおりみられることだと、私は思っているのだが、これは、辻村さんの強烈な個性のせいだと考える。

SMプレイにつきあって、カチンとくるのはこの趣味の違いという絶対的な壁で、面白くないことでも面白いようにしていなければならぬ、タイコモチ精神を心得ていなければお相手がつとまらないという事実である。

H氏のように私の趣味と同一なら、SMプレイも楽しいが、それぞれ個人差のある、強烈な性傾向を有する誌友が多いから、現実にはぶつかると腹の立つことも多い。

まったく遊びは、むずかしい。

ということ、SにしろMにしろ我が侘な（私も含めて）人が多いということだろう。自分の性癖には忠実であっても、他人の性癖は平気で無視するわけである。



おたがいに、寛容は必要だと思う。
——みゆきの鼻孔の奥まで覗けてみえる鼻粘膜は、度重なる鼻責めによってか、ピンク色にテカテカと光り、鼻毛を抜いたのか、剃ったのか、一本の毛も残っていないかった。それに引換え、洋子の鼻孔は、黒い繁みに蔽われて、その奥もサダカではなかった。——

絵空事ではこうは書けない。疲れ果てた辻村さんが目に見えるようだ。オツカレサマ。

石坂洋次郎はホントにおかしな作家だと思う。小説新潮七月号の「キノコのように」という小説に、

△床の間の横あたりの便所の戸があいたかと

思うと、間もなく、溜壺に糞便の落ちる音がポトリ、ポトリ聞こえた。五郎は無表情で音を逃さず、

「ひとつっ……ふたあつう……みつっう……」そこからせきこんで、「四つ、五つ、六つ……」と数え上げた。

「およしよ、倉橋さん、お客さんのいる前でさ。……出るものが出なくなってしまうじゃないか」と便所の中から間借人の女房の声が聞こえた。そうとんがった口調でもない△とか、

△便所から、紙をもみ、ついで尿のほとばしる音が聞こえた。五郎は相変らず無表情で、△「在郷のおかさま、腰コかがめて傘しよんべん、ジャアー」とはやしたてた△という一節があったが、石坂洋次郎でなければこうは書けないだろうと、つくづく感服してしまったのである。

△人間の生存の現象を追いつめていけば、たしかに、(糞)と(尿)の線でいきどまりになるのではないだろうか……。△
と終りに書いてあるが、老年になってからこの主題を追っているように見受けられる。スカトロロジイはむづかしい。



合戦記と切腹の美学

中 康 弘 通

わが邦の武士道精神の二大支柱として、切腹と仇討は武士道の象徴となっている。中でも切腹については、合戦記、軍記の類にその様相が、かなり壮烈悲愴の美意識のもとに描かれているので、その代表的なものを集録してみよう。

まず切腹の方法について調べてみると、太平記巻七吉野城軍ノコトに、村上彦四郎義光が、大塔宮護良親王の御身代わりとして忠死を遂げる条^{くだ}りに、一文字の切腹が記されている。しかし是は普^{あま}ねく知られているもので、同じく巻十八金崎ノ城落ツルコトには、新田越前守義頭^{あま}の自刃が記されている。

刀を抜いて逆手に取直し、左の脇に突立

てて、右の脇のあばら骨二三枚かけて掻破り、其刀を抜いて、宮の御前に差置きで、うつぶしになってぞ死しにける。

仙道軍記に見える、多川八郎という武士の自刃は、いわゆる一文字の切腹には違いないが少し交っている。

サラバ切腹仕ラントテ大刀ヲ抜キ、弓手ノ脇ヨリ妻手ノ脇へ突通シ、南無ト云ヒテ向へ押シケレバ、腹ハ上下ニ別レ、腸ワタ前ニ出デニケリ。

石田軍記に現われた、関白秀次の寵童不破万作の切腹もまた、一文字の異型と見るべきであろう。

生年十七才、日本ニ類ナキ美少年、雪ヨリモ白キ肌ヲバ押開キ、初花ノ漸綻ブル

風情ナルヲ嵐ノ風ニ吹散ラサレル気色ニテ、弓手ノ乳ノ上ニ突立テ、目手ノ細腰マデ曳下ゲタリ。

こうして、一文字の切腹は、大体、刃先を左の脇腹に突立て、右脇まで引廻して行われたものようである。

しかし、合戦が盛んに行われていた頃は、江戸時代と違い、まだ切腹の式法が整っていなかったもので、介錯人なしで切腹することが多かった。また、介錯人があっても、勇烈さを示すためにかなり惨烈な創傷をみずから腹部に加えるものが多く、切腹の方法も十文字が多かったという想定が可能である。

なぜなら、細川両家記には細川家の家臣薬師寺与一が、家督争いに乗じて叛旗をひるが

えし、事やぶれて死罪に処せられたときのことが記されているが、その中に、

最後のとき申様、皆御存知のごとく我は一文字このみにて薬師寺与一。なのりも元一。此寺も一元院と名付たり。されば腹をも一文字に切るべしとて。腹一文字にかき切り。朝の露とぞ消にける。

とあるのを見ても、一文字に切る方が、このころは既に珍しかったものと見える。

同じ細川両家記に、十文字の切腹について明瞭な記述がある。細川九郎澄之が、同苗六郎澄元と戦って破れ、波々伯部伯耆守に切腹の作法を聞く条りである。

我いまだ腹切るやうを知らずと宣へば。

伯耆答て申やう。それ自害と申は十方仏土と申せ共。まづ西へ向ひ十念し、御腰の物をぬき左の脇にさし立。めての脇へ引廻し。かへす刀にて御心もとにさしたてて。袴の着ぎはへおしおろし候と申ければ。御りやうじやう有て御腹めされけり。伯耆涙と共に介錯申。そののち伯耆も腹を切。

是は正十文字の切腹であつて、まず腹を左から右へ横一文字に切り、右脇で一旦抜いた

刀を鳩尾に突込み、縦に臍下へと切下げるのであるから、ずいぶんと気力体力を要するものと思われ、後年、江戸時代も末に近づいては、鎌十字、すなわち、刃を腹から抜きとることなく十字状に切る法が考え出されたのももっともなことである。

しかし合戦記に詳述されている十文字の切腹は、ことごとくこの正十文字の法に拠っている。

では、こうして切腹が凄烈に遂行される折の因由は、いかがであらう。

合戦記で最も数多く見受けられるのは、やはり合戦の勝敗につれ敗者が切腹するという例である。

それにも、さまざまの経緯がある。たとえば富樫記に拠ってみると、

爰ニ城衆本郷修理進春親敵多打取り。我身ニ痛手ヲ負ヒ小墓アリテ靠リ伏所ヲ。兵数多落合欲捕首ヲ無手ト起直リ。太刀申金ヲ追取ノベ敵ノ裔波羅利々々々ト難伏セ。敵二三人討捕リ腹十文字ニ搔切失ニケリ。

富樫記は加賀国高尾城主富樫政親が一向一

揆に亡ぼされた記録であるが、右の記述に先立ち、城兵の殊死敢闘ぶりを説明して、

短兵已ニ交リ。或ハ組テ落ル者アリ。或ハ指違ニ死スル者モアリ。立戻リ腹十文字ニ搔切り思々心々ニ勝負ヲ決ス。

とあるのを見ても、合戦に力尽きた将士が選ぶ切腹の姿を彷彿させる。

やがて城方は士卒数多を或いは討たれ、或いは腹切つたために失い、落城の刻が近づいてくる。この条りは、切腹の式法も定まらぬ当時であつて、作法らしいものが出来はじめたと見られる記述があるので、少し長文になるが引用する。

将政親宣ハ強テ不可作罪。怖ニ来世之報。去来面々腹ヲ切レト宣フ。去バ承候ト置五六帖擲出シ。広庭ニ敷並々々居既欲切腹。政親宣フ溢リニ不切腹。孟ニ腹切刀ヲ取添可為思指ト宣フ。承候トテ大瓶ヲ打立早酒宴ヲ始ム。乱舞半ノ事ナルニ。爰ニ宮永八郎三郎。扇子追取取通ヒニ立。一拍子ヲ踏ミ一声ヲ揚グ欽花欲尽春三月。命葉易零秋一時ト二三返歌ヒ一舞マフ。見聞ク人々皆湿ニ鎧之袖。将ニ畏リ申。乍ニ緩急中有ノ旅路

露松可仕ト土器ヲ取挙三度酌ミ腹十文字ニ搦切り。乍恐勝見与四郎殿へ可持参。盃ニ刀ヲ副へ勝見ニ指ス。珍敷載ニ御盃ニ三度酌之腹切り福益ノ弥三郎ニ指ス。其後那縁。吉田。小河。白崎。進藤黒川。与津屋五郎。谷屋入道徳光。西光房。金子。上田入道。八屋藤左衛門入道立入加賀入道。長田三郎左衛門。宮永左京進。沢奈井彦八郎。安江和泉守。神戸七郎。御園筑前守。同五郎。槻橋豊前守。同三郎左衛門尉。同近江守。同式部丞。同弥六。同弥次郎。同三位坊。山河亦次郎。本郷興春坊。如此次第々々ノ思指ニ切腹面々已上卅人ト聞へケリ。其外残給人。大将政親。本郷駿河守ガ童千代松丸計也。将駿河守被申ルハ。前代未聞ノ見物哉。早浮世ニ無思置事。急ギ御腹召ルベシ。某シ殿リ可仕ト被申。政親宣フ老衆立蹤事無謂次第也。若ガ役ニ政親可殿。互ニ為ニ相論。終ニ駿河守負被申。去バ某シ先達仕覽。推融腹十文字ニ切。一首ノ歌計リ。

陰弱キ弓張り月ノ程モナク我ヲ誘テ入ヤ彼ノ国

ト読生年五十六ニテ失ヌ。其後政親急ギ追付ント被仰。千代松丸。九寸五分ノ鎧徹シ中程。以ニ檀紙吉利々々ト巻キ甲斐々々敷介錯申ス。将政親刀ヲ追取返ス刀ニテ水走ニ突立膝下へ活ト推下シ。緋ノ血ヲ以一首辞世。角ト聴ル。

五纏本空ナリケレバ何者カ借リテ来ラン借リテ返サン

被遊。刀ノ鋒口ニ含ミ俯ニ給フ。鋒柄口マデ被貫失セ給フ。将千代松丸御死骸ヲ取認メ。屋形々々ニ火ヲ掛ケ。猛火ノ中ニ飛入り御供申ス。誠ニ艶キ事トモ也。

その次にしばしば見られるのは、敗北必至となつた籠城の城主が、士卒の助命を条件として、攻囲軍に申入れて切腹する場合が少くない。史上有名な備中高松城の消水宗治、播州三木城の別所長治などがその例であるが、備中兵乱記によれば、天正三年正月、毛利輝元の兵に囲まれた備中山田鬼ノ身の城主、上田孫次郎実親も、譜代の臣の裏切りもあり、とうてい戦い抜けずと見てとると、

実親一人腹切ラハ楯籠ル処軍兵トモ扶ケ置ルベキヤ。其条報偽ナク分明ニ印テ給

リ候ヘカシ。一命ヲ捨テ家僕トモノ恩賞ニ行ヒ度。

と申入れている。やがて定め時刻限に実親は、乞い受けた軍使を待つて切腹した。

畳ノ上ニ座シ。向ニ西合手。南無西方極楽教主ノ如来。為父切腹ナレハ。如来モ済度シ給ヘシ。唯今先父源清公ト一ツ蓮台ニ迎ヘ給ヘト高声ニ念仏三返唱ヘ。

大脇差中巻シテ。左ノ脇ニ撞立テ。右リノ脇ニ引廻。柄モ拳モ碎ケヨト。真直中ニ押込。十文字ニ切レハ。荒木右京進ト云古老ノ者立寄り頸打落シ。其身モ髻切テ死骸ニ添タリ。実親廿ノ春ノ花初春ノ頃ナレハ。荅ナカラノ落花コソ。実ニ哀ニソ覚ヘケル。

同じく敵に申入れて切腹するにしても、実親の兄、備中松山城主三村修理進元親の場合、落城に際し城中で切腹しようとして家臣にとどめられ、一旦は城を落ち延びたが、進退きわまり菩提寺に入り、毛利方の検使を迎えて切腹した。

惟子ノ襟ヲ押サケ。案内申シ時。頸打チ給ヘト言葉ヲカケ居ナオル。粟屋西ヘ向給ヘト云ヘハ。十方仏土ノ中何レヲ仏土

ニ指ヘキヤト。拔身ノ脇指持ナカラ合掌シテ。鎖湯炭清涼殿剣樹刀山遊戯城ト唱ヘ。終テ脇指ヲ左ノ脇ニ突立テ。右ノ脇ニ引廻シ。胸ノ下程ニテ柄モ拳モ摧ヨト押込。声ヲカクルト頸打落ス。

以上の例に見て顕著なのは、切腹することが捨身成仏につながる、という思想で政親の強テ不可作罪。怖ニ来世之報。去来面々腹ヲ切レ

とか、実親の

親ノ為ニ切ル腹ナレバ如来モ済度シ給フベシ

と云う言葉などに、その間の事情がよく示されている。

さて、戦敗れては腹切るほかなし、という直情径行に対して、あくまで再起を期して身を潜めたが、頼った舅に災厄の及ぶのを恐れて遂に切腹するに至る例もある。

矢島五郎満安は最上義光と争って敗れ、舅の小野寺義道に頼っていたが、義光が義道に逆意ありと責めたため、満安は陰腹を切って果てた。奥羽永慶軍記に見える話である。

義道内々イカナル遠慮力有ケン逆心ナシ

ト陳スヘキ返答遅々シケル処ニ矢島五郎ノ方ヨリ大森五郎力陣へ使ヲ以テ我不慮ノ災難ヲ得テ牢浪ノ身ト成義道ヲ頼ミ蟄居シテ候処ニ誤ル事ナクシテ義道心ヲ受候事畢竟満安ニ扶持シ候故ナレバ我故二人ヲ亡サンヨリハ只今自害仕ニテ候此上ハ義道ニ子細有マシクトコソ申ケレ康道聞テ仰越サレ候旨承テ候御辺生害セラレ候ニ於テハ何ノ子細有ヘカラス候ト返答ス義道是ヲ聞テタトヘ諸トモニ滅却シ侍ルトモイカテカ満安ニ腹切ラセン事有ヘキトイフ処ニ満安左コソ仰ラルヘク存シハヤ用意仕候トイヘハ是ハイカニト見ル処ニ満安押肌脱シト一尺計ノ刀ヲ腹ニ押立背ニ切先少シ顕レタリ今ハ止ルニカ及ハス満安頓テ縁ヨリ庭ニ下リ立テ腹十文字ニ切テ腸ヲツカミ出シ家来ヲ呼首ヲ討セケル其後満安カ近習二人同腹ヲ切テ伏あたかも尼子氏の再興を希って自重しながら、空しく高梁川畔に惨殺された山中鹿之介を彷彿せしめる挿話である。

降るを潔よしとせず自殺するに至った例を述べて来たが、降ってなお切腹を強いられた

挿話もまた少くない。

細川澄元と同苗高国の争闘で、澄元に与して敗れた三好之長父子がそれである。細川両家記によれば、

去間三好之長父子三人運のつくる事やらん。その夜のうちにいつ方へも落行給はで曇華院殿に忍ばれし事かくれなく。此寺を同九日に二重三重に取巻ければ。之長父子三人腹切らんとし給ひしが。今一度命のべばやとおもはれ高国へ御佗言申さる。誠にはかなき事ながら降参にまいられる。

子息芥川次郎長光。同弟の孫四郎長則まづ寺を出て。同十日に高国へ御対面也。上京安達の宿所へ入給ふ。同十一日に之長。同名新四郎も御免とて此寺を出給ふ。然所に淡路彦四郎殿。げんざいおやのかたきとて申請させ給ひ。上京百万遍して腹切給ふ。同名新四郎介錯し。我も則腹切ぬ。淡路守殿むかへり月にかやうに有ければ。只人間の因果はめぐるにはやきもの哉と人々申也。

同子息次郎孫四郎事も彦四郎殿より高国へ色々申されける。降参人いかがと思

召けれ共。さあらば生害させられよと御返事有ければ。彦四郎殿の御内衆。かの兄弟の宿所へ同十二日にをしよせ申けるは。御親父之長は昨日百万遍にて腹切給ひぬ。かたがたも只今腹切給へと申ければ。兄弟は親の事を聞て涙を流し。同は一所にて死せんずる物をとて嘆き。やや有て申されけるは。人々暫く御待候へ。国へふみを下べしとて硯をこひ。二人思ひ思ひにかきとどめ。ある人の方へ渡されける有様は。古のさうりそくり兄弟がかいがん波濤にありつるもかくやと思ひ出されて。一しほ哀まさりける。

去間孫四郎腹切給ひければ。次郎方介錯あり。そのち我も腹きり。侍は相互。たれにても介錯して給候へと申されければ。しばしあり槍長刀にて首を取る。

とあり、また大内義隆記には、陶晴賢が大内義隆を攻め自裁せしめたとき、平賀新四郎隆保も腹を切らされた話がある。

平賀新四郎隆保も屋形方シテ腹ヲキル。此隆保ト申セシハ小早川興平が舎弟常平が次男。天文十年正月晦日ニハ尼子ガカタシテ常平ハ三石ノ城ニテ腹ヲ切ル。其

時隆保ハ十才ニシテ龜寿丸ト申セシヲ。兄弟三人生捕テ山口ヘ下シオキイタハリ玉ヒケル程ニ其身器用ノ者ナレバ皆人惜ミ玉フ。備後ノ神辺ガ陣ニテ病死スル。

平賀太郎左衛門ガ遺言シテ龜寿ヲ家督ニ申置ケレバ。義隆ハ同心シ。平賀ニ仰付ラルル。家来ノ者ハ二ツニナリ。家モサダカニ成シカド今度ハ時節ト幸ニ。隆保ヲ卒スル者ドモ。毛利高厚ヲカタラヒテ。謀叛ヲ起シテ隆保ニ腹キラスル事ゾカシ若輩ニテハ有ケレド。腹ノ切ヤウ十文字ニ先横ザマニ切テ。イニシヘコシカタノ事ドモヲ心静語リツツ。在山口ノ其時ハ十一才ノ時ヨリモ歌鞠ノ御会ニ参ツツ御意ニ応ズル故候哉。一門ニテモナケレドモ。平賀ノ家督玉ハリテ一兩年モ過行バ本意ヲトゲシ事ドモ物語リシテ。其後ニ硯料紙ヲ出セトヨ。書置ベキ事有ト歌ヨミツツ申セドモ。介錯ノ者ドモガ鬼ノ様ナル心ニテ歌道知ズニ候ヘバ。硯料紙ハ出サズシテ。時刻ウツリテ叶マジ。早タトイソギケル。隆保力及バツシテ脇指ヲ取直シ。心モトヨリ乳ノ下ヘ差オロシテゾ伏ニケル。

また武運尽きて捕えられ、転向をすすめられたが、聞き容れず自裁した例もある。総見記に見える印牧弥六左衛門である。

抑今度諸軍勢ノ討来ル額ドモヲ、降人前波九郎兵衛吉繼、富田弥六郎長秀、兩人目アカシニ被ニ仰付一々ニ見セ玉ヘバ、兩人見テ、是ハ誰、是ハ何ト名字名乗ヲ申上ゲ、一々カクレハナカリケリ、就中不破河内守ガ郎党、加左衛門ト云者、敵方ノ奉行人印牧弥六左衛門ヲ生捕リ来ル信長公聞召シ、是ハキコユル勇士ナリ、引テマイレト御錠ニテ、スナハチ御前ニ引キスエル、汝ハキコユル勇士ナリ、何トシテ生捕ラレタリケルヤト御尋有ケレバ、印牧御請申ス様、江北ノ事急ニシテ自身数廻敵ニアタリ、身キレ身ツカレ申スユヘ、角トラヘラレ候ト申上ル、信長公被ニ聞召、勇者程アルゾ、正直ナル申シ分也、一命ヲ助ル間、味方ニ加ツテ、越前ノ案内仕候へ、ト前波ヲ以テ被ニ仰下、印牧申シ上ルハ、御錠生生世世奉存候、併某苟モ朝倉譜代ノ家人ニテ、剽國中奉行ノ名ヲ汚セリ、身不肖ニ候ヘバ

タトヘ義景目ノ前ニテ、忠義ノ討死ヲコソ不仕候トモ、敵陣ニ請受テ一命ヲ助ル事思ヒモヨラズ候、貴命ノヲモムキニシタガハバ、累代ノ瑕瑾、申時ノ恥辱、是ニ過タル不覚アルマデ、兵尽矢窮テ生捕トナル事モ、戦場ノ習也、大将ニ先立テ士卒ノ死スルハ軍ノ道也、厚恩ニハ早々頸ヲハ子ラレテ給ルベシト云フ、前波吉継イロイロニ異見申セバ、印牧眼ヲ怒ラシテ汝コソ主君朝倉殿ヲ捨、降人ト成テ、不義ノ挙動、人非人ノナスワザナリ、某ハ汝カ様ナル不義ノ者ニテハナシト云テ曾テ以テ同心セヌ故、サラバキレトテ、頸ヲ刎ントシタリケレバ、印牧申ス様、凡ソ侍タル者ノ敵ノ逢テ生捕ラルル事、古今珍シカラズ、雑兵同前ニ頸切ラレンコト思ヒモヨラズ、只切腹コソ本意ナレト云フ、

信長公被聞召敵ナガラモ志アル者ナリ、縄ヲユルシテ腹切ラセヨト被仰下、檢使ヲ以テ切腹サセラル、即印牧思フママニユウシク腹ヲ切タリケリ。

以上、合戦に伴う切腹の種種相が、文章で

如何に表現されたかを、検討して来たのであるが、最後に、合戦の終熄に伴い、次第に風をなして来た殉死の切腹、すなわち追腹について例を探ってみよう。

中村一氏記にみえる小姓たちの切腹の模様である。

十三日朝米子感応寺にて追腹切申候、先一角龜の前へまいり、焼香つかまつり、早早可^レ参候所に、一門中傍輩ども、いずれもいとまごい仕候とて、おそなわり申候と申上く、扱家老共、何れもいとまごいつかまつり、たたみの上に蒲団をしき、三峯に脇差巻き候いて御座候、兩人は、辞世短冊書き、空へなげあげ候えば、風にもまれ、方方へ吹きちらし申候、さて若狭脇差をとりそのまま腹を切り候わんと仕り候えば、勘解由申候は、同道をあとさきへ参り候わば如何敷思召候わん間、声をかけ一度に切り候わんととめ候いて、声を一度にかけ申候、若狭は其のまま腹へつきこみ申處を、介錯仕候、

勘解由は、腹を十文字に切もうすべく候とて、かいしやくに断り申候いて、横に

脇指切立切申すとて、鳩尾のあたりより臍のわきへおしきげ申し、わきざしふかく立て申候やらん、さがりかね申候を、声をかけ、両手にておしきげもうすとて、うつむき候いて、又あふのき申す所を切り申候へば、当所ちがい、さかやきだけ切り候えば、勘解由うつむきにたうれ申候が、又おきあがり、くびをうけ申候、さてさてたしかなる最期と誉め申候。

戦陣にあつて主君討死自刃の場合、臣たるもの直ちに自刃して殉ずるところに武士の面目があつたとされていたものらしいが、平和になってくると、合戦で討死の機会は減り、むしろ主君の病死に際して追腹を切る方向に傾いて行った。

右の例はその初期の一例で、同道をあとさきへ参り候わば、如何敷思召候わん間、声をかけ一度に切候わんという気魄の凄じさが、是から永く、江戸時代の殉死禁令まで、追腹の風習を支えて行くのである。

—おわり—

「お願い。小夜子……いを——」
「よしよし」

義雄は、小夜子が最初のいいつけ通り、そうした甘い仕草を始めると、気を良くし、このムードを壊さぬように気を使いながら、その小夜子のうしろへ廻って、彼女のふくらみの頂点を背後から手を廻して、やんわりと静かに……し始めた。そして、甘ったるい優しさをこめ、低い声音で小夜子の耳にささやきかける。

「どんな気分か、弟に教えてやったらどうだい。え、小夜子」

小夜子は、ゆっくりとくねらすように体を動かしつつ、うなずいて、

「——文夫さん。今、姉さん、とても、とても、いい気分なのよ。ああ、何とっていいか、わからないわ」

そして、小夜子は、首を後へねじ曲げるようにして、義雄に唇を差し出すのである。

悪魔にとりつかれたような姉のそうした仕草を見て、文夫は猿轡の中で、獣めいた呻きを洩らし、激しく体を揺すぶったが、小夜子は、義雄に舌を吸わせ、自分も充分に吸ったあと、再び、顔を正面に戻して、胸元からんだ義雄の手が一段と強く……始めた事に調

子を合わせるように、激しく上体を揺すり始める。

「——ああ——」

裡から衝き上げて来る苦しさにたまりかねたよう小夜子は、上ずった声をあげ、その身悶えは一層、激しいものになっていく。

「あっ！」

急に小夜子は、一声、そう叫ぶと、踊りを急に止め、キリキリ歯を噛みしめた。

「どうしたんだよ、小夜子」

義雄は、二つのふくらみを爪先で抓るようにして、不気味な優しさをこめた調子で、横から小夜子に尋ねた。

「もう、こ、これ以上、続けると……ちやうわ。もう勘忍して——」

「駄目だよ。つづけるんだ」

そう命じられると、鼻を鳴らしながら、小夜子は再び、おぞましい自虐を開始する。そして、小夜子は、全身にこみ上って来たしびれるような苦痛にのたうち、全身、汗みどろになって、堪えながら

「文夫さん。笑っちゃ嫌。姉さんを笑わないで——」

そう呻くように叫んだ小夜子は、その深い甘美な敗北をチンピラやズベ公、そして、弟

の文夫の眼に、あからさまに示しながら、数分後に異様な声を発して……れてしまったのである。

「どうだい、文夫君、こんなお姉さんを見て何と思うかね」

義雄は、精根の限りをつくしたようにぐったりとなってしまうた小夜子の頬に口吻しながら、虚脱したような顔の文夫にいい、次に小夜子の豊胸を指でついて、

「小夜子、今、君は、弟の前に、どういう状態をさらしたかわかっているね」

「ハイ」

小夜子は、さも羞かしげに眉を寄せ、赤らんだ顔を義雄に見せながら、小さくうなずいて見せるのだった。

義雄は満足げにうなずいて、

「もうこれで君はどうしようもない破廉恥な女になっちゃったんだ。もう助かるうなんて考えは一切捨てて、奴隷として森田組に一生奉仕する事だ。わかったね」

「ハイ」

小夜子が柔順にうなずくと、義雄は、銀子と朱美に命じて、小夜子の鈴縄を外させる。

「それじゃね、小夜子」

義雄は、眼を閉ざし、唇を柔かく噛んで、

ズベ公二人に縛り直された小夜子の耳に口を当てた。

「そ、そんな——」

もはや、そこには何の敵意も反発もなく、徹底的なくらいに無意志な素直さで、小夜子は悪魔達のするがままになっていたが、今、義雄が口にした事を耳にして、急に狼狽を示した。

「どうしたんだい。もう小夜子は、僕達には一切、服従する約束だったね」

「お願いです、義雄さん。小夜子は、もうどのような羞かしめを受けてもがまんするわ。でも、でも、文夫にそんな——」

小夜子は、さも悲しげに顔を歪めて、シクシク泣き出した。

「私達は、ほんとの姉弟なのよ。ああ、そんな恐い事——」

動揺する小夜子を面白そうに見ていたズベ公二人は、

「でも、弟の方は、お姉さんの美しい肉体を見ているうち、そら、こんな風になっちまったのよ。可哀そうじゃない」

「何も体を貸してやれといってるんじゃないわ。ただね、お姉さんのそのきれいな手だけをとって——」

そんな事をいって、小夜子をますます狂おしい思いにさせるのだ。

「そ、そんな。——お願いです。小夜子はどんな目に合ってもいいわ。でも、それだけは御生ですっ」

「よしわかった」

義雄は微妙な微笑を口に浮かべて、再び小夜子に近づく。

「どうしても、弟の体を触りたくないのなら別の手を考えよう」

手をかえ、品をかえての悪魔の心理的なたぶりに、小夜子の混乱した神経はくたくたになる。

「ね、それならいいだろ。小夜子の口から、今いったように、とっくりと文夫に納得させるんだ」

小夜子は、もう微塵に魂まで打砕かれたよう睫毛さえ動かさず、義雄に何かいい含められていたが、

「——わかったわ」

と、絶息するよう首を垂れてガックリとしてしまった。

義雄は、舌なめずりするように、ズベ公やチンピラを呼び寄せ、指示する。

「間接的ってわけね」

銀子と朱美は文夫の傍へ、竹田と堀川は、小夜子の傍へ近寄った。

「そら、小夜子、文夫に云わなきゃ駄目じゃないか」

義雄に乳房をはじかれた小夜子は、そっと首を上げ、涙に潤む黒眼を文夫に向けるのだった。

「——ね、文夫さん。今度は、貴方が姉さんに見せてくれる番よ。いいわね」

姉にそう云われた文夫は、何か意味ありげに、にやにやしながら左右に立った銀子と朱美を見て慄然とする。

「暴れちゃ駄目。おとなしく銀子おねえ様にお任せするのよ。ね、いい子だから」

小夜子がそういうと、銀子が文夫の……手を触れさせようとする。

文夫は、猿轡された首を激しく振り、狂い立ったように足をばたつかせて、それに抵抗するのだった。

「おとなしくするんだよ。これからお姉さんとタイミングを合わせて、天国へ行かせてあげるんだから」

銀子と朱美は、暴れ狂う文夫の足を左右から抱き込むようにして取押え、麻縄でキリキリ縛り始める。

一方、小夜子も、竹田と堀川に肢に縄をかけられながら

「いいわね、文夫さん。姉さんもこれから、うんと楽しむわ。だから貴方も——」

竹田が横で箱の紐を解き出すのをチラと見た小夜子は、ふと眉を曇らせたが、すぐにまた強いて無表情をつくろい、

「——姉さんと、なんでも一緒に、ね、いいでしょう」

間もなく、両者の中間に立ってにやにや北叟笑んでいる義雄の眼前に、淫虐な地獄図が展開した。

裕福な家庭に育った令息と令嬢が向かい合い、ズベ公とチンピラ達の手で、残酷に責められている。義雄は、たまらなくなったよう悪魔的な笑顔をたてた。

「俺に煮湯を飲ませた村瀬宝石店に対するこれがせめてもの復讐さ。ハハハ、お嬢ちゃんもお坊ちゃんも、恨むならお互に自分の親父を恨む事だね」

小夜子も文夫も、何か麻薬におかされたように全身が上の空のような力なさを帯び始め今や為す術もなく、せっぱつまった敗感に浸りだしている。

小夜子だけではなく、文夫まで、今まで自

分の気づかなかった別の血が逆流し始めたよう、ふと、こうした責めを悦ぼうとする気配が感じられ出した。それを見てとった朱美は文夫の猿轡を外したが、すると文夫は、もう悪態をつく気力もなくて、ああ、と生々しい呻きをあげ、真っ赤になった顔を横へそむけ、いじらしい位に必死になって、自分に耐えている。

文夫の苦しみをながめて、羽毛のように柔らかに、優しく……つづけている銀子は、「随分と強くなったわね、文夫。フフフ、どうやら、あんたもスターの域に近づいて来たようだね」

「ね、銀子姐さん、少し、私と代ってよ」朱美が乗り出し、銀子と交代すると、化粧品箱の中から小瓶を取り出し、たっぷりと落として、文夫に立向かった。

一方、小夜子も、竹田に背後より乳房を柔らかく優しく……され、前面に腰をかかめた堀川に責具を……されている。

堀川が小夜子の深い甘美な美しさを楽しんでいると、

「おい、こっちと交代しろ」

竹田は堀川と位置を代って、それを取り、吸いつくような粘りを楽しみ始めた。

苦痛が昂まり出し、段々と激しくなる美しい姉と弟とのすすり泣きを義雄は、煙草をくゆらしながら陶然とした面持で眺めている。一種の勝利感が酒の酔いのように心地よく義雄の体内を駆けめぐるので。

「そら、すすり上げてるばかりじゃ能がないじゃないか、小夜子。何とか文夫に声をかけてやれよ」

義雄は、口元を歪めて、竹田に遮二無二責められている小夜子に声をかけた。

段々とピッチを上げ始めた責めに、水の中の藻草のようなくねくねした優雅な身悶えは次第に激しいものになり出す。そして、小夜子の魂も消えるような涕泣。

それと同時に、文夫を責める朱美も、それを愛……手を一層強め出して、残忍にもこの裕福な家庭に生れ育った美しい姉弟の苦悶を一致させようと、竹田と呼応し始めるのだ。

「文夫さん——」

小夜子は、何か意味不明の事を口走ったかと思うと、絹を裂くような声と共に、電流にでも触れたよう激しく……あわせる。と同時に、文夫も、……絶息するような呻きをおげ、

「——姉さんっ」

と、呼ぶと、事切れたようがつくり首を落
してしまった。

「まあ、若いだけあって、元気がいいわ」

朱美は、文夫が屈伏した事を認めると、笑
い出した。

義雄は、ぐったりとなつて、首を垂れてい
る文夫と小夜子を交互に見て、

「これで君達姉弟は、お互に動物的な凄まじ
い姿を眺め合ったんだ。これからは人間的な
感情を捨てて、実演スターとしての道を姉弟
仲良く歩きつづけなければいい。わかったね」

そして、義雄は、急にギクツとなるほど声
を大きくして、

「メソメソせず、しっかり、顔を向け合はん
だ。羞しいなんて感情は、もう許さないぞ」

そう呼ぶと、小夜子と文夫は、互に顔を起
し、悲しげに視線をかわし合う。

小夜子の瞳は、しっとりと情感を湛えて、

まるで恋人を挑発するかのように、まじまじと
弟の眼を見つめているので、義雄は、これで
いよいよ小夜子が人間的思念を放棄し、完全
に洗脳され、こっちの待ち受ける女に変貌し
てきた事を知覚した。

「それじゃ小夜子——」

義雄は、小夜子の心に最後のとどめをさす

気で近づくと、冷酷な薄笑いを口元に浮かべ
て、小夜子の耳に口を寄せた。

「わかりました」

小夜子は、情感を含んだねっとりした瞳を
傍に立つ竹田と堀川に向けた。

「ね、小夜子、これから姉として、弟に色々
意見をしてあげようと思いますの。二度と森
田組の皆さんに抗ったりしないように——」

「へへえ、そりやなかなか感心だ」

「——その前に、弟を小夜子と同じような体
にしてほしい」

「そりやどういう事だい」

竹田が鼻毛を抜きながら、小夜子の顔をの
ぞくようにして云った。

「——不公平よ。姉の方だけ剃っておくなん
て——」

小夜子は、すねるような甘い云い方で、顔
を横へそむけるのだ。

「成程、そりやたしかに不公平だ」

チンピラ二人は、剃刀を取り上げると、残
忍な微笑を浮かべて、文夫に近寄っていく。

——文夫さん、姉さんを許して。辛抱して
頂戴——

小夜子は、心の中でそう呼び、しかし、表
面は、凍りつくような冷酷さと、情感を湛え

た翳のある瞳で、じっと文夫の方を見つめて
いるのだ。

「へへへ、姉さんのいいつけなんだからな、
悪く思うなよ」

竹田は、文夫の前に身を低めると、いきな
り、剃刀を当てがった。

銀子と朱美は、口に手を当て、クスクス笑
い出す。

文夫は、身心ともに打砕かれ、ぐったりと
なったまま、もう何の敵意も反抗も示さず、
チンピラ達の為すがままになっている。

「へっ、いい気なもんだぜ」

竹田は、銀子達の方を見て舌を出し、乱暴
に剃刀を使い始めた。

「駄目よ、そんな無茶をしちゃ、傷がついて
しまうじゃない」

朱美が竹田を制して、

「お嬢さんの時のよう、もっと優しく剃って
おやりよ」

「野郎には、そう親切にしてやる気が起らね
えのですね」

「じゃ、剃刀をこっちへ渡しな。銀子姐さん
と私が仕上げてやるから」

朱美と銀子が仕事を開始した。

「いやーね。このお坊ちゃんたら、また暴れ

出して来たわ」

朱美は、ゆるやかに剃刀を使いながら、銀子と一緒にクスクス笑い始める。

そんな文夫に、じっと睨の深い視線を向けている小夜子に義雄は眼を向ける。

「文夫さん。いいわね。姉さんのように、きれいにしてくくのよ。うん。駄目よ。そんなに動いちゃ。もう、少しじゃないの。が、がまんして——」

小夜子は、義雄に強制されるまま、そんな風に文夫に話しかける。

わかって！ ね、文夫さん。今のわたし達

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

はいくら抗ってみたって、この鬼たちの手から逃げ出せないのよ。辛いけれど、口惜しいけれど、人間としての感情は捨ててッ。ね、ね、文夫さん。

小夜子の胸の裡は、そういう文夫に対する呼びかけが血を吐く思いで渦巻いているのだった。

ようやく、ズベ公二人が仕事を終えて立ち上る。

「そら、姉弟仲良くこれで丸坊主だ」

竹田と堀川は、二人を見くらべて哄笑し、「さあ、これでいいだろう。次はどうするん

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに對しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

だい、お嬢さん」

「——次にねえ」

小夜子は、左右につめ寄った二人のチンピラにさも羞しげな仕草をとりながら、

「しばらく睨みっこしたいの。お願い、二人をしつかりと、縄で縛って——」

精も根も使い果たしたよう、ぐったりとなつたまま、屈辱の剃毛をどこされた文夫であつたが、ふと、顔を上げ、慄然とし、再びさつと赤らんだ顔をねじ曲げるのだった。

足首を縛った縄を解き出した竹田と堀川は小夜子の左右に分れて、足首の一つ一つに縄を改めてかけ直し、両方から力一杯引っ張り始めたのだ。忽ち、優美な小夜子の二つの肢は八の字に吊られていく。

小夜子は、そのように無残な肢態を弟の文夫の前に堂々とさらしてしまつたが、軽く眼を閉ざし、うすら冷たいそっけなさをつくつて、冴えた美しい象牙色の頬を見せているだけだった。

文夫の足首を縛った縄が解かれ、今度は、銀子と朱美が、竹田達の行った事を真似て、一つ一つの足首を縛った縄を左右から引っ張り始める。思わず、文夫は体を硬くしたが、「——駄目よ、文夫さん」

小夜子が反抗を示す文夫をたしなめるのである。

「さからっちゃいけないと、姉さん、いったでしょう。男の子らしく、堂々とするのよ。姉さん一人に、こんな羞しい恰好させるなんて嫌——」

そう小夜子に声をかけられると、文夫は、何か催眠術にでもかかったよう無抵抗となりズベ公達に引かれるまま、大きく肢を開いていく。

壁に取りつけてある金具に引いた縄をつなぎ、美しい姉と弟とをあられもない姿に仕上げて対峙させた悪魔達は、盛んに揶揄したり哄笑したりしながら、はしゃぎ出すのだ。

「さあ、次をつづけなきゃ駄目じゃないか」

義雄は、情緒的なほどに冷やかな翳の深い小夜子の容貌を楽しげに眺めて、鼻の上を指ではじく。

「ここまで来て、今更、ためらう事はないじゃないか」

小夜子は、わかったわ、と自嘲的に呟いて睫毛の長い二つの瞳をそっと開いた。

「ね、文夫さん。姉さんの——をはっきり見て頂戴。美津子さんとくらべて、どっちが素敵と思う。ねえ、おっしゃて——」

そんな言葉を口にするのが、どれほどの捨て身の勇気のいることか。

声を出し、口を動かし言葉とするにすぎないこの単純な作業が、時と場合と相手によって、これほど苦痛をとまなうものになるということを、この深窓の令嬢は改めてひしひしと思い知らされるのだった。

だが、もし拒否をしたり渋ったりすると、この悪魔たちのいたぶりは忽ちその何倍かにふくれ上って、容赦なくハネ返ってくることも、いやと云うほど思い知っていることだったのである。

小夜子は、わざと微妙な微笑まで口元に浮かべて、文夫に甘えたい方をする。

「——姉さんだからって遠慮しなくてもいいのよ。ねえ、黙っていちゃわからないわ。はっきりおっしゃって、文夫さん」

小夜子は、わざともしどかしげに腰をもじもじ揺するようにして、甘い声で文夫に話しかけるのであった。

義雄は、一種の淫婦に化した小夜子を、文夫の眼に示してやるのが目的だから、次々と小夜子に、その淫奔ぶりを強要する。

「——ねえ、文夫さん。姉さんの——がわかる？ もう子供じゃないんだから、それ位の

事、知ってなきゃ駄目よ」

小夜子は、傍に立つ義雄に情感を含んだ粘っこい瞳を向け、

「あなた。弟に教えてやって。お坊ちゃん育ちで、まだ女の事がよくわかっていないと思うの——」

よし、と、義雄は身を寄せた。

「これだよ。わかるかい文夫君。君のお姉さんの一番の泣き所さ」

義雄は、文夫の狼狽ぶりを楽しみながら、次に向き直ると小夜子の優美な肩に手をからませて、

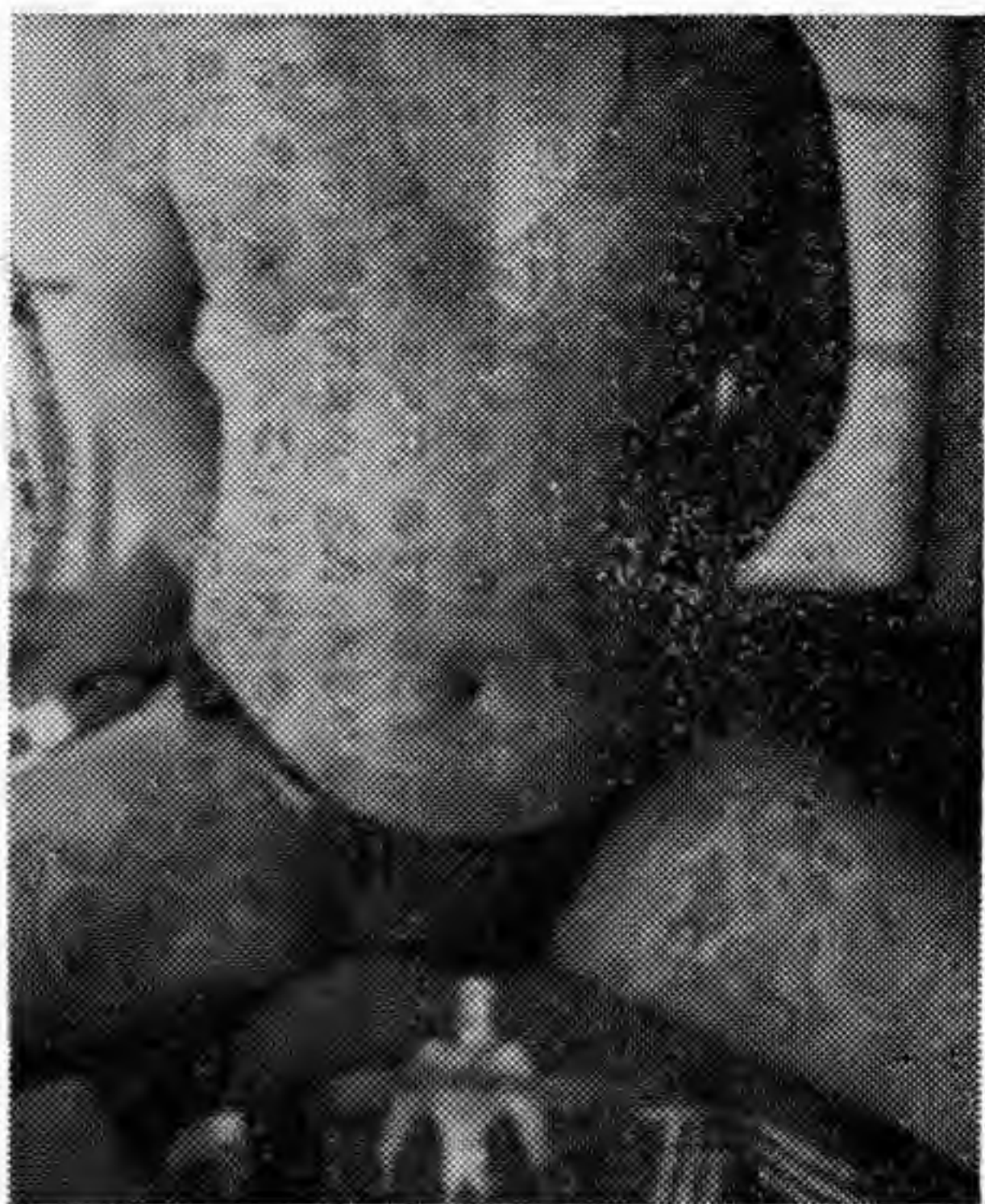
「それじゃ、しばらく、このままにしておいてあげよう。弟君に色々意見をしてやるんだ。いいね」

義雄は、小夜子に頬ずりし、無気味な優しさを含めた声で

「それがすめば、また、素ばらしい方法で、君達姉弟を楽しませてあげるよ。ま、楽しみにしておいで」

そういつて義雄は、心から勝ち誇った気分になり、再び、大声で笑い出すのであった。

(未完)



私の刺青考

堀田 彩次郎

私は、自称刺青マニアである。

今日の世間一般の風潮からみて、刺青というものはその大小を問わず、普通人のするべきものではないとされている。なるほどそうであろう。すすめるべき性質のものではないことはよくわかる。だが、私自身はどういうものか、どうしても断ちがたい強い執着をもっているのである。

そして、全身隅なく刺青を施している。

私が刺青をしているからいうのではないのだが、世間では刺青をしているというだけで

悪人のレッテルを貼り、さげすみ嫌うが、刺青が何故悪いのであろうか。刺青そのものは決して悪いのではない、刺青をして悪い方に利用する人が悪いのである、と私は思う。

刺青自体は、原始時代から世界中のあらゆる種族にもある、一種の風俗である。

刺青は、人間の本能的な装身術の一つとはいえないだろうか。

全身に刺青しているけれど、私は決して賭博師や、香具師、無頼漢のたぐいではないしその経歴もない。真面目な市井人として正し

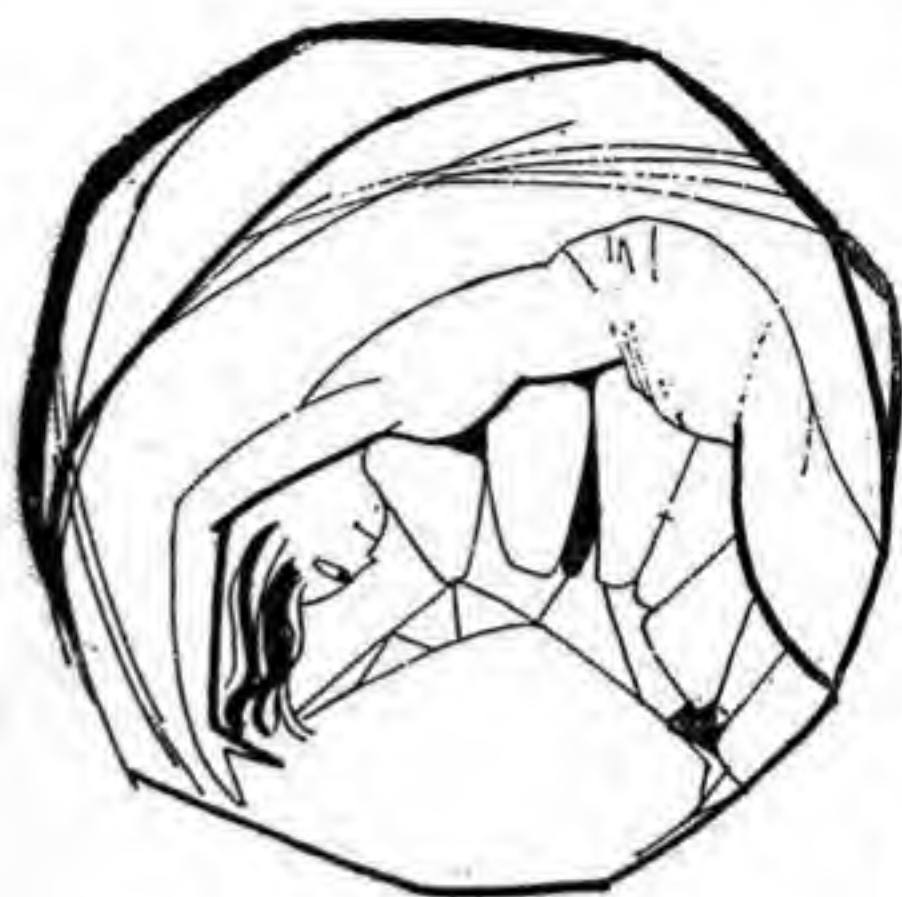
い職業を持ち、正常な家庭を営んでいる一市民である。ただ、刺青そのものが不健康であるといわれればたしかに不健康であるから、それをしてる私は、不健康な市民といわれるかもしれない。

しかし私をして云わしむれば、女性が化粧や装身具を好むごとく、また如何なる賢夫人や偉人といえど、セックスに関してみせる人間本来の欲望と同様に、刺青に断ち難い執着を覚える私が、私の体にそれを施して何が悪かろうといったのである。刺青の中には、その図柄や彫った人の人柄によって恐ろしいものもあるが、私は美しい肌のアクセサリーとしてのものを考え、刺青のもつ魅力を、体に適合させて最大に発揮させるようにすればこの上ない芸術であると思う。

芸術は永遠であるが、刺青の場合は一代限りである。それだけに余計、短い人生を彩り共に散るこの芸術に私は魅かれ、楽しくかつ美しく感じられるのである。

私は人間の心と野獣の身体をもっている。

その獣性を満足させるために彫った刺青を私は無上のものとし、他の人にも見て貰うことを楽しみとしているが、それが私のマニアたるゆえんと思い、誇るべきものではないとは承知しながら、マニアなることに満足し、聖人君子はどうか知らぬが、一皮むけば人間は皆同じではないかと思う次第である。



わが回想と私見

真 実 の 叫 び

威 井 蘇 生

昭和十二年七月七日、北支の一角に響き渡

った一発の銃声は、当時二十二才であった私の青春を十二年間に亘り、泥沼と死の恐怖の中に奪い去った。想えば、尊い青春の総てを捧げ尽した拔殻同様の身を待っていたもの。

『国敗れて山河あり』と言う古い美しい言葉とは反対に、巷に溢れた飢えた人々の姿。激しい生存競争の中で失った青春を取り戻す術もなく、生きる努力の明け暮でした。そしてやっと気づいて、背を伸し一息ついて見ると現世代の青春は、我々の想像を絶し常識を超え、とうてい手の届く筈のない遥か彼方で目

まぐるしく変貌して居ります。

曰くヒッピー・アングラ・サイケ調に至っては、もういけません。あのような姿でしか青春を謳歌するより外に術はないものなのかと、只々驚異の目を見張り、隔世の感深く、今更ながら時代の相違と過去を無為に過ごしてきた悔悟の念を禁じ得ません。噫々我が失われた青春よ、いずこに！

一時的放心状態の続いた一年半程前の或る日、偶然にも店頭で貴誌を始めて手に取り、世にも不思議な世界の存在を知りましたが、実は決して始めてではなく、遠い遠い過去の

記憶の中にこれに通ずる何かがあったような気がしてならないのです。丁度、知り過ぎる程知っている人の名前が咄嗟に口に出ないもどかしさ、あれです。しかしその時は、その何かが一体、何を指すものか、どうしても思い当りませんでした。

さてそれからの私は、今日まで年令相応に総ての点で控え目に生きて来ましたが、突如として夢想だになかった青春の息吹きと胸のざわめきを、自分の中にはっきりと自覚するようになったのです。現世代の暴発的エネルギーとは方向は異なりますが、深く静かに

素晴らしい活力が甦って来た感じでした。然し只胸がわくわくするだけで、さて何をやったらいいか具体的な方法手段は判らず、折角の泉の如き活力にも手の施す術もなく、宛ら夢遊病者の如く古本屋を貴誌を求めて徘徊するのみでしたが、その頃、ふと遠い過去の記憶の中から、不思議なもう一つの世界に焦点を合わす事の出来る小さな出来事を、はっきりと思い出したのです。

私の従妹にS子という嬢はん育ちの大阪嬢がおりました。私より二つ年下で、我儕なきかん気のお転婆娘でした。夏休み中は瀬戸内海の海岸にある私の生家へ泳ぎに来るのが、例年の慣わしになっていたのです。その年も夏の終りに近い頃だったと思います。私が十四、五才位でした。昼間の泳ぎで疲れ切った、けだるい体を、八畳の間に吊った蚊帳の中へ横たえた、夜の九時頃ではなかったかと思ひます。仄かな蚊遣りの香りが漂い、蚊帳の外を飛び交う蚊の羽音が聞き取れる静かな夜でした。

何が原因だったのか思い出ませんが、兎に角、S子と激しく口論を始めたのです。口論と言っても一方的で、S子は早口の大阪弁で、やたらとまくし立てるのに引き替え、私

は田舎弁丸出しで、よたよたと答えるので、どうしてもテンポが合いません。ちゃきちゃきの都会育ちのS子は、耐えられない焦れたさに痼癪を暴発させたに違いありません。突然、横で寝転んでいた私に飛びかかり、処構わず噛みついてたりつねったりするのです。

私も力を出せば、荒れ狂うS子を振じ伏せる位い何でもないので、田舎育ちのコンプレックスとでもいうのでしょうか、年上ながら何時もS子には圧倒され通して、二目も三目も置いておりましたので、私は両手で頭を抱え、ごめんごめんと言いながら体を転ばせて、逃げ廻っておりました。すると、S子は、蚊帳の中で急に立ち上り「男のくせに弱虫！」と叫びながら足を上げ、私の肩と云わず腹と云わず、体中を蹴るのです。

S子は、確か其の頃都会にしかなかったハワイのムームーのような型の、袖なしのアップパー（田舎ではそう云いました）の洗ったものを寝着代りに着て居りました。私は足蹴にされながらも、痛みや苦痛を感じた記憶は全くなく、振り乱された髪の毛、汗と香油の入り交った匂いに酔い、頭を抱えた両手の隙間から薄明りを通して、かすかに見え隠れする小麦色に陽焼けしたS子の脚の方には

かり気を取られていたのです。

S子は、夏も終りとはいえ、未だ蒸し暑い蚊帳の中で力一杯暴れたので、ハアハアと激しく肩で息をしながらも止める気配もなく、弱虫！弱虫！と叫ぶ声も、何時しか泣声に変わっていたのです。私は口論の内容から、泣き狂う程の思い当る理由はどうしても見付かりませんでした。

その時、片方の蚊帳の吊手が切れ、丁度網に掛かった魚のように二人の体に被さりました。瞬間、何の衝動か解りませんが、突然私の体内に圧縮されていた男性の攻撃本能が音を立てて燃えたのです。私は矢庭に立ち上ると頭に被さった蚊帳を払いのけ、驚いて立竦むS子（しかし瞳は大きく開かれ輝いていたようでした）を蚊帳ごと押し倒し、見る間に蚊帳でS子の全身を簀巻きにしてみましたのです。S子は芋虫のように、もうどうする事も出来ません。

私は常日頃、都会育ちを笠に着て、年上の私を馬鹿にしていた生意気な女を征服し自分の支配下に置いた喜びに昂奮し、S子に馬乗りになり無言の俥処構わず殴りつけました。が、不思議な事に、S子は腕くだけで声一つ出さず、時たま小さく呻くのです。私は急に

心配になり殴るのを止め、S子を蚊帳から出してやろうとしましたが、S子は嫌々と云いたげに体を左右にくねらせるのです。私は、S子が強情な鼻柱を暴力で征服された事を怒り、私のお節介を拒否しているのだと思ったのです。私は遂方に暮れそつと立ち上ると足音を忍ばせて二階の勉強部屋へ上りました。興奮もいくらか静まりましたが、兎に角大變な事をしたという悔悟で、下に降りてS子にかける言葉の用意など、思いもよらぬ事でした。

三十分程経て恐る恐る降りて見ると、蚊帳は元通り吊り直され、S子は布団の上に腹這いになり、伏せた額の下に両手を置き身動き一つしません。襟足に汗の玉が光り、後れ毛が首筋の肌にくっついておりました。再び蚊の羽音の聞える元の静けさに戻りましたが、S子はじつとそのままの姿勢を続け一言も云わず、私も無言でそつと横になりました。

それっきりです。今、私は当時を懐しく振り返り、貴誌で知った不思議なもう一つの世界も、初めてと錯覚しただけのことで、実は四十年近い遠い過去に、無意識の内に巧まざる真剣そのもののSM相互プレーを、既に身を以て体験していたのです。

実に感慨深く思いました。S子に足蹴にされ、苦痛を感じなかった私。蚊帳の簾巻の息苦しい中で、馬乗りになられ殴られながら一声も出さなかったS子。お互いの肉体に潜む無意識な加虐被虐欲が、稚拙な実験により証明されたといえましょう。恐らくS子は自分の女を意識し、強力な異性の暴力による被虐の快感に悶え、甘美な喜びを蚊帳の中で噛みしめていた筈です。

四十年の歳月を経た今日、遅れ馳せながらもそれがはっきりと確信を以て言い得るのは奇クという媒介があったからこそ、貴重な偶然に感謝すると同時に、特異性のある内容の貴誌を、幾多の難関を超え言論の不自由を克服し、維持発展へ導かれたその労苦と功績は計り難いものと推察いたします。

さて、私自身に潜そむ被加混同の性向を自覚し、それを益々助長発展せしめるための心構え、いい交えればモラルと肉体。人間としての精神と、動物としての本能について、良識を脱し切れないう中途半端な迷いと、ジキルと、ハイド的二重人格の幻影に悩まされました。プレイ・メイトにだけしか打ち明けられない性向に強い抵抗を感じ、秘密を持つ疚しさが表面に現れ隠影とはならないか、等々。

御誌々面を賑わしている読者通信欄の記事も毎月楽しみみの一つですが、何如にも世間を憚るもの、秘密の漏洩を恐れるものが目につきます。秘密裡の行為なるが故に貴重なのか、又そのスリルを味わう事が楽しいのか、プレイそのものの楽しさはさる事ながら、こうした種々な感情の交錯した、所謂アブノーマルな世界に没我の境地を切り拓く努力が必要ではないでしょうか。

古い道德教育の殻を被り、一死報国の至誠に若人の血を滾^{たぎ}らせた過去のある私は、精神と肉塊を別々に考える事の困難さとの戦いから始めなければなりませんでした。良識の目を憚り、自分を偽り、オーバーな表現をする^と犯罪者の劣等感をも、自分の性向行為を合法化するための結論によって打ち破らなければ納得出来なかったのです。先程も通信欄の事に触れましたが、その他の資料によりまして、教職にある方、公務員、有名商社マン、会社経営者、家庭の主婦等々の、教養を身につけておられる方々が、自分の性向に対処する基本的姿勢（夫婦間のみのプレイは別にして）、妻の協力が得られない場合、もしくは独身の方々、又はより高く他にメイトを求められる方達の、思想の根本に是非触れて

みたいと思います。

私は私なりの結論に到達する事が出来ました。難産の末、やっと得たものです。それは性生活の延長としてのプレイ。性生活に密着したプレイ。勿論、相互に道義的、社会的責任を自覚し、相互の性向をよりよく理解し合える人を得ること。もう一つは、芸術としてのプレイです。ルネッサンスの名画を眺め、パレーの『白鳥の湖』を観覧する人間の心の奥深く秘められた願望を、より具体化したプレイにより果す可能性に近づく事が出来る、人間美の、或は肉体のかもしれない出し得る最高の魅力の極致を探究する目的です。理解ある同性向の方の積極的協力は勿論、必要です。従ってプレイメイトの選択は慎重を期する事は申すまでもありません。飽くまで相互関連者との理解と、そのために起り得る煩わしい複雑な人間関係の諸問題について、又は先程触れましたそれぞれの性向に対処する基本的姿勢について語り合い、論じ合い、その中から相互の納得出来る結論に到達し、根本的思想を把握し合って後、本当に信頼に値する同志的結合の中から、始めて理想の男女の差別のないプレイ・メイトが、誕生するものと確信します。この世界にだけ通じる『良識』と

してです。

極論かも知れませんが、手紙の一通や二通で、見知らぬ世界を覗き見たがるのは、物見高い群集心理か興味本意の、まやかし者と決めつけても過言ではありませんまい。

さて、以上の如き理想論を羅列いたしました私も、始めの頃は理想とは程遠い報酬目当のBGや、物欲しげな女性を探し求めては、不本意ながら相互プレイの真似事をやって来ましたが、何時からとはなく、あるBGは報酬は第二になり真剣にプレイに打ち込み、又ある女性は隠された性向を他の女性から巧みに引き出すベテランとなり、段々と理想に近づきつつある数名のメイトを得ました。二対一、三対一と種々のプレイに真剣な汗を流す彼女達にとつては、性向をいやが上にも満足させつつ実益を得る最適なアルバイトです。私自身はこよなき生活の糧となります。

さて私のプレイですが、詳細は公表を憚ります。

ですが、バイブレーター数個を駆使した攻防が主体です。セックスを前提条件としたバイブレーションの責め、耐え忍ぼうとする主人の意識を裏切る肉体。理性では如何にしても防ぎ切れない動物的本能を晒さざるを得ない姿に、我と我身を羞恥と被虐の地獄へ墮して行くのです。これこそ厳肅な地上最大の祭典と言えるのではないのでしょうか。私は途中、申しました如く、失われた青春を再び呼び醒す機会を得た喜びと、その成果と可能性を忘却し、打開策に気付かず、自らをマンネリ化の貝殻に閉じ籠める数知れぬカップルや、真剣にSMに取り組む気構えを持ちながらメイトに恵まれない方々の一人でも多くに僭越ながら分ち与えたい思いと同時に、大先輩諸兄弟のお導きを乞う事が出来ますよう念じつつ老兵の身も願う敢えてペンを執った次第です。

拙ない文に胸中の総てを託す事なぞ思いもよらぬ事です。四十、五十は鼻たれ小僧と申します。同年輩の皆様、若者に負けないファイトを燃やして、同志的信頼を基に固く手を結ぼうではありませんか。決断、実行の叡智こそ新世紀へのハイ・ウェイです。

懸賞入選作品



Mモデルと

その妻

伏虎久作

Mモデル募集

古い読者の中には、まだまだ御記憶の方も多い事と思うが、今から七年ばかり前、本誌編集部が誌上で「男性マゾモデル」を募集した事があった。思いもよらぬ男性Mモデルの公募に飛び付くように応募した私が、旬日をいずして図らずも、あの高嶺の花にも似て当時はグラビア写真でのみしかお目にかかる

ことの叶わなかった美人、私にはあこがれの女神、絹川文代さまのあの美しいおみ足に我が唇を当てることの榮に浴することが出来たのであった。夢を見ているような出来事、正に夢のような幸せの訪れであった。

夏が近いことを思わせる明るい雨が、静かな泉北の街屋根を濡らしていた。植え込みの松や楓が美しく洗われ、新鮮な緑がまぶしく私の眼を射た。

教えられていた料亭は直ぐに分った。ひっそりとした高級邸宅を思わせる落ち着いた構えのその離れ座敷が、長い間の私の空想の世界でしかなかったあの夢のプレイを、現実のプレイとして、天が与えてくれた幸福の場所であった。

初めてお目にかかる文代さまの美しさは、到底グラビアの比ではなかった。女中さんに案内されて、私がその部屋にお伺いした時、

丁度、文代さまはお風呂上りの素肌に浴衣を羽織られ、明るい縁側のとう椅子に腰をおろして、涼を入れられ乍ら髪型のお手入れをなされていた。浴衣の裾を割って、大胆に伸ばされた素晴らしい脚線美は、無言で私を圧倒し、雪を思わせる白い足には、文代さまの美しいお体が隠されて、思わず跪かずにはいられなかった。

ここで、どんなプレイがどのようにして行われたかを詳述するのは、私の意とするところではない。足舐めに始まる数々の奴隷プレイは、そのいずれもが私には生まれて初めての真の喜びであったし、七色の虹に包まれた夢のような数時間は、生涯私には忘れることの出来ないものであった。

とりわけ、特に忘れられない感激は、それから更に一カ月の後、今度は、大阪市内の或る高級ホテルの一室で、第二回目のプレイが行われ、そしてそれが終了した時であった。

編集部、撮影の係の方が、何かの御都合で少しの間、席を外され、部屋には文代さまと私の二人だけとなった。その間に文代さまはプレイの後の汗を流されるため、隣りの浴室の方へ行かれた。

その日の文代さまの女主人ぶりは、実に素

晴らしいものがあつた。奴隷男の心の内を憎いまでに見透かされたその見事な責めに、私はもうすっかり上気して、異常な興奮に全く自分を失っていた。もっともらしいいい訳けは云うまい。厚顔無礼にも、私は脱衣室に入られた文代さまを追って、その足下におすがりするように、

「文代さま、お願いします。一度だけで結構ですから、どうか、どうか本当の奴隷の接吻をお許し下さい。お願いです」

と、哀願した。一瞬、さすがに顔をこわばらせ、驚きの色を見せられた文代さまではあったが、直ぐに又、元通りの落着きを取り戻され、しかも、その美しいお顔には、決して私などの、いやしい思い上りや甘えをお許しにならない一種毅然としたものが感じられ、更にはこの私の常軌を逸した無礼極まりない振舞いに、はじめて女性としての烈しいお怒りに燃えられているのを知った。図に乗り過ぎていた私の甘い考えは吹っとんだ。私は後悔した。しかし遅かったのである。

「お黙りっ、馬鹿っ！」

ピシッ。文代さまのしなやかな右手が挙って私の頬が大きく鳴った。恐しい程の平手打ちであった。続いて二つ、三つ、容赦のない

往復ビンタが狭い脱衣所にこだました。

「ごめんなさい。お許し下さい」

私は板の間に両手をついて必死に詫びた。

「犬のくせに」

余程のお腹立ちであつたのであろう。平グモのようになっていた私の頭を、文代さまは何度も足を上げて蹴り付け踏みにじられた。

「悪うございました。どうかお許し下さい」

自分を取り戻した私は、自分の厚顔さが堪まらぬ程、恥ずかしくなった。

「二度とそんな事を云うと承知しないから」
やっと許された私は、真赤になって元の部屋に戻った。打たれた両頬が膨れぼったい感じで熱く、口の中が切れたのであろうか、妙に生臭くて、ひりひりと痛んだ。

だが、私はやはり犬であつた。文代さまの云われる犬であつた。お芝居ではない真剣な文代さまの厳しい叱責と強烈な折檻。それらは、プレイの中では到底、味わうことの出来なかつた新しい興奮と例えようのない屈辱の喜びを私に感じさせた。「犬のくせに」思わず洩らされた文代さまの、あの短い言葉の中に、私に対する本当の侮蔑と嘲笑がこめられている思いがして、私は今更のように新しい喜びと感激に、全身の血を妖しく揺すぶる

のであった。

手紙

文代さまとのプレイの一部が、グラビアとなって本誌に掲載されて間もなく、差出人が全く私の記憶にない男の名前になった一通の封書が届いた。宛名は間違いなく私であり、不審に思いながらも開いた中から、更に出て来た小型の可愛い封筒は、なんと意外にも文代さまからのものであった。多分、編集部で私の住所をお聞きになったことであろうがそれにしても、私の妻に対する万一の御配慮からか、わざわざ差出人を男性名として下さっていたことも有難く、住所は伏せておられたが、小さく絹川文代としたためられているのがとても嬉しく、印象的であった。

私の手は震えた。甘い花の香りがして、夢中で開いた二枚の便箋には、流れるような優しい女文字で、大要次のようなことが記されていた。

『前文御免下さいませ。突然に、このようなお便りを差し上げますことの不躰、何とぞお許し下さい。』

先日の妾とのプレイ、如何でしたでしょうか。妾の女主人ぶり、貴方さまにお気に召し

て、頂けましたかどうか、心配致しております。……中略、つきましては今一度、貴方様にお目もじの上、何かと御相談、お話し申し上げたく存じますれば、若し、お差支えなき場合、次の日曜日、午後一時、大阪難波、高島屋百貨店の正面玄関、入口にてお待ち申し上げております故、お越し願えれば、文代一生の幸せに存じます。詳しくは、お目もじの上にて……後略』

私は、飛び上る程嬉しかった。あの時は、随分叱られたが、このお手紙ではもう許して頂けたものか、そのことには一言も触れられていなかった。第一、このような個人的なお便りが頂けるなどは、夢にも思っていない私であった。

当日、私は口実を設けて早目に家を出た。私のアパートから指定の場所までは、約一時間半の道程である。お土産として土地の有名特産品である、S屋の日もちの良い羊かんと高級せんべいの詰合わせを持参した。そして約束の時間待ちを利用して、高島屋店内で、あれこれと迷った挙句、先日のお詫びのしるしにと、女店員さんを選んで貰って新型ハンドバッグを買った。それは私の一月の収入をはるかに越えるものではあったが、安価なも

のをお贈りして、反って文代さまのお気持をそこねてはという心配から私としては精一杯の買物であった。

九月とはいえ、まだまだ真夏並みの厳しい暑さであったが、日曜日ということも手伝ってか、さすが大阪ミナミの盛り場の人出はものすごかった。ひきもきらぬ人の波が右へ左へと流れていた。

若しや見落してはと、私は一生懸命、群衆の中に文代さまのお姿を求めて緊張した。だが、約束の一時はおろか、やがて二時になるうとするのに、文代さまは遂においではなかった。私は待った。諦めたくなかった。何かの御都合で、遅くなられているのでは……と、万一に希望をつないで、いつまでも、いつまでも立ち尽くした。しかし三時過ぎ、そして四時を廻っては、さすがに私も諦めるより仕方がなかった。

重い足を引きずるようにして帰った私を追いかけるように、その翌日、再び文代さまから丁寧なお詫びのお手紙を頂いた。やはり男名前のそのお便りには、私の予想通りやむを得ない急用のため、約束の日時にお出掛けになれなかったらしい事。そうして、その代り今度は妾が来週の日曜日、所用もありますの

でそちらのW市までお伺いしますから、もう一度午後二時、御当市T町にある「天海閣」三階の百合の席までお越し頂けるようお願い申し上げます。という意味のことと。最後に今度は必ずお伺い致しますからと書き添えられてあった。

文代さまが、私の地W市の天海閣を知っておられる。これは私には意外であった。しかしそれだけに、よけい文代さまが恋しい方な思えて嬉しかった。私は元氣を取戻した。

残暑の厳しい季節柄、万一を心配して、お土産の菓子折りを新しいものに買替え、再び私は指定の場所に出掛けた。

天海閣は当W市のほぼ中央の繁華街にある大きなレストランで、一階、二階が大衆席、そして三階以上が宴会場と家族用の個室として、夫々完全に独立した小室に区切られ、紅葉の席とか、あやめの席、ばらの席といった名前が付けられてあった。

百合の席は三階西側の隅近くにあつて、窓からは、ある有名女流作家の小説で一躍有名になったK川が白い帯のように横たわり、その川口にあるS金属工場の赤い煙が、幾筋もたなびいているのが遠望される。

「百合の席」とかかれて、美しい模様ガラス

の入ったドアを何度も何度も確かめて、私は躍る胸を押さえ乍らそっとノックした。不安と喜びの入り混った複雑な気持の私に、

「どうぞ、お待ちしてましてよ」

と、少し作つたような、だが私には嬉しい声が、はねかえつて来た。私は緊張した。そうして、思い切つてドアを押し一歩室内に踏み入れた私は、思わずそこに棒立ちになつてしまつたのである。

奴隷の誓い

その頃、私の住んでいたアパートは普通の二階建の古い家を改造したインスタントアパートで、一階、二階ともに、それぞれ二世帯が住みつき、私の部屋は二階であつた。下に較べて家賃は三割も安かつたが、その代り四世帯の共同になつてゐる炊事場やトイレ等が、いずれも階下になつてゐるため、二階の住民はその度に狭い階段を上下しなければならぬ不便さがあつた。境界がベニヤ板にヒゲの生えたような、お粗末な建築材料で申し訳に仕切られた私の隣の部屋には、助田正一、それに妙子という私達よりは七つ八つも若い共稼ぎの夫婦が住んでいた。いずれも近くの小さい洋酒バーで、それぞれバーテンやホステ

スをしているというものであつたが、私達とは朝夕時折に廊下や階段等で顔を合わせた時挨拶と軽い言葉を交わすくらいのものでそれ以上の深い交際はなかつたが、やはり商売柄人触りのよい粋な夫婦であつた。特に妻の妙子は丁度今売出しの美人歌手、黛ジュンを思わせる目の美しい人で、時々忙しく階段を往き来する時、その短いスカートの下から見せる形の良い白い脚には、こぼれるばかりのなまめかしさと色気があつて、池に咲く赤い水蓮にも似て、黒く古ぼけた私達のアパートに匂う一輪の美しい花であつた。

意外にも、百合の席にいたのは、その助田夫婦であつた。もう食事は終つたのであろうか、テーブルの上にある洋皿類は、一つにまとめて積み重ねられ、それぞれ煙草を喫つたり、唇を直したりしてゐた。

私は自分の目を疑つた。だがそれは、まぎれもなく正一と妙子の二人に違ひなかつた。しかもその顔や様子には、昨日までの彼ら夫婦とはうって変り、露骨なばかりの蔑みの色が浮かんでゐた。

「どうして彼等がここに？ まさか彼等夫婦が私の秘密を……まさか？」

はかり知れぬ疑問と不安が、にわかに黒い

雲のようになって私を包んだ。

「さあ、どうぞどうぞ。折角、御招待申し上げながら、そんな端近かでは申訳がない。こちらへ来て掛けて下さい。もっとも、椅子へ坐るよりは床の上に跪ずく方が、貴方は好きだろうけれどね」

正一が、はじめて口を開いた。おそろしいばかりに毒の含んだ言葉であった。

「絹川文代さんでなくて、気の毒したわね。フフ……」

やはり、彼女達は知っていたのだ。そのトゲの含んだ皮肉な言葉の裏には、私の恥部のすべてを知り尽しているような怖ろしい響きがあった。

思わず顔が赤らみ、頬が熱く火照るのを感じた、足が小刻みに震える。

「まさかと思っていたが、やっぱり貴様だったのか」

がらりと言葉を変えた正一は、テーブルの下から問題の本誌新刊号を取り出し、例のグラビア頁を開けて私の鼻先につきつけた。

思い出のある喜びの一駒が、大きく写っていた。大胆に突出された文代さまの白い素足を両手に戴いて、人間も理性も忘れ去って、ただ、犬のように浅間しくむさぼり舐め廻す

写真と並んで、更にお化粧をされている文代さまの足もとにうずくまり、嬉しそうな表情でその足台となっている、間の抜けた私の顔があった。しかも、その殆んど正面に近いその顔には、黒いインクで眼鏡が書き込まれてあり、眼鏡を掛けたそれは正に私の顔であった。

元来、私は近視である。そのため眼鏡は、小学校五年生の頃から着用した。長い期間に亘って眼鏡を着用している人なら誰でも御経験がおありのことと思うが、十年、二十年と眼鏡を掛けていると、その人の顔は眼鏡を掛けている時と外した時のそれとは、その感じがまるで違っていることに気付く。私の場合、特にそれがひどかったと、私は思っていた。そのため初めてプレイに入る時、写真部の方が折角親切に「念の為、サングラスでも掛けておいたら？」と、すすめて呉れていたにも拘わらず、私はただ眼鏡を外しただけでプレイを受けた自分の軽卒さが今更のように悔まれたが、それにしても正一夫婦が奇くを読み、そして私のことがこうも簡単に見破られているなどとは、思いもよらないことであった。

「これが貴様ではないかって最初に気づいた

のは、この妙子さ。それで俺達、この写真に眼鏡を書いてみたのだ。するとやっぱり貴様だ。それでも未だ俺達は半信半疑だった。まさか貴様がマゾヒストとは思わなかったからな。しかし、出版社などに問い合わせても勿論これが誰だなどと教えてくれる筈もないし妙子の発案で、あの偽手紙を書いて貴様を罠に掛けて見たのだ。でも苦勞したんだぜ。消印などで疑われないために、大阪まで行って投函したんだ。そうして馬鹿な貴様は、それにうまうまと引掛ったという訳けさ」

正一が面白そうに説明した。

「でも、先週は、わざわざ大阪まで御苦勞様だったわね」

妙子が皮肉るように笑った。

「それでは、あの時……？」

「ふふ、いたわ。貴方の直ぐ後にね。もう貴方に間違いがないからって、余程声を掛けてあげようかと思ったけど、念には念をと、やめておいたのよ。それにしても貴方、随分、根気よく立っていたじゃないの？ 妾達ゆっくりお買物をして食事まで済ませて出て来たのに、まだいたわね。一体、何時頃まで待っていたの？」

私は恥ずかしさで、逃げ出したくなった。

「でも、日頃尊敬していた貴方が、こんな恥知らずな大馬鹿者だってことは知らなかったわ。ところで、貴方がこんな犬も顔負けのみにとない恰好をして喜んでゐる事を、奥さんは知っているの？　そうね。貴方がこんな嫌らしいことを平気でする男だってこと、貴方の会社の人やアパートの方達が知ったら、みんなどんな顔をするかしら？」

妙子が改めて、グラビアに目を移しながら脅迫するように云った。

云うまでもなく、それは私にとってもっとも怖しいことであつた。妻は勿論、会社の上役、同僚、それにアパートや近所の人々に、万一このような事実を知られたら……。いや、若しかして、もう知られてゐるのでは……。いや、そんな筈は……。でも、この二人は知つてゐる。この二人の口から……。不安は、また新しい不安を呼んで、真暗な底なし沼を覗くような焦燥感に、私はいたたまれないものを覚えた。

「頼むから、このことは君達二人だけの胸におさめて、決して他所の人には云わないで呉れないか」

私は必死になつて二人に頼んだ。頼んでそれが、決して頼りになるものでないと解つて

いながら、そうせずにはいらなかった。「そんな偉そうな口、貴方は私達に対して利けると思つてゐるの？」

妙子の急に峻しくなつた言葉に、私はハツとした。そうして改めてこのことの容易でないことを思い知ると共に、今度の自分の軽率妄動が恨めしかった。

「ああ、そうでした、済みません。お願いしますから、どうかどうか内密にしておいて下さい」

私は、素直に言葉を改めて哀願した。

「ふふ、どうしてさ。いやらしい犬のくせにやっぱり恥ずかしいかい？」

妙子がコンパクトをしまいながら笑つた。犬のくせに……。ふと忘れていた文代さまの言葉を思い出した。そして又、今ここで妙子から再び同じ言葉を聞いた。

「はい、恥ずかしいです。お願い致します」

私は手を合わせて彼女の方を拝んだ。

「土下座して両手をついてお願いするのね」

妙子の、私を見る目が妖しく光つた。そして云われるままに椅子を離れ、ビニールタイルの床に膝を落し、深々と下げる私の頭の上で二人は顔を見合せて笑つた。

「ははは……。馬鹿野郎。だがな、云うか云

わぬかは俺達が決めることだ。それより貴様一体このモデルになつていくら儲けた？」

急に真顔になつて正一が聞いた。

「いいえ、これは僕の方から希望してプレイをさせて貰つたもので、最初から報酬など貰う約束はしてゐないし、そのつもりもありませんでした。でもお心づけは貰いました」

私は正直に答えた。

「それじゃ貴様、本当に女からこんなことをされて嬉しいのだな」

私は、うなずいた。二人の私に対する蔑みの色が一段と強くなった。

「この恥知らずが……」

だし抜けに正一が私の顔を殴つた。不意をつかれて私は、ぶざまに引っくり返つた。

「あきれた人ね」

妙子が立ち上つて入口に近づき、ちよつと隣りの席室や廊下に人氣のないことをうかがい確かめると、ドアについてゐる簡単な鍵を掛け更に備え付けのテレビのボリュームをあげた。そうして再び坐り直して顔を上げた私の前まで戻ると、やや腰をかがめていきなり私の頬を平手打ちした。更に返す手が反対側の頬に小気味よい音を立てて襲つた。そしてそれは三度、四度と彼女は、まるでその殴打

を楽しむかのように私の顔を殴った。昨日まで、お隣の御主人であった私が、今、お隣の年若い奥様に烈しく頬を打たれているのだ。「ふふ、どうお、痛い？ それとも気持ちがいいの？」

妙子が私の顔を覗き込んで、面白そうに笑った。そんな彼女に私は再び両手をついて、「奥様。どうか御内密にお願い致します」と、更に懇願を続けた。

「そんなに他人に知られるのが怖いのか？ ふふ、いいわ。黙っていてあげる。と云っても貴方次第だけだね。ねえ、あなた」

妙子が意味ありげにニヤリと笑って、正一の顔を見た。

「貴方次第……？ ゆすられる」私は、ふと新聞や小説、それに映画などに出てくるあの弱味をもった人間に、ダニのように食いついて離れない恐ろしい脅迫者を想像した。

「僕にどうしろと云うのですか？」

おそらく私には到底払えそうもない法外な口止め料が彼女達の口から提示されるのではなからうか？ という新しい不安におののきながら、私は彼女達の言葉を待った。

「じゃア、云ってあげる。今日から貴方は妾達二人の犬になるのよ。犬で解らなければ奴

隷よ」

「僕が貴方達の犬に？」

「そうよ、この写真のようにね。それとも、絹川文代さんでなければ、お嫌？」

「いいえ、そんな……」

私は、あわてて否定した。

「そうでしょう。今の貴方には、そんな勝手や気ままは許されない筈だね。それに貴方にとっても、まんざら嫌なことでもないでしょう。まあ、世間に知られなくなったら、おとなしくすることね」

勝ち誇ったような妙子の言葉が続いた。

「妾達ね、毎月奇クを読んでいて、いつも貴方のような奴隷が一匹欲しかったのよ。気のすむまで苛めてやったり、叩いてやった上でこき使ってやれる奴隷がね。でも驚いたわ、その奴隷がこんな手近な所にいるなんて。これで心配しながら、面倒な読者通信などに投書する手間が省けたというものよ」

「おい、もうそろそろ始めてやれよ」

正一が何故か、ふと時計を覗いて妙子を促した。

「そうね、じゃあ早速だけど、貴方が本当に私達の奴隷になったかどうか試してみたいのよ。いいわね」

「はい」

私は、うなずいた。

「では、妾の方へおいで」

私は云われた通り、彼女の前に進み出た。

「ひざまずきなさい」

私は、再び云われた通りにした。あこがれていた妙子の白い脚がそこにあった。ふと唇にしたい衝動に駆られる。やがてその脚が、ゆっくり上って、彼女の赤いバックバンドのかかとの高い靴の、土に汚れた細い靴裏が目の前に迫った。

「お舐め」

皮と土の匂いが混じり合って、口の中が、じりじりした。溜まってきた唾液を、そのまま泥と一緒に飲み下した。ふと、何か、尊く、おそれ多い感がして、そのまま平伏したいような思いがした。快よい屈辱感がひしひしと私を包む。

「そこが済んだら、ここもきれいにし」

彼女の足先が動いて、その鋭いかかどが槍のように私の舌を突き刺した。

どれくらいの時間が経ったのであろう。それは長いようでもあり、又短いようにも思われた。そして、連続して舌をこのようなことに酷使することの、想像以上に疲れ、苦しく

辛いものであることを、私は始めて妙子によって教えられた。さすがに一息ついて、私はその清拭作業を一瞬中断した。

「誰が休んで、いいと云って？」

乱暴に宙に躍った妙子の脚が私の顔面に炸裂し、そのまま私は後にのけぞった。

「さあ、もう一度、私がいいって云うまでお続け」

再び差出された彼女の反対側の靴底に、私は唇を寄せ舌を這わせた。

「いいこと。どんなことがあっても、やめるのじゃないよ」

妙子が、念を押すように云った。その時であった。「トントントン」と、この百合の席のドアが鳴った。

「やめると承知しないよ」

妙子が声を落して云った。ふと、その言葉に私は、彼女達に或る怖い企みのようなもののある事を感じとった。

「はい。しばらくお待ち下さい」

正一が立ち上って、入口のドアを細目に開けた。

「ああ、奥さん。お待ちしていました。さあさ、どうぞ」

入口を背にして、妙子からその作業の中断

を許されなかった私には、その奥さんと呼ばれる客が誰であるかは知らなかったが、第三者に、あえてこの秘密行為を見せようとする彼女達の命令の裏に、何か容易ならぬものが隠されているように察知され、不安と恥ずかしさに身の凍る思いであった。

「まあ、あなた」

その驚きの声で、私はその客が妻の節美であることを知って、がくぜんとした。全身の血が一時にひく思いであった。そうして彼女が、私のこの異様な恰好に思わず駆け寄ろうとして、傍らの正一に制止されているのが分かった。

「ふふ、お隣りの奥様、いらっしゃいませ。

お忙しい処をわざわざお呼びして申訳けありませんわね。でも御覧になって？　これが自宅の旦那様の、妾に対する本当のお気持ちを正直に表現されているお姿よ。今日は、このことをちょっと奥様にお見せ申し上げておきたかったのですのよ」

妙子は楽しそうに私に片足を預けたまま、上品な口真似をして節美をからかった。

「妙子さん。これは一体、何の真似なの？」
節美が、上ずったような声でなじった。

「実はね奥様、旦那さまは妾達の奴隷にして

欲しいって云うのよ。奴隷にして頂ければ妾達の云うことには、絶対に服従しますって誓われているのよ。まあ嘘だと思ふのなら見ていてごらんなさいな」

妙子は私に預けていた脚を乱暴に振り放すと、さっと立ち上った。

「さあ、御主人さまの命令よ。四ツ這いになって、妾の足の下をおくぐり」

格子模様の形のよいスカートが心持ち持ち上げられて、むき出しになった彼女の素晴らしい二本の白い脚線美を目近かにして、私の血は再び烈しい憧れと喜びに妖しく波立つのを覚えた。そうして、更にそのスカートの下に、こぼれるような白いスリッパの花びらを覗かせ、白い彼女の脚が二つに開かれた時、私のそれは怒濤の押し寄せる嵐となって爆発した。その巧みな彼女のサジスチック的な誘惑に、私はもう恥も外聞もなかった。私は喜々として、その嬌慢な白柱の間を這った。

「もう一度」

再び、私は自分の体を小さく縮めて、それをくぐり抜けた。

「ふふふ」

見下していた妙子が、咽喉の奥で笑った。そうして、その露を含んだ美しい目に、くっ

きりと情炎に似たものを浮かべているのが私にもよく分った。

「やめてーっ」

さすがに、耐えられなくなったように節美が叫んで、私の方へ走り寄ろうとした。

「うるさいっ」

正一の手が挙って、二つ、三つ、節美の頬が烈しく鳴った。

「亭主が好きでしていることだ。黙って見ていてやりなよ。下手に邪魔立てすると、お前さん達御夫婦は、会社はおろか、表も歩けなくなるぜ」

「いいわ、それくらいで許してあげる。ふふふ、咽喉が乾いたでしょう。今から奥様の前でいいものを御馳走してあげるから、ついていらっしやい」

妙子が正一を見て、にやりと笑った。生ビールでも飲んだのであろう。テーブルの上にあった空の中型ジョッキを一つ手にして妙子が室を出た。時刻外れということもあって、大衆席とは違い、廊下にも人影の見当らないのが幸いであった。

百合の席から、更に奥に進んだ処にトイレがある。

「待っているのよ」

一寸、様子を窺ってから、妙子が婦人用と書かれたドアの向うに消えた。やがて、間もなく「お入りっ」と、いう彼女の声で、私はそっと中に這入った。

「一番奥にあるから、こぼさないように、皆のいる部屋まで持ってくるのよ」

いいながら、彼女は蛇口で手を洗って出て行った。三つ並んで、掃除のよく行き届いた水洗トイレの最も奥の白い便器の底にジョッキがおかれてあった。そして、それは正に生ビールを思わせるものであった。六分位まで満たされた、黄金色の透き通った液体のその上に、真白な泡が乗っていた。

私の手は震えた。これが長い間の私の空想生活にいつも出て来た、あの夢の酒であり、幻の飲物なのか。しかも、それが今、現実私的手中にある。人々が忌み嫌い、ただ、廃棄されるだけのそれが、不思議に入手しようとして入手出来ない貴重な飲物であった。だがそれにしても、その長い空想の美酒が、このような姿でしか味わうことの許されなかった私にとって、その実現は余りにも大きな犠牲であり、破滅であった。

「どうお、美味しい？ 妾の今日の奢りよ。残らず飲んでおしまい。吐いたり、捨てたり

したら承知しないよっ」

「うう、……」

咽喉が躍り、胃が烈しく騒いだ。空想のうま酒に比し、現実のそれは、何と醜悪強烈なものであろう。思わず胸の底から突上げる不快な嘔吐感と、背筋を走る嫌悪感は、私の幸せと憧れである被虐の快美感をも奪い去るに余りある、苦痛と怖しい拷問であった。

「奥様。今旦那様が召し上っているお飲物は一体何だと思いいなってる？ ふふ、おそろくまだ温かい筈だわ。でも貴女の旦那様ってお偉せねえ、あんなものがお好きだなんて」

意地の悪い妙子の嘲けりであった。やっと半分が私の咽喉を通過した。

「あら、未だ半分じゃないの。遠慮せずに全部召し上りなさいな。ああ、そうだったの。余りおいしいので、半分は奥様に上げるおつもりなのね。仲の良い御夫婦ですこと。奥様旦那様が半分下さるそうよ。さあ、おあがりなさいな。妾はね、奥様とは違っていつもおいしいお料理を頂いていますもの、それにも高い栄養があると思うわ。それに妾のような美人のものだから、少しは奥様もお美しくなられるかも知れなくてよ。ほほほ……」

果てしなく続く妙子の辱かしめであった。

その時、何を思ったのか妻の節美が、いきなり私の手からあの汚辱をたたえた忌まわしいジョッキを奪い取ると、そのまま自分の口に流し込んだのだった。止める暇もなかった。そうして一息、二息飲み干すと苦しそうに口を押さえて、手洗いの方へ走った。私は啞然とした。

「ほほほほ、似たもの夫婦ね」

「あっははは……」

冷酷な優越感に酔う妙子と正一の嘲笑が、狭い個室に、こだました。

「それじゃ、貴方、出ましようか？」

妙子が身仕度を整えて立ち上った。

「ちよいと、ここのお勘定、お前に払わせてあげる。それからこれは何だか知らないけどどうせ絹川さんに差し上げるつもりで持ってきたのでしょ、妾が代りに貰っておいてあげる。いいわね」

二人が去った後に、百合の席お二人様と書かれた請求伝票が、一枚、ひらひらと私の前に舞い落ちた。

夫婦奴隷

妻の節美が正一のために汚されたのは、その翌日の夜のことであった。しかもそれは当

然のことながら、全く私と節美とを侮蔑し、嘲けりきった彼の半ば公然とした辱かしめであった。いつものように夜遅く十二時近くにあって、店から帰った妙子は、その足で一緒であった正一を残して、一人銭湯に出掛けて行った。私が正一に呼ばれたのは、その直後であった。

「おい、お前。あれが欲しくないか？」

いいながら正一がアゴで示したのは、バケツ形をした小さいビニール籠に、無難作に丸めて突込まれている薄いピンクのパンティであった。

「今、妙子が脱いで行ったものだ。お望みなら呉れてやってもいいんだぜ」

正一がブリーフ一枚の姿で、煙草に火を点けながら笑った。

「本当ですか」

ふと体内が熱くなって来るのを覚えながら私はそっと腕を伸ばして、それを手にしようとした。

「おっと、まだ早いよ」

一瞬それより先に、煙草を口にくわえたままの正一の指が、そのパンティをいかにも汚ならしそうにつまみ上げていた。

「あいつは不精者だから、さぞ汚れもひどく

て臭いことだろうよ。ほーら見ろ、こんなになってるあー」

正一が面白そうに、殊更にその汚れたのを拡げて見せた。

「もっともお前のような変態野郎は、かえって汚れている程、喜ぶっていうじゃないか。どうだ、欲しいか？」

「はい……」

「よし、やろう。その代り俺の見ている前で舐めてみせろ」

云いながら正一がそれを放り投げた。私は云われるままに顔を寄せて行った。女の若く新しい体臭がそこにあった。

「どうだ、嬉しいか？ もっと舐めろ」

「はい、あ、有難うございます」

「はははは、有難うございますか。おい、本当にそう思うのだな。よし俺の親切でお前もこないない物が貰えたのだから……解っているのだろうな？」

急に表情を改めた正一の目に、くつきりとみだらな色が浮かび、その短く派手なブリーフ一枚の勝ち誇った態度の裏に、いやしい好色の兆しが現われたのが私にもよく分った。

正一は消えた。だが、その時の私には、もうそんな彼に対し、制止することはおろか、

一言の抗弁さえも出来ないものであった。

思ったより静かであった。さすがに私は耐え難いものを覚えて頭をかかえた。その異様な静けさが、反って私を責め苦しめ、そして身を灼かせた。しかし、どうしようもない私自身の身から出た錆であった。それでいて砥ぎすまされた私の耳は、例え一本の針の落ちる音さえも逃すまいと、必死な努力を続けているのであった。

「どうだ、俺が好きなら、今日から俺の情婦にしてやってもいいのだぜ」

押し殺したような低い正一の声であった。

「ふふ、お願い……ね」

末尾が消えて含んだような節美の声が、理由もなく私をほっとさせ、何か救われたような思いさえする私であった。

私は恥じた。昨夜遅くまで妙子達二人から侮蔑と嘲笑を一杯に浴びせられながらも、すべてを知らされた節美が、いつそこんな私を罵倒し、愛想をつかして去って呉れた方が余程、私には気持が楽になるように思えた。

だが節美は私のアパートを出ようとはしなかった。そしてそんな節美を待ち受けていたのが、正一の凌辱であり、妙子の若い女性とも思えぬ残忍な暴行であった。

それは節美が正一に汚されてから更に二日を過ぎた、やはり夜のことであった。九月ももう半ばを迎えようとしているのに、蒸し蒸しと暑く、寝苦しさの容易に想像できる宵であった。珍しく店を早仕舞させて貰って来たりしい正一夫婦が、部屋に帰るなり私と節美を呼んだ。

「はいりな」

云われて私達は、おそろおそろ彼等の部屋に入った。ふっと不安に似たものが頭をかすめる。

「ふふ、坐りなよ。どうお？ 二人共、私達の奴隷になる決心がついたの？」

細く短い水色のショートパンティに、やはり同色のブラジャーだけという、私には眩しいばかりに大胆な姿の妙子が、真珠のような美しい歯を覗かせて笑った。

「はい」

私がうなずいた。

「お前は？」

得意そうに腕を組み、素晴らしい脚線美を誇示するようにして、私達の前を行ったり来たりしていた妙子が、ふと伸ばした足先を節美の額に当てて、こづいた。

「どうなのさ？」

「はい。一生懸命、勤めさせて頂きます」

「ふふ、そう。でもお前に勤まるかしら。正一は優しい人だからいいけど、私の奴隷は辛いわよ」

「はい、分っております」

「そう、頼もしいわね。云っておくけど妾は本当に鞭で殴るわよ。それでもいいの？」

「はい」

「そう。それじゃ、妾達も約束通り、誰にも云わないでいてやるから安心をおし」

「はい、有難うございます。それだけは、くれぐれもお願いします」

私は改めて念を押すように懇願した。

「それでは、二人共、これから正一とあたしには絶対服従するっていうのね」

「はい。もうあのお願ひしたことさえ聞き入れて頂ければ、どんなことにも従います」

「そう。じゃ早速だけど、その言葉に嘘がないのなら、女房を裸にしてやりな」

「えっ」

「早くしなよっ」

「は、はいっ」

私にうながされて節美は、すべてを観念してか、意外に素直に半袖のブラウスを脱ぎ、はいていたスカートのホックを外した。そう

して白いスリッパを肩から滑べらせると、そ
と私の隣に坐った。

「これも取るのよ」

と云うが早いか、妙子の伸びた右手が乱暴
に節美のブラジャーを引きちぎった。背中の
小さい釦が勢いよく飛び散って、本能的とも
思えるような節美の両手が、そのむき出しに
なった胸をかばった。

「ふん、まだその薄汚いパンティが残ってい
るよ」

云われて一瞬、ためらいの色を見せ躊躇し
た節美であったが、それでも、ずっと、それ
から両脚を抜いた。

「その手が邪魔ね。なんだい、貧弱な胸をし
てさ。これでも女の胸かい」

いきなり妙子につねり上げられ、節美は小
さな悲鳴をあげた。

「さあ、縛っておいてやるから、両手を後
にお廻し。あなた、ちょっと縛ってやってよ」
「オッケー」

先程から面白そうに、にやにやとしながら
眺めていた正一が、節美の後に廻ってその手
首を固く縛り合わせた。

「ピシッ」妙子得意の平手打ちが節美の頬に
飛んだ。続いて二つ、三つ。彼女の白い手が

大きく左右に走った。

「節美っ。どうしてお前がこのあたしに、こ
んなに撲たれるのか知っているの？ 断って
おくけど、今夜は階下の人達は二軒ともお留
守よ。だからお前がどんなに泣こうとわめこ
うと、あたしはちっとも構わないの。ふふ、
どうしてやろうかしら」

私は彼等夫婦が、今夜に限って急に店を早
仕舞いして帰って来た理由が分ったような気
がした。再び妙子の右手が躍って、節美の頬
が激しい音を立てた。その小気味よい頬を打
つ音が、更に彼女に快い興奮を呼び、サジス
チックな血をかき立てるのである。節美を
殴る手に一段と力がこめられていった。

「畜生っ！」妙子が憎々しそうに節美をにら
みつけた。

「まだ分らないのね、勘の悪い女。一昨日の
晩、あたしがお風呂に行っている間、一体う
ちの正一と何をしていたのよ。ふん、しらば
つくれやがってさ。お前のような奴を盗っ人
猫ていうんだよ」

妙子の言葉に、私も思わずハッとして正一
の方をうかがった。

「はははは、正直に云っちゃまいな。そうして
お許しを乞うんだな」

正一が楽しそうに声を立てて笑った。私達
は声もなく頭を下げた。

「ふん節美。念の為に教えてやるけどね、お
前、真珠とブタ」って云う言葉を知っている
かい？ 正一はね、あたしとお前がそれだ、
っていうのよ。つまり較べものにならない
てね。お前なんかブタもブタ、最低の肥溜め
ブタだって云ってたわ。ホホホ……」

妙子が部屋の入口に脱いでいた自分のゴム
裏のスリッパの片方を拾い上げた。

「彼が少し甘い顔をしてやったら、お前情婦
にしてねって云ったそうね。笑わせるわね」
節美が黙って、うなだれた。ふと妙子の目
が私に注がれた。

「隣りにいる雄ブタも雄ブタね。自分の女房
が目の前で他所の男に甘えかかっている、
手出し一つ出来ないんで、それでもお前、男
かい。口惜しくないの？ 腰抜けブタ奴。も
っとも女房より薄汚い他人ひとのはいたパンティ
を追いついてお前のことだものね、馬鹿
野郎、こうしてやる」

云い終らぬ内に、妙子の手にしていたスリ
ッパが烈しい勢いで、私の顔面に炸裂した。
「パシッ、パシッ」焼けるような激痛が顔面
一杯に拡がった。

「どうやら下の人達、お帰りのようだな」

立ち上り窓の外から視線を落していた正一が、振り返って妙子に声を掛けた。

「そうお、思ったより早かったのね。じゃア今夜のところは、これぐらいにしておいてあげる。そのうちにゆっくりと可愛がってやるから……その代りこれから正一が、あたしにお前たちが肥溜めブタだってことを見せてやるっていうのよ。あたしもそれが見たいしね肥溜めブタっていうのは、汚いトイレの底で飼っているブタのことらしいのね。だからそのブタは、いつでも頭の上から人間様の要らなくなった汚いものを浴びながら、暮らしているっていう訳。ところが又、そんなブタはそれを喜んで喰べるそうよ。うまくできているわね。それじゃこのままでもいいから、早くお前達の部屋へ行くのよ。これを忘れるんじゃないよ」

妙子が節美の脱いでいたスカートやスリッパを足で蹴った。正一や妙子の後に続いて、私も、後手のままの節美を抱くようにして自分の部屋に戻った。

「ここでもいいから、お坐り」

六畳といっても家具や道具が雑然と並んで空間は狭い。入口に近いその一隅に壁を背に

して私達は正座した。妙子が入口のドアを閉め、窓にカーテンを引寄せた。

「よし、いいだろう。顔を上げろ」

云われて私達は、そっと正一を見上げた。節美の乱れた髪の毛の幾筋かが、妙子に打たれて赤く染まった頬にかかって痛ましい。

「もっと上を向いて口を開けろ」

「もっと仰向きなよ」

横から妙子が節美の後髪を掴んで乱暴に引いた。「ヒィー」と小さい悲鳴に似た声を上げて、節美も一杯に顔を上に向けた。

「よし、そのままでいろよ」

云いながら正一が身がまえた。妙子が正一の方へ身をかわした。次の瞬間激しい勢いの水滌が、節美の額に砕け、頬から首、そして胸へ滝となって流れ落ちた。

「もっと大きく口をおあけ」

妙子が正一の後から上ずった声で叫んだ。

容赦なく注ぎかけられる放水攻撃。節美は激しくむせんた。

「そら、お前もだ」

彼が僅かに動いて、それは私の頭上にも変ることなく注がれた。やがて滝は畳に流れて少しづつ川巾を広げながら流れていくのを見て、妙子は傍らの湯上りタオルを掴んでその

上に投げた。

「妙子、お前も、やってみろよ。いい気持ちだぜ」

正一が云った。

「そうね、やってやろうかしら。面白そうなもの」

妙子が目を輝やかせて辺りを見廻した。私達の使っている座敷用の小さい食卓がそこにあった。妙子がそれを引きずり出して私達の前に置いた。そのついでに、鏡台の上にあったガーゼのハンケチを掴んだ彼女は、別に恥じらう様子もなく食卓の上にあがり、大胆にもそのビキニ型に近いパンティに両手を掛けた。はっとした私は、そのままでは又彼女に叱られそうな気がして、あわてて視線を外らしてうつむいた。びっくりする程の勢いであった。勢い余ったそれは、後の壁にまで激しく当たってはねかえった。坐っている畳が更に新しく、大きく浸水していった。そうしてその流れの上に、丸められたガーゼのハンケチが投げ捨てられた。

専用トイレ

私達の生活は、大きく変わった。先ず、買って間もないテレビをはじめとして、私達が

所持していた目ばしいものは、節美の僅かな装身具に至るまで、すべて妙子の手によって没収された。さすがにたった一つ、結婚以来一度か二度しか指にした事がなく、大切にしていたオパール指輪を取り上げられた時は女性として当然ながら節美は泣いた。「それだけは勘忍して」と取りすがる彼女を、妙子は激しく殴った。そして更に、素直に出さなかったとして、私の面前で鼻血の出るまで節美の顔を足蹴にするのであった。

それにしても私は本当に悲しい人間であった。妻が他人の女房から、そのような犬猫に對するそれよりも尚浅ましい数々の暴虐を受けるのを眺める時、ある快感にも似たものを覚え、又更にそのような節美を羨望の思いで迎え入れるのであった。

共稼ぎで、それもバー勤めという妙子は、何かと家庭や身の廻りの雑用を節美に云いつけた。しかも節美は、易々としてそれに従った。そんな彼女に妙子は、当然のように正一のものばかりか自分の汚したパンティまでも洗濯させた。赤やピンク、それに青といった様々の魅惑に富んだ妙子のそれは、節美に頼んでその大方を私は洗わせてもらった。妻は階下にある洗濯場で洗濯機を使用出来たが、

私は人目もあり、バケツに水を汲んでは自分の部屋に運び、せつせと手で揉み洗いた。それが又、私には楽しい奉仕であった。そうしてそんな時、節美は大抵、買物に出掛けたり隣の部屋の掃除に行ったりして、私が照れずに済むよう図って呉れた。或いは私のそんな哀れな姿を見なくなかったかも知れなかったが、とにかくそのお陰で、私は心ゆくまで幸福に酔うことができた。

香りを楽しむには多少厚目のメリヤスの方がよく、味わうには、薄いナイロンがよかった。汗や汚れに染ったそれは、淡い異臭の名残りと共に妙子の新鮮な体臭を感じさせてくれた。そのものが、尊い御神体を一日でも二日でも守っていた御神域なのだと思うと、どうしても一度は、我が唇に、我が舌にせずにはいられなかった。

十月に入って間もなく、私は会社からの帰途、妙子に云われていたように、白い瑠璃のひかれた美しい便器を買い求め、それを自分の部屋に置いた。それはその夜から妙子達の専用の物となる筈であった。いちいちその度に下まで用足しに行くのが面倒だから、という妙子の発案であった。

やはりこれもテレビと一緒に没収された小

型の掛時計が、隣の部屋で十二時を打って間もなく、ノックもなしに私の部屋のドアがかけられた。店から帰った妙子であった。

「いいつけといった物は買って来たの？」

「はいっ」

私も節美もあわてて起き上ると布団を巻上げその真白な便器を差し出した。

「蓋をおとり」

節美が従った。妙子は、ごく当然のような顔付のまま、私達を全然無視して、さっとその真新しい便器を汚していった。それは実に何の恥じらいも飾り気もない大胆な行為であった。

「節美ッ！」

妙子が平然として呼んだ。

「はっ、はい。只今」

節美がびっくりしたように大急ぎで膝で近づいた。白い花が一輪、そっと便器に浮かんだ。

「いいかい、これからはいつもこうするんだよ。いいこと」

そして、それは正一とて同じであった。気が寒くなるに従い、妙子達は滅多に下の便所に行かなくなった。そしてそれは当然の事ながら私達の就寝中であらうと、食事の最中

であろうと、私達が部屋にいる限りは時を選ばず行なわれた。

私が出たような、実生活に根を下した奴隷気分にも心も溺れきっている頃、節美もまた正一によって新しい欲びを教え込まれていた。もともと、これらの感激を知る素地のある女性に生まれついていたであろうことは、私や正一夫婦から逃げ出さずにいたことからもうなずけることであつたが、それが正一夫婦を知ったことによつて、にわかに眠りを醒まされ一挙に爆発点に向かつて燃え上つたのであらうと思われる。

それは正一達夫婦が私の部屋を専用便所にするようになって半月余りも経つた或る日曜日のことであつた。お昼近くになつて起き出して来た妙子が、いつものように先ず用足しを済ませ、代つて正一がブリーフ一枚という姿で入つて来た。

節美の顔を見てニヤリとした正一は、いそいそと駆け寄る彼女に短く、

「脱がせろっ」

と命じた。節美が彼のグリーン色の薄くよく締つたブリーフを外すと、正一はそのまま私の方へ近づいた。若々しい力を秘めた素晴らしい体軀であつた。

「御主人様に奴隷の挨拶をさせてやろう」

正一が私の前に仁王立ちになつた。

「正座しろっ」

急に体をひいた正一が、いきなり足を上げて私の顔を蹴つた。不意をつかれて私は、そのまま後にのけぞつた。

「おいっ、節美。此奴には俺の汚れ物でもかましてやる方がよさそうだ。いいから呉れてやりな」

節美がブリーフをおずおずと差し出した。

「まさか妙子のものは出来て、俺のものは嫌だなどと云うのではないのだらうな」

「はいっ」

「よし、その汚れたのが消えるまで、しっかり舐めていろ。後で検査してやらあ」

強烈なまでの異臭と汚点が私を侮蔑し、嘲笑し、辱かしめた。

「ふふ、いい気味だ。いくじなし奴ー」

正一の上気したような声に私は思わず正一の方を見てハツとなつた。

そこには、微然と仁王立ちのまま、私の妻に奴隷以下の奉仕をさせている正一の勝ち誇つた眼が嘲笑していた。

「ふふ、どうだ、うまいか？」

正一が私に云つた。だが私が返事するまえ

に節美が代つて答えた。

「そりゃ、正一様のですもの」

節美の目は生き生きとして輝いていた。私は、このような妻の嬉しそうに満ち足りた美しい顔を、且て見たことはなかつた。

「と云うことは、奴隷にされていても、この俺が好きということか？」

「ええ、大好きよ」

正一の顔を見ながらそう云う節美の姿に、私は彼女の内にある真実を見たような気がした。

女性の生理というものが、おそろしく生臭くて、しかもすぐぐにがいということを知つたのは、妙子が専用便器を使うようになって初めての生理の時であつた。何時ものように夜遅く就寝前の小用を足しに入つて来た妙子は、節美の前に四角い大きな紙包みを放り出した。綿花であつた。

「はいっ」

節美は心得て素早くそれを開き、彼女に近寄つた。黒いパンティの下に更に短かい同色のパンティがあつた。

節美は古い綿花を捨てようとした。その時ふと私の方へ注がれていた妙子の視線が私の目とかち合つた。

「節美、お待ちっ。捨てるのじゃないよ」

妙子が命じた。

「あの雄ブタが欲しそうな顔をしているよ。」

面白いじゃないの。やってごらん」

節美が躊躇した。妙子の声が高くなった。

「何をぐずぐずしているのさ、あたしが命令しているのよ」

すえた腸わたを思わせる強烈な生臭さが容赦なく私に迫った。おそろしくにがい。受けつけまいとする胸が激しく突き上げた。

「ふふ、如何？ 遠慮することはないよ。よく味わうのね。そんな有難いお恵み物は滅多に戴けるものじゃないわよ」

用便を済ませて節美に新しく手当をさせた妙子が、面白そうに見下しながら笑った。私は必死に堪えた。

「それを有難く思えないようじゃ、まだまだあたしの忠実な奴隷とは云えないわね。まあそのうちに、喜んで押し戴きたくなるように仕込んでやるから……」

妙子は冷酷な笑みを残して部屋を去った。

新らしい人

いかに秘密を約したといっても、人の口に戸は立てられないということとは、やはり今度

の私達の場合にも、あてはまっていた。

階下の一号室、つまりアパートのおもて側入口を入って手前側の部屋には、川口真紀という若いBGが一人で住み自炊していた。小さい木材会社の事務員をしているという彼女は、未だ二十才には一、二年の間があるとのことであつたが、体つきが大柄な上に早くからの自炊生活が身についてか、どうしても年令より老けて見えた。そんな彼女は、やはり年令的にも一番近い妙子と最も気も話も合うのか、誰よりも親しくて、よく往き来していた。それが、妙子に勧められて妙子達の働く店でアルバイトをするようになってから一層親密の度が深まった。そうして休日の日などは一日中、妙子の部屋で、私から取り上げたテレビを見たり、遊んだり、するようになった。

やがて秋も終りを告げ、そろそろ師走の聲がささやかれる頃になって、真紀の私達に対する様子が以前とは少しずつ変化して来たことに気付いた。そしてそれは急速に露骨なまでの軽蔑の色さえ添えられていった。廊下や共同炊事場等で顔が合つて挨拶をしても、以前のような答えは聞かれず、反って黙殺されるか、冷笑されることが多くなった。

それから間もなく、その事実をいよいよ証明するかのうちに、ある日の午後、節美は丁度その日、休日をとって休んでいた真紀からこっぴどく辱かしめられ、ののしられたのである。

その頃、アパートでは建物の周囲や廊下、それにトイレ等の清掃は、四世帯が夫々一月ずつ輪番制で受持つことになっていた。そうしてこの十一月は、たまたま妙子の当番になっていた。しかし彼女は当然のこととして節美にそれを行なわせていた。従つてその日も節美は妙子に代つて裏の落葉を集め、廊下を拭き、最後に、トイレの床や陶器を磨いていた。

真紀が入つて来たのはそんな時であつた。以前ならそのような場合、掃除をしている者がいくら勧めても、後からお借りしますからと辞退して出直すのが普通であつた。それがその日の真紀は、節美に掃除を中断させて用を足した。仕方なく節美は、そのまま閉められたドアの外に立って待っていたのである。ところがやがて出て来た真紀が、いきなり節美にそれを非礼だと、なじり始めた。

「あんたって、いい齡をしている割に常識というものを知らない女ね。いくら女同志だゝ

らって、他人が用を足している間ぐらいおトイレから離れていたらどうなの。第一、失礼だよ。嫌らしい」

「でも……」

節美は意外な真紀の叱責に、びっくりして彼女の顔を見た。

「何がでもよ。なにさ、その顔。素直に、他人のご用の間、お傍にるのがわたしの趣味です、済みません、って謝ったらどうなの。」

ふん、夫婦そろってブタのくせに」

満面に嘲笑を浮かべた真紀の、蔑み一杯の言葉であった。

「なんですって……」

さすがに節美が色をなして、つめよった。

「ブタだからブタだって云ってやっているのよ。文句あるの。こ・や・し・ブ・タ」

節美は肩を落とした。もう知られているのだ。彼女は観念した。

「汚ならしい。胸が悪いわよ」

はき捨てるような言葉を残して、真紀は出て行ったのだった。

街にジングルベルが鳴り、歳末大売出しがたけなわの頃、真紀の隣りに住む老夫婦が引越した。息子の家が出来上って一緒に暮らせることになったとかのことであったが、それ

を機会に家主は階下の一部を改造してガレージを造ることになった。そのため、家主の依頼で表側の部屋を明けることになった真紀は老夫婦の跡へ年内にも移ることになった。ところが、その話が決まって二日目、妙子に呼び出された私は、彼女から私達に下へ移るよう申し渡された。代って真紀が二階へ上り、妙子達の隣りに住むというのである。

老夫婦の部屋の畳は、まだ美しかった。

「先に畳を入れ替えるのよ」

妙子に抜け目はなかった。

「それから美しく掃除をおし。後で検査して上げるから」

年末で日曜日でも会社を休めなかった私は、節美に手伝わせて夜の間に部屋を片付けた。二階の畳を下し、代りに下の部屋の畳を上げた。そして柱から敷居、天井に至るまで入念に雑巾を掛け、壁紙も貼り替えた。今までの私達の部屋は、見違えるばかりに美しくなった。二晩がかりであった。

「これならいいわ。ついでに真紀ちゃんに指図して貰って、これから真紀ちゃんの部屋の物をお運び。朝まで掛かってでも節美と二人で運んでしまうのよ。真紀ちゃんは、今夜あたしの部屋で泊るから」

深夜、店から帰って来た妙子は美しくなった部屋を眺めて、そう云った。

「いいわね、あたしが教えた通りの所へ道具を納めて頂戴。それから云っておくけど丁寧に運ぶのよ。若し疵をつけたり、こわしたりしたら妙子さん達に云いつけて酷い目に合わせて貰うわよ」

真紀が、おどかすように云った。

翌日、会社から帰った私は再び妙子から命じられていた作業を進めていた。それは彼女達の部屋に通じるブザーの取付けであった。そのスイッチは妙子だけではなく真紀の部屋にも設けられた。簡単な配線ではあるが、それでも天井裏を這い、床をめくっての面倒な作業であった。これで二階のどちらの部屋からも、私達の部屋のブザーが音を立てることになった。

問題の専用トイレの妙味は、妙子には忘れられなかったらしい。しかしその便器の置場がなくなったため、私達はその都度それを持って上り、廊下の端で用が済むとそれを又、直ぐ持って降りるように強制された。ブーと一声の時は用便、ブーブーと二声の時はその他の用事ということも決められた。そうしてその時から、真紀もはつきりと私達の主人と

して加わることになったのだ。

十日戎の済んだ頃から、妙子達の責めは愈々本格的なものを思わせた。誰はばかりことなく、古いアパートの一室で、正一も妙子もそれにつられて興味半分の真紀までもバンドを振るい、足を上げて私達を蹴った。寒い夜裸にされて冷水を浴びせられ、二階の廊下に朝まで放置されたこともあった。

「お前、あの本の中で絹川さん便器の中へ頭を突込まれているところがあったじゃないか、それも足でね。あたしもしてやろうか」
 こう云って妙子に、彼女が使用したばかりの便器の中に顔を漬けられたのも、その頃のことであった。

それでいて、節美は正一の、私は妙子や真紀の、差し出された足裏に歓喜して唇を寄せていくのであった。

「会社やお店で面白くなかったり、腹が立つても、こうして引っぱ叩いてやるとスーッとしてくるわね。いい気持だわ」

真紀が目を細めて笑った。

そんな真紀に対し、私は自分の心の不思議な変化に気づき始めていた。彼女は、さすがに下着を洗わずとか後の始末までは許さなかった。他のことは妙子と変りなかったが、唯

捨てることだけを任された汚物には、何故か妙子のそれに対するような不遜な恥行がどうしても出来ないものであった。その汚れを嗅いだり味わったりすることが、そのまま真紀の人格を冒瀆し、傷つけ、恥ずかしめているようにさえも思えるのであった。それでいて、真紀のそれらに対する思慕と憧憬は、到底妙子の比ではない程強いのである。丸めて折り畳んだまま、拡げることすらおそれて、目を閉じて始末を続けたのであった。

奴隷の接吻

その年の春は遅かった。三月ももう半ばを過ぎようとしているのに、まだまだ桜の蕾も固く、いっこうに弛む^{ゆる}気配はなかった。そんな時、突然妙子がこのアパートから消えた。店の馴染客との計画的な、正一を捨てての失踪であった。そして更に一週間を過ぎた三月の末日、私が会社から帰ると、部屋の中が何となく淋しくなっていて、節美の姿もなかった。私は、ふと思いついて二階へ上った。案の定、すべての家財がきれいに運び去られて思ったより広々とした感じの正一の部屋の、開け放された押入れの薄青い壁が寒々と目に映った。ある程度の予測も、覚悟もしていた

とはいえ、あまりにあっけない別れのような気がした。げんきになくらしいに私の物だけを残した部屋には置き手紙一つなかった。

ふと目についた乱れ簾に、白いものがあつた。二枚に重ねられたメリヤスの女もののパンティであった。誰のものかわからないままに、半ば習慣で私は洗濯する気になった。

ヤカンに半分、炊事場のガスで湯を沸かしバケツに移すと水をさして適当な水温にし、浸そうとして重なっているのを外すと、下側のパンティの端に赤い糸で「M」の文字があるのに気づいた。「M」真紀のものなのだろうか。私は、いつか自分の心の禁を犯していた。そっと顔を埋めたそこには、違った新しい人の匂いがあつた。ふと淋しさがこみ上げて来て、薄暗い洗濯場で私はいつまでもその人の面影を追ひ求めていた。

「ふふ」

不意に人の気配を背中に感じて私は、あわてて顔を上げた。真紀が立っていた。私は素早く、それをバケツの底に沈めた。

「洗濯して呉れているのね。わかってるわよ、何もかも妙子さんに聞いて。でも、そうしていつも匂いを嗅ぐの？」

「はい、いいえ……あのう……」

私は、どぎまぎした。

真紀の白い顔が、まぶしかった。

「臭いでしょう？」

「いいえ。はい、でも……」

「何を云っているのよ。でも、あたしが洗いますから返して頂戴」

真紀が手を伸ばした。

「いいえ、これだけは洗わせて頂きます。洗わせて下さい」

私は急いで洗剤を放り込んだ。

「そうお。じゃ済んだら、あたしの部屋に来ない？ お茶でも入れるから」

「はい、お邪魔させて頂きます」

真紀が去った。私は夢中で洗った。

「今年は、いつまでも寒いわね」

和服にくつろいだ真紀が、又別の美しさをのぞかせてコーヒーを入れた。

「貰い物だけ……」

小さい菓子鉢に可愛いケーキがあった。

「あたしも、おかしいなと思っていただけで、やっぱり奥さん、妙子さんの旦那さまとは、できていたのねえ」

真紀が、しんみりとした口調で云った。

「ええ、でもあれはあれでいいんです。みんな僕から出たことなんです。今更おかしいの

ですが、もう貴方にもすっかり知られてしまつて……恥ずかしいばかりです」

私は、うつむいた。

「それにしても大変なことになったわね。これからどうするの？」

「はい、今晚、部屋に帰ってから、ゆっくり考えてみようと思つてます」

「そう。まあ、ゆっくりと、よく考えた方がいいわ。それから、これを機会に貴方も、もうあんな馬鹿な真似はやめたらどうお。恥ずかしいことよ。そりゃあね、あのような愛もあつていいと思うわ。でもよ、でもそれは、あくまでも愛し合う者にだけ許されることよ。

最高に愛する人同志が、その愛を形で表わす意味でキスしたり、奉仕したりするのは結構よ。むしろ素晴らしいことだわ。そんな純粋な美しい愛し方は、あたしも好きよ。でも貴方のしていることは大嫌い。いやらしいわ」

私は顔を上げることができなかった。

「それに奴隷だか何だか知らないけど、およしなさいよ。女の汚れ物などにキスするのもつまりはその人にキスしたい気持ちをゴマ化しているのしょうけど、それは駄目よ。女ってね、好きな人になら、何もかも上げたいとも思うし、嬉しいものだけど、好きでもない

男に、誰がキスなどさせてやるものですか。

あんなに酷いことをする妙子さんだって、それだけは許さなかったでしょう。あら、いやだわ。若いくせに貴方にお説教などして、あたしって生意気ね。ごめんなさい」

「いいえ、有難うございました。本当に色々とお心配を頂いて……許して下さい」

私は、彼女の前に両手をついた。

「あら、謝るのはあたしの方よ。つい妙子さんのムードに酔つてしまつて、貴方たちの弱味をいいことに、随分酷いことをしたわ。勘忍してね」

真紀の目が心なしに潤んだようであった。

その翌日、私は会社を休んだ。過去の自分の汚い生活を絶ち切るために、どこか環境のよい郊外の下宿にでも移ろうと決心した。そうして出来れば、今の会社もやめたいと思つた。

その晩、私は再び真紀の部屋を訪れ、自分の決心を打ち明けると共に、このアパートを去ることの挨拶を述べた。

「そうお、よかったわ。それでいいのよ」

真紀は喜んで呉れた。

その夜遅くのことであつた。ブーとブザーが一つ鳴った。はっとして起き上つた私は不

思議に思いながらも、とにかくトイレの入口に立て掛けてあった便器を持って二階に上った。

「隣の部屋へ入って待っていて頂戴」

真紀の声がドアの向こうから聞こえた。

真紀が点けたのか余り明るくない裸電球がランとして主のいない閉め切った雨戸を暗く照らしていた。真中に大きなナイロンの風呂敷が敷かれてあった。私は、そっと便器をその上に置いた。

「そんなものは要らないわよ。その隅へでも置いておきなさい。それより貴方を少しの間縛っておくわ。手を後に廻して」

真紀は軽く私を後手に縛った。

「そこへ寝るのよ、上向きにね」

彼女の白い手が私の眼鏡を奪った。私は彼女の意図を計りかねながらも、云われた通りその真青なナイロンの上に横になった。

「馬鹿ね。それじゃなんにもならないわよ。」

もっと下の方へ下って」

私は体をくねらせて、その位置を移動させた。真紀がナイロンを押さえた。

「眼を固くおつむり。あたしがいいっていうまで、絶対あけては駄目よ。いいわね。開かないで頂戴よ」

終りの方は、私に何か頼んでいるような口ぶりの真紀であった。

「はい、絶対にあけません。これでいいですか？」

私は喉が痛くなるほど、固く眼を閉じた。

「いいわ、そのままにいるのよ」

軽い衣摺れの音がした。

「あけないでね」

「はい」

自由を奪われ、暗黒の世界に追いつまれた私の頭の上に、ひそやかに何か近づいた気配がした。

「あけては駄目よ」

近くなった声と共に重圧が急襲してきた。

息が詰まった。苦しい。思わず顔をねじ向けて逃がれようとした。

「駄目よ。じっとしてるのッ!!」

いいつけに背くつもりはなかったが、いつしか私の目は禁を冒して開いていた。

「真紀お嬢さま……。僕は……」

「黙って」

私の声は、さえぎられた。

「永久にあたしだけの奴隷になるのよ。そしてあたしにだけ奉仕なさい。あたしも貴方だけの女神様になってあげる」

「真紀さま」

「さあ、わかったら改めて奴隷の挨拶をなさい。この新しい女神様に永遠の奉仕と隷属を誓うのよ」

「有難う、有難うございます、真紀女王様」

私は、あえいだ。

いい知れぬ屈辱の幸福感に私は身も心も宙に浮く思いだった。

「いいわね、じゃ新しい奴隷の洗礼を受けさせてあげる」

真紀の声が降ってきた。

何もかも新しく出直すのだ。そう思いながら、わたくしは、その思いもかけぬ洗礼にむせびながら少しでも多く自分のものにしようとしていた。感激に胸がふるえ、新しい欲びが、ひしひしと私を包んだ。

こうして深夜の聖なる女神の、自からの尊い儀式は終りを告げた。

程近い静かな郊外に新しく居を得た私が、真紀女王様のお興入れを改めてお迎えしたのは、固かった桜の蕾もようやく、ほころびを見せはじめた頃であった。

あぶ・らぶす・こんと



登 沢 水

新幹線のD、E席は楽しい。

春もうららかな大阪へ、出張した時のこと。

東京駅から隣り合わせになったE席のういういしい女性。若奥さんらしいと想像できたがそう簡単に話も交せない。今時の若い人達のようにインスタントにいかないのが昭和一桁の泣き所。

コップの水もこぼれないというキャッチ・フリーズほどのことはない。テーブルの上のせておいたサンドイッチの箱が置き場所が

わるかったのか、ころげ落ちた。拾って置く
とまた落ちた。二三度続くと余り体裁のよい
ものではないだけに困ってしまう。件の女性
もおかしいらしく、かくし笑いをしている。
こうなれば肚を決めるしかない。私はサン
ドイッチの箱を膝の上にのせると誰に話すと
もなく言った。「もう決して落とさないぞ。
落ちないよう食べてしまおう」包を開くと、
大きなトンカツをはさんだやつが行儀よく並
んでいる。独りで食べてしまうのは紳士のす

るべきことではない。一応すすめるのが作法
というものである。さそうほどに白い指が伸
びて、後は食べ、茶を汲んで四方山の話に自
然に入ってしまったのである。一旦垣が取除か
れると問わず語りに、彼女はほんの三月前、
恋愛の果、実って結婚にゴール・インしたア
ツアツだということがわかった。団地住いで
暫くはライフ・アップのため共稼ぎとのこと
そして、今度はじめて広島のママに挨拶に帰
るのだという。仕事の関係で、夫君は居残り
の独り旅になってしまったという。理智的な
眼、柔かそうな唇から察して年の頃は二十三
四とおぼえた。

年若い娘、特に美しく頭の回転の速い女性
と話をする時に心得ておかなければならない
ことは、相手の感情を傷つけず、いたわりな
がら聞き手にまわり、やがて、こちらのペー
スに乗ってくるようなムードを徐々にかもし
出すことにある。お茶を飲み終ったのが熱海
煙草を吸ってよいか許しを受けて紫煙をくゆ
らせる。徒然な独り旅も楽しく過せそうであ
る。途中のやりとりは略して結論を急ごう。
話はいつしか男性女性の事となって、名古屋
駅に滑りこむ時には、誰にも迷惑を掛けなけ
れば自由恋愛、即ち浮気してもよいのだとい

うことになってしまった。思いなしか彼女の眼はやるせなくうるみ、濡れたように、見えた。悪い癖がでて、そろそろプレイの方に話題を移そうと考えたが、折角の雰囲気がかわれてしまいそうな気配を感じた。それに宿のとしてある下車駅の京都は間もなくである。まして、一盗を犯すのは見知らぬ彼女の夫君に申し訳ない。そして私はムード・メーカーとしての余情を楽しむ方だから。

京都駅のホームに立って振り返ると窓越しに彼女が見守っている。発車してゆく「ひかり」に手を振ると、彼女の視線は私を捕えて離さない。赤い唇が小さく動いた。きつと、「さよなら」といったに違いない。私も「さよなら」と、小さくなってゆく超特急に咬いた。

今回はいたって純情なお話でした。さて……

常習犯

初夏ともなれば、東京のH公園には一間、即ち一・八メートルの間隔も置かずにアベックがびっしり。二人のためだけに世界があるかの如く、抱き合い、くちづけている。

ここに登場するのが、ミスター・トム。陶酔している二人の五十センチも近くに寄ってシゲシゲとのぞかれると気味がわるくなる。

はじめてのキスに純情なS君、夢中になってはいたが、これには大いに辟易していると、抱きついたままのガール・フレンドが小声で「大丈夫、彼は何もしないわ。いつもああやってるだけなのよ」

帰ってきたカップライ

新米の泥君、親分の前に獲物の包みをひろげると、垢のついたブラジャー、スリッパ、パンティ、ガーター、ストッキング等、女の下着ばかり。

親分怒って一喝すると、新米君心外そうに「ボスは日頃、肌身はなさずいつも体につけているものを狙って取ってこいと言ってるじゃありませんか。こいつなんか、無理やり脱がしてもってきたんですぜ」

温故知新

二DKから新居に移ることになって、夫「君、このミニのスーツ、どうする」妻「春つくったばかりだけど、気に入らないから誰かにやるわ」

夫「荷造りで余ったロープや、古いネッカチーフ、くたびれたパンティなんか、この箱に入ってるんだけど処分してもいいね」妻「私が荷造りしたのよ。持ってゆくのよまだ使い道あるもの」

内気

「どうも、僕は小心者らしい。手を伸ばせばとどく所にあつて、欲しくて欲しくてたまらないのに、どうしても手が出せない時があるんだよ」

「君が。へえ。ガール・ハンターで手が早い君なのにねえ」

「そうなんだよ、できなくて悔むんだ。街で隣を歩いてゆく女の子のパンティをさ」

嫉妬

保護されたティーン・エイジの娘、カウンセラーから家出の原因を尋ねられると、

「父はいつもお仕置で、私を後手に縛ってからパンティを下げて、ベルトで叩くんです。痛いやら恥かしいやらで……」

「それで、とび出したという訳だね」

「いいえ、それよりも、パパはママにも同じことをするんです。わざわざ私のために私に買わせたベルトを使わなくなつていいと思うのです。おまけにママは猿轡してやりたいほど喜ぶんです」

理想の女性像

「あなた、ラッシュの電車に乗るのに、なんでブラジャーやパンティ、脱いでゆくの」「だってママが言ってるじゃない。良家の子

女は、見知らぬ男性に接した時でさえ、相手に好感を与えると同時に、驚きを感じさせるような雰囲気、常にもってなくっちゃいけないって」

逆もまた真

あるテレビ映画プロジュサーのところにきた、あの女性からの抗議文。

「……。あなたの作品には婦女虐待のシーンが多く、放映中のあのドラマは開始以来、日も浅いのヒロインが縛られ、責められ、苦しめられています。今日で八度目になりました。どうか。昼下りの聴視者たる主婦ら奥様たちが、いかに驚き羞かしがっておられるか。そして口にするのもおぞましいと息をはずませて語られるのを聞かたびに、私はどうしてもこの実態を、是非、責任者たるあなたに知ってもらいたいと思い、筆をとった次第です……」

旬日しての返事

「……私の拙作につきまして、かくも皆様の話題にのぼり、関心が得られましたことは真に有難く、今後共奥様方の御意向に沿って作品を続けさせて頂きまますので、御支援のほどお願い申し上げます」

語学力不足

喫茶店で

友人「リン、あなたは今日は大分、嬉しそうじゃない。何かいいことあったの」

鈴子「ええ、これからジョージとデートするの。片言だけど——リンのたむ、あなたの素晴らしいチチに早く会わせて——って、彼仲々紳士でしょう。今時父親に会ってからなんてお堅い人、日本人だって少ないでしょう。彼、車でくるの、時間だからまた明日ね」

そして翌日、同じ喫茶店で

友人「リン、昨日はあんなに嬉しそうだったのに、今日はなんで泣いているの」

鈴子「ジョージは、ひどい男よ。車の中で突然、襲いかかってきたの。英語の俗語だったのよ。チチって、オッパイのこと。リンのたむって私の為と思ったら、リンの玉のことだったの」

ハレンチ

プレイ・ガール二人

「デートどうだった。彼、変態でしょう」

「予期してっただから、そうでもなかったけど裸にして後手に縛るのよ」

「そして猿轡したでしょう。彼の趣味なの」「ううん、口は縛られなかったけど、目かくしされて、鼻も縛られたの。口で息するの、

とても辛いわ。すぐ喉がからからに乾いちゃって苦しいっただらないの」

「それで」

「そのままで一時間位責められてからだだったわ。喉が渴いただろうて、開きっ放しの私の口にむりやりいれると、飲まされちゃった」

「彼って、ほんとにサジストなのよ」

「とっても、おいしかったわ」

「まあ」

「冷えたコーラなんだもの」

現代風俗

ボーイ・フレンドの下宿を訪れた女子大生が、智性と教養の溢れた現代風俗批判を、とうとうと並べ立てる。

「いくら偉そうなことを云ったって、現代の大人は子供に退行しているようにみえるの。街をみてごらんさい。パチンコ、お好み焼き、スマートボール、おにぎり屋。かたちは変わっても、昔は子供用のものばかりじゃないの。それを……」

あまりの長談義に、ウンザリ加減の彼、「君の説はもっともだ。でもこれも流行だろう。だから僕達も子供時代に戻って、てんしんらんまんにお医者様ゴッコなど、どう？」

K 誌 を お も う

— 私の望むこと —

魔 仁 阿 天 狗

『奇譚クラブ』八月号の奇クサロンの冒頭に掲載されたもの「没を覚悟で書く」と一行されながら、あえて没にはされなかった一文、天道公平氏の「私は何を望むか」を理解しようとするれば、「何故に本誌のみ、かくも馬鹿正直であらねばならぬか」という一句を対外的な事情より、さぐってみる必要があると思うのである。

私は、私なりの感じとりかたからまとめたつもりの一文を投稿し、本誌三月号に採り上げられた時評、梶山季之氏の小説「ミスターエロチスト」の背景については、悪書などとはおよそ無縁であろうところの一般文芸雑誌

の雄といえど、ソロバンに合うようならば、ヘンタイ結構のカ・マ・エか？ との諷刺を含ませたものであった。

ところでこの課題について「サスペンス・マガジン」五月号に、安東泉氏がSM文芸時評「異端こそ前衛」——梶山季之氏

ハミスター・エロチスト／小論、でふれていられるが、その中の一節に「セックスの前衛派は、前衛なる意味において多く地下文学としての宿命が避けられない。一般の文芸雑誌や娯楽雑誌が、遅ればせながらこの予見者の開いた道を、かつては自分たちが表面上マユをひそめた変格セックスのSMものに右へな

らえて、流行に遅れまじと競いたった。

——風俗誌の先達たちは、報いのない無名の先駆者として、彼らに道を開いてやった功績だけを置き残して、さらになお、その地下にそしてなお遠くの未来へ、無視と排斥を報いとして受けつつ前衛の宿命だけを甘受するのである」とある。

たしかに風俗文献誌の宿命は、なおも深く静かにでもあろうか。さらばと云って、いまの出版界は「SM真似事の展覧会」が毒喰わば皿までと暴走（エロの強さよ）しているし映画界また、五社の東映を真ッ先に、エロだエロだと、ピンク映画路線になぐり込みをかけはじめた、このさわぎ。まさに世相は昭和の元禄時代であり、テレビ文化であり、アングラであり、フリーセックス、芸術と文学の乱交的な時代といえるだろう。分っちゃいるけど、わが奇譚クラブに、文句の一つも付けなくなるのは、天道公平氏ばかりではないようだ。

ひらたく云えば、どうして真似事のSM的な文章が、舞台が違うとエロもロコツも許され、SM追求、真面目な成人対象の専門誌たる本誌には、それが許されないのか。遂には「本誌編集者はあまりにもお人好しである」

という言葉も出てくる始末だ。

だと云って、あまりにもあっさりとして、「私の理想は巷間流布する春本をSM世界で実現させたいのだ」と云ってしまったては実もフタもない。この稿は天道氏を批判するのではなく私なりの地点から「いかにして」天道氏の望む期待を、「公刊誌として体裁づくってゆくか」に頭をひねってみようとするので、その点を特筆大書して、話を先に進める。

ここで具体的な例を提出して考えてみようか。ベストセラー作家、話題の人、堤玲子と名前を出せば、すぐスラムが生んだ型破り作家とおわかりだろう。すでに、三一書房から「わが闘争」を出し、続けて「わが妹・娼婦鳥子」をこの度、発表した。全篇これロコツな刺激のある文章で充滿している。それがまた人気をよぶ。「娼婦鳥子」をひろいよみすれば(不とう不屈の淫売精神、青酸加里女郎)とか、(キリストも強姦しかねまじき)(いまだ定まらぬ骨盤が)(おじやん・うんこ)や、(魔羅)等々のイサマシイ文句が、ホウキではくほどとびでてくる。凄まじいエロが主でS・Mが従の一章もある。

『とある日、役者にしたいような色の白い美青年があがって来、梅毒で鼻のおちた鼻の長

だけぱんと二つあいてるやりて婆あはいった。「生理中の子はこの子だよ」青年ははたと顔をそめ、鳥子を見つめ、はにかんでほえんだ。鳥子は、こんなうぶそうない男と寝れるのか、女郎冥利につきるとわくわくした。熱い血がたぎったのも、メンスのせいだけではなかった。畳の上に鳥子はむかに横たわった。青年は横たわった鳥子の両方の足首を強くにぎり、思いきり開いた。血が密生した陰毛の下からあふれおちるのを、鳥子は感じた。青年は服装に似つかわしくない風呂敷をほどいたとみるや、やにわに鳥子がこれまで感じたこともないものを、素股に押しあてた。鳥子は鎌首をもたげて見ると青年は白いピカピカした、お袋の作ったにぎり飯に、あふれる鳥子の血をつけて、むしゃむしゃうまそうに喰っていた。その白い頬から、あごにさっとひとはけ、生理の血をしたたらせて、その端麗な眉一筋動かさずほおばっていた」——原文通り写したが、このままの原稿がもし本誌であつたら、果して活字になったか、どうか。

ここで注目したいのは、作者の書こうとする姿勢と出版社のPR方法だ。本書の帯封にある活字が、八虚飾と汚濁の現代に挑戦する

感傷と憐憫を許さぬ生命の叫びVであり八阿呆で憎めない安娼婦の半生記Vとうたわれてゐる。その世界を赤裸に描写するためには、それにふさわしい表現方法が必要であり、より真実を打出す手段(筆法)としては、作者も又、体当りすることが必至である。即ち文学の必然性が、読者にジカに反応するという仕掛けになっている。大阪のスラムを浮き出させる言葉も「文学」の中では、表現の自由をふまえて許されるということだ。

いやこの場合、独自の生な文句も性追求のためには不可避である。なぜ、(この地点では悪書という言葉は論外で、より深い性追求という本質的な問題である)真面目な、成人対象の、少数数のSM追求を中心とした風俗文献誌たる奇譚クラブが、表現の必然性をうたうことが出来ないのか。なぜ投稿者も、編集部も二の足をふむのかということである。

特殊なSMの本質に迫るには、きれいでつまされない。地方の風土を描写するためには地方弁が必要なように、ワイセツと思われる字句も、生な言葉も、グロの筆法また必然である。マネゴトのSM的なストーリーがことさらに舞台が違つとエロもロコツさも「必然性」ということで許され、本物の誌上

(奇ク)では、それが制約される。社説「本誌自肅の徹底」が、出版の自由に裏付けされた「表現の必然性」をうたう時、大きな重石となつて、作品の取り上げ方も編集方法も交つてくることはたしかだろう。この事は文章ばかりの問題ではない。グラフィア写真並に口絵・文中の挿絵などにもあてはまる。それらの削減が主ではなく、むしろ如何にしたら、以前のように、いやそれ以上に盛り沢山にすることが出来るか。そのために種々な編集部と寄稿家との血の出るような研鑽が必要であり、風俗誌独自の、どこからも文句のでもない新境地の復活を目標とすべきである。残念ながら現況では、ただ単に挿絵を小さくしたカット程度。ある頁の小説などは活字のみの無惨なものである。文章に表現の必然性がうたわれると共に、また写真・絵などにも風俗文献誌としての伝統にともなう、それにマッチした、この方面の必要性が実現されなければならぬと思う。

——といって、はたしてこれだけでこと足りるだろうか。そう、一方通行である。この論を徹底させるためには、読者もまた編集部がジダンダふむ「お人好しである」という深意の所までとび込んで行く必要があるだろう。

「読者中心」と、いう奇譚クラブのためにも——だ。ピンク映画路線が五社から冷遇されながらも健在をほこるのは、最後の一线、自活自営の体制をかううじてでも確立しているからだろう。私もかつて、ジャーナリストの飯をたべているので云えるのだが、現下の文獻誌発行に対する出版事情は、はなはだもって狭き門であり、これは全国の新聞一般書店が、小説現代など、内容はどうかあれ、講談社という名前だけで無条件で受入れるのとわけが違つて、坊主憎けりやの類でソッポをむかれ、おそらくお情けで少しばかりお席をゆづつてもらう実態であろうと考える。とまれ、直接購読者が増え、理想から云えば、編集長が、精一杯の、(営業方針などに頭をひねらず)腕をふるう。新刊された号が無条件で受け入れられる体制が出来れば、もっと本誌も内容充実されようし「面白く」もなろうか。

奇譚クラブもまた同人誌ではなく「商品」であり、公刊される、制約される前に、売りさばかれるルートに、針金渡りの芸当を常に強要されるようなことでは、編集の鬼もまた馬鹿正直にもならざるを得ないか。「読者が何故本誌を買うか」でなく、もっともっとスムーズに、奇譚クラブが売れる道を開拓すべ

きか。ちなみに、私の住んでいるF市では、どの書店でも本誌を店頭に出している所は無い。とまれ、表現の必然性をカチとる裏付けとして、読者の支持によって、一日も早く奇譚クラブの販売網の確立を実現させたいものである。

天道公平氏の講評は遂に私をして、奇譚クラブ(商品)の販売ルート問題にまで発展させた。しかし、何を望むかは、ここまで指向しなければ完全でないと思うのだ。奇クサロンの鶴藤恵氏の「笹舟は帆を降ろせ」の言はこれから、ますます、他誌の異常風俗小説の暴走を横眼に見ながら、口惜しくも現実的に多難の前途を暗示させる。天道公平氏の言に同調させられるものを感じ、その実現のために、私なりの言葉を精一杯吐いた。それだからと云つて、「奇ク丸は、もっと小さくしなければならぬ」という鶴藤恵氏の論もおろそかに出来ないものが感じられ、また、「本誌自肅の徹底」の深意にも体当りした。たしかに、わが奇譚クラブは、過渡期である。始終一貫した論調になれざるのは、また答え無く読者の考え方も入現在進行形Vであるが故の乱調子と御諒承を願うものである。

ピンク映画シナリオ



製作 ヤマベ・プロダクション

赤い拷問

脚本・団 鬼六
監督・松原 次郎

1 酒場「春風」その表

看板の灯が消える。

2 同・酒場内部

閉店後の後片づけしている京子と秋子。

テーブルの空瓶を運んだり、床の上を掃除したりしている。

マスターの英治、カウンターの上で、結婚式の案内状を書いている。

秋子 (床の上を掃きながら) ね、京子ねえさん。新婚旅行は何処へ行く予定なの。

京子 (頬を染めて) わかんないわ。

登場人物

京子	子(女賭博師)	谷 ナオミ
秋子	子(ホステス)	滝 リエ
英治	(酒場のマスター)	伊海田 弘
義江	(親分の二号)	祝 マリ
笠井	(流れ者)	里見 孝二
滝川	(やくざの親分)	瀬川 宏
江原	(同 乾分)	北村 淳
西田	(チンピラ)	宮瀬 健二
吉井	(チンピラ)	太古 八郎

秋子 ねえ、マスター、何処へ行くの。

英治 さあね。雑用に追われて、まだその

予定はたっちゃんないんだよ。

秋子 呑気な人達ねえ、一生に一度の事だ

というのに。

英治 ハハハ。おい、京子。結婚式の案内

状だが、笹村組の会長とか大村の親

分さんとかにも一応出しようか。

京子 (顔をしかめて) 冗談じゃないわ。

もうああいう人達の名前を口にす

だけでも嫌よ、私。

英治 そうかい。お前がそういうならやめ

ておこう。俺はやくざの世界っての

は知らないが、義理を聞いたとか何とかで、あとでうるさくはならないかい。

京子

何いってるんですよマスター。私は

去年、きっぱりと足を洗ったのよ。

堅気の女房になる私が、また、や

ざと義理づき合いするなんて、そん

な馬鹿な話はないわ。

英治

ハハハ、それもそうだな。

秋子

マスターは、すぐ京子ねえさんの古

傷にさわるような事をいうわ。いけ

ない癖よ。

英治

そんなわけじゃないんだけどねえ。

(笑って)以後、気を

つけますよ。

秋子

でも、京子ねえさん、

昔は、賭博^{ばくち}打の花会な

んかで壺を振った事がある

んですってね。そ

んなおねえさんの姿、

私、一度位、見ておき

たかったわ。

京子

そんな事はもういわな

い約束だったでしょう

秋ちゃん。

秋子

ああそうだ。ごめんな

さい。

英治

京子の古傷にさわるよ



うないい方をするのは、お前の方じゃないか。

三人、笑い合った時、カウンターの電話が鳴る。

英治

(電話) はい、もしもし、ああ滝川

の親分さんでございますか。

京子と秋子、不快な表情で顔を見合

英治

(電話) はい、はい、これからすぐ

ですか。ええ、そりゃ有難いんです

が何も今夜でなくなっちゃったって——はい

はい、それじゃ、一応、京子にそう

申しまして——はい、では、失礼致

します。(受話器を置く)

秋子 何なの、マスター

英治 今までの勘定を全部払うから、今夜

中に京子に取りに来させろとい

るんだ。京子、お前、滝川一家に請

求書を出したのか。

京子 ええ、もう二十万近くもたまってる

のよ。

英治 だって、お前、相手は——。

京子 何も地元のやくざに、つけ上らせる

事はないわ。ますます癖になるだけ

よ。私、集金に行つて来ます。

英治 こんな時間にかい。

京子 平気よ、くれるという時にもらつと

かないと、ああした連中のつけは、

とりにくくなるものよ。じゃ、私、

一寸着換えして来ますから。

京子、酒場の二階へ上つて行く。

英治、不安な表情。

3 同 二階の部屋

タンスの前で和服姿に着換えている京子。

英治、のっそり二階へ上つて来る。

京子、長襦袢の伊達巻をしめながら、英治

に微笑し、

京子 どうしたんですよ、憂うつそうな顔

をして——。

英治 何だか俺、心配なんだよ。滝川親分

は、お前が目当てでこの店へ通つて

いたんだからな。お前と俺とが、正

式に夫婦になるって事を知って、かなり頭に来てると思うんだ。

京子 そんな事、一々気にしてりゃ水商売なんて出来ないじゃありませんか。

英治 人の噂じゃ、あの親分は変質者だっ

ていうぜ。何だか嫌な予感がするんだ。今夜は行くの見合わせてくれな

いか。

英治、うしろから、京子の肩を抱き、頬ずりする。

京子 大丈夫よ。来月はお店も改築しなくちゃいけないし、今、一番、お金が

忙がしい時よ。

英治 うん。そりゃわかってるんだが――

京子 フフフ、あなたって、まるで子供みたいだわ。そういう所に私、惚れち

まったんだけど――。

京子、うしろを向いて、英治を抱擁する。

英治 京子――。

二人、そのまま、畳の上にくずれ落ち、接吻する。

京子 英治さん、私、今、本当に倅せよ。

これでとうとう私、堅気の人の奥さんになる事が出来るんだもの。

英治 だが、俺は何だかお前が、急にスーと眼の前から消えてしまうような気がしてならないんだよ。

京子 (笑って) 馬鹿な事いわないで。

英治 俺は、意気地のない人間なんだよ。

お前がついていてくれないと、何も手がつかないんだ。

英治、甘えるように京子に身を寄せる。

京子 フフフ、大きな赤ちゃんだこと。さ

ママは一寸お仕事に出かけるから、おとなしく待っているのよ。

京子、英治に熱い口吻をして、立ち上る。

4 温泉旅館 大月荘

玄関先にタクシー止り、和服姿の京子、降りる。

5 同・大月荘ロビー

京子、ソファに坐っている。

滝川の声 よ、待たせたな。

京子が顔を上げると、丹前を着た滝川が腹心の乾分、江原と一緒にやって来る。

京子、立ち上って、丁寧に頭を下げる。

滝川 相交らずきれいだな。ま、坐んなよ。

滝川、京子の前のソファに坐り、懐から煙草を取り出す。京子、それに火をつけて、

京子 わざわざお電話まで下さって有難うございます。親分は、ずっとこの旅

館にお泊りなんですか。

江原 何いってるんだ。この旅館は、今月

から親分の持物になったんだぜ。

滝川 ハハハ、月二、三度、一部屋を借り

て、花札賭博を開帳していたんだがこの親父がよしいのに、博打

に手を出しやがってよ。揚句の果、博打の借金にここを流しちまいがった。庇を貸して母屋をとられるってのはこの事だぜ。ハハハ。

京子 (不快な表情)

滝川 ところで、おめえ、いよいよ来月は「春風」の英治と結婚するんだってな。

京子 はい、女だてらに色々と極道してき

ましたが、ようやく人間らしい暮らしに入れる事になりました。

滝川 そうかい。だが、女賭博師で名を売

ったおめえの亭主にしちゃ、ちっとばかり相手が不足じゃねえか。

江原 あんな野郎のどこが気に入ったんだい。物好きにも程があるぜ。(せせら笑う)

京子 (むっとして) 物好きなのは英治さ

んの方でしょうよ。下らないやくざ相手に渡世して来た私を拾い上げて

おかみさんにして下さろうってんで

すからね。私にとっちゃ、まるで神様みたいな人ですよ。

滝川も江原も、酸っぱい表情。

滝川 そうか。ま、そこまで惚れこんでいるなら仕様がねえやな。おめえに、

結婚の祝物をくれてやるよ。

京子 いえ、そんな。お店の方で色々とお

滝川

世話になっておりますし、親分に、そんな事までして頂きましては罰が当たりますわ。

東京へ使いに行った若い衆が、俺が注文しておいた呉服物を持ってもうすぐ戻って来る。温泉にでもつかって、少し待っていてくれねえか。

京子

はあ。でも、今夜はもうおそいし、うちの方で心配するといけませんから——。

江原

お京さんよ。そりやおめえ、親分に対して失礼じゃねえか。わざわざ親分は、お前さんのために東京から祝物を取寄せて下さってるんだぜ。

——でも。

江原

お前さんの店の勘定は、その祝物かとどいた時、一緒に支払わせてもらうからな。

(不快な表情)

京子

(ニヤニヤして) ほんの一時間ぐれえだよ。な、いいじゃねえか。商売熱心も結構だが、たまにゃのんびりするもんだ。

6 同 婦人風呂

温泉に浸っている京子。

手拭で首筋を拭きながら吐き出すように独り言。

京子 飲み屋の勘定を出ししぶっていて、



何が滝川一家だよ。笑わせるない。

7 同 脱衣場

そっと、脱衣場のガラス戸が開き、チンピラやくざの西田と吉井が足音を忍ばせ入っ

て来ると、脱衣籠の中から京子の着物下着類一切を奪って出て行く。

8 同 旅館の一室

滝川、卓の前で独酌で酒を飲んでい

る。襖が開いて、江原、京子の衣類を抱えてニヤニヤしながら入って来る。

畳の上へ江原がドサリと投げ出した京子の衣類を見て、滝川、ニヤリと笑う。

江原 これでお京姐さんは、出るに知られぬ裸の小鳥というわけですよ、親分

(笑う)

滝川 ハハハ、ざまあ見るだ。散々、煮湯を飲ませやがって。このままじゃ、こっちの虫が治まらねえからな。

江原 さすがの親分も、あの女にゃものの見事に肘鉄を喰わされた恰好ですからね。

滝川、畳の上に花のように積まれた京子の衣類を両手にとり、その長襦袢などの匂いを嗅ぎながら、

滝川 畜生、いい匂いをさせやがる。——

江原、笑ってくれるな。俺は、あのはねっ返りに、こんなに惚れちまっただ。

江原、京子の衣類に頬ずりまでしている異様な滝川の姿を呆れた様に見つめている。

滝川 だが、もうこうなりやこっちも自棄だ。若い奴等のいる前で、あの阿女



を翫りものにしてやる。

江原 といつても親分、あの女は、空手も

使うジャジャ馬ですぜ。ものにするにや、かなり骨だと思ふんですが。

滝川 いくらジャジャ馬でも、素っ裸じゃ

どうしようもねえだろう。風呂へ奴を入れたのも、こっちの作戦さ。

江原 なるほど、さすがは親分、頭がいいや。

9 同 浴室の脱衣場

湯からあがった京子、脱衣場に着物が無いので驚く。ガラス戸から、外を見る。

チンピラ二人、こっちの方を見て、ニヤニヤしている。

京子 あんた達ね。馬鹿な冗談はおよし。

西田 一体、何の事だい。

京子 とぼけるんじゃないよ。私の着物を

どこへ隠したんだよ。

吉井 知らねえな。丸裸のまま、旅館中を

探してみな。

西田と吉井、顔を見合わせて笑い合っている。京子唇を噛む。

10 酒場「春風」

カウンターを挟んで、英治と秋子が浮かぬ顔でトランプをしている。

英治 (いらいらして) もう、やめよう。

(トランプをバラバラにする)

秋子 随分と、おそいわ、京子ねえさん。

あれからもう三時間よ。

英治 うん。

秋子 大月荘へ電話するたびに、もうとっくに帰ったというんだけど、ほんとかしら。

かしら。

英治 秋子、お前、家の方で心配しているよ。もういいから

帰んな。

秋子 ええ。だけど、私

何だか胸騒ぎがするわ。

英治 (苦しそうな表情)

11 大月荘 風呂場

流しの所に身をかがめ、

口惜しげに唇を噛んでい

る京子。

脱衣場の方に人の気配がし、京子、ハッと

して、手拭で腰を包み、結びつける。

ガラリと風呂場のガラス戸が開いて、浴衣

姿の滝川と江原が一杯気嫌で入って来る。

うしろからチンピラ二人がのぞいている。

京子両手で乳房を覆い風呂場の隅に立つ。

京子 (眼をつり上げて) 一体、あんた達

女を風呂場に閉じこめて何をしよう

ってんだよ。

滝川 幡随院長兵衛じゃないが騙し討ちに

するにや風呂場に限ると思つてな。

ハハハ。

京子 (憎悪のこもった眼で二人を睨む)

江原 おめえのようない女が、むざむざ

薄馬鹿野郎の女房になると思うと、

腹が立って仕様がねえんだよ。銭別

代りに、滝川一家がこつてり可愛が

ってやるというわけさ。

京子 フン、滝川一家は親分乾分揃って出

齒亀揃いか。こいつはお笑いだよ。

江原 (むっとして) 何だと、この阿女。

江原、チンピラ達を見て、

江原 このジャジャ馬を縛り上げる。

西田 へい。

西田と吉井、用意して来た麻縄で、京子を

捕獲しようとして突進する。

京子に素早く体をかわされて、西田、頭か

江原 くそつ。ら湯の中へ落ちこむ。

江原 うしろから、京子にからみつく。狂ったように暴れる京子。

江原 早く縄をかけるんだ、吉井！

吉井、麻縄を持って近づくと、京子の肢がはね上って吉井の急所を蹴り上げる。転倒して悲鳴をあげる吉井。

江原の手を振りほどいた京子、脱衣場の方へ逃げる。

江原 くそつ、待ちやがれ。

江原、京子の前に立ち塞がり、懐から七口を抜く。

京子の手が素早く走って、江原の手首へ。

あつと江原が叫んで、七口を落すと、それを京子、素早く拾い上げ、出口に立ち塞がる滝川と衝突する。

滝川 あつ。

と、腰のあたりを押えた滝川の手から、血がしたたり落ちる。

一瞬、愕然とする京子。すぐに外へ走り出す。

江原 あつ、親分——くそ、あの阿女を逃がすなつ。

12 酒場「春風」のドアをたたく手

13 同 酒場の中

スタンドに坐っていた英治と秋子、はっと顔をあげる。

英治 京子かっ。

英治、ドアを開ける。

くずれるように中に入って来た京子、髪はおどろに乱れ、泥まみれの宿屋の浴衣を着ている。

英治 ど、どうしたんだ京子。

京子 あんた！

京子、英治にしがみついて泣きじゃくる。

英治 一体、どうしたんだ、その恰好は。

え、京子、わけをいえ。

京子 ——滝川を、滝川を刺しちまった。

英治 えっ、なんだって。

京子 もう只じゃすまないわ。でも、仕方がなかったのよ（泣きじゃくる）

英治 秋子、表をしめて、鍵をかける。

秋子、硬化した表情で、ドアを閉め、内鍵をかける。

京子 あいつ等、私を寄ってたかって手ごめにしようとしたのよ。まるで獣だわ。

英治 （おろおろして）何て奴等だ。だから俺があれ程——今更、そんな事い

ったって仕様がな。とにかく、ここにいちや危険だ。すぐ追ってくるぞ。

京子 （すすり泣きながら）来月は、私達

英治 式をあげるといふ所まで来たのに。ほとぼりがさめりや何とかなるさ。

さ、急がなきゃ。

英治興奮状態の京子を二階に連れて行く。秋子、カウンターに頭を押し当てて泣く。

14 同 酒場の前

車、止り、江原、三人の配下と一緒に降り立つ。

15 同 酒場の二階

身なりは整えたものの、茫然として畳に坐りこんでいる京子。

タンスの抽出しをかき廻すようにしていた英治、京子の所へ来て金を置く。

英治 相憎と現金はこれだけしかないが。

京子、英治に悲しげな視線を向けていたが衝動的にしがみつく。

京子 辛い、辛いわ、ようやく幸せをつかみかけたというのに。

英治 （涙を浮かべて京子を抱き）皮肉なものだよ。この店の月賦も、やっと

今月で終わったのにな。

階下で激しくドアをたたく音。

英治と京子、ハッとす。

英治 しまった。窓から逃げろ、京子。

英治、立ち上って、窓を開ける。

英治 さ、京子、早くっ。

京子、窓の所へ来て、再び、英治を抱きしめ、激しく接吻する。

京子 達者でいてね、あんた。

英治 お前もな。

秋子が二階にかけ上ってくる。

秋子 京子ねえさん早く逃げて、滝川一家が――。

京子 秋ちゃん。あんたも達者でいてね。

秋子 (涙を浮かべて) 京子ねえさんも体に気をつけて――。

京子、うなずき、未練を断ち切ったように窓の外へ飛び出す。

16 同 階下の酒場

ドアを破って、突入した江原達。

あわてて二階から降りて来る英治と秋子。

英治 一体、どうしたというんですか。

江原 京子が帰って来てるだろ。

英治 いいえ。

江原 とぼけるな。京子が親分に大怪我をさせやがったんだ。ひよっとすると親分は片輪になるかも知れねえ(チンピラ達に) お前達、二階を探してみろ。

西田、吉井、恐怖に慄える秋子を、突きのけるようにして二階へかけ上って行く。

英治 信じられない事ですよ、僕には。何か原因がなければそんな事を京子がする筈はない。



江原 そんな事を聞いてるんじゃない。京子の居場所を聞いてるんだ。

秋子 (慄えながら) 知らないわ、知るもんですか。

江原 お前達、下手に隠し立てすると承知しねえぞ。

江原、ポケットから拳銃を出す。

二階から、西田、吉井、降りて来る。

西田 兄貴、いませんぜ。

江原 畜生、ずらかりやがったな。表を探そう。

江原達三人、わらわらと表へ出て行く。

英治 くそっ、獣め。

17 山々の俯瞰

18 流れる谷川

19 山の小さな鉱泉宿の一室

一升瓶やするめを盛った皿などが乱雑に散らばった薄汚ない部屋で、二、三人の土工めいたのを相手に、花札でオイチョカブしている京子。

京子がまいた札に千円とか五百円とかを血眼になって土工達はかけている。

土工A ヘヘヘ、今度はそう簡単には参らねえぞ。そら四六九のカブと来らあ。

土工B ついて来たぜ。こっちも、そら四五のカブだ。

京子、微笑しながら、札をしぼって、

京子 悪いね、また九一だよ。

京子が投げ出した札を土工達、溜息をつくようにしてみる。

部屋の隅の方で帽子を顔にかぶせて、うたたねをしていた男(笠井)薄眼を開けて、京子の方を見る。

京子 (土工達に) どうだい、まだ勝負するかい。

土工A とても敵わねえや、姐さんにゃ。俺はやめたと。

土工B こっちもおけらさ。もう参ったよ。

京子 フフフ、あんた達、立人には氣をつけた方がいいよ。そら、とったものは返してやるよ。

京子、 膝元にある小銭の山を押し出す。

土工A ええ？ そりゃ、どういう事だい。

京子 いかさまだよ。一寸、退屈しのぎにあんた達をからかってみたのさ。お邪魔様。

京子、 立ち上る。

土工達、 啞然とした顔つき。

20 同・旅館。京子の部屋

京子、 窓からぼんやり景色を眺めている。

笠井 今日。

京子、 振返る。

京子 なんだ、また、あんたなの。一体、何の用なのよ。高崎あたりから、あんた、ずっと私のあとをつけてるわね。

笠井 ああ、あんたには気の毒だがね俺はあんたに一眼惚れしたらしいんだ。

京子 一眼惚れ。

笠井 ああ高崎の辻岡組の賭場で、あんた壺を振ったろう。俺は、あれを一眼見て、何だか、こう胸がジーンときたんだな。

京子 (笑い出す)

笠井 何も笑う事はねえだろう。あんたが

何処へ流れて行くのか知らねえが、

こっちも流れもんだ。あんたの行く後をつけてやれっていう氣になったんだよ。

京子 呑気な男ね。あんたって一体、何を渡世にしてんのよ。あんたも壺振りかい。

笠井 俺か。俺はまあ人殺して所かな。人殺し——(吹き出して)人殺しも結構だけど、そんなのに後をつけてもらうと迷惑だわ。

京子 つけるのは俺の勝手だ。

笠井 (むっとして)とにかく人の部屋へのこのこ入って来るのだけはやめとくれ。

京子、 ふんとした表情で部屋を出て行く。

21 谷川の吊橋

京子、 橋の手すりにもたれて、水の流れを見つめている。

(京子の心の声) あれから、もう三年だわ思い切って、あの人のいる湯が崎へ戻ってみようか。

川の流れに英治の幻影が浮かぶ。

(京子の心の声) 足を洗ったのも束の間、またこんな渡世に入っちゃった。あの人に合わす顔はないけれど——。

京子、 凍りついた表情で、じっと川の面を見つめている。

ふと、人の氣配を感じて、京子、振返る。

笠井が、のっそりとやって来る。

京子 (口の中で) またやって来た。うるさい男だね、全く。

笠井 いい景色だな。

笠井、 京子と並んで景色を眺める。

笠井 これからどこへ行く氣なんだよ。

京子 (景色を見ながら) わかんないね。

笠井 へへへ、あんたも俺と同じ、誰かに追われている身じゃねえのか。

京子 ええ？

笠井 俺の勘はたしかさ。(煙草を口にしてい) どうでい、俺をあんたの用心棒にしねえか。何かの時には役に立つと思うがね。

京子 ごめんだね。どこの馬の骨かわかんない男をどうして用心棒にしなくちゃならないんだよ。それよりあんたは一体どういう素性の男なんだい。

人殺しといったじゃないか。

京子 冗談はおよしよ。

笠井 冗談じゃねえよ。下らねえやくざ喧嘩で人間を二人殺らしちまってね。

もっとも相手は、毒虫みたいな野郎だったが。

京子

笠井 もう少しで、まっとうな人間になれる所だったんだがよ。世の中はうま



京子

くいかねえもんだ。とうとう追われ犬になっちまった。

(川の方を見て) 私も、この渡世から足を洗い損った女さ。もう少しで堅気の女房になれるって所だったんだけど。

笠井

(京子の横顔を見る)

京子

ねえ、ここから湯が崎は近いわね。

ああ、あんた、湯が崎へ行くのか、そいつは丁度いい。俺もそこへ足をのばそうと思っていた所なんだ。

笠井

あんたも湯が崎へ。

あそこにゃ、滝川一家っていう南風

京子

会の流れをくむやくざがいるんだ。二、三日、厄介になってみようと思っっているんだが――。

京子、

手に持つ小百合を動かしながら歩き出す。

笠井

おい、待てよ。

京子

うるさいわね。あとをつけるな、といったらう。

笠井、酸っぱい表情で、京子のあとを見送っていたが、ニヤリとしてポケットから拳銃を取り出す。京子の背後を狙って撃つ。

京子が手にしている小百合が吹っ飛ぶ。

京子、振り返って笠井を睨む。

京子 馬鹿野郎、何するんだい。

笠井 何かの役に立つだろう。持って行きな。

笠井、拳銃を京子の足元へ投げつける。

京子、拳銃を拾い上げ、笠井の方へ向ける。

笠井 まだ、弾丸は入ってるんだぜ。

京子 とぼけた男と逢った記念に貰っておくよ。

京子、拳銃を懐に入れ、後も見ずに去って行く。

笠井

(その後姿を見て) いい度胸してやる。女にしておくにゃ惜しいぜ。

22 旅館・大月荘

滝川、妾の義江と夜具の上で抱擁し合っている。

義江

(身をすり寄せながら) ねえ親分。

滝川

親分は何時、私をおかみさんにして下さる気なの。

滝川

何もそんな事あわてる事はねえよ、俺に本妻があるわけじゃなし。

義江

だから、私、催促してんのよ。何時まで、私を二号のままにして置く気なの。

滝川

時期という事があらあな。若い者達の手前もあるしな。

義江

うそ。本当は親分、あの女の事が忘れられないんじゃないの。

滝川

何の事だ？

義江

親分をびっこにした京子っていう鉄火女よ。

滝川

馬鹿野郎、あの女にゃ恨みこそあれでも、可愛さあまって、憎さが百倍って事もあるわ。

滝川 下らねえ事いうな。

床の間の電話が鳴る。

滝川、手をのぼそうとして、痛てえ、と顔をしかめる。

滝川 昔の古傷が痛みやがる。一寸、体を動かせば、すぐこれだ。

義江、受話器をとって、

義江 (電話) もしもし、ああ江原さん。

うん、そう、わかったわ。(電話を切る) 階下へお客が来てるそうよ、親分。

23 同 旅館ロビー

笠井、出された羊羹をむしゃむしゃ食べ、茶をガブガブ飲んでいる。

笠井の前のソファに坐って、笠井の添状を読んでいる滝川。滝川のうしろに江原や西田達が控えている。

滝川 (手紙をしまつて) よしわかった。

この添状をお前さんに書いた静岡の常岡って人は、俺とは古くからの兄弟分なんだ。ま、何日でも泊って行きなよ。

笠井 へえ、どうも有難うございます。

滝川 お前さん、拳銃は仲々の腕前だそうじゃないか。

笠井 それ程でもありませんがね。でも、いつときますが親分、一宿一飯の何てやらってわけで、殺しの請負だけ

は真平ですぜ。

滝川 ハハハ、俺はそういう血なまぐせな事は性に合ねえんだよ。昔はとにかく、今は、御覧の通り、わずかな身内を抱えて、博打のカスリだけで細々、渡世しているだけさ。ま安心しろ。

笠井 へい

滝川 (茶碗を下げに来た義江に) 義江、この客人を部屋に案内しな。静岡の常岡さんからの紹介だ。丁重に扱うんだぞ。

義江 じゃ、どうぞ、こちらへ。

笠井 それじゃ、御厄介になります。

笠井、鞆をぶら下げて、義江のあとについて行く。しばらく、そのうしろ姿を見ていた滝川。ふと、江原達の方を見て、

滝川 それはそうと「春風」の英治の問題は片がついたのかい。期日は、今月中だった筈だぜ。

江原 へい、その件で、これから話をつけに行くんですよ。(ネクタイの形を直すと西田と吉井に) じゃ行くか。

三人、玄関の方へ歩き出す。

24 八幡神社境内

見張りに立つよう西田と吉井がその辺をうろうろしている。

松の木の傍で、江原と英治が向かい合って

いる。

英治、憔悴した表情で、内懷から封筒を取り出す。

英治 それじゃ江原さん、どうか、こいつで。

江原 何でい、こりや。

英治 俺の酒場の権利書なんです。

江原 じゃ手前、博打ですった三百万の穴埋めを、この権利書だけで、すまそうってのか。

英治 でも、俺には、もうあの店以外、何にも残っちゃいないんですよ。

江原 あんな古くせえ店は、どう見たって二百万の値打しかねえよ。手前、少し虫が良すぎやしねえか。

英治 し、しかし、今、いったように、もう俺にやあの店より――。

江原 まだ一つ付属品があるじゃねえか。

英治 ええ?

江原 秋子だよ。

英治 な、なんだって。

江原 手前が秋子と最近、出来合ってるという事は、こっちはお見通しだよ。

英治 (硬化した表情)

江原 おめえも仲々隅へ置けねえ色事師じやねえか。京子が姿をくらましたその後釜に秋子をたらしこむとはな。

英治 江原さん、俺は、俺は――。

江原 何だよ。

英治 あんたと親分さんに無理やり誘われて博打に手を出し、こういうざまになっちまったんだ。もう俺は、自棄になつて――。

江原 自棄になつて女がものに出来りや結構な話だぜ。ハハハ。

英治 京子が俺の前から姿を消したというのも、俺に博打を無理強いして無一文にしちまったというのも、みんな滝川一家が――。

江原 この野郎、手前、滝川一家にケチをつけようってのかい。

江原、英治の胸倉をつかむ。

英治 あんた達は、その上、秋子まで俺から奪つて、どうしようというんだ。

江原 この温泉街にも、そろそろコールガールという種の女が必要になつてきたんだ。滝川一家お抱えのコールガールとなりや秋子も結構、売り出せるぜ。

英治 (ひきつった表情)

江原 何でい、その面は。期日までにはまだ五日あらあ。その間に三百万、耳を揃えるか、それとも、店と秋子をこっちへ差し出すか、ちゃんと、けじめをつける。

江原、英治を突き飛ばす。

江原 おい、皆んな、帰るぜ。引き揚げて行く三人のやくざの後姿を英治唇を噛んで見つめている。

25 酒場「春風」その二階

英治と秋子、熱い裸を悶えさせ、狂つたように激しく抱擁し合っている。

やがて、夜具の上に俯伏せになった英治、枕元のウイスキー瓶を引き寄せ、コップに注ぎ、苦しい顔して一息に飲む。

そんな英治の背中へ、頬ずりする秋子。

秋子 ね、英治さん、あなた、私とこういう事になっちまったので苦しんでるのね。

英治――。

秋子 私、とうとう京子さんを裏切つてしまったのだわ。(すすり泣く)

英治 もう、それをいうな、秋子。京子はもう二度とこの土地には帰らないだろうよ。

秋子 でも私、今日か明日にでも、京子さんが現われるような気がして。

英治 馬鹿な事をいうな。――それより、秋子。

秋子 ええ？

英治、何か秋子にいおうとするが、急に気がくだけ、がっくりと首を枕の上に落してしまふ。

秋子 どうしたの、英治さん。

英治 (急に、ハッと首を上げ) そうだ、秋子。俺達、ここから逃げ出そう。

秋子 ええ？ ここから逃げるって？

英治 今日中に三百万もの金を作らないとこの店がとられるだけじゃない。お前まで、大変なとばかりを受け取る事になるんだ。出来るだけの手はつくしてみたが、もう金策の望みはななんだよ。

秋子 (悲痛な表情)

英治 な、秋子、俺と一緒にここから逃げてくれ。

26 同・階下の酒場

旅支度をした英治と秋子、二階から降りて来る。戸口の方へ向かおうとして、ギョツとする。

ドアの前に、西田と吉井が、ニヤニヤして突っ立っているのだ。

西田 どこかへお出かけですかね、お二人さん。

吉井 兄貴の命令で、張りこんでいたんだよ。窓から中へ入ってな。

西田 (ドアを開けて) 兄貴、やっぱり、こいつ等、ずるかる気だったぜ。兄

貴の予感はいったり命中だ。

江原が唾え煙草で入って来る。

英治と秋子、体を寄せ合い後退する。

江原 大方、こんな事だろうと思つたよ。



秋子 (絶叫する) 英治さん
28 同・酒場の中

英治、床に這いつくばり、何とか上体を起こそうと体を動かせている。

英治 —— 秋子っ秋子っ ——
29 旅館大月荘の一室

襖が開いて江原にドンと背中を押された秋子。つんのめるようにして畳に手をつく。

すぐ眼の前で、滝川が義江の酌で酒を飲んでいる。

滝川 ずらかろうなんていう量見はよくねえな、秋子。

秋子、畳に手をついたまま慄えている。

滝川 おめえの亭主によ、三百万もの穴をあけられてこっちはとんだ迷惑だ。

その埋め合わせの一つにおめえの身柄は当分こっちで預らせてもらう。

いいな。

義江 あんたの亭主の方も、それは承知している事だからね。あまり世話をや

かせないでね。

滝川、ガタガタ慄えている秋子を北叟笑んで見ていたが、チンピラ二人に、

滝川 逃げようなんて気が起らねえよう裸にむき上げて、物置にぶちこんでお

きな。

“へい”と西田と吉井、秋子の肩を引き起こすと、着ているものを剥こうとする。

秋子 な、なにをするのっ、やめてっ。

義江 (顔をしかめて) ほこりが立つじゃないか。ここは脱衣場じゃないんだからね。向こうへ連れて行って、ガタガタやってよ。

30 物置の中

扉が開き、西田と吉井、秋子を引きずるように入ってきて来る。

西田 さ、裸になるんだ。

秋子 嫌っ、嫌ですっ。

吉井 親分の命令だ。悪く思うなよ。

秋子 誰か、誰か来てっ。

西田と吉井、暴れ狂う秋子から次々と衣類を剥ぎとっていく。

遂にパンティ一つになった秋子、床に顔を埋めて泣きじゃくっている。

西田 念には念を入れろ、というからな。

西田、物置の隅の麻縄を手にとると、吉井と二人、秋子の肩に手をかけて、上体を起こさせ、ひしひしと縄をかけ後手に縛り上げる。手拭を出し秋子の口を覆った西田。

消え入るようにすすり泣く秋子の頬をつついて。

西田 おとなしくしてるんだぜ。へへへ、可愛い顔してやがる。

全く人をなめやがって。よし、秋子連れて行きな。

“へい”と、西田と吉井、秋子を表へ連れ出そうとする。悲鳴をあげる秋子。逆上する英治。

英治 な、なにをするんだ。

西田 うるせえ。手前はひっこんでろ。

西田、英治を突き飛ばす。

英治、床に転倒する。起き上って来た所を吉井がビールの空瓶で頭をなぐる。

秋子 あっ、英治さん！

27 同 酒場の前

止っている車の中へ引きずるように秋子を連れ込む西田と吉井。そして、江原。

西田と吉井、散乱している秋子の衣類を拾い上げ、外へ出て行く。

がつくり首を落し、すすり泣く秋子。

31 酒場「春風」の近く、朝

小粋な和服姿、美しく髪をセットした京子、懐しそうに酒場の看板を見上げている。

32 同・酒場の中

朝の光りの射す薄暗い酒場の中で、英治、自棄になったように一人でウイスキーを飲んでい。心身共に疲れきったその横顔。ドアが開き、京子がそっと入ってくる。

英治 誰だっ。

朦朧とした英治の眼に、京子のはっきりと形をとって映じる。

英治 あっ、京、京子。

京子 あんたっ。

京子、こみ上げて来て走り寄る。

英治も京子の肩を抱いたが、そのままずるずると床にくずれ落ち、頭を押さえて泣き出す。

京子 どうしたの、ね、英治さん。

英治 京子、許してくれ、俺は、俺は――

京子――

もう、お前は二度とこの土地へ帰らないと思ったんだ。ああ、俺は、なんて馬鹿な――。

京子、カウンターの上にある秋子のコンパクトに、そっと手を触れる。急にハッとす

る。

京子 じゃ、あんたは秋ちゃん――。

英治 (うなずく) 夫婦約束までしちまったんだ。三年は長過ぎたよ、京子。

京子 (啞然とする)

英治 お前がいなくなってから、俺は生活がすっかり狂っちゃった。滝川や江

原に無理やり誘われて博打に手を出し(ひきつったように笑って)あげくの果、とうとうこの店まで奴等にとられちゃった。

京子 (愕然とする)

英治 滝川一家はまるで鬼だよ。この店を取り上げるだけじゃ飽き足らず秋子

まで借金のカタだと吐かして、俺から奪っちゃまいやがった。

京子 何んだってっ。

英治、フラフラと立ち上ると、京子の肩をつかむ。

英治 京子、俺はどうしたらいいんだよ。

(泣く) 頼む、京子。俺は今までの事みんな忘れたいんだ。俺と一緒にここから逃げてくれ。

京子、いきなり、英治の頬を平手打する。

京子 卑怯者、あんた、それでも男かい。

英治――

京子 あんたは、秋ちゃんを見殺しにする気なの。

英治――

京子 愛してるんだろう、あんた、秋ちゃんを。

英治 (カウンターに頭を押し当て、号泣する)

京子 秋ちゃんは私が救い出すよ。

英治 (ハッと顔を上げて) 馬鹿な、お前が滝川一家へ行きや、殺されるに決っている。

京子 秋ちゃんは死ぬより辛い思いをして

いるかも知れないんだよ。あの滝川って男は変質者なんだからね。

英治 (愕然とする)

京子 ここで待っているのよ。いいわね。

京子、さっと外へ飛び出して行く。

33 旅館・大月荘・その一室

滝川と義江、夜具の上で抱擁している。

能動的な義江に対し、滝川、何となく落着きがない。

義江 (すねて) うん、親分、一体、どうしたのよ。

滝川 おい、もう十時だぜ。そろそろ起きなきゃ。

義江 フン、親分、物置にいる秋子の事が

気になって、落着かないんでしょ。

滝川 ああ、西田達が何か悪さをしねえか

義江 悪さをしたがつてるのは親分じゃな

い。若い娘を見ると、すぐじわじわ
いじめたがる。悪い趣味ねえ。

滝川 だが商売もんには手をつけねえよ。

一寸、からかってやるだけさ。

滝川、床から起き上る。

34 同・廊下

西田と吉井、牛乳瓶やパンなど持って歩いて来る。それを滝川、うしろから呼び止めて、びっこをひいて歩いて来る。

滝川 おい、お前達、何処へ行くんだ。

西田 あ、親分、お早ようございます。

吉井 物置のお嬢さんにお食事させようと思ひましてね。

滝川 そうか、じゃ、俺も行こう。

西田 何ですか、親分。そりゃ。

西田、滝川が小脇にかかえている紙包みを不思議そうに見る。

滝川 これか。ハハハ、物置へ行きゃわかるさ。

35 物置の中

隅の壁に背をもたれさせ、小さく立膝している秋子。

緊縛され、口には猿轡をかまされている。

扉が開き、ハッと身を硬くする秋子。

滝川、西田、吉井の三人、ニヤニヤして入って来る。

西田と吉井、秋子の前に牛乳やパンを置き

西田 さ、朝のお食事だぜ。



西田、秋子の猿轡を外す。吉井、パンにバターなど塗って、

吉井 そら、アーンとお口を開きな。

チンピラ二人、緊縛したままの秋子に食べさせようとして、肩を押さえ、口元にパンを近づける。激しく首を振って、それを避ける秋子。

滝川 食事の前に、すまずものはすませ
てやらなきゃ可哀そうだぜ。

滝川が陰靡な微笑をして紙包みから取り出したものを見た秋子、慄然とする。小児用の便器だ。

西田 (吉井の顔を見て苦笑する) また始

まったぜ、嫌な趣味だね、全く。

滝川 早くこっちへ連れて来な。

西田 へい——親分がだっこして下さるん

だよ。赤ちゃんみ
てえにな。

西田と吉井、秋子の肩や

背に手をかけ、滝川の所

へ連れて行くとする。

秋子、狂ったように暴れ

て、西田と吉井の間をか

いくぐり逃げ出す。

表へ走り出そうとする秋

子の縄尻を掴んだ西田、

秋子を横へ突き飛ばして

扉を閉め

西田 そんな恰好のまま、どこへ逃げよう
ってんだ。馬鹿な奴だぜ。

秋子、二人のチンピラの手を逃がれて物置
の壁に背を当て、肩で息しながら、ニヤニ
ヤ迫って来る二人に哀願的な眼を向ける。

秋子 嫌っ嫌っ、お願い、馬鹿な真似はや
めてっ。

そんな秋子を面白そうに眺めている滝川、
チンピラ二人に向って、

滝川 何をぐずぐずしてやがるんだ。早く

素っ裸にして、ここへ連れてこい。

へい、と西田と吉井、秋子に突進する。

悲鳴をあげ、狭い物置の中を逃げ廻る秋子

36 同・旅館の一室

鏡の前に坐って、化粧している義江。鼻唄
を唄いながら口紅をひいている。

襖がそつと開き入って来た京子の姿が義江の前の鏡に写る。

義江、ハツとして振返る。

京子、拳銃を出して、義江にびったり体を寄せる。

京子 あんた、滝川の二号だね。(拳銃を

義江の喉に当てがい鋭い声) 返事しなよ。

義江 (慄えて) そ、そうよ。

京子 ここへ「春風」の秋子が連れこまれている筈だわ。案内しな。

義江 私、知、知らない。

京子、ふと、鏡の傍に、ワンピースやスリッパ、ブラジャーなどが一かたみにして無雑作に投げ出されてあるのを見てワンピースを手にする。

京子 このブローチは秋子のものよ

義江 (慄える)

京子 畜生、秋子を騷り物にしたんだね。拳銃を義江へ再び向け引金に指をかける。

義江 —— あ、案内するわ。お願い。乱暴はしないで。

義江、京子に拳銃を突きつけられたまま立ち上る。

37 同・物置の中

チンピラ二人の手の中をかいぐるようにして必死に逃げ廻る秋子。



滝川、煙草を、くゆらしながら三人の鬼ごっこを楽しんでいる。

秋子、部屋の隅へ追いこまれ、遂に西田と

吉井の手に抱きすくめられる。

西田 そら、捕まえな。全く世話をやかせやがって。

吉井 さ、こっちへ来るんだ。

秋子 嫌っ、ああ、お願い。

秋子、二人のチンピラに滝川の前まで押し立てられる。

滝川、煙草を捨て、西田と吉井に体を支えられて身悶えしている秋子の爪先に便器を置く。秋子、恐怖と、羞恥に顔を歪める。

滝出 何もそう羞しがらる事はねえよ。誰だつてする事だ。

滝川、身をかがめて、秋子のゴム紐に手をかける。その時ガラリと扉が開き、京子にうしろから拳銃を突きつけられた義江が入ってくる。

あわてて、秋子のパンティから手を引いた

滝川、あつと声を上げる。

滝川 手、手前は京子だな。

京子 下手に騒ぐとこいつが火を吹くよ。

京子、拳銃を棒立ちになっている男達に油断なく構える。

チンピラ二人の間に立たされている秋子、

激しく身を揺すり、

秋子 京子さん。(あとは言葉にならず号泣する)

京子 (チンピラ二人に) 何をしてるんだ

よ。早く秋子の縄を解かないか。

チンピラ二人、ふくれ顔で秋子の縄を解き出す。

京子、抱えていた秋子の服を投げ出し、

京子 さ、早く着て。

秋子、服を身につけ始める。

滝川、いまいまして舌打ちして、

滝川 京子、手前、よく帰って来たな、こ

の町へ。

京子 久しぶりに親分さんの間抜け面が見たくなってね。

西田 くそっ。

滝川 京子、手前、こんな事しちゃ、いよいよ只じゃすまねえぞ。

京子 フン、鳶に油揚げさらわれたって所ね。お気の毒様。

38 同・物置の近く

笠井、風呂上りらしく宿着に手拭をひっかけてやって来る。

物置から飛び出して来た京子と秋子を見てあわてて笠井、柱のうしろへ身を隠す。

京子、物置の中へ拳銃を向けながら、京子 お邪魔したね。達者で暮しな。

京子、扉をしめて、外鍵をかけると、

京子 さ、秋ちゃん、早く。

京子、秋子の手をとる様にして走り出す。

笠井 (ニヤリとして) 全くいい度胸してやがるぜ。

物置の戸を内から滝川達がたたいている。

滝川の声 おい、誰かいねえのか。早くここを開ける！

柱のうしろにいる笠井、それには、とり合わず、懷から煙草を出して口に咥えるが、向こうから江原がかけて来て物置の前に立つのを見て、顔をしかめる。

江原 (物置の前) どうしたんです親分。

滝川の声 京子の奴が現れたんだ。早くここを開ける。

笠井、口の煙草を捨てて、うしろの方へ走りだす。

39 松林

京子と秋子、手を取り合って走っている。

秋子、疲れ切り、地面に手をつく。

京子、秋子を介抱して、

京子 もう少しよ。秋ちゃん、しっかりして。

秋子、京子に抱きついて泣きじゃくる。

秋子 京子さん、私、私、貴女を裏切った女なのよ。

京子 何いってんのよ、そんな事。私は何も気にしちゃいないわ。

秋子 でも、でも。(泣きじゃくる)

京子 私には、好きな人が出来たのよ。むしろ、あんたに感謝したい位だわ。

秋子 ほ、ほんと、京子さん。

京子 さ、早く逃げなきゃ。追手が来たら大変だわ。

京子、秋子を引き起こす。

40 松林を出た道

京子と秋子が出てくると、自動車が止っている。運転台から笠井、首を出す。

笠井 おい、早く乗れ。

京子、笠井にふと警戒態勢をとる。

笠井 早くしろよ。滝川一家は、血眼にな

ってお前達を探してるぜ。

京子 あんた滝川一家の用人棒なんだろう。笠井 用人棒じゃねえ、お客様だ。早くしろったら。

京子、疲れ切った秋子を支えるようにして車に乗る。

笠井 いったくけどな、俺は滝川一家の世話を受けてる人間だ。つまり、お前とは敵同志だよ。さっきのお前の度胸に感心して、今日は特別サービスをしてやるだけだ。つけ上りやがると承知しねえぞ。

笠井、ブリブリした調子で、エンジンをかける。

笠井 どこまで送りやいいんだ。はっきりいえっ。

41 駅前広場

旅支度をした英治と秋子、京子と向かい合っている。

京子 そろそろ汽車が来るわ。それじゃ、これでお別れよ。

英治 (気弱な眼をして) 京子、お前はこれから――。

京子 私の事なんか気にしないでいいわ。ああ、そうだ。(懷から分厚い封筒を取り出して) 放浪しながら、あちこちの賭場で稼いだお金なの。あん

た達のお饌別よ。

秋子 京子さんっ。

英治 俺は、俺は何とっていいか——。

京子 何もいわなくていいから早く行って

私、私、涙が出ちゃうじゃないの。

英治 ——京子。

京子 (眼に涙を浮かべて) 早く行ってっ
たら。

英治と秋子、幾度も京子の方を振り返りながら駅の方へ——。

京子、虚脱した表情で二人を見送っている

42 海岸

京子、砂丘に坐って、ぼんやり海を眺めている。

急にこみ上げて来て、砂に俯伏し泣きじゃくる京子。

少し離れた砂丘から、そっと首を出したのは江原だ。つづいて西田、吉井がそれに続き、京子に近づく。

江原 騒ぐんじゃない。

江原、拳銃を背後から京子に当てる。

江原 よくも俺達をコケにしやがったな。たっぷりお礼をさせて貰うぜ。立ちな。

西田と吉井、硬化した表情で立ち上った京子の懐を探し、拳銃を取り上げる。

江原 親分と姐さんがお待ち兼ねだ。歩きな。

京子、やくざ三人に包囲された形で歩き始

める。

43 大月荘の一室

滝川、義江、江原、西田、吉井の五人が小気味良さそうに笑って包囲する中に京子、冷淡な表情で坐っている。

京子 何をさっきから黙りこくっているのさ。睨めっこじゃあるまいし。こっ

ちは、覚悟は出来ているのよ。突く

なと斬るなど、勝手におしよ。

京子、着物の袂から煙草を取り出して口に咥える。

滝川

いい度胸だ。滝川一家は手前のために一度ならず二度まで煮湯を飲まされたんだ。手前の命はもらったぜ。

だがその前に、聞きてえ事がある。手前、秋子を何処へ逃がしたんだ。

京子

さあ知らないね。(煙草の煙を吐く) あいつは、コールガールに仕込み上げてよ、滝川一家の金づるの一つにする予定なんだ。どこへ逃がしやがった。云えっ。

京子

知らないいったら。しつこい親分だねえ(義江の方を見て) ちよいと、灰皿ぐらい出してよ。

義江

(むっとして、足もとの灰皿を京子の膝元まで足で蹴り飛ばす)

滝川

畜生。よし、それじゃ、手前の体に聞いてやる。(吉井に) 用意しな。

冷淡な表情で煙草をふかせている京子の傍に、麻縄や革鞭などが無難作に置かれる。

京子、チラとそれを見て、

京子 私に泥を吐かせるにや骨だわよ親分

江原 フン、大きな口をたたきやがって。今に吠え面かかせてやるからな。

滝川 それじゃ、素っ裸になって頂こうか

京子 (憤怒の色を眼に浮かべて、滝川を見る)

滝川 (せせら笑って) どうしたい。すっ

坐ってる京子のうしろに西田と吉井近づき催促するように背に手をかける。

京子、灰皿へ煙草を押しこむと、ゆっくり立ち上る。

京子、帯を解き始める。くるくると、とぐろを巻いて畳に落下していく帯あげや帯。

長襦袢姿になった京子、伊達巻を解き始める。

唾を呑みこんで凝視している男達。

やがて、湯文字一枚になった京子、乳房を両手で押さえ、顔を伏せて立っている。

江原 (溜息をつくように) いい体してや

がんな。ね、親分。

滝川 (京子を凝視しながら) うむ。

そんな男二人を嫉妬めいた眼で見た義江、いらいらしたように京子の足元に落下して

いる衣類を拾って抱きかかえ、

義江 いいさまだよ、全く。このきれいな

おべべは、みんな私が頂戴しておくからね。さ、腰のものもお取り。

京子 (さすがに狼狽して顔を赤める)

義江 皆んなあんたの生まれたままの姿を見たがってるんだよ。さ、お取りつたら。

京子、口惜しげに唇を噛みながら乳房を抱く手を下ろし、湯文字の紐を解き始める。

京子の足下にハラリと落ちた最後の一枚。

義江の嬌声、男達の哄笑。

江原 よし、縛り上げる。

西田と吉井、麻縄を取り上げ、京子に近づくと両手をうしろへねじ曲げ、乳房の上下へキリキリ縄をかけていく。

滝川 ハハハ、男勝りの鉄火姐さんが、素

裸じゃ恰好がつくめえ。どうだい、

江原。六尺をキリキリと緊めてやろうじゃないか。

江原 成程、そいつは面白いや。このジャジャ馬にや、きつとよく似合います

ぜ。

京子の顔、羞恥と屈辱に歪む。

44 同・笠井の部屋

笠井、畳の上に腹這いになり、二つのサイコロを転がして一人遊んでいる。

襖が開いて、ほろ酔い気嫌の義江が盆にビ



ールを載せて入って来る。

笠井 (坐り直して) こりゃ、どうも。

義江 ごめんなさいね。何のおもてなしも出来ずに。——はい、どうぞ。

義江 ビールの口を抜いて笠井にすすめる。

笠井 それじゃ遠慮なく(と飲んで、返杯

する) よろしかったら、姐さんもどうぞ。

義江 ええ、頂くわ。

笠井 随分と、いい御機嫌じゃありませんか。

義江 フフフ、一寸、祝酒を飲んでね。悪い女狐をとうとうつかまえたのよ。

笠井 女狐?

義江 そうだ。あんたもいらっしゃいよ。退屈しのぎに面白いものを見せてあげるわ。

笠井 へえ?

45 同・二階の日本間

緊縛された京子。天井の梁から垂れたロープに縄尻をつながれて立っている。その腰にようやく六尺を締めさせて立ち上った江原と西田。

江原 仲々良く似合うぜ。鉄火姐さんにや

と、笑って京子の尻を平手打し、革鞭を取り上げると、京子の顎へ差しこんでぐいと首を上げさせる。

滝川、京子の口惜しげな顔をのぞきこんで

滝川 どうだい。秋子の居所を白状するなら、今のうちだぜ。

京子 (憎悪の眼で滝川を睨み、唾を吐きかける)

滝川 あっ、くそっ。江原、もう容赦する

事はねえぞ。

江原 へい。

江原、鞭を大きく振り上げて、京子の尻をぶつ。

思わず悲鳴を上げて大きくのたうつ京子。

襖が開いて、義江が笠井を連れて、入ってくる。

鞭打たれ苦悶する京子を見て、笠井、啞然とする。

滝川、笠井を見て、近づいて来る。

滝川 俺を散々コケにしゃがった雌猫なんだ。どうだい。退屈しのぎにあの阿

女のケツをひっぱたいてみねえか。

いい運動になるぜ。ハハハ。

笠井 どうも俺は女を痛めつけるのは苦手なんで。

滝川 ハハハ、俺はこんな面白いもんはねえと思ってるんだよ。ああそうだ、

(懐から拳銃を取り出す) あの女狐が持ってやがったもんだ。こいつはおめえにくれてやるよ。

笠井 へえ、そりゃ、どうも。

滝川、悲鳴を上げてのたうつ京子の方を愉快そうに見る。

江原、疲れて、手を止める。

江原 くそ、全くしぶとい阿女だ。おい、西田、手前、俺と代れ。

西田 へい。

義江 一寸、お待ちよ。

西田 ええ？

義江 こんな図太い女をいくら鞭で引っ張たいたってこっちが疲れるだけさ。

それより、もっと面白い方法があるわ。

義江、大きく肩で息づいている京子を残忍な眼つきで見る。

46 同・浴場の脱衣場

ガラス戸が開いて、滝川と義江、後手に縛った京子を引き立てて入って来る。うしろから、笠井がのっそりついてくる。

浴場の方で男達が高声で唄をうたっている京子 (顔を硬化させ) 何をする気なん

い。

滝川 ここは、三年前、手前が俺に大怪我させた所だ。あの時のお返しをちつとばかりさせてもらうぜ。

義江 さ、お入り。

義江、浴場のガラス戸を開ける。

47 同・浴場

江原、西田、吉井、気持良さそうに湯に浸っている。

京子が引き立てられてくると、口笛を吹いたりして笑い合い、

西田 待ってました。

江原 いい湯加減だぜ。

吉井 体の隅々まで洗ってやっからな。

滝川と義江、京子の縄尻をとり肩を押して湯槽のへりに立たせる。

湯の中から西田や吉井、手を出して、京子の足首をつかみ、中へ引きずりこもうとする。義江、笑いながらそれを制して、

義江 ガツガツするんじゃないよ。一応、京子姐さんの気持を聞かなきゃいけないんだから。

滝川 どうだ、京子。男達と湯に入るのが嫌なら秋子の居所を教える事だな。

京子 (唇を噛み、眼を閉ざしている)

滝川 そうか、そう強情をはるなら仕方がねえ。おい、笠井、こいつを押さえていてくれ。

不快な表情で腕組みしている笠井、京子の肩をうしろからがっしり抱く。

義江、京子の肢元に身をかがめ、湯の中の男達を見て、

義江 やっぱり皆んなと一緒に、湯に入りたいんだってさ。仲良くしてやっておくれ。

男達、歓声をあげる。

義江、京子の六尺の結び目を解き、クルクル脱がせ始める。

京子、切なげに眼を閉ざし、首を大きくのけぞらせる。そんな京子の頬が笠井の鼻先に触れる。ごくりと唾を呑む笠井。

滝川 さ、入るんだ。



滝川に背を押された京子、縛られた姿で、義江の手に長い布を残したまま、しぶきを上げて湯の中へ落ちる。

忽ち、京子にからみつく三人の男。狂ったように湯の中で暴れる京子。

滝川、異常者めいた笑いをして、それを見ている。

男達三人、京子の肩を押さえて、湯の中へ押しこむ。泡を出して湯の中へ沈む京子。

滝川 (狂ったように笑い) どうだ京子、これが温泉責めだ。ハハハ。

江原、京子の顔を湯から引き揚げると、

江原 白状する気になったか、ええ。

京子 (激しく首を振る)

江原 くそっ、何てしぶとい阿女だ。おいも一度、沈めろ。

48 林の中(翌朝)

もうもんか、どうせ殺らさなきゃならねえ女だ。

男達、京子の肩や頭に手をかけ、再び湯の中へ沈める。
眉を寄せて、見ていた笠井、舌打ちして、
笠井 親分、こんな事すりゃ、女は死にますぜ。
滝川 (湯の中を見て 義江と一緒に狂人のようにはしゃぎながら) か

京子、松の幹を脊にして立たされ、西田と吉井に縄がけされている。腰を手拭一本で覆われただけのみじめな姿。
滝川、江原、義江、そんな京子を薄笑いを浮かべて見つめている。
滝川 全くおめえの強情なものにはカブトを脱いだよ。希み通り、今日は天国へ送りどけてやる。

滝川、懷から拳銃を取り出す。
近くの松の根に坐って、煙草を吸っていた笠井、ハツとする。
江原 親分、近くに百姓屋があるんだ。拳銃はまずいですよ。どうです、絞首

刑って事にしたら。

滝川 成程、そいつは面白いな。

西田 もう少し、あっちへ行った所に、いい枝っぷりの松がありますかね。へへ。

滝川 よし、じゃ、支度にかかろう。

滝川、坐りこんでいる笠井の傍へ近寄る。

滝川 おめえ、今日から旅に出るんだってな。

笠井 へえ、色々お世話になりました。

滝川 いや、何のもてなしも出来ねえで、こっちが恐縮だよ。どうでい。一寸俺達が支度にかかる間、あの女狐の体を楽しんじゃ。

笠井 ええ？

滝川 どうせ、すぐあの世へ行く女だ。後くされがなくていいじゃないか。

滝川、松の幹に縛られている京子の方を見て笑う。

滝川 さ、皆んな行くぜ。客人に気をきかしてやんな。

滝川、義江達をうながして歩き出す。

笠井、のっそりと京子に近づく。

顔そむけ、眼を閉じている京子。

笠井 助けてくれと云わねえのかい。

京子 (眼をあいて) 冗談じゃないわ。誰があんたなんかに。

笠井 ハハハ、とうとう死ぬまで俺を嫌が

りやがった。

京子 でも、あんたが、秋子を逃がしてくれた事には感謝するわ。(眼を閉じて)いいわ、私の体を好きなようにして。

笠井、京子の首に手をかける。京子、うっとりと唇を寄せる。

笠井、さっと身を引き、

笠井 俺はな、恩を売って女をものにするってのは大嫌いなんだ。覚えとけ。

京子 (びっくりして眼を開き) だって、私はもう死ぬのよ。そんな事どうだっていいじゃないの。

笠井 死ぬのは手前の勝手だ。俺の知った事か。

京子、打ちのめされたように首を垂れ、すすり泣く。

49 同・松林®

太い松の枝にロープがかかっているその下に踏台を置く西田。

京子、江原に縄尻をとられ、虚脱した表情で立っている。

滝川 さあ、支度は出来たぜ。台の上に乗んな。

江原 どうしたんだ。急に命が惜しくなったのかい。

踏台の前で、動かなくなった京子を見て、江原、滝川と顔を見合わせ笑う。

京子 死恥だけは、かきたくないんだよ。こんな恰好のままじゃ――。

義江 羞しくて死ぬに死ねないっていうのね。フフフ。

江原 証拠品が残ると困るんでね。可哀そうだが丸裸で往生してもらうぜ。

滝川 死体を発見した奴が喜ぶぜ。ハハハおい、腰の布も剥ぎとって吊るしちまえ。

西田と吉井、京子の腰に手をかけた時、轟音二発。二人、はじけ飛ぶ。

江原 だ、だれだ。更に轟音二発。江原と滝川、地面に顔倒する。

その場に腰を抜かせてしまう義江。

近くの木の後から、拳銃を持った笠井、のっそり出てくる。

京子 (啞然として) あ、あんた――。

笠井、京子の縄を解くと、すぐに力一杯、京子の頬を平手打ちする。

あっと地面に倒れる京子。

笠井 手前のために、また人を射ちちまつたじゃねえか。

笠井、放心したように坐りこんでいる義江の眼の前で手を振る。

身動き一つしない義江。笠井、義江の帯を解き出す。

京子、両手で乳房を覆い、笠井の方を気弱

そうに見つめながら、ひざまずいて身をすくませている。

何時の間にか、腰巻一つの姿にされてしまっている義江。それでも眼を開いたまま微動だにしない。義江の衣類を抱えてやって来た笠井、それを京子に投げつける。

笠井 じゃ、あばよ。

笠井、振り向きもせず歩き出す。

京子 待、待って。

京子、あわてて着物を着始める。

50 長い一本道

笠井、歩いて行く。

京子、追って来る。

京子 ね、待っててよ。

笠井 俺は今、気嫌が悪いんだ。ついて来るな。

笠井、京子突き離して歩いて行く。

京子 (微笑して) あんたの理屈じゃないけれど、ついて行くのは、こっちの勝手じゃないか。

一本道を歩いて行く笠井を追って、京子、再び走り出す。

京子 やっぱ、やくざの女は、やくざの男とうまが合いそうだわ。ね、あんた、待ってよっ。



SMつれづれ行脚

徳永昭三

奇クのファンとしては相当古くからの愛読者であると自負している小生ではあるが、未だ嘗て誌上にペンを執ってみたいと考えたことはなかった。もっとも辻村隆氏のカメラ・ハントには「行動的な徳永昭三」として度々登場しているのであるが、専ら読む側として沈黙を守っていたのである。

小生が辻村氏を知ったのは大分以前のことである。氏が『奇譚三十九夜物語』を連載しておられた頃、その構成員になりたくて編集部に便りを出したところ、早速編集長から辻村氏を紹介されたというわけである。小生が自分の職業や身分、住所氏名などをありのままに書いたことや、その知名度が多分好感されたものとは思いますが、意外にも容易にベテランのSM紳士に紹介されたのは驚きだった。

行動派と言われる小生のことだから早速辻村氏との会合を求めたのは言うまでもない。それ以来、数多くのマニアを紹介され、モデル嬢たちとの会合にも出席させて貰うことが出来たし、撮影の場面にも立ち会うことが出来た。また或る時は拷問、処刑場面で責め役として登場し、親しく自らの手で若々しい何人ものモデル嬢を責めて限らないSMの想念を満足させて貰ったこともあった。

嘗ては小生の内面生活の中でくすぶり続けた欲求不満のそれら諸々のどろどろとした塊が、一条の清冽な水脈によって洗い流された思いだった。そういう楽しみの可能性の存在を知った小生の日常生活には、今までにない張りが出てきたのは事実だった。情性で行っていた何ら感激も伴わない仕事

も従来とは打って交って面白くなってきたのも不思議だった。

小生は元来、Sの傾向だと自任していたし又当初は専ら女を責める方ばかり専念して結構それが楽しく生甲斐のように思っていたのだが、多くの誌友やファン諸氏と逢っているうち、Mもまた楽しという心境も会得できるようになってきた。現在ではS7M3の割合で理解でき、プレイや実演の際SMいずれの側になっても適当に楽しめることを知った。

最近、夫婦SMプレイの同好者や体験者の記事を見る事が多い。斯くいう小生もその信奉者であり家内はよき理解者でもあり協力者でもある。否、最近では協力者というよりもSMそのものを愛し楽しんでいるといっても良いだろう。千里の道を遠しとせず紹介された友を求めて旅をしたことも少しとはしない。しかし、最初にも書いたように、その体験記を書いてみようと思ったことはなかった。その意味では編集部に対しては良き協力者ではなかったようだ。最近では心気一転、撮影した数多くの写真なんかの誌上掲載について資料提供を申出ているのだが、今のところ編集部からの色よい返事は貰っていない。

貰っていない。

あの徳永昭三ならSMに関しては一通りのことはやるだろうというところで小生の出番の機会は決して少くはないだろう。事実小生はそういった機会を首を長くして待っているのである。現在はレジャー時代といわれている。余暇利用の娯楽としては、その種類の多様さは全く目を奪うばかり、絢爛というほかはない。この種の性向を抱く者の一人として、我田引水ながら、小生は声を大にしてSMファンの大同団結を訴えたい。幸いにして小生の従来親交を求めた友の多くは潤達な人ばかりだったので親しく胸襟を開いて語り合えることが出来たしプレイの面でも極めてフランクにつき合うことが出来た。しかし、中には徒らに卑屈になったり秘密主義に徹したりして、本当の意味でのSMの楽しみを共に味わうことの出来難い人達もあるようだ。

小生はあくまでSMというジャンルは、日常の徒然を慰めるためにのみ存在しているものだと思っている。人生の総てではないのであるから、極めて大らかな気持ちで余暇を有効に利用して楽しめばよいのだと考えている。



(第五十一回)

辻村隆

昭和四十年四月号のカメラ・ハ

現象である。

ント「耳責めに微笑む娘」刑部典子の巻で、耳朵に小孔を穿った娘のことを書いたが、中国の姑娘ならいざしらず、日本では珍奇な存在と思っていれば、近頃は若い女性、歌手なんかにも、かなり波及していることを知って驚いた。人氣歌手の伊東ゆかりも耳朵を穿孔していて、テレビでそのことを平然と喋っていた。イヤリングのとりつけをよくよく注視してみるとすぐ分ることだが、或いは島倉千代子なんかもそうではないかと推察されるのである。そのうち穿孔が流行して、若い娘達が我も我もと穿孔を始めると、佐々木生氏の喜ばれるような時代がやってこないとも限らない。サイケ調の時代になると、過去の稀有なことが何もかも茶飯事になるかも知れない。嬉しいような、淋しいような

私がSMカメラ・ハントを書き出したのが、昭和三十九年の十一月号からで、当然九月下旬発行だから、それ以前に原稿を送ってあるので、もうかれこれ満四十年を迎えることになる。当時は、ガル・ハント、ボーイ・ハントというような言葉はあっても、カメラ・ハントという言葉は世間で使っていなかったので、謂わば私の新造成語とも言えたのだがまさか私の題名をとったわけでもあるまいが、テレビでカメラ・ハントという番組があるし、山本一章氏の書いた「この人と」と同じ題名のプログラムもある。テレビ関係者の中にも、奇クの隠れたファンがいて、或いはフト思いついて使ったのかも知れぬが、それにしても何か隔世の感をつくづく覚えるので

ある。梨花悠紀子と伊吹真砂子のレスポスを扱った八ミリ映画を今から七、八年前に作ったが、その時の題名が「夢魔」。今それと同じタイトルで戸川昌子が書いている。これは偶然の一致である。S M気のある人間の考えることは皆似たようなものであるらしい。

カメラ・ハントで登場した彼女達の、その後をよく同好の人達から聞かれる。去った人、交遊のある人、結婚した人、崩れていった人と、さながら若い女性の万華鏡のようだが、SMカメラ・ハントも満四カ年を迎えようとする今、その後日譚或いは回顧といったものを、総まとめにして発表してみたく思っている。ハントで未掲載のもの、没のもの、又は未発表のフォトを登場させて、今一度去りにし彼女達の面影を偲んでいただこうというねらいである。編集長の快諾も得たので、現在纏めているが、その気になればえらいもので電話や手紙によって、彼女達の八割以上の消息が得られた。二回くらいに分載の予定であるが、得がたい私の同好の仲間の協力に、本当に感謝の念しきりである。

ここ一カ月余りの間に、三好留美、左近麻里子、浅井優子、佐々木真弓の諸嬢と、相ついでプレイする機会に恵まれたが、孰れも、続篇として書きたい人ばかりである。編集部の方からも、次々とニューフェイスの方を紹介していたが、今、今の処嬉しい悲鳴をあげている。カメラ・ハントでメシを喰っているわけでもないのに、本職の方がすっかりお留守になってしまつて、台所は火の車、遊びの方と生活は所詮、両立しないもので、やりくり算段に大童である。加えて団鬼六氏より、一緒に一本映画撮らないかという誘いもかかり、その氣があるなら緊縛スターオールキャストで、空前絶後のSMものを撮ろうじゃないかと大張切りしていらっしやる。心は二つ、身は一つで、金の成る木でもあれば、わずらわしい生活の方の仕事はすべて擲うって、SMにひたすに耽溺したいのだが、そうもゆかぬままならぬ浮世である。

今月のSM書のすすめ——。×
 マルコム・ネスビット著『肉体
 の戦車』(浪速書房発行 定価
 四五〇円)×
 この作品のテーマは「性の快楽

は死に値するか?」という命題の追求であり、証明である。戦後の異色的な作品で、現代的な新しいSMとSEXの文学といえる。かつての名作『舞踏会の手帖』式のストーリーの展開で、あら筋は戦争が終り、かつて交渉のあった女性と再会する為パリを訪れた主人公が、新聞で彼女の変死を知る。彼女の遺言によって、彼女と交渉のあった人々を遍歴してゆくうち

イメージ画・・・

「ある夜の幻覚」

春川ナミオ

昨日は頭が痛かった。めったに飲まない薬を飲んで早々と床についたが、重く締めつけられる苦しさにと気がつく、頭の上に素晴らしいグラマー女性が腰かけているではないか。私は押し潰されそうな気がして悶えた。「フッフ」と彼女は笑って更にグイッと両足で踏みしめてきたのだ。「死ぬかもしれない」と私は思った。眼が醒めたら寝汗が一杯だった。



に、彼女の思いもかけぬ、奔放きわまるSMの行状が明らかに becoming ってくる。その真因は奈辺にあったのであろうか?

最後に文中の一節をほんの少し紹介しよう。(……ぼくは衝立の後から出てきた。そして、そこに横たえられている、彼女の無惨な姿をまざまざと眺めた。彼女の両手、両足は大きく開かれ、それぞれ、ベッドの四隅に備えつけられ

てあった、鉄の鎖にしっかりと結びつけられていた。そして背中的一面に真赤に服れ、尻の所などは皮膚が破れて、赤い血がにじんでさえた。よくも、こんな辛いことが我慢できたと思うほどであったが、しかし、それが彼女は却って嬉しいらしい。

少し、恨みがましい眼でぼくを見上げて、「あんた、すっかり聞いたわね、

私の悲鳴を」

「うん」

「じゃ、彼が帰って来る前に、そこにある竹の棒で力一杯、私の体を打って……」とよ。私が本当は何を喜びにするか良く分っているのでしょう」

「しかし、そんな体にとっても」

「じゃ、ジーンの居所は教えてやれないわ。それに早くしなければピエールが戻ってくるわ」

そう言われては仕方がない。ぼくは、そこにおいてある竹の棒をとり上げた。

「できるだけ力一杯ね。うんと身にしみて効いたら、三回で許して上げる」

仕方がない。ぼくは、それを力をこめて振上げると、彼女の背中の一番腫れ上っている所をめがけて振下ろした。

「ひえ!」

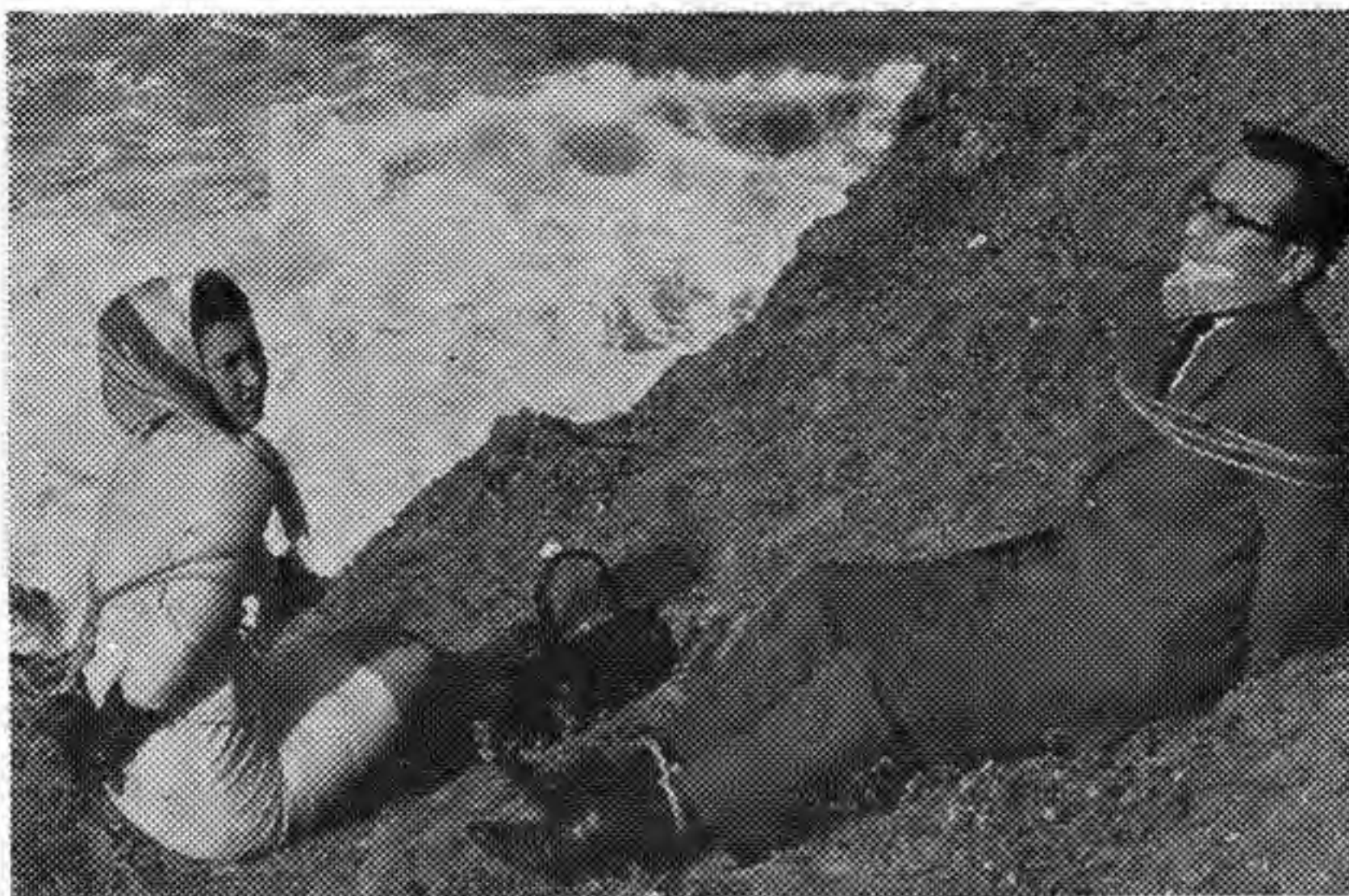
彼女は思わず悲鳴を洩らし、身悶えた。そして枕をじっと噛みながら、

「後二つよ」

と言った。ぼくは続け様に二つ打った……というような描写がフンダンに出てくる。ちなみに原題は、「Flesh of Chariot」である。

テレビの緊縛シーン

安貞名太郎



厳正な？ 放送コードなるものが存在し、茶の間のPTAがコワイ目を光らせている筈テレビにもれっきとした緊縛シーンがまかり通るのだからうれしくなる。
この二葉の写真、いずれも放映

は終わったものののだが、このままブラウソ管から消えさせるには、マニアとしても大へん口惜しいのでサロンの一隅を借りてお目にかける次第。

片や視聴率三十パーセントを誇る「ザ・ガードマン」(TBSテレビ系)が、奄美大島にロケした『恐怖のハネムーン』(写真上)のスナップ。白いスーツに黒の皮手袋というスタイルで後ろ手に縛り上げられているのは紺野ユカ。その傍に彼女のハンカチでサルグツワをされ神妙な顔をしているのが大森ガードマンに扮した中条静夫である。テレビとはいえ足首もちゃんとくくって、なかなか良心的な縄の使い方をしている。

あちら製の方は、NETテレビ系で放映していた「おしやれ(秘)作戦」(写真下)で、名探偵のパトリック・マクニーが、線路に縛りつけられた美人助手のダイアナ・リッグを救い出すシーン。まさに危機一髪の名場面といたいところだが、どうも縛り方がお座なりで危機感が盛り上がらない。
この勝負、身びいきといわれようがやはり「ザ・ガードマン」の肩をもちたいが如何？

荒野の抱擁

黒井珍平

七月号で、千草氏の近松物語について文を読みました。私も先日テレビで、二十年近くも前に見たジュゼッペ・デ・サンティスの「荒野の抱擁」(イタリヤ映画)を見て、何ともなつかしく思いました。

あの頃は、あの映画を何度みたことか。それは、今流行のドギツイ縛りの入った映画にない水々しい美しさ色気を湛えていました。筋は大変深刻で、涙ぐましくも生き生きとした名作でした。私のただ一つの好み、後手(縄がなく手で握りしめている)が二回。そう三十秒と十秒だけ。

新婚の式を挙げた若い男女がトラックで楽しく村へ帰って行く。運の悪いことに、そのトラックには開拓村の人々が生命をかけて待っている大金がつんである。そのためにギャング(日本と同じく、めちゃくちゃに荒廃した第二次大戦終了直後の頃を思い出して下さい)に襲われ、式を挙げたばかり

の新妻が人質として連れ去られてしまう。

ちっとも美人ではないが、親しみやすく、くりくりとふとった可愛い女である。救急車をよそおったギャングのバスが村人の前を通り抜けるとき猿ぐつわを噛まされ、後手にされている。そして夫である男の前を、身もだえながら引きずられて行く。三十秒の緊迫した水々しい色気。

ラストは、ギャングも、その夫も戦争の犠牲者であり友人であることがわかってハッピーエンド。私は、こういうエロティシズムが好きです。

いつか「七人の刑事」かで、新婚ホヤホヤの妻が夫を亡くして、正座してスカートをギューと握りしめて泣く場面。その膝のあたりと指のアップに強烈なエロティシズムをみて、吉行和子のたゆまざる演技にほれこんでしまい、いつまでも記憶に残っています。

これでもか、これでもかのSM攻勢のマスコミ時代に、加藤氏の「SMエッセイ」ではないが、一本の紐、ほのかにSM、ほのかにお色気を大切にとっておきたい。初心、忘るべからず。

ちかごろのクールシヨック

香川泳三

「週刊・平凡パンチ」が、二号にわたって「レモンいろの雨」をテーマにトップを飾ったのは、いささかシヨックだった。

まずその(1)は、五月六日号で、「クールでシヨックな新感覚・S & Mの世界」の文中、その滋雨を、一週に一度味あわないとイライラする青年の紹介。大きいほうの試食まで、ドライにのせている。

ウロラニーとは、舌たらずで恐れいるが、舞台が舞台だけにシヨック。つづく五月二十日号では、「告白特集」として牛乳ビン一本五〇〇円で買う篤志家の行状記。ついでに、墓地のなかで、自家用車からとびおり、

うすいクチビルをびっくりするほど大きくあけて、レモンいろの雨を存分に味わせて頂くシーン。二十八才独身のサジスチンが、海岸でひろったバカみたいな男を相手に、実演を敢行する、すばら

しい特ダネ。

牛乳ビン一本五〇〇円とは、あの、とおとい雨を、ずいぶん安く評価したもの(サカズキ一杯千円の相場を、このライターはごぞんじなさそう)。

つづいて、サイケ雑誌(月刊)「話の特集」七月号は、おしっこ対談。そのなかで、直か呑みのエピソードやら、いろいろおもしろい話がでてくる。

じか呑みで顔にシブキが散ったら、女性がハンカチでやさしく拭いてくれたとは泣かセルはなし。ここでも、牛乳ビン一本が五〇〇円とは、ダンピング。ボクなら〇を一個多く五〇〇〇円で、喜んでいただきますのに。

ともあれ、こうした一般誌が、きそって、レモンいろの雨の記事をのせだしたのは、うれしいことだが、かんじんの、総本家のわがKK誌が、近頃、この方面に冷淡なのは、われら美酒党にとってはさびしいかぎり。なお、私の手元には、短期間に、創作ルポルタージュ、あわせて数本の「おしっこテーマ」の作品が到着、丁寧にフアイルされたことを、ご報告しておきます。



新聞記事より

ムチ打ち症について

鶴 藤 恵

昭和四十三年五月三十日附、地方紙、神奈川新聞「自由の声」欄に、「非医学的な呼びかた」と題して、次の一文が掲載されている。ちよつと興味がある投稿なので、その全文を紹介しよう。

○自動車事故がますますふえ、特に追突されて首をやられることが多い。その症状はムチ打ち症と呼ばれている。これは米国からはじまった名称とかで、もちろん一時的な呼び方とは思ふが、いったいわれわれ日本人の中で、ムチで打ったり打たれたりした経験のある人がいるだろうか。七十余歳になる私でさえ、まだそのような経験はない。したがってムチで打たれた症状がどんなものかわからない。もしこれが仮の呼び方だとして、なおさら一般の人たちにピンとくるような名称はないものかと思う。医学界の権威ともいう

べき人たちまでムチ打ち症などと呼んでいるのは、不思議でならない。

また、イタイイタイ病というのもひどい。およそ病気と名のつくものに痛くない病気はあるまい。新しい病気で、まだ名称がないから、だれかはじめにいったことが通用されていることと思うが、医学の進歩で、心臓の移植や、眼球の入れ替えまで行なわれている現在、余りにも非医学的な名称だと思ふ。

江戸時代ならいざ知らず、近代医学のもとで、ムチ打ち症とかイタイイタイ病などという病名は、医学界の恥ではないだろうか。もう少し医学的な呼び名を考えてほしい。

以上だが、この投稿を読まれて何か疑問を感じないだろうか？ 投稿者である七十余歳の桜田と

いわれる方は、ムチ打ち症の名称について、少々感違いしていらっしゃる様に思う。この一文から察すると投稿者はムチ打ち症の名称は、ムチで打たれた場合の肉体の反応、即ち打たれた瞬間に背を反らし頸をのけぞらす所作から採ったものと思われている様である。

実は小生もムチ打ち症の名が使われ初めた頃は、ムチ打たれた瞬間の軀の状態と追突された瞬間の軀の状態が似ているところからこの名が使われたぐらいに思っていた。ところが実際にはそうでなくムチは振れば良く撓う。追突された場合も同じように腰を基点として、上半身がまるでムチの様に前後に撓うところからこの名が付いたという。

これは医者と被害者（患者）の対談として某紙に載った記事を小生が読んだ受け売りではあるが、ムチ打ち症の名の由来は、これがほんとうであろう。

小生も過日パブリカ運転中、乗用車に追突され弾みで前の軽自動車に追突し散々な目に会った経験があるが、交通事故の激増している今日お互いに気をつけ度いものである。

編集部だより

○八月号の「奇クサロン」で「緊縛と妊婦の資料提供」という一文を寄せられた木戸悦子さんに電話をして逢ったところ、出産の予定日が八月三十日とのこと。八月三日以降が臨月で、七月四日以降が九カ月ということになる。

○予想したより遙かに大きなお腹なので九カ月に入ったあたりから辻村隆氏の「カメラハント」に登場してみないかと打診したところ本人も大乗気でOKという返事。いずれ誌上に、その英姿を載せることになるかもしれない。

○今月号に掲載した団先生のシナリオ「赤い拷問」。これは団氏が特にマニア諸氏の希望を入れて執筆した鉄火娘をいたぶるというストーリーで、八花と蛇シリーズの第六弾といったところ。主演は本誌でお馴染みの谷ナオミ嬢。下田ロケには四月号、五月号のカメラ・ハントに登場した、賀山芳男氏が同行し、専属スチールカメラマンに混って緊縛場面の撮影を行った。誌上にもその一部を発表させて貰った。賀山氏が随伴された口

《提案》 作品鑑賞席

原 五平

かねてより思っていたことですが、七月号の「読者通信」に立町老梅氏が提案されているので力を得ました。感想欄設置提案に賛成します。本誌の特色ともいえる読者通信欄は、最近の感じからいうと、もはやプレイの呼びかけや、便り交換希望の個人的な通信に占領されてしまったようです。

この辺りで、掲載作品に対する「鑑賞席」のような欄が設けられることは、必要で急務のことだと思います。ただ、一般大衆誌のようない一方通行ではなく、読者と作者の意志交流の出来る対談の場的なふくみが欲しいのです。またその感想の統計によって、いろいろの効用が現われてくるのではないのでしょうか。現在は、作品評などは主として、サロン欄にあるようですが、鑑賞席が設けられたらサロンはサロンとして、もっといろいろと楽しいものが盛り込めるでしょう。

わたしは大声で「作品鑑賞席」の新設を提案します。

＜告白＞

「S」か

「M」か

町 陽一



一般にSはMの反対だというのが果してそうだろうか。Sの中にM気のある人も居るし、Mの中にもSに喜びを見出す人も多かるう。

私のようにSでもMでもという人も少なくはないと思う。

Sの人で、Mの相手を見つけて発散出来る場合はいいが、その相手がいない場合は我れと我が身にS行為を実施する。すなわち自分がSであり、Mでもあるのだ。一種のナルシズムかも知れない。

私の場合、いや、大半のS男性がそうではないかと思うが……女性が憎らしくて苛めることに喜びを見出すのではない。それどころか、女性を愛するから、好きな相手であるからこそ縛り、鞭打つのだ。その人が、そうされることによって余計に愛らしくなるからなのだ。

また、私がMになる場合も、彼女の縄目が、鞭が、私に対する愛情の現れだと思ふから、余計に嬉しくなるのだ。

相手が居ない時、私は自分自身に縄をかける。可愛い最愛の女性を縛るつもりで……。又、時には、自分自身を鞭打つ。彼女に打って貰っているつもりで……。

だがやはり、つもりだけでは淋しく空しい。

本当に気の許し合える相手が居なければ、正式にSやMとは云えないのだろう。

ケーションの話は『鬼六談義』にして貰う筈だったが、これは今月号には間に合わなかった。

○最近、地方都市在住の読者よりの通信では本誌が書店の店頭から姿を消してしまったという便りが多い。中には廃刊になってしまったのではないかと問合わせてくる方も少なくない。先日、二県ばかり青少年対策室とか青少年対策本部とかを訪ねて聞いたところによると、出来るだけ書店の店頭には出さないように指導しているのとこととであった。それ故、店頭を眺めるだけではなく、是非在庫の有無を店主に尋ねて頂きたいと思う。

○原稿料は出来るだけ速かに送金するように心掛けています。最近発行前に届けているものや、未発表のものでも掲載の決定した分には稿料の支払いをしているので御承知願いたい。尚、当方より依頼した原稿以外は理由の如何に拘らず一切返戻の求めには応じられないので、お含みおき頂きたい。○御送付の原稿は事情の許すかぎり原稿用紙を使用してほしいと思う。それから鉛筆描きの絵は製版出来ないで黒インクか墨を用いてペンか筆で描いたものを御送り頂きたくお願いしておく。

＜短歌＞

「生花」

高村初子

海老責をうちかえされてさされ
たる二つの花は揺れつつかしぐ

胸をおす息苦しさにふと見れば
谷間に活けし花ふるえおり

さかさまに折り曲げられて括ら
れし縄目痛きも花活けられて

やわ肌の肉の谷間にいけられし
花白けれど紅に見ゆ

悲しきは女のさだめ二もとの生
花までも責の具となる

深々と羞恥の個所に押されたる
茎の痛みに思わず呻めく

折り曲げし頸痛けれどそれより
も目の前に咲く花痛々し

高々と尻をかかえて薔薇の花い
ま美しく匂い放てり

羞かしさ悲しさ今ぞ極まれり海
老責のまま生花となる

ミミズのたわごと

「S」と「私のS」

早乙女責留

責めには、数多くの形がある。
花と蛇を見れば判るように、考え
出せばきりが無い。が、だいたい
責めのポイントはいまきまっている。

責めは、苦痛を与えるものと、
羞恥をおおるものとの二つに大別
出来ると思う。中には浣腸や開股
逆吊り等の様に、苦痛と羞恥を兼
ね備えているものもある。この場
合、苦痛、羞恥の、いずれがより
強く感じられるかによって、先の
分類にあてはめられる。この感じ
方は、責められる側によって、か
なりの個体差を見る。したがって
自分の責めの目的と、責めの手段
と、M女性の感受性とは、同一線
上に並んだ時に、本当のプレイが
成立するのである。S側が一方的
手段をもって、がむしゃらに責め
自分のみ満足するのはプレイでは
ないと思う。

さて、S紳士はというと、「責
め」これ私の人生というように、
会社において、女子社員の一挙一
動に目をこらし、その中に責めの

ヒントを得、帰りの電車の中に女
性の吊り責めを見、サテ今夜は!!
という猪突猛進型。又、昼は淑女
夜は娼婦ならぬ、昼は虫も殺さぬ
純然たる紳士、夜になると持病の
発作を起す、ジキルとハイド型と
が見られる。私は後者の部類に入
るだろう。もちろん羞恥責めであ
る。最も好むのはセーラー服の責
めである。やはり十六、七の年令
がいい。したがって私達には不可
能となる。キクにはこの責めが全
然といっていいほど出てこない。

カメラハント、分譲品等で採り上
げてくれたら……と思うのは、ひ
とり私のみではあるまい。

というわけで専ら妻を「むく」
事に精進している。縛るのばかり
が責めではない。まずは縛りナシ
に始る。題して、観賞責め。晃々
たる光の下に種々のポーズが繰広
げられる。ただそれだけで充分な
る責めとなる。それだけでは終ら
ない。わが家には膣圧計がある。
乙女が見たら、目を回すかも知れ

ない。一万円近い高価な器具だが
それだけの価値がある。

やがて彼女は、羞恥と疲労のた
めにグッタリして来る。そこで縛
りに入る。筆が、羽毛が、パイプ
レーターが、敏感な肌を次々と襲
う。カメラの鋭い目が狙う。さす
がに顔をそむけ、身をすくませよ
うとする。

やがて責め道具は私の口唇や、
舌先にすり交えられ、それは責め
ではなく「愛」に移行して行く。
たいていは行きつく所は同じなの
ではあるまいか。

ところが、私の妻は、ダメなの
である。後手縛り以上はいやがる
のだ。開股責めなどもっての外。
したがって、今までの話は、すべ
てミミズの戯言。このような責め
ができたなら……という事。無
理強いしても……と、思うのだ
がアパート住いの悲しさ、隣室へ
の気兼ねもありそうもいかず、い
つになつたら出来る事かと、出る
のはタメ息ばかりなり。この道で
成功している方に、この頁を借り
てお願いしたい。成功のケースと
それに到る過程の記録を教えてください
ただけならと思っております。ど
なたか教科書となるべきものを、
お与え下さい。

……
〔無 題〕
……

能 美

積

七月号に「データーと……」を掲載して戴いた処、社内で意外に反響がありめんくらっています。よまれても精々二、三人と多寡をくくっていたのですが、「おもしろ

いもん、読ませてもらったで」とか、なんとか、ほめられるというより、おちよくられてる感じの聲がしきりなのです。こうなったら便所場の火事（や

試し打ち

By
K-HAGINO



廣作イラスト

「鞭のイメージ」

萩野和夫

けくそ)で社内でも奇ク愛好会でもつくってやろうか、それとも田舎におちのびようか、と目下、思案中という次第。

処で私は、大阪に住んでいながらまだ一度も箕田編集長、それにセミ・レギュラーの辻村、山本両先生にお会いしたことがありません。いつも社の近くを通るたんびに編集長、今ごろは俺の原稿、屑箱へほうりこんでるのちがうやろか、と横眼で睨んでるのです。が、お会いしない最大の理由は、なんととっても怖いという一語に尽きます。別にとって喰われる、という怖さではないのですが、少年時代、一度だけ講演を聴いたところのある共産党の野坂参三氏の顔が、なんとなく編集長とだぶるのです。官憲のきびしい追求にもくじけず主義を押しとおした偉大な政治家と、奇ク編集長とは全然、別なことは解りますが、世論に屈せず黙々と奇クを発行しつづける箕田さん。たくましい大阪商人のど根性、といってしまうえばそれまでですが、金もうけだけでは割切れぬなにかがある筈、と思うのです。もっともおふくろに、大きくなっても共産党にだけは入らないでおくれ、と言われたように、今

ならさしずめ、奇クだけは読むんじゃあないよ、といわれそう。

辻村さんは、文章を拝見する限りでは一向に怖くないし、山本氏は私と同年配の青年紳士で矢張り怖い感じはしません。ただ思うのに、もし私がカメラハントをやってみたら、「能美積、取材中にモデル嬢に暴行」てな記事が、三면을賑わす事は必定。要するにこらえ性が無いんですな。ですから親しくしていただいてハントについてこいとでも言われたら、それこそ一巻の終りと相成る。それが怖いんです。誰です、お前のような出歯亀が傍にいたらモデルが引き立つ、なんて仰有るのは。

でもですよ、天下の美女に繩をかけ、写真をとるだけで指をくわえて我慢なんてのは、ずい分、辛いとは思いませんか？ あなたは辛抱出来ると確約なさいますか。駄目でしょうが。仮にその場は我慢をしても、白濁の肌がちらついていけません。その意味では想像の世界にあそぶ、我等の方が利口というもの。ものは考えようであります。だから私は、お三方には会わない。怖い三氏を廻上にあげて、フォトをもらう方が誠のど根性なのであります。

ショート ショート

ある日の夢想

タバコと女

絵と文 城野道一



真暗な中に小さな火が螢のように明滅してゆれている。突然、答の音と悲鳴が同時に起り、赤い小さな火が宙に浮いて、激しく上下に揺れ動いた。

「ね、お願いだから、もうかんにんして……」
明らかに何かを啜えている女の声が嘆願する。小さな螢火がブルブルと震える。

「甘えるんじゃねえッ」
男の叱咤と共に電灯が点けられた。パツと明るくなった部屋に、羞しげに身をちぢめる女の、露わな肌がさらけ出された。
まだ少女とも見えるような若い女だ。ふっくらとした感じの両手



を後手に、ふくよかな胸を横に走る縄が二筋、哀れにもしっかり縛られて立ちすくんでいる。
その上、彼女の唇には、三十センチもあるかと思える長キセルが啜えさせられているのだ。暗い中で揺れていた小さな螢火は、そのキセルの火口につめられたタバコの火だったのだ。
「だめじゃない。さっきの光りようじゃあ、吸ってるんじゃなくて吹いてるワ」ソファから、声がかかる。バーのマダムといったタイプの女が批判する。
「はやくしなきゃあ、明日の開店に間に合わないじゃないのよ」
「へエ。大丈夫、吸わせやす。オイ、甘えたって、吸えなきゃあい



つまでも許さねえぞ。もっとマジメにやらなきゃあ、答だけじゃ済まねえぞ。このカミソリで……」
「カンニンッ！吸いますから」
「そうかい。じゃ、しっかりやれとにかく明日の開店までに吸えなきゃあ、ジョリジョリだぞ」
男はマダムと頷き合って、縛られた女に改めて、タバコを詰めたキセルを啜えさせ火を点けた。
「サ、答のたびに吸うんだぜ」
後手の女は覚悟したように唇をひき締めてキセルを啜え直した。
「ピシ！」と答が鳴った。スツとキセルの光の火が強く光り、つめタバコの山が少なくなった。
「よし、その調子だ」
キセルを啜えた可愛い唇の間から、白い煙りがもくもくと吐き出されて来た。

「ピシッ」「スウー
ムウー」
「ピシッ」「スウー
ムウー」
答の音と、タバコを吸う音、吐く息のリズムは、そのテンポを速めながら、いつまでもいつまでも続くようだった。

映画通信

私の見た緊縛映画

細川英治

「浮気妻」関東ムービー映画作品

夫との夜の生活に不満をもつ人妻が、ある事から知り合ったつれこみホテルの女将に、帳場の押入れをあけてマジックミラーで隣室の様子をのぞかせてもらう。そこには、若い豊満なびちびちとした女が荒縄で縛りあげられ老人に鞭でビシビシと打たれ、裸の女体をくねらせてうめいているシーンがあつてなかなか見たえがある。

「よこれ」

この映画では、田舎から出て来たまだ二十才前の小娘がヤクザのわなに陥り無理やりに売春婦にしまれる。

それを娘がこぼすと、パンティだけの裸にむいてえび縛りのような形にヤクザ二人がかりで縛り上げ、うすぎたない押入れの中にほりこむ。二、三日そのままにしてこらしめる。食事の時間が又大変

七月号 青井松造氏

「公園」に模して

「受感」

系振昇

遮断機が降りた。ふと隣りあった娘さんの手首に光る金鎖りが目につく。私にはその腕時計の鎖りが捕鎖に見える。こう感じるの私がいけないからだろうか。公園で若いアベックに会う。女性立木に寄りかかり、後腰に廻

した両手で幹を支え、向い合った男性と何か話している。私には、その木に後手に括られて、女が男に何か詰問されているように思える。こう感じるの私が悪いからなのだろうか。

大きな犬を連れた散歩の娘さんが、ぐんぐん進む犬の鎖を両手で押え、よろけながら押えようとしている。私にはそれが、犬族にかまった人間の牝が、両手を括られてひきずられていくように思える。こう感じるの私が変わなからなのだろうか。

で、娘が食事もとらないで反抗すると、チンピラ二人がかりで無理やり握り飯を娘の口の中にねじこんでしまう。口の中にいっぺんにたくさんめしをつめてこまれた娘は縛られたまま目を白黒させて呻き、苦しむシーンがみもの。

「青い暴行」国映

江島ゆかりが浜の娘に扮して、浜の若いチンピラ三人に海辺で丸裸にむかれて暴行されるシーンがあるが、若い江島ゆかりが必死に抵抗して裸のまま浜べを転がりまわるシーンが迫力があり、若い女体が海水を浴びてなまめかしい。

「処女残酷」

この映画では、まだ売春がおおやけにおこなわれていた頃、島のヤクザのボスにがんじがらめにされた娼婦の一人、由美がそこを逃げ出そうとしてつかまり、リンチにあう。腰巻一枚の半裸にされ、足には石のおもりまでつけられて木馬のような物の上に無理やり跨らされて木馬責めにあい、おまけに手下のヤクザに足をひっぱられヒイヒイ泣きわめく。

しまいにはヤクザのボスがヤキゴテで由美の乳房を焼く残酷さである。とうとうあまりの責め苦に由美は気が狂ってしまう。

「花と蛇」に望む

佃 鬼八

私が本誌を知ったのは、今年の一月頃古本屋で見かけてからである。その時、表紙に魅せられて何の気なしに買って読んでみた所、非常にすばらしかった。読んで以来、病みつきになった。読んでいるうちに、昔のはどんな内容だったのか、読んでみたい欲望にかられ既刊号を取り寄せたほどだ。

昔のと比較すると、確かに現在の本誌は充実しているようである。中でも、特にすばらしいのは団鬼六氏の「花と蛇」である。流暢な文章で、羞恥責めの極限を極めているようで、回を重ねるたびに味わい深い小説であると思った。しかし、私は団氏に一つ注文がある。それは、捕えている女性達を一室に集め、彼女らに互いに責め合わせるのである。例えば、静子夫人が京子を、京子が小夜子とといったように。そうすれば責める方の女達にも精神的な責めとなるのではなからうか？ 団氏が私の提案を念頭に置いて書いて下されば実に光栄に思う。

読後感

可愛い妖精たち……

高野原美

奇ク誌で最初に開くのは、ハントの頁である。カメラハントに登場する新鮮で若々しい裸の可愛い妖精たち、この女の甘い羞恥に溢れた肢体が、辻村、山本両氏の冷酷な？ 探究心の前に何らなす

すべもなく、全裸にされて縄目が豊かな柔肌に喰い込んでゆく。

私は、次々と新しい女性が、それぞれの個性と肉体をもって登場し、変化に満ちた緊縛美を展開してゆくのに魅惑されている。可愛いモデルたちである。このカメラハントは、奇ク誌の中でも最も素晴らしい企画であり、読者にとって最も楽しい記事であると思う。勿論、毎号のハント記事は大切に保存し、写真とともに記事を読んで楽しんでいく。

ところが七月号で、山上氏が、同じような内容になるので一本にしたかどうかと提言しておられるので、こんな考えの人もあるのかと驚いている次第である。

同じ内容とは決して云い切れない面がある。同号で辻村氏が「や

はり目新しい人になるべくという気持ちで、そうした人を優先的にするので、一回きりになってしまいう惜しい人もある」と云っているが、これとても、何もそう気を使う必要はないと思われる。

同じ女性でも、その時によって反応も異なり、緊縛ポーズも異なる筈で、それだけで充分に読者は満足できるものである。

モデルによって、あっさりとした緊縛を切り上げ、あまり羞恥責めの強烈なポーズを撮っていない場合がある。モデルが、願望が、女性の甘い夢が急に現実のものとなり男性と二人きりになって裸身を晒した時、思いもよらぬ強い羞恥本能と防禦本能に突き上げられて、無意識的に必死の抵抗を示す場合も見られる。また反対に、願望が現実のものとなった歓喜に羞恥を克服して、あっさり全裸になって厳しい縄目に身をゆだね、死ぬほどの露骨な羞恥のポーズに、女の露出欲を満足して喜びに胸をふるわせている場合もある。それぞ

れの女体のもつ変化、複雑な心理が読者を楽しませ、美しく可弱い女体を弄び責める男のサド心理を心の底からかき立てさせる。緊縛責めも、単なる緊縛から開股、海老、逆海老、逆吊り等々の変化があり、大島照代の演じた浣腸と排泄羞恥責め、木村洋子のムチ打ちまでバラエティに富んだものである。同じ女性でもその時の環境、責めの変化によって新味がでるものである。

カメラハントは、毎月三本立てでもよいし、同じ女性でもかまわない。ますます私達の希望を満すよう充実したものであって欲しいと思う。

奇ク誌は、常に批評されているように一般誌より同人誌的傾向が強い。それだけに読者は読むと同時に体験することを求めている。それだけにハント記事は、生身の体験記事であり、その生々しい強烈な体験が写真によって真実性と現実性を与えている。これは機会さえあれば誰れでもが現実のものとする可能性を秘めている。

私は「花と蛇」も好きだ。しかし、ハント記事に較べるとどうしても迫力に弱く、夢物語に終っている。これは、読者の夢をたくす

「美人コンテスト」はSM女性の中から

錦田 紘

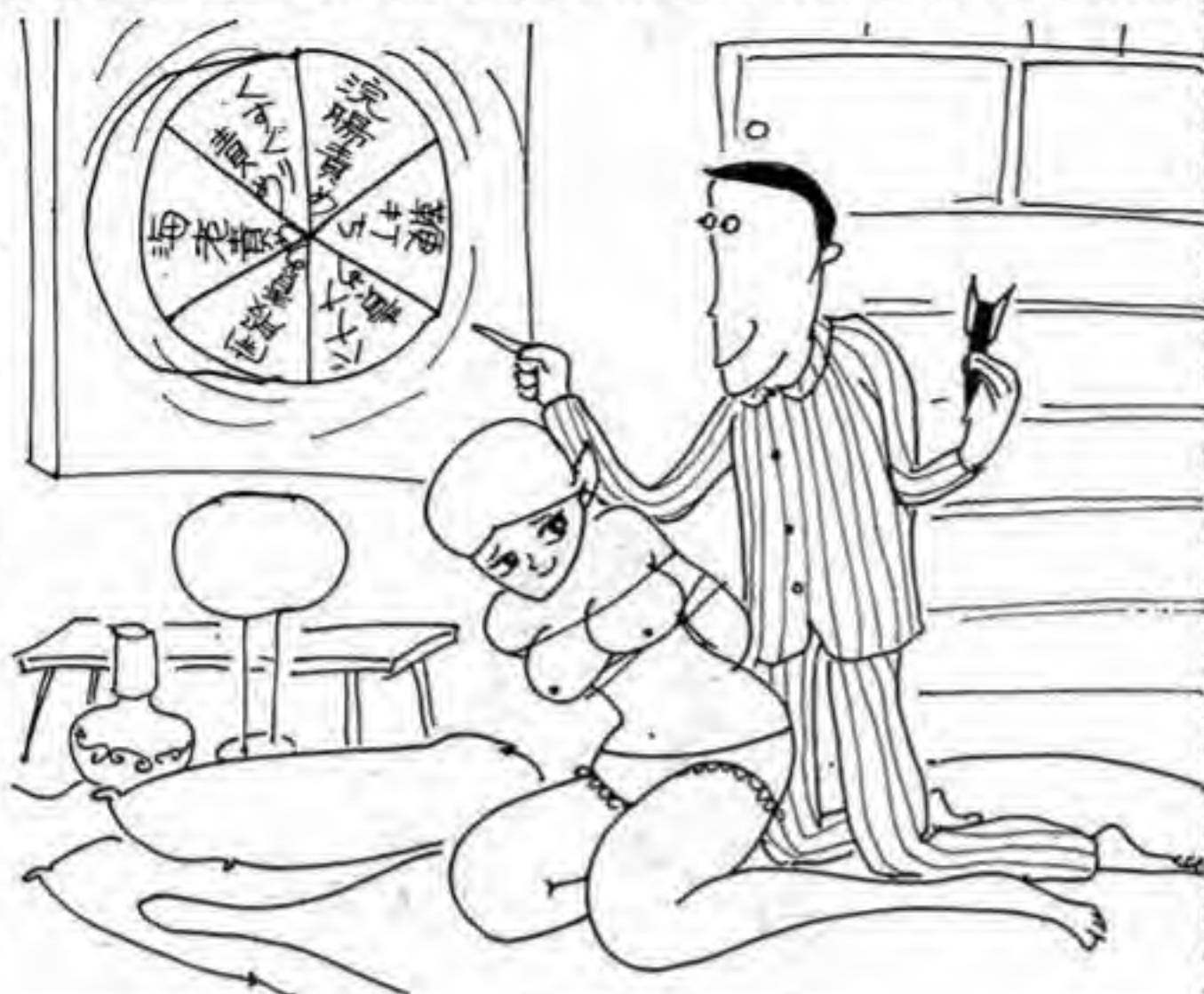
KK誌でSM美人コンテストが企画され、我々ファンにその「清き一票」を投じられるチャンスを得たことは真に編集部のアイディアに感激する。今から発表を心から待ち遠しく期待している。

このコンテストの目的は一般の美人コンテストと異りがあってこそ意味がある。それはSMファンのためのコンテストとするのが正しいと思う。

その審査の条件として

- (1) 美人で
 - (2) プロポーションが良く
 - (3) SMスタイルの体付きと
 - (4) SM趣向の持主であること
- いわゆるこの世のSM女性の中から入賞するのが正しいと思う。さて以上の四つの条件のサイドから考えて「清き一票」を投票しよう。でもSMの世界で、この条件に合う人は少ないと思う。勿論ピンク映画の女優のようにプロ的でショウウの（SM女性でないのに演技的に）職業的女性は除くべきである。その理論はご存知、KK

「運任せ？」 九美 淳



・ 僕のイメージ画集 ・

「ポスター」 室井亜砂路

冬木尚子さんも愛用していた
美しく丈夫な犬
小屋です。
鉄格子、錠前
付、その他の特製
品も御座居ます。
御買上の方全員
に鞭1本サービス。



犬小屋な亜砂路屋

別註にも応じます。

日本ペット同好会 推薦
TEL (930) 1158 (代)
ラテリ イイコヤ

小説として意味があるだろう。
ハントは、ピンク女優が登場し
てますます面白味をましてくる。
今後の辻村、山本氏の活躍を期待
するとともに、できれば切腹や女
処刑のポーズ等も演じさせて欲し
いと思う。

ものであり、豊かなムッチリした
臀部の美を美事に見せた猪吊りの
ポーズは、最も好きなものであつ
た。その他、木村洋子、関谷富佐
子、谷ナオミなどは何度見ても魅
力がある。

私は提案する。今までのモデル
嬢のコンクールをしてはどうだろ
う。簡単に写真入りでモデルの特

徴、責めを紹介して投票する。一
位から五位迄の女性を紹介するこ
とにして、そのフォートを撮る時
に読者を五名程度参加させる。
もう一つは、カメラハント特集
号の作成。誌面ではフォートが不
鮮明なものもあったので、フォ
トは各モデル毎にグラビアにして
記事も願いたいものである。

ファンのための我々の世界を思さ
せないためである。

独身女性も注意！チェックすべ
きである。SMの真の理解もでき
ない単にアルバイトかせぎのよう
なチンピラ女性なんか、尊い権利
を施行する我々は除外すべきであ
る。我が妻が真にSMを理解でき
るようになったのは結婚後五、六
年過ぎてからである。

結論を申そう。SM女性の中か
ら選ぶ。それには

(1) 独身のSM女性
(2) 既婚のSM女性

こう分けて投票しなければ、フ
ァンの一人として投票に迷いが生
ずる。最近のハント、ルポ等の中
から私なりに予備投票しよう。

独身の部

第一位 左近麻理子

第二位 梨花悠紀子

第三位 芝 梨枝子

第四位 長井ハツ子

第五位 佐々木真弓

既婚の部

第一位 関谷富佐子

第二位 安井喜久子

第三位 中河 恵子

第四位 田宮 夫人

第五位 愛知 葉子

以上

私の夫婦プレイ

フォト通信 「ゆ う 子」

新 田 英 雄



ご無沙汰しましたが、毎号、ますますその素晴らしさを増した辻村様、山本章様のルポを楽しく読ませていただき奇クサロンの長田夫妻、山本夫妻の、夫婦プレイの発表等を拝見致し、感激しています。

去年機会を得まして辻村様とお会いすることが出来、私達夫婦のプレイに対するご助言などをいただいたことが嬉しく、大いにプラスにさせていただいています。以後、関西方面に旅行する度にお忙しいのを承知で、図々しくおしかけて行き、お話を聞かせていた



だいております。六月号に見られる長田実氏のプレイフォトを拝見しまして、棒を使った形の面白さにひかれました。更に私の注目したのは、多分、革製品であろうと思われるプレイ用パンティですが、今少し詳しくお話しが聞きたいものと思っております。私も三種ばかり革で自作し、プレイの度

に使用させていますが、フォトでは発表出来かねますので、長田氏に直接お見せして、アイデアの交換など出来たらと思います。

山本武男夫妻の鎖による全身緊縛、きりッとした緊縛感溢れるフォトは感嘆に価するもので、私達にはとてもよい参考品となりました。なんとかよい機会を得て、お会い出来れば幸いです。私は仕事の性質上、月のうち半分は東京を離れ、全国の都市に旅行しておりますが、特に名古屋、京都、大阪、岡山、広島、福岡、下関等には滞在の機会が非常に多いので、いつかはきっと皆様にお目にかかれるのではないかと期待しております。

同封のフォトは、例によって私

「常連」の偶筆・・・
夜乃探郎

私が奇クを愛する気持を具象化するには、書く、という孤独な作業姿勢をとる以外になかった（それがどのようなものであれ）。でもこのごろ、芳野さん同様、筆勢は衰えましたように。誌友がふえたわけではなく、私のいいいたいことを吐き出してしまったように。

八月号の芳野さんに刺激されて「まだ生きているよ」のアイサツまでに一筆。……私も、田中氏の文に「叩かれる花もまだあった」と、むしろ喜んでゐるほうで。芳野さんゴアンシン賜りたく。

ところで、かつて私の企てた前衛（？）も、ちょっとアチャカラカに流れすぎて失敗したようだが、「平凡パンチ」（6・24号）の、

——キミも学ぼう、この反逆的カラミ哲学——「デザイナー横尾忠則の血煙り喧嘩論」なるものが目について苦笑させられた。

グラビア、口絵の全廃。どうにもならない奇クの過渡期に、私はこのごろ週刊誌などをみて奇妙な思いにとらわれるんだ。奇クに時かれたはずの種が、よその畑で交

達夫婦のプレイの一端ですが、革バンドによる乳房打ちと、ローソク責めを楽しんだときのもの。私も、ゆう子も特に乳房責めを好みます。



最初に目かくしをして、両手を背後にまわさせ、胸の上下を縛ってから手首で止めました。続いて腹部を固く縛り、坐らせたまま革バンドでハズミをつけて打ってやると、それを望むゆう子も、さすがに最初のうちには相当にこたえるらしいのですが、所かまわずの全身打ちに進むころには、ハッキリと恍惚境に遊ぶ表情に変わって行きました。いつものことですが歯をくいしばって、痛さを避けるのではなく、明らかに求める様子が見られます。

口に帯をかませ一旦、縄をとい縛り方を変えてやりました。ゆう子の気をしずめるために二十分ぐらいいは、じっと坐らせておくのが普通です。フォトにはありませんが、この時にはローソク責めをやってみました。足首を吊って人間燭台を作り、革バンドで鞭打ちと並行してやると、ゆう子は悲鳴を噛みながら悶えていました。別に、こと新しいアイデアではないのですが、初めてやってみたこのプレイには、ゆう子も私も、我れを忘れて没入出来る新鮮味がありました。

プレイの終了後に訊いてみますと、ゆう子は、ちょっとしたことでも変わった責め方は気分も変っていい、というようなことを云っていましたが、気に入ったらしいです。同じことの繰返しに新鮮味の乏しいのは当然ですが、その都度、新しくしてしかも適当な責め方となると思うに任せません。絶えず仕事に追われる身ではあ

りますが、なんとか変ったアイデアをとり入れてプレイを続けて行きたいと思えます。皆様からのご教示を、心からお願ひしたいと思ふものです。

議論などはしようと思いませんが、田中八郎氏が、夫婦プレイなど何が面白いのか、というようにことをいわれていましたが、私達夫婦にとっては、面白いというよりひとつの必要な事ともいえるのではないかと思っています。おわかり願えたら幸いと思います。



種となって開花しているよう。だがわが愛する奇クは完成ではなく、そのまますを記録とみるならばこれもまた、つわものどもの夢の跡だけは残ること、否定ではなく本筋と考えるべきか。

芳野さんの文学(あえてそう云う)には一つの弱点がある。けれど真正面からテーマに取組むより、現実的に、いつでもホネをひろってくれる誌友が、身近かにふえたことで発散されるならば、なにも好んで孤独なペン作業などやることもない。初期の作品から現在に至る意識された断層を埋めそこらから出発し、独自の神酒文学を開拓することが文学の本質であっても、受入れ体制が不完全であれば、私も無理に要求も出来ないし、まあ、せいぜい濡れにぞ濡れてクダサイ、とでもいうより仕方がないよ。

ただ一言、現実的な常識に、ならんかの意味で影響されざるを得ない実生活にあつては、マニアは理由の如何によらずアウトサイダー(よけい者)エレジーよりの逃避は出来ない。故にこそ、呪われた栄光ある耽美な錦の御旗を、深淵より大切にしたいと思う。まあ命だけは保っておきましょうや。

貞操帯

睦月笛一郎

世間には奇抜な団体もある。日本発明狂会なども其の一つである。今は大半がスリッパに変わったが、昔は便所の履物はたいていが下駄であった。汚いという先入観からか、殆んどの人が脱いだままにして便所を離れ、次に入る人が反対に揃えてから履くのが通例で

ある。そこで発明狂会の一員がどちからつかけても履ける便所下駄を工夫して、実用新案特許の出願をした。原理は簡単である。便所下駄を前後、相似形にして真中にベルトを付けただけの事であった。ところが少しも売れず、発明者の家は便所下駄の返品で



「鏡の中のおんな」

野江三郎

埋まり、風呂の薪として燃やすのに一カ月余りかかったという。表題の貞操帯や月経バンドの発明、又は新案特許の出願が有るかと思つて調べたところ、結構出願者が後を絶たないと思つて、新案特許の整理番号が両者とも記録されていた。貞操帯で有名なのは、フランスのルーブル博物館に陳列されている数種の貞操帯である。薄い数片の鋼を組合わした貞操帯は僅かながら模様も見られ、正に芸術品といつても過言ではない。エルササレムに向けて進発する十字軍の騎士に、生涯の貞節を証明する貞操帯が、夫の手で妻の蜂のようにくびれた細腰にカッシリと穿められ、鍵を掛けられる情景は中世に似つかわしい。中には鍵ではなく、鍛冶屋の槌でかしめられ、蒼白い裸身に細い金属のベルトが妖しく映えた事と思われる。又、他の博物館では革製の貞操帯が飾られていた。好事家なら垂涎の品も、門外漢にはどうして大小便の仕末をするのか不思議でならなかっただろう。他の大陸でも貞操帯はあったがヨーロッパの貴具にも似た貞操帯と異り、呪術的のものが主で、特殊の色に染めた細布や麻を腰に捲

く程度であった。日本でも戦前、欧州に留学した有名な音楽家が秘かに持込み、夫人に強要していたという。此の音楽家は、夫人や妾を、当時としては珍らしい寝台に手や脚を縛りつけ、大いに変態ムードを悦しむので有名だった。戦後、深川の或る下駄屋の隠居が貞操帯を種々作製していたのを機会があつて見た事がある。又、愉快な連中同志が作製を思いついてある鑑師に依頼したそうで、美事な革漆仕上げの貞操帯を完成したが、美術品としては見事だったということである。よく市販品で貞操帯と称するものを見るが、およそ実用には供し難いもののようである。誌上でも夫人に貞操帯的なものを着用させて居られるらしき発言を見受ける時があるが、女性側からの感想は如何であろうか。六月号サロンに載った、山本武男氏の奴隷妻についての一文と写真。プレイに徹して居られて感心した。夫人の御感想を、是非共お聞きしたいものである。女尊男卑の傾向が強い米国人の中には、病的な程の嫉妬心から妻に貞操帯を強要する例も多いらしく、品物も簡単に手に入るそうである。

〔最近作緊縛傑作フオト〕

開股竹棒羞恥責め	大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円
逆エビ責め手足縛り	大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円
竹棒開股強烈縛り	大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円
鼻責めと鼻孔大寫し	大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円
首縛後手強烈縛り	大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円
全裸開股膝頭縛り	大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円
菱縄縛り竹棒責め	大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円
柔肌に喰込む縄目	大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円
豊満な全裸を弄る	大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円
逆エビに痛める魔手	大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円
黒髪をいたぶる手	大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円
大島 照代	

菱縄縛りにあえぐ	大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円
強烈後手縛りの狂態	大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円
牝犬奴隷の醜態	大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円
全裸二つ折り縛り	大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円
菱縄しばりの表情	大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円
八の字開股羞恥責め	大手札四枚一組 略号「そま」 五〇〇円
菱縄縛りの全裸を晒す	大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円
奴隷捨札開股縛り	大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円
菱縄強烈開股縛り	大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円
竹柱立縛り晒し者	大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円
柱宙縛り苦痛表情	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円
猿轡股間縛り歩き	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円
木村 洋子	

浣腸にむせび泣く女	大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円
身動き出来ぬ強制浣腸	大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円
竹棒開股苦打ち縛り	大手札三枚一組 略号「つて」 四〇〇円
後手吊りにもかく女体	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
逆エビ縛りの色々	大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円
逆さ吊りと足吊り	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
片足吊り上げ縛り	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
美しき臀部を晒す	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
階段に晒す全裸身	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
花瓶を太股で挟む裸身	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
麻里子の裸身をあばく	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
柱に立縛りの全裸身	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
左近麻里子	

絶妙の鞭打ちポーズ	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
悶える白肌を俯瞰する	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
両膝頭開股宙吊り	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
片足挙げ吊り責め	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
両手吊りに悶える女	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
開股責めを悦ぶ女	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
両手万歳吊りにもかく	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
静子夫人への羞恥責め	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
雁字搦目縛りにうめく	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
八力月の妊婦に革具責め	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
九力月の妊婦に首枷責め	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
増田みゆき	
激痛に耐える鞭打ち表情	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
関谷富在子	

印画紙焼付極鮮明写真
〔美人モデル緊縛フオト〕

鞭打ちによる感涙の表情 大手札四枚一組 略号 (めち) 五〇〇円 関谷富佐子	股裂縛りて痛打する 大手札四枚一組 略号 (めの) 五〇〇円 関谷富佐子	海老縛りの鞭打地獄 大手札四枚一組 略号 (めぬ) 五〇〇円 関谷富佐子	尻立縛りて強打に泣く 大手札四枚一組 略号 (めし) 五〇〇円 関谷富佐子	ムチは臀部の双丘に炸裂 大手札四枚一組 略号 (めけ) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭に悶える鉄砲責め女体 大手札四枚一組 略号 (めま) 五〇〇円 関谷富佐子	逆手吊りて晒す臀部 大手札四枚一組 略号 (めむ) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭の縛りに夢心地表情 大手札四枚一組 略号 (めり) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭は美体にからみつく 大手札四枚一組 略号 (めも) 五〇〇円 関谷富佐子	狂う鞭に狂い泣く女体 大手札四枚一組 略号 (める) 五〇〇円 関谷富佐子	両手吊りの女体に強打 大手札四枚一組 略号 (めさ) 五〇〇円 関谷富佐子
鞭打ちに示す感涙の極致 大手札四枚一組 略号 (めて) 五〇〇円 関谷富佐子	逆海老開股縛りに鞭打ち 大手札四枚一組 略号 (めひ) 五〇〇円 関谷富佐子	ムチに悶絶した美夫人 大手札四枚一組 略号 (めへ) 五〇〇円 関谷富佐子	のけぞる悦唐表情の露呈 大手札四枚一組 略号 (めふ) 五〇〇円 関谷富佐子	責めによる美的法悦表情 大手札四枚一組 略号 (めら) 五〇〇円 関谷富佐子	妊婦開股縛り哀歎 大手札四枚一組 略号 (わう) 五〇〇円 中河 恵子	八カ月の妊婦開股責め 大手札四枚一組 略号 (わの) 五〇〇円 中河 恵子	妊婦太鼓腹開股縛り 大手札四枚一組 略号 (わえ) 五〇〇円 中河 恵子	妊孕美人媚態の立像 大手札四枚一組 略号 (わお) 五〇〇円 中河 恵子	妊孕美人媚態坐像 大手札四枚一組 略号 (わき) 五〇〇円 中河 恵子	両手吊り片足挙げ妊婦 大手札四枚一組 略号 (わく) 五〇〇円 中河 恵子
突き出た腹部の妊孕美 大手札四枚一組 略号 (わし) 五〇〇円 中河 恵子	両手吊りの妊婦正面 大手札四枚一組 略号 (わす) 五〇〇円 中河 恵子	縛られた妊婦の艶姿 大手札四枚一組 略号 (わせ) 五〇〇円 中河 恵子	両手一本吊りの妊婦 大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円 中河 恵子	恵子の妊孕美緊縛 大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円 中河 恵子	初妊娠の太鼓腹の美 大手札四枚一組 略号 (おぬ) 五〇〇円 中河 恵子	裸身縛りの妊孕美 大手札四枚一組 略号 (おす) 五〇〇円 中河 恵子	身籠った裸身責め 大手札四枚一組 略号 (おも) 五〇〇円 中河 恵子	麗わしの妊婦縛り 大手札四枚一組 略号 (おひ) 五〇〇円 中河 恵子	膨満の腹部緊縛美 大手札四枚一組 略号 (おみ) 五〇〇円 中河 恵子	立縛り髪責め引回し 大手札四枚一組 略号 (おけ) 五〇〇円 安井喜久子
後手縛りて引回す 大手札四枚一組 略号 (おく) 五〇〇円 安井喜久子	片足吊り上げ責め 大手札四枚一組 略号 (おて) 五〇〇円 安井喜久子	憂愁夫人の菱縄縛り 大手札四枚一組 略号 (おや) 五〇〇円 安井喜久子	柱対向立ち縛りの夫人 大手札四枚一組 略号 (おあ) 五〇〇円 安井喜久子	片足吊り股裂き責め 大手札四枚一組 略号 (およ) 五〇〇円 安井喜久子	逆エビ責めに泣く女 大手札四枚一組 略号 (おわ) 五〇〇円 安井喜久子	柱正面立ち縛り媚態 大手札四枚一組 略号 (おの) 五〇〇円 安井喜久子	股間縛りにもかく女体 大手札四枚一組 略号 (おう) 五〇〇円 安井喜久子	豊満の女体をくびる 大手札四枚一組 略号 (おれ) 五〇〇円 安井喜久子	開股前屈愛撫責め 大手札三枚一組 略号 (おね) 四〇〇円 愛知 葉子	逆エビ縛りの愛撫 大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円 愛知 葉子

印画紙焼付極鮮明写真

〔新しいモデル強烈縛り〕

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号八ちねV
左近麻里子

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号八ちてV
左近麻里子

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号八ちやV
左近麻里子

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号八ちみV
左近麻里子

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号八ちつV
左近麻里子

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号八ちなV
左近麻里子

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちすV
左近麻里子

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちさV
左近麻里子

豊満な体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号八ちにV
左近麻里子

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号八ちこV
左近麻里子

投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号八ちくV
左近麻里子

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号八ちけV
左近麻里子

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号八ちるV
左近麻里子

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号八ちれV
左近麻里子

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号八ちきV
左近麻里子

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号八なたV
中河 恵子

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号八なあV
中河 恵子

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号八なちV
関谷富佐子

臀部に炸烈するムチ

大手札四枚一組 略号八なつV
関谷富佐子

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号八なてV
関谷富佐子

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号八せきV
左近麻里子

強烈猿ぐつわ哀歎

大手札四枚一組 略号八せかV
左近麻里子

息づくポリウムを縛る

大手札四枚一組 略号八せもV
左近麻里子

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号八せみV
左近麻里子

ゴムカバーの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号八せなV
左近麻里子

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号八せけV
左近麻里子

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号八せこV
左近麻里子

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号八せまV
木村 洋子

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号八せむV
木村 洋子

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号八せえV
木村 洋子

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号八せろV
中河 恵子

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号八せれV
中河 恵子

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号八せりV
中河 恵子

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号八せとV
中河 恵子

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号八せてV
中河 恵子

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号八せゆV
左近麻里子

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号八せいV
左近麻里子

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号八せたV
大島 照代

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号八せのV
大島 照代

逞ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号八せねV
大島 照代

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号八せにV
大島 照代

大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号八わりV
関谷富佐子

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号八わもV
関谷富佐子

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号八わめV
関谷富佐子

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号八わみV
関谷富佐子

大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号八わまV
関谷富佐子

蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号八わとV
関谷富佐子



東京の石田茂様、お便り頂けませんか。園部マリさんの夢、実現させてあげたいですね。カメラ・ハント、カメラ・ルポは素晴らしい出来ばえです。ピンク・シネ・ハントは参考になりました。今度撮らせてもらいましょう。その後の奴隷妻の山本様、お便り頂けませんか。M女性の方、SMに興味ある男女の方、お便り下さい。

(水戸市・野田)

奇クが号を増すごとに益々面白

なくなってくるようで、毎月かかさず発売される日を楽しみに待っています。私も未熟ながら皆様に負けないようにと、昨今くだらぬ小説を書いていきます。小説を書くのは大変好きなのですが、さて書いてみると、なかなか文章にならず弱っている次第です。とに角、懸命に努力して作成しています。出来上り次第、早速応募しようと思っています。四月号の大阪山本広子様、小生は二十六才まで日本舞踊を未熟ながら習いました者ですが、貴女に踊りの一手でも教えて頂ければ幸甚です。色々の面で趣味が合致することと思います。何とぞお便り下さい。一日千秋の思いで待っています。遅ればせながら簡単に自己紹介させて頂きますと、小生は三十才の健康な男子でびわ湖の片隅に毎日、凡々たる生活を送っております。職業は一セールスマンで、趣味は読書、釣りで、絶対、秘密厳守し、迷惑をかけないことを約束します。では貴女からのお返事、楽しみに待っています。(滋賀・益田二郎)

城山ほずみ様、貴女の呼びかけのお便りを読み、ペンをとりました。小生は奇クを愛読して三年に

なります。ほずみ様の呼びかけ、とても嬉しく思いました。小生は美男ではありませんが貴女を縛りしはばっていいじめたいと思います。お互いに素人同志、私と貴女の夢を実現しようではありませんか。私は貴女を色々な縛りで、たとえば流腸責め、ローソク責めなど、あるいは貴女を縛って動けなくし鞭打ちで思いきり貴女を満足さしてあげます。又、乳房責めもいたしますよ。ほずみ様のMを私が失神一步手前まで責めてあげます。

(横浜・佐渡しげる)

先日、私は東京の、いわゆるピンク・チェーンなる映画館に足をふみ入れてみました。実をいうと「極秘女拷問」の映画の題名に魅かれて、ついフラフラと這入った次第です。奇クファンの私は、題名を見ただけで感情が高まってきます。内容は、谷ナオミ扮する妾が、姦通の罪と夫殺しの容疑で、明治初期の、あらゆる拷問をかけられるという、すさまじいものであったが、奇クの読者は絶対に見のがせない一作だと思います。五月号のカメラ・ハントに登場した谷ナオミが、情容赦なく縄目を受け、髪を振りみだして豊満な肉体

を悶えさせ、必死に苦痛にたえる様子が、カラーにより刻明に映し出されている。三角木馬に跨がせられ、股間より赤い鮮血が滴り落ちるところでは、思わず息を呑んで見つめてしまいました。あまりくわしく書きますと、映画をご覧になられた時に興味が薄れるのでやめておきましょう。とにかく奇クファンなら、必ず見て損はしない映画だと私は確信いたしております。(縄目太郎)

読者の皆様、いかがお過ごしですか。小生も永年、奇クを愛読します。以前に「女工哀史」という本を読んだことがあります。当時、昭和初期には、女工さん達は人権を無視され、半ば身売りのような状態で連れてこられ、非人道的な舎監の監視の下、たとえ病気になっても強制的に就労させられ、命令にそむく者は容赦なく他の同僚の目前で凄惨な私刑が行われたという事です。又、NHKのラジオ放送でも、こういう内容の話を聞いたことがあります。わずかな不始末をした女工さんは、ロープで体を縛られ一晩中、天井から吊り下げられていたということとで、こ

ういうことは数多くあったということ。かすりの着物を着て、お下げ髪にした少女が、不本意な責めに血涙を流した当時の女工哀史に非常にあわれさを感じたものでした。我々は、こんな陰惨なものでなく、明るい趣味的なSMにしたいと思います。小生は四十才の男性です。女性の方でMに興味をお持ちの方、お便り下さい。

(神戸市・篠原伸)

城山ほずみ様、六月号の奇クサロンで、貴女のお便り拝読いたしました。同じ県内で貴女のような勇敢な同好者がいるのを知って、心強く思っています。私も奇クを愛読して四年近くになります。県内で名乗りを上げたのは貴女が初めてだと思います。私は貴女のような方が出てこられるのを心待ちにしています。このチャンスをおのがしたら当然、このような機会にめぐりあえぬと思い、お便りした次第です。私は幸いにもフォトリの技術がありますので、きつと美しい写真がとれるものと信じます。そして色々の責め道具を用意いたしましたので、紳士的プレイを楽しもうではありませんか。

(神奈川・千部好夫)

一年余りのファンです。最近「悪書追放」運動とやらで、昔のような記事、写真は姿を消しましたが、これはやむを得ないことでしょう。私はM的傾向の方が強いのですが、男女共SMの両面を持つていてと思います。ただ表面にでる度合で、判断しているだけです。ムードのある女性の、こまかい姿態の写真、記事を、どしどし載せて下さい。私は、美しい女性にいいじめられ、かわいがってもらいたい願望、赤ん坊の時に母の乳房に吸いつく、あの本能を今も持っています。そういう女性が現われることを望んでいます。理想とする女性は、顔は普通で結構ですが小太りの、バスト・ヒップともに九十以上ある、目立ない質素な服装、女らしいやさしい女性だが根はいたってしっかりした人を期待しています。山本武男様、野田和江様、笠原様、吉沢頼子様、その他、長野県内の皆様、ハッスルして大いに意見を發表しましょう。

(長野市・はの八八〇)

全国の奇ク愛読者の皆様お元気ですか。私は本誌を愛読してから三年になります。毎月の奇クの発

売日が待ち遠しくなりません。七月号でプレイを希望されていました直方市の緒方則子様、近郊に同好の方がいることに気がつき、早速ペンをとりました。私も緊縛の実行を夢見てきた者ですが、今まで一度の経験もございません。貴女様さえよければ、一度プレイしたく思っています。近くに同好の方がおり、貴女様を全裸にして責めていることを思うと、体がほてってなりません。秘密は厳守いたします。緒方則子様、勇気を出して二人で楽しくプレイを研究しようではありませんか。

(北九州市・小畑齊)

お便り申し上げます。柳瀬慶子様、私はSMどちらでもできるマニアです。アヌス責め、浣腸責めが特に好きです。羞恥感、浣腸、アヌス責めが最高だと思います。あなたのおっしゃる性の羞恥は、素晴らしいことのように思います。検温はもちろん、お尻からしたのでしょうね。アヌス責めには、かかすことのできないプレイです。あなたを十分、恥かしめることに自信があります。お便り下さい。

(川崎・新井)

奇クファンの皆様、最近の誌上を賑わす夫婦プレイの数々、本当に嬉しくもあり頼もしくも感ぜられます。私も案にたがわず夫婦プレイの讃美者でございます。二人の協力でフォトリ作品を撮り合ったり、SMプレイに耽溺したり余り倦怠期を憶えず十年の生活を送って参った私達ですが、やはり皆様同様、マンネリの傾向は確かです。主人も私もここで考えますことは、このような夫婦プレイの讃美者の方々と、グループ通信や連絡方法がとれないものでしょうか。仮称(おしどりグループ)でも作って、夫々の悩みや共通の広場を、奇クの結びつきの一環として持つことは夢なのでしょうか。勿論秘密保持はいくらでもできるし、会員番号で同友通信し誌上で語り合っても宜しいでしょう。たとえ小さくみすばらしくても、せめてゲラ刷の連絡通信を持ち合いより楽しく、より新しい充実した夫婦プレイが、夫々のペースで幸せに進められるよう企画すべきでないでしょうか。どうか御意見を是非お聞かせ下さい。又、複数プレイ、奇数プレイに興味の方も、連絡お寄せ下さいませ。近い処で三月号の愛媛・川江芳子様、私も

同様の輝ファン、フォト作品をお見せしたり、お話ししたいと存じます。私達は夫三十九才、妻二十八才の夫婦です。どうぞ宜しくおねがいいたします。

(徳島市 吉倉美子)

先月、テレビのニュースで、乳牛のホルスタイン種の受精卵を、普通のメス牛に入れてその腹の中で成長させ、無事に出産させることに日本で成功したことを知りました。私はそれから毎日、そのことが頭から離れず、自分のことにおきかえて色々と想像し、興奮に身をふるわせました。ある日、万年便秘に悩む私は思い余って、お医者様に見てもらいに行きます。その時、私は麻酔をかけられ、何分か意識不明になります。それから数カ月して、私は自分の体の変化に気づきます。しかし私は男性との関係がないのですから、特に気にとめませんでした。一カ月くらい経った頃、お乳が凄く張り始めた。調子も、以前四カ月目で堕した時と全く同じです。しかし、日頃の年少者の坊やへの想いとか、自分の肥満に対する喜びなどのため、体に変化を起こさせたのだらうと思いました。けれども日増に

私のお腹は大きくなり、五カ月目くらいの時、お腹の中で何かピクピク動くのをハッキリ感じます。私は妊娠している、どうしようかしら。元来、私は大きなお腹をしていますが、それでも妊娠したことはとうてい隠すことはできず、変な目でジロジロ見られるので、ついにお店も居辛くなってやめてしまい、アパートを引き払い、仙台から一時間ばかり離れた小さな町の山手の一軒家を借りて生活を始めました。でも私は、出産ということに実感がともなわないので準備をする気にもなれず、日々にせり出して行くお腹を見つめながら、毎日食べては寝るという生活を送っていました。ある時、私は町に買物に行き、八百屋の小僧さんに家に届けてくれるように頼みます。小僧さんは夕方、品物を持ってきてくれました。私は、お茶をすすめ世間話をしました。その中に、お乳が余り張って痛いので「すまないけど吸ってくれない」と小僧さんに頼みます。小僧さんは、始めは恥かしそうにしていたが、思いきって吸ってくれます。やがて私は、小僧さんの手を自分のお腹に押しあて「マッサージして」と、お腹をもませました。そ

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト	開股羞恥責めの姿態	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△しう▽ 五〇〇円	髪吊りで強烈ムチ打ち	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△した▽ 五〇〇円	片足首引きつけ縛り	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△しち▽ 五〇〇円	尻立て鞭打ち艶姿	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△しつ▽ 五〇〇円	柔肌に炸裂するムチ	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△して▽ 五〇〇円	エビ縛りの鞭打ち	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△しと▽ 五〇〇円	貞操帯着用鞭打ち	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△しや▽ 五〇〇円	痛打にもかく美女体	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△しゆ▽ 五〇〇円	あくら縛りの羞恥責	大手札四枚一組 安井喜久子 略号△しよ▽ 五〇〇円	片脚挙げで晒す裸身	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とは▽ 四〇〇円	
膝頭縛り開股竹棒責め	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とは▽ 四〇〇円	竹棒開股足首縛り	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とへ▽ 四〇〇円	股間縛りの裸身表情	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とち▽ 四〇〇円	菱縄縛り猿ぐつわの表情	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とり▽ 四〇〇円	乱痴戯騒ぎの結末	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とぬ▽ 四〇〇円	菱縄縛りで床に喘ぐ	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とる▽ 四〇〇円	浣腸責めの甘い恐怖	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とか▽ 四〇〇円	浣腸液の注入直後	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とま▽ 四〇〇円	強制浣腸の各姿態	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とみ▽ 四〇〇円	浣腸責めの美態開陳	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とめ▽ 四〇〇円	浣腸を待つポーズ	大手札三枚一組 中河 恵子 略号△とも▽ 四〇〇円

れから、その小僧さんに毎日、乳しぼりとマッサージをしてもらいます。十カ月目になると、私の大きなお腹は全く凄いものです。重すぎて垂れ下った大きなお腹をさすりながら、陣痛のくるのを待ちます。やがて真夜中、私は突然のお腹の痛みに目を覚まします。やっと最後の入浴をすませ、晒の浴衣を着た私は、鏡の前に正座してお腹を出します。私はナイフを右手に持ち、左下腹にプツリと突き立てます。脂肪があればほど厚くあったのに、大きくなり過ぎたために薄くなり、思ったより簡単に切れ、パツクリ開いたお腹からホルスタインの胎児が這い出してきたのを見た私は、失心しました。

(仙台・美川美子)

横浜の城山ほずみ様お元気ですか。六月号であなたの写真を拝見しました。私も貴具の写真をとり一度、城山さんに見せたいと思いい三枚の写真をとって見ました。モデルは私です。手錠は自分の手で後手錠等にできて大変便利なものです。腰鎖と手錠を連結し後手錠にしますと、少しでも腰や手を動かしたとき、腰鎖や手錠が肉にギンギン締ってきます。又、腰鎖と

手錠を連結してある鍵は数字合わせです。これを城山さんのウエストにカッチリはめてはいかがですか。もし一日では不足することができたら、この貴具をあなたにプレゼントしたいと思います。又、希望ならば、あなたの体に合う足枷、手枷、貞操帯なども作りたいと思います。こんな私でよろしければプレールの相手をねがいます。

(静岡・井川昇)

緒方則子さん、敢然と呼びかけ自分の夢をかなえて……と、その勇気に大いに我が意を得たりと早速お便りいたします。小生の住む隣の町に、貴女のような方がおられるのに驚きました。私が貴女のその夢を必ずかなえてさしあげます。私は、自分はS的傾向の強い奴だと思っています。小生は公務員です。必ずお便り下さい。

(福岡・波多野)

七月号の佐倉敬生様の「紅花のよそおい」それに、女性の愛輝の手記等々、女性のふんどしマニアふんどし女の血斗マニアにとって全く楽しい号となりました。「紅花のよそおい」は全く小生のあこがれの一つである、ふんどし一つ

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆる

全裸縛りに羞らう

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よた

の裸女の血斗の世界でした。文中でも、作者は度々ふんどし一つをしめただけの裸女の美しさを讃えておられますが、全くふんどしというものは、女性の身体を美しくする為にあると確信しています。文中の紫ふんどしの年増、紅花模様のふんどしの乙女等、想像するに美しいことでしょう。惜しむらくは挿画がなかったことです。麗筆はこれ表現して余りありません。美しい女体にキリリと締められたふんどし、わずかに隠しどころをおおい、美しい尻の双丘をわって「みつ」のある、ふんどしの後姿。妖しくゆれる、そのお尻の魅力は、全くたまりません。紫ふんどしに爛熟した、女盛りの裸身をキリリと引きしめ、紅花のふんどしは引きしまった乙女の裸身をいやが上にも引き立て、この二人のふんどし一つの女達の血斗模様は、全く血みどろの美の極致といえましょう。勝った乙女は、ふんどし一つの裸身で勝どきをあげ敗れた女は首と体を異にして空しき死屍といえども倒錯美の極致です。どなたか、この情景を絵画化していただきたいものです。間和志様のおたより、ありがとうございます。お説のとおり、ふんどし一丁の女の血みどろ図絵にあ

どし一丁の女の血みどろ図絵にあ
こがれている私にとって、その後
なかなかアイデアが浮かばずスラ
ンブ気味のところ、七月号で大い
にハッスルしました。一つ又、愚
作をまとめてみたいと思っていま
す。同好各位の通信を待つことや
切。
(東京・女斗彦)

柳瀬慶子様、八月号の貴女の投
書を拝見して、これぞ私が探し求
めていた女性であると、早速ペン
をとりました。当方は三十二才の
男性。女性をいじめぬくことが大
好きという、はなはだ困った趣味
の持ち主です。いじめるといって
も、ムチをふるったり女性の美し
い肌を傷つけるような野蛮なこと
は好みません。それよりも女性の
最も弱点である恥ずかしいという
心を責めつけるのが大好きです。
貴女は海老責めで恥ずかしめられ
るのが好きということですが、そ
れだけで私の好みにピッタリとい
う気がします。ぜひ一度、プレイ
をしたと思います。必ず双方とも
満足感が得られることと思いま
す。貴女が人間としての権利を放
棄したくなるような恥ずかしい責
めも与えてあげましょう、美しい
女奴隷の飼育がたのしみです。

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もろ▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

(草加市・山田二郎)

○ 毎号、読者通信を興味深く読んでおります。しかし最近ではS女性の活躍が少なく残念です。私は中年のM的な男性ですが、特に男性を腕力で征服するようなSの女性に深くあこがれています。畳の上で格闘のプレイを行って下さるS女性の方がいらっしゃったら、ぜひお会いしたいと思えます。その際のルールとして、紳士的に行い、打つ、なぐる、ける等の行為は禁止で、格闘のみとします。互いに腕力で必死に争い、上になり下になり戦います。遂に業のすぐれた女性に仰向けに倒され、どっかと馬乗りになり、両手をはりつけの形に上げて上から押さえつけ身動きできぬように組み敷かれます。そして上から見下ろされながら「さあ、どうだ」と、ギョウギョウ責めつけられ、馬乗りを楽しまれます。こうして女性に腕力で完全に征服され、奴隷にされたのです。男性を組みしきたいSの女性のお便りをお待ちします。

(東京 青木雄三郎)

○ 僕は奇タを読みはじめて、まだ一年たらずの初心者です。毎月、

発売されるのを楽しみにして読みあれやこれやと想像をして楽しんできました。僕の読んだもので特によかったものを順番に書いてみますと、痴人の糧、花と蛇、ガンペッタ「復讐」、カメラ・ハント、理恵女献身、の五つです。この他の読物もいいのですが、どうも僕の趣味に合わないのです。最近、本当に女の方を責めてみたいという気が起こり、毎日その思いにかなれながらも相手になって下さる方もないことですし、しかたがないとあきらめの日々を繰り返してきました。しかし六月号の城山さんや八月号の柳瀬さんのように相手をさがしている方のおられることを知り勇気を出して、おたよりをしました。僕は強烈な責めにあがれ、生ぬるい責め方は余り好みません。神奈川、東京在住の方で責めさせて下さる方はいらっしゃいませんか。お便りお待ちしております。

(小田原・村上文敏)

○ Mという名の魔性の細菌に五体を蝕まれていく男の、その後の近況をお知らせします。私は、いつものワンマンMプレイ・スタイル(全裸に手製のくさり縄、首輪、足錠を装着)で四っん這いになり

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はわV
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV
中河 恵子

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV
中河 恵子

悦虚に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV
中河 恵子

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV
中河 恵子

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさV
中河 恵子

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV
中河 恵子

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV
中河 恵子

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV
中河 恵子

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV
関谷富佐子

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV
関谷富佐子

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はもV
関谷富佐子

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさV
関谷富佐子

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△はしV
大島 照代

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はすV
大島 照代

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせV
大島 照代

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆV
大島 照代

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はたV
大島 照代

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はちV
大島 照代

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつV
大島 照代

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はてV
大島 照代

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はとV
大島 照代

右手の鞭がわりのベルトを一閃して、我と我が尻に思いきり振り下ろしました。ピシッという私の尻の肉を打つ音が一瞬、冷えきった室内の夜気を、つん裂かんばかりです。二打、三打。あとはもう夢中で自分の尻に痛打を浴びせました。その後、一カ月後、また新しい責め方のアイデアを得、実行に移しました。SM愛好者なら知らぬ者のない、フランスの傑作小説「O嬢の物語」のラスト・シーン（ヒロインが、ふくろうの面をつけ、くさりで引っぱられ、夜会の見世物になるという凄惨な終局）にヒントを得、私自身をO嬢ならぬO氏に見たてて責めさいなってみたかったです。先ず裸になつて、くさり、足錠、くさりつきの犬の首輪を自分の身体に施します。次に自動車の羽根ばけの羽根を、筆とりとります。それから買収求めておいた糊を矢庭に自分の裸身に所かまわず塗りたくり、羽根を植えつけていきました。鳥の羽根を全身に植えつけ、股間にはくさりで作った鞭をつけ、足には小犬の首輪で作った足錠、手首にはピカピカ光る本物そっくりの手錠をはめ、首輪のクサリで鴨居から吊られている一人の、いや一匹の

奴隷、一匹の犬畜生、一羽の奴隷用の鳥!! 私は言いしれぬほどの凄じい興奮を感じました。私は新しい責め方を案出しては、自分自身の裸身を責めさいなむことを今後も続け、時折、近況を報告したいと思ひます。(仙台・秋田一郎)

大川恵子さま。貴女がご独りで浣腸なさって、眺められたいとお書きになったものを拝見した時、私はとても嬉しくなりました。八月号で「私の体験」をお読みになつて、おわかり下さると思ひますが、私は浣腸をされてから排便するまでの間、誰かに見られてゐるのを感じると、本当に恥ずかしう思ひました。でも浣腸の後、そっけなくされると、もっと見られたい、苦しみたい、恥ずかしい思ひをしたいと、瞬間的にですけど感じました。私のような者でもかまいませんでしたらお使い下さい。(東京・中野昭子)

雨線がアスファルトにハジキ返えされる東京の初夏、皆様いかがお過ごしですか。生まれでる以前よりの貴誌との出会いと再会。そして今なお続く貴誌の存在の重さ故に、その叫びの真実なるが故に

最新撮影総天然色

カラ・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円

大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円

大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円

大塚 啓子 略号八てこ

後手・高小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

東浦 啓子 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

東浦 啓子 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

東浦 啓子 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

東浦 啓子 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

真紅の腰巻着用品姿
大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様
大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用品縛り
大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた蹄観
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るま

羞らしい真正面縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけ

若肌を喰い込む縄目
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿態
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八るよ

羞らしい股間縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八るに

各方面からの圧力に窮しつつも、頑強に存続せられることは、一読者の責任としても痛感いたしております。私は先年七月号のサロンのページに掲載していただいた者です。先天的被虐性淫乱症の素晴しき貴女!! 理性の創造物であらんとする、この悪しき文明社会に背を向けて、夜々奈落から絶叫する至美の貴女!! 二十二になっても頼りなく少年のような僕。この少年に、全存在としての貴女を賭けて辱かしめられたい。部分的快感なぞには興味なく、虐待そのものが快楽である。全身恍惚そのものに溶け入らんとする貴女と僕に優しく苦痛に歪んだ貴女が存在を共有させて下さい。

(東京・呪詛夢)

○ 小生は仕事にて各地を廻りますが、最近も広島、大阪、名古屋、岡崎、豊橋などへ参りましたので書店で奇クを探しましたが、なかなか発見できず、広島ではステーションビル内の書店と駅前の書店などで見つけましたが、他の都市では見かけませんでした。残念なことです。小生は東京では、上野地下街の店や池袋の店で買っていますが、いつか置かなくなるので

はないかと心配しています。奇クは写真、グラビアがなくなり、物足りなくなつたとの声があるようですが、私はむしろ現在の方が、ずっと内容が充実していて面白くなつたと思っています。写真、グラビア、画を最少限にして内容で読ませるといふ編集の努力、広告を排除した良心的な営業方針など奇クが他の同類誌と比べて如何に立派であるかを示しています。ぬるま湯のような写真、グラビアを掲げ、ピンク誌のような広告を掲載して、内容は全くつまらない同類誌が次第に薄っぺらになり市場価値もなくなつていけるのは、正しい評価だと思えます。しかし御誌としても、今大変むづかしい時期故、編集の苦心も並大抵でないと拝察します。私は、奇クはその内容から文献価値の高い雑誌とありますが、次第に書店から奇クが消えてゆくを見ると、胸が痛みます。やはり奇クのような傾向の雑誌は、次第に圧迫されていくのではないかと気がかりです。私は奇クに愛着が強いだけに、いつの日にか奇クの姿がどの書店にもなくなるのではないかと怖れています。どうか小生たち愛読者のためにも末長く発行されるよう願って

<p>双胎臨月蛙腹鮮烈写真 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号八れやV</p> <p>双胎臨月腹強烈縛り 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号八れゆV</p> <p>臨月腹裸身の媚態 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号八れえV</p> <p>黒縄縦縛りの媚態 大手札三枚一組 一〇〇〇円 中河恵子 略号八れぬV</p> <p>立縛りにあうの裸女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村洋子 略号八れねV</p> <p>開股された股間縛り 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村洋子 略号八れのV</p> <p>豆絞りの猿ぐつわ縛り 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村洋子 略号八れむV</p> <p>柱宙縛りに喘ぐ刺青女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号八やかV</p> <p>高小手に悶える全裸 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号八やきV</p> <p>緊縛に映える入墨の肌 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号八やくV</p> <p>脱がされた緊縛刺青女体 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号八やもV</p> <p>縄にのたうつ入墨裸身 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号八やしV</p>	<p>腰巻一つで縛られる刺青女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号八やみV</p> <p>女相撲迫力投業連続動作 大手札十二枚一組 五〇〇〇円 大塚・東浦 略号八なるV</p> <p>恵子の妊孕美観賞 大手札四枚一組 一〇〇〇円 中河恵子 略号八ぬめV</p> <p>孕み若妻の羞らい 大手札四枚一組 一〇〇〇円 中河恵子 略号八ぬめV</p> <p>八の字の開股責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号八しいV</p> <p>足枷強制開股責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号八しみV</p> <p>全裸強烈逆エビ責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号八しけV</p> <p>両手吊り足枷責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号八しこV</p> <p>両腕逆手吊り責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号八しらV</p> <p>豊満なる臀部責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号八しれV</p> <p>大の字縛りと足挙げ責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号八しわV</p> <p>お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号(箕田京二宛)へ願います。</p>
---	---

おります。

(東京・夢野洋)

柳瀬様、貴女の言われるように海老責めほど素晴らしいものはないと思います。特に飼いの馴し訓練された女体を海老責めにかけた姿は又、格別です。たとえば、よく訓練をうけたアクロバット・ダンサーの逆海老の姿は素晴らしい、これに緊縛がともなえば、文句なしです。海老責めであれば、あぐらに組んだ足首を背中中で組み合わすまで二つ折りに曲げ、その組んだ足首に高々とあげた後手の手首を重ねて縛る海老責めは、最高の責めと言えます。ただ、この姿勢は簡単にできず、相当な訓練が必要です。私の交際していたM嬢は非常に柔らかい身体を持ち主であったが、それでもこの責めの姿になるには大分かかりました。私としては、できれば海老責めにより、背中に組んだ足首と手首を一緒に吊ってみたいところですが、さすがにそれだけではできませんでした。貴女は、海老責めの経験がありますか。貴女が思うほど楽ではありませんよ。いくら貴女がMでも、やはり徐々に馴れる必要があります。近ければ訓練してあげたいがちよっと無理のようですね。まあ

海老責めとはどんなものか、一日ぐらいでしたら貴女の身体にきいて見ても良いけれども。では、お元気に。貴女の希望が達せられますよう祈っております。

(神戸・山本鉄雄)

城山ほずみ様、六月号に発表されました貴女のお写真と文章を拝見いたしました。どの写真も素晴らしい、よくとれていきますね。お世辞ではありません。私は、はっきりとした専門家の写真もいいですが素人っぽいものの方に、より以上の魅力を感じます。何故かって、私が、あれこれと想像できるからです。影像のぼやけたところがあれば、私なりにいろいろと空想して楽しめるからです。貴女のお写真では左頁の下半身のが特に私に訴え、たっぷり一時間、夢の世界に遊んでしまいました。私は創刊号からの奇巧の愛読者ですが、今まで勇気がなくて読者通信一つ書き得ませんでした。しかし、そろそろ四十才に達し、社会的にも落ちついた地位を得た昨今、今更のよう自分の性向に対して消極的であったことを、後悔しております。もし貴女がおよろしければ、私と一度プレイして下さいませんか。

か。経験は辻村先生のようにありませんが、特に器具を種々つかってする責めに興味がありますのできつと満足していただけることと存じます。六月号の奇巧サロンでは山本武男様の「奴隷妻」が圧倒的な迫力で私に訴えました。あのような股間鎖を私も作ってみましたが、悲しいかな相手がおらず致し方なく私の専用にしております。申しおくれしましたが、私はSにもMにも興味があります。勿論、結婚しておりますし、子供もございます。ご迷惑は絶対におかけいたしませんから、ぜひお手紙をおねがいいたします。

(東大阪市・西田節男)

女斗美ファンの皆様、「徳川女系図」は見ましたか。諸氏の期待しておられる文章の通り、空前絶後のものかも知れません。はじめの予告では、シバリやハリツケなどの残酷シーンもあるとかで、正に奇譚誌総出の映画かと思いましたが、じっさいは、そういう場面はなかったようです。僕は今まで現代娘の角力のイメージを好んでいたのですが、この映画で大いに古典趣味に改宗しました。映画のコピーのことを書いてありました

が、動きの早い角力などでは、オリジナルの各コマの像自体がブレているから、どう苦勞しても大した仕上りにはなりませんね。ところで僕は、幸いにもF市の映画館の友人のお蔭で、このシーン(正味で六分間)の全体をフィルムで見ることが出来、上映中には判らない面白味を味わうことが出来ました。上映中、見ているとスーッと済んでしましますけれども、たとえば谷直美と加山恵子(だろーと思う)の取り組みなど、ひとこまずつ見ると素晴らしいフォームであって、息を呑むようなところがあります。直美が双差しになっていて、恵子を投げようとしており乳房が押し合って腋の下にふくらんでいるシーンや、又、祝真理の取り組みで、腰を落として吊るところの太腿の逞しさなど、上映中にはわからないものです。こういうシーンがスチールで残っていないのは残念なこと。こうして女角力や女ふんどし美の実際を見ると、なるほど女の尻の美しさが最高だということがわかります。とくに立禅は細くてキリッと締まっているのが最高で、双丘を割って喰い込んでいる赤い立禅のすばらしさはたまりません。女優たちも変

に悪びれず、ハッスルして取り組んでいて愉快でした。ところで僕は海野さんのファンで、特に彼の女角力の絵は出色と思います。十二月号と二月号の千代、美保の対戦など、繰り返し読んでいます。その中の一重鞭を引いて投げあう図は実にすばらしいが、ただ立鞭が太すぎるのが残念です。これは二月号で終わってしまったて惜しいと思いました。僕は千代と美保に同時に男児が出来て、盛隆の世つぎを決めるのに困り「母達の角力に決します」というようなことになるのかと、勝手に楽しみにしていたのですが、今後とも同氏の健斗を祈ります。

(メトミ・マニア)

私が奇クを読み始めてから、早や五年の月日がたちました。辻村先生のカメラ・ハントは、いついかなる時においても私を満足させてくれます。今月号も文・写真、ともに生彩を放っておりました。しかし正直のところ余り私の好みには合いませんでした。ただ一つだけ、木村洋子さんが増田氏の愛妻みゆきさんに、バイブレーターで責められる場面が私の好みにピッタリでした。私は鼻責めは好み

ません。しかし鞭打ちは、女体を傷つけない程度にやってみたいと思います。白鳥氏の「緋縮緬地獄」には華麗な画が入るといいなあと思います。斎藤氏の「探奇考料」は、どうも奇クにはシックリこないんじゃないですかね。奇クは普通の性書じゃないのだからです。芳野氏の「濡れにぞ濡れし」は、一寸ニヤツとさせられます。一種の精神安定剤のような役割を果していると思います。水沢氏の「あぶ・らぶす・こんと」も、この傾向ですね。次回を期待しています。沢瀉氏の「理恵女献身」は今一つの盛り上りの不足していることを残念に思います。団先生の「花と蛇」は、よくあれだけのアイデアが湧き、そして我々を満足させてくれるものだ、驚きと共に一種のあきれさえ持っており、この作品の良さはSMファンならもう周知のことだと思えます。千葉氏の「復讐」が終ったのは惜しい。ちょっと描写に物足りないところもあるにはあったが、井上氏の「法律雑考」は、SMを希望する者にとって、必読の文だと思えます。奇クファンなら、すでにプレイにとり入れられた方々もおいででしょうね。終りにピンク映画

のシナリオですが、団先生のものでしたので期待していましたが何だか肩すかしを食ったみたいですよ。やはりシナリオは、そんなに制約を受けるものでしょうか。

(名古屋・山本一心)

始めてお便りします。高校時代に、ある事情でオシメを常用しております内に、いつか深い執着を覚え、以来、他人に言えぬ習癖をひそかに恥じて参りました。偶然の機会で本誌を拝見しまして、同じ習癖の方が他にも沢山いらっしゃることを知り、驚きと安心と、ある親しさを感じました。いま私はオシメ二十枚、ビニール張りの病人用オシメカバー二枚、三十ccのガラス製流腸器一本を持っておりませんが、その他の器具の入手方法、使用方法など教えて頂きたいと存じます。県内にお住いの女性の方で、オシメや流腸に興味をお持ちの方とお友達になられたら嬉しゅうございます。

(豊橋市・山本直美)

八月号で初めて仲間に入れてもらったばかりで厚かましいとは思いますが、次のような趣旨の実験を試みたく、実験台志願の女子を

求めます。これは、デートの最中に女の方が、何のかんのと理由をつけてトイレに行くのをブチコワシだと感じた男たちが考え出した「オトイレ無用のデートの方法」に関する実験です。実験当日は冷房のきいた喫茶店で、私の注文する飲料(種類は貴女の好み、水分総量五〇〇cc程度)を午前中に飲み干さなければなりません。そして午後六時までの間、トイレ行きは一切、禁じます。デートの費用は私の負担としますが、トイレに行かざるを得ない事態が生じた場合は、貴女の負担になります。以上のように簡単なことですが、問題点はいくつかあります。第一におむつの着用は要求はしません。右の諸条件から常識的に判断すると、一応おむつは必要であり、途中での交換は必要でないと見られます。そこで、おむつ一組を自宅に着用して出発してもらいます。よう。第二の点は、私は自由にトイレに行きます。もちろん、おむつ着用はしません。ずるいと思われるかも知れませんが、私は実験する立場ですから当然です。第三はデートの際に、不安がある場合はつき添いの人を連れてきて構いませんが、SMの話もしたいので

次号(十月号)は八月二十五日に発売いたします

その妨害となる石頭の輩は困ります。第四に、東京または近郊の人に限られるでしょう。実験成功の暁には、その報告を誌上でするつもりです。(東京・岩手信夫)

川崎の柳瀬慶子様、私は永く同好の士を探していましたが、はからずも貴女の一文を拝見して、早速お呼びかけした次第です。私はプレイの経験はありませんが、きつと貴女を喜ばせてさし上げる事ができると思います。貴女を洗腸したり、排泄の強制などして、羞恥責めにかけてあげたいと思います。(横浜・水野)

奇ク愛読の女性の皆さん、ごきげんいかがですか。私は十数年来の奇クファンで、神戸に住む四十一才のサラリーマンです。ロープ縛り、くさり縛り、浣腸など、いずれも大好きで、今まで女性を縛ったことがあります。特に興味のあるのは、マゾ女性の股間をくさりで縛り、その上にゴムのオシメカパーをほどこし、街を散歩させることです。この際、ひざの上

をロープで縛り、ヨチヨチ歩きできるくらいの余裕をあけて歩かせるのです。もちろん、外見は普通どおりで他人にはわかりません。室内でのプレイでは、特に浣腸をほどこすのが好きです。三月号の大上那美子様、私は貴女の御主人を教育できるかどうかわかりません。しかし貴女の美しい御姿を縛らせていただければ、無上の光栄です。貴女の嫌いなプレイは絶対行わないことを誓います。又、秘密は絶対、守ります。どうか本当にマゾを願うプレイを希望する真面目な女性の方、お便り下さい。(神戸・山本進)

城山はずみ様、六月号のお呼びかけに応じて、プレイのお相手を作らせていただきました。思っています。辻村さんのカメラ・ハントなどを頼りに、鏡の前での不自由な自縛ポーズ、お写真を拝見して、切ないじらしい貴女のねがいを、ぜひとも叶えてさしあげたいと思います。拝見した感じからは、猿ぐつわに太目の縄での後手縛りが、貴女にはお似合いのようです。貴

めの器具は何をお望みですか。日頃、考えている手段を総動員して貴女の個性を引き出し、見違えるようなマゾヒズムの美しさを大鏡の前に実現してみましよう。その姿態をカメラで、また絵筆で再現してお贈りしたいと思っています。小生は奇クファンの中では耽美派の一人のつもりです。(東京・北畠劔二)

私は十年来、本誌を愛読している二十八才の青年です。私は勿論S傾向で、それに類する画、写真及び映画などを見ては、己れの悲しい性向を慰めてきました。しかし今日はじめて柳瀬慶子さまの勇氣ある便りを読み、非常に感銘をおぼえ、私の夢もようやく実現するのではないかと、一条の光明を見出したように思えてならない。今までに何度か女性と交際したことはありましたが、相手の感情をそこねてはと、又、己れのつまらぬ自尊心から、その性向を隠してきました。お便りによれば、羞恥責めにされたいとの由、これぞSにとつて、いや私にとって最高の目的と思っています。しかし、相互の深い信頼と理解がなくては、プレイは存続しないと確信してい

ます。従いまして一、二度は理論?それから以後、本格的な実践に移りたいと思います。(東京品川・岡本)

毎月二十五日を待ちわびていました。八月号を拝見。編集後記にもありました。今月号は芳野、香川、津川の三氏に加えて、久しぶりに、とやま氏の一文に接し、私たちM族にとっては、この上なき贈り物として、いずれも胸おどらせて拝見いたしました。これらの作品に対して例によって勝手な感想を述べることをお許し下さい。まず、とやま氏の、いつに交らぬ「良い意味で」描写、たのしい限りです。ストローの話、小生も何とかチャンスを見て、贈りものにあつきたいものです。「白い花びら」もしこれが神酒始末紙であれば、もっとすばらしかったでしょう。直接、神酒にありつけなくとも、せめて美人の神酒をしつとり吸ったチリ紙に接することができれば、どんなにすばらしいことでしょう。次に津川氏の作品。同氏の傑作は過去二度にわたって拝見し、非常にたのしませて頂いています。今回のうち、(一)の「俺らあ飲んじまっただ」での、中学一

年生の女の子の飲んだとありますが、もし彼女、高校生か大学生だったら、もっとよかったのにと自分勝手な想像をしています。曰の「大柄は、やっぱり駄目ね」はもっとよいサービスをもっと顔の上に受けた筆者、死ぬような苦しみにもだえているようですが、五十七キロといえば、たしかに女性としては重い方でしょう。その巨大なヒップのサービスを受けることは、何とすばらしいことでしょう。筆者は、この種のサービスより、神酒拝受を第一とし、しかも相手の女性には、筆者独自の好みがあるようですが、小生としては逆に大柄のグラマーが好ましい次

第です。できれば六十キロ以上の豊饒に敷きつづかれ、そのあと神酒を直接に拝受できたら最高と思います。神酒放出の烈しさ、量はやはり肉体の大小に比例します。若い豊満女性の神酒放出のはげしさは、小生にとっては夢にも忘れられない贈物です。この他、八月号にはM的なものが多くのおり、大満足です。

(京都・並川新一)

私は数年前からフンドシに大変興味を持ちはじめ、私自身、六尺フンドシを着用致しています一女性でございます。私にとりましては、六月号の伊藤ますみ様、七月

号の文田利子様からのフンドシへの体験告白など、大変嬉しい記事ばかりでございました。奇クを愛読してから二年半、女性のフンドシ記事の出なかつたところでしたので、この上ない嬉しい気持ちで、何度も読ませていただきました。奇クを三十年ごろから愛読なさつておられ、特に女性フンドシの記事が出てくる奇クをお持ちの方、お便りお寄せ下さい。勇気ある同性の方々、ピッチリとふんどしを締めて行きましょう。

(愛媛県・越智かおり)

緒方則子様、私は貴女の通信文を読み、感激の余り、その日は夜

もろくに眠れない状態でした。貴女が望まれていることと、私の望んでいることが、余りにもよく類似しているからです。私は今、すべての情熱を貴女にかけてもいいと思っています。女奴隷に對する私の夢は、先ず後手錠にクサリをついた足錠、そして犬の首輪をつけ、尻にきつく喰い込むフンドシをしめさせ、思いのままに馬の代用品として走り廻らせることなのです。もし、このような夢が実現できたらと思うと、私はいても立ってもいられません。いかがですか。こんな夢をあなたは見ませんか。

(神戸市・梶田一郎)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。お早い目に○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三力月以上予約注文以外、既刊号は含まず、一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は、小包にて発送申し上げます。

昭和40年7月号	昭和40年6月号	昭和40年5月号	昭和40年4月号	昭和40年3月号	昭和40年2月号	昭和39年12月号	昭和39年11月号	昭和39年10月号	昭和39年9月号	昭和39年8月号	既刊雑誌在庫案内
(送共三)	(送共三)	(送共三)	(送共三)	(送共三)	(送共三)	(送共三)	(送共三)	(送共三)	(送共三)	(送共三)	
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	
円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	円円円円円円円円	

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各條例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしており、すが、本来成人向として發行を企図して、り、下す關係上、十八才未満の方には、絶對販売下さらさないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。

△振替口座大阪四二七八三番
（昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可）
（昭和四十二年四月二一日）
国鉄大島特別級承認雑誌第二一〇号